

評 隆家が中納言であつたのは、長徳元年四月から同二年四月まで、ある。假に二年のうちの出来事としよう。(中宮廿一、隆家十八、清少卅一、二?)

扇は物見や何やと、事のある折に、使ひ料として新に製らせた趣は、既に廿一段すさまじきもの、條に叙べてある。また新しく製つて、饒別以外にも、人に贈りもしたもので、和泉式部集に、
扇張らせて、はらから達に心ざとすて、

とある。自然かういふ風だから、互に風流な趣向を競ひ合ふやうになつて、骨も木地物、塗物、細工物に、美術の精華を罄し、地紙も色合に數寄を凝し、紙質に唐紙の何のと、贅澤をやつたものである。そして繪様なり模様なりに、また凝つた趣向を施した。だからい、地紙があつても、氣に入つた骨がなかつたり、本文のやうにいみじき骨があつても、地紙にい、のが見付からなかつたりして、それを苦勞にしたものである。もつが實用から起つて、形式的儀容を飾る道具となり、更に遊戯三昧に一轉して、扇合といふ遊も始まつた。

殿上人扇どもして參らするに、こと人々は、骨に蒔繪をし、或は白、黄、沈、紫檀の骨になむ、すぢを入れ彫物をし、えもいはぬ紙どもに、人のなべてしらぬ詩や歌や、又六十餘國の歌枕に、名あがりたる所々などをきつ、人々參らするに、例のこの殿(行成)は、骨の漆ばかりをなかしげに塗りて、黄なる唐紙の下繪、ほのかにをかしきほどなるに、表の方に樂府をうるはしう真に書き、裏には御筆とてめて、草にめてたく書きて奉り給へりければ、打返しく帝御覽じて、御手筈に入れさせ給ひて、いみじき御寶と覺しめたりければ、云々。(大鏡)
これは十數年後の事で、萬事が一層華美になつた時代ではあるが、その骨や紙やの立派さ、趣向のつけ方の面白さは、この頃とても、大した相違はあるまいと思ふのに、「更にまだ見ぬ骨のさま也」を、隆家が高言を拂つたのを見ると、その骨は餘程い、物と見える。

海月の骨の洒落は大出来である。秀句、地口などの歌洒落とは一つにならぬ。海月は鹽漬にしたのを、この頃の人は、平生食べてゐたので、延喜式にも立派に出てゐる食物で、海月に骨のない位は、深窓のお嬢様でも、先刻御承知の筈である。決して經文の典據で覺えたのではない。言高く申し給ふ隆家の會話の調子は、大鏡に「世のさがな者といはれ給ひし」とある性格を立證してゐるやうである。
文章は軽々と書かれて、甚だ妙である。「かやうの事こそ云々」以下は、蛇足の感じがする。

八十九段

雨のうちにはへ降るころ、今日も降るに、御使にて、式部のぞう信經まゐりたり。例の褥さし出したるを、常よりも遠くおし遣りて居たれば、あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて、
「かゝる雨にのぼり侍らば、足がたつきて、いとふびんに、きたなげになり侍りなむ」といへば、
「せんぞく料にこそはならぬ」といふを、
「これは御前に、かしこ仰せらるゝにはあらず。信經が足がたの事を申さざらましかば、えの給はざらまし」とて、返すくいひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ばめかなとかたはらいたく、
「清はやうおほぎさいの宮に、ゑぬたきといひて、名高き下仕なむありける。美濃の守にてうせにける藤原の時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、『これやこの高名のゑぬたぎ。などさも見えぬ』といひ

(口譯) 雨が引續いて降る時分、今も降るに、勅使として式部丞信經が、中宮の御方に參つた。例のやうに褥をさし出したのを、何時もよりも遠くに押退けて坐つたら、私が「あれは誰が敷く爲ですか」といふと、信經が笑つて、「こんな雨の時に上りますならば、褥に足跡が附いて、甚だ都合にきたならしくなりませう」といふから「何でそん

ける返事に、ゑぬたぎ『それは時柄ときがらに、さも見ゆる名なり』といひたりけるなむ、かたき
にえりても、いかでかさる事はあらむと、殿上人、上達部までも、興きょうある事にの給ひ
ける。又さりけるなめり、今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。信經それまた時柄
がいはせたるなり。すべて題出しがらなむ、ふみも歌うたもかしこき」といへば、清げ
にさる事あることなり。さらば題いだしむ、歌よみ給へ」といふに、信經いとよき事
ひとつはなにせむ。同じうはあまたを仕うまつらむ」などいふ程に、御返りおんは出て
ぬれば、信經「あなおそろし。まかりいでぬ」とて立ちぬ。人々「手もいみじう、まなもか
んなもあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなむある」といふもをかし。

(考異) ○時柄に 原本時柄もとあり。古本による。○さる事はあらむと 文字、抄本によりて補ふ。

○雨のうちへふる 雨が引續きて降ると也。「うちへは」は打延へにて、長く續くをいふ。○御使に
て 主上のなり。○式部のぞう「ぞう」は丞なり。式部省を見よ。○信經 藤原爲長の子。抄の所引の
勘物に「信經、長徳元年正月十一日藏人、廿七日右兵衛尉、二年兵部丞、三年正月式部丞、後從五位越
後守に至る、云々」。○例の云々 勅使なれば、例の如く、褥をさし出したりと也。○常よりも遠く云々
褥はさし出されても、何時よりも遠慮して、わざと褥を外したる故、不審したるなり。○あれは誰
が料ぞ あれは誰が敷く爲の褥なるぞ、即ち君の爲の褥にはあらざるかと也。下に「然るを何とて敷き
給はぬ」の餘意を含めり。○笑ひて 信經がなり。○雨にのぼり侍らば 雨に遇ひて褥に上りたらばと
也。○足がたつきて 褥に汚れたる足形の附きてと也。○ふびん 不便の字音。不都合なるをいふ。○

な事がありますか。洗足料にはなりませう」といふを「これは貴女が盲く仰しやつたのではない。私信經が足跡の事を申さないならば、この秀句は仰しやる事は出来ませうまい」といつて、繰返し「いつたのが、面白かつた。見當ちがひの餘りな御自慢であるよと苦々しくして「すつと昔皇太后の宮に、ゑぬたぎといつて、名高い下仕の女があらりました。美濃守になつて死なれた藤原時柄が、まだ藏人であつた時、下仕達の居る所に立寄つて、「これがあの高名のゑぬたぎか。なぜその名のやうには見えないのか」といつたその返事に「それは時がらによつて、さうも見えないのです」

など などはの給ふの略。○せんぞく料 既褥いせきに洗足料をいひかけたる洒落なり。既褥は「しとね」のことにて、和名抄に「褥、今案毛席名也、俗以猫皮等爲之、既褥也」とある物なり。「洗足料にこそは云々」は足を洗ぎ清むる料にはならんと也。前に足の汚れたることを信經がいひたれば、洗足料にとはいへる也。○お前 清少をさす。貴女の意。○かしこう 賢うなり。畏うにあらず。○あまりなる御身ばめかなとかたはらいたく、餘なる御自讃よと苦々しくしてと也。清少の秀句をいへるを、信經が自分の手柄なるやうに自慢したるを、傍痛わななく思ふなり。旁註、春註に、これを清少の自讃のやうに解したるは「傍痛く」にて、この段を切りて、以下を別段としたる誤解の結果なり。「傍痛く」の下、てを略けり。抄本に傍痛しとあるは、事もなし。○はやう云々 舊註悉く別行として、時柄と清少との問答とせり。今は信經と清少との問答とし、時柄、ゑぬたぎの問答を、清少の詞のうちにあるものと見たり。これは豊穎の説による。○おほぎさいの宮 皇太后宮なり。村上帝の皇后藤原安子を申す。○安子 右大臣藤原師輔の女。村上帝の天徳二年、女御より進みて皇后となる。同康保元年四月崩す。年三十八。冷泉帝の代皇太后、圓融帝の代太皇太后を贈らる。故に「おほぎさいの宮」と書ける也。○ゑぬたぎ 下仕の名なり。名義は犬吐いぬはななり。狗犬をゑぬと訓める例は、日本紀、和名抄にも出づ。吐はたぐりと神代紀に訓めり。そのぐりを約むればぎとなること、尙手繰りを約めて、たぎといふが如し。さて犬吐は犬の反吐なり。諸註一もこの語義に言及したるものなし。試に新説を吐くのみ。○下仕 諸註、下仕の男と解したるは非なり。これは雜役に服する女なり。下文に、弘徽殿の下仕に、打伏といふ女の事見えたり。○美濃の守にてうせにける 美濃守在任中にて死にたると也。○時柄 旁註所引の勘物に「康保五年正月廿八日美濃守、云々」。日本紀略、類聚符宣抄などにその名見ゆ。○ある所 居る所なり。○これやこの云々 これがあの高名のゑぬたぎなるかと也。「や」は疑辭、「高名」は著名なること。○さも ゑぬたぎ

といつたのが、相手に選つて拵へても、どうして、このやうな對の秀句があらうぞと、殿上人上達部までも、面白い事に仰しやつた。又今までもかういひ傳へられるのは、さうある筈でありませう」と、中宮に申上げた。すると信經が「それも亦、時柄がいはせたのです。全く只題の出しがらで、詩でも歌でも盲く出来ませう」といふから「ほんにさういふ譯もある事です。それなら題を出ませう。歌をお詠みなさい」といふに「大層結構な事です。一つばかり何にしませう。同じ事ながら澤山詠みませう」などいふうちに、中宮から主上への御返書が出来てきたので「あゝ恐ろし

い。逃出します」といつて立つてしまつた。手蹟も大層わるく、漢字も假名もまづ書くのを、人が笑つたりなどするのて、かうして胡摩化したのである」と人達がいふのも面白

(口譯)

信經が、作物所の別當をしてゐる時分、誰の許へ遣つたのかしらん、細工物の繪圖面をやるといつて「この繪圖面のやうに致しませ」と書いた漢字の書きさま、手蹟の世に類なく變なを見付けて、そのそばに私が「こ

の名をさす。○時柄にさも見ゆる名なり 時と場合から、さやうにも見ゆるわが名ぞと也。時節がらの意に、時柄の名を寄せたる秀句なり。「時柄に」には、よりの意。○かたきにえりても 始より相手に選出して、秀句を競はせても也。「かたき」は敵手なり。○さりけるなめり 然るべきやうなりと也。「今までかくいひ傳ふるは、さりけるなめり」を、前後にいへり。○聞えたり 中宮に聞えたりの時柄がゑぬたぎに秀句をいはせたるなりと也。これは信經がさきに「これはお前にかしこ仰せらる、には云々」といへる、おのが詞を辯護せん爲なり。○題出しがらなむ云々 題の出し様によりて、詩も歌も旨く出来るものぞと也。「ふみ」はおもに詩をいへり。○よき事 の下、なりを略けり。○御返り出でぬれば 中宮より主上への御返書のさし出されたればと也。○手もいみじう 「手」は筆蹟なり。「いみじう」はいみじくわるきをいふ。「いみじう」の下、てを略けり。○まなもかんなも 「眞字」をまんなとも音便にいふ。漢字なり。「かんな」は假字の音便なり。○かくしてなむある かうして紛らかしてまかり逃げたるなりと也。

作物所の別當するころ、誰がもとにやりけるにかあらむ。物のゑやうやるとして、「これがやうに仕るべし」と書きたるまんなのやう、文字の世にしらず、あやしきを見つけて、それがかたはらに「これがまゝに仕うまつらば、ことやうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見て、いみじう笑ひけるに、大腹だちてこそうらみしか。

○作物所の別當する頃 信經がなり。旁註の勸物に「長徳二年五月三日藏人兵部丞信經補作物所別

れの通りに致しませうならば異様なものであるとせう」と書いて、殿上に遣つたので、人達が手に取つて見て、大層笑つたので、信經が大きに立腹して恨んだ。

當」。○作物所 ツクモドコロ、ツクモンドコロ。作物所の轉訛なり。禁中の調度を調進し、諸細工をなす。職員は別當、預、史生及び細工(職人)あり。○別當 ベタウ。職別に專當する意にて、他に本務あつて、別に關係する職名なり。○誰がもとに云々 職工の誰のところにやりしならんかと也。○物のゑやう 細工物の繪圖面なり。「ゑやう」は繪様の字音。○しらず 知られずの意。○あるべけれとてあるべけれとわが書きての略。○大腹立ちて 信經がなり。

評。この洒落は、秀句、地口の種類に屬するもので、せんぞく料も、時からも、あまり頂いたものではない。只麩蓐を常に取扱ひつけてゐる人達だから、今の我々が聞くよりは、餘程自然に聞えたらしい。犬吐は稗糞の儔で、まことに變な名である。だから高名にもなつたので、名を聞くと形なしのやうだが、逢つて見れば氣の利いた顔付だから「などは見えぬ」といひたくなる。「時がらにさも見ゆる」は、時に取つての旨い挨拶である。但時柄の字面が、最初から底を割つてゐるので、面白味を餘程減殺する。時柄は日本紀略承平元年二月七日の條に「仰藤原時柄令學天文道」とある。こんな科學者の中にも、ゑぬたぎに對し「などさも見えぬ」位の洒落をいふ通人もあつた。

題の出し柄といふことは、一般に人の認めてゐた事實だから「けにさる事」と、早速承了して置いて、さて歌で責め付けようと企む清少、それを知つてゐながら「おなじくは數多を」など、始から詠まぬ料簡で、大風呂敷をひろけて、御用が濟むや否や「あな恐ろし」と一散に逃出す信經、この双方の虚實の懸引は、名將の用兵を見るやうである。

漢字も假字も拙なのは、この時代の人には珍しい。それゆゑ慢侮的となつた譯である。式部丞にもなつてゐるから、多分文章生出身の人だらうに。

「これがやうに」の悪戯は、中宮御用の何かの細工物なので、その繪圖面が、中宮の御方に廻つた時の事だらう。それをわざと殿上に送つて披露するなどはひどい。ひまがあつて人がわるくて、藏人などは眼中に無い人達だから、こんな事も遣るのである。

枕草子評釋下卷

金子元臣著

九十段

淑景舎春宮にまわり給ふほどの事など、いかゞは、めてたからぬ事なし。正月十日にまわり給ひて、宮の御方に、御文などはしげう通へど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ、心ことに磨きつくるひ、女房なども、皆用意したり。夜中ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなく明けぬ。登華殿のひんがしの二間に、御しつらひはしたり。つとめて、いとく御格子まわりわたして、あかつき、殿、うへ、ひとつ御車にて参り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東に隔てて、北向に立てて、御疊、褥うち置き、御火桶ばかり参りたり。御屏風の南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。

(考異) ○北向に 原本北西にとあり。抄本による。

(口譯) 淑景舎の女御が、東宮御所にお参りなされる折の諸事萬端、どうして目出度ない事とてはありはせぬ。正月十日にお参りなされて、それから中宮の御方に、御交通などは顔にあるけれど、御對面などはないのを、二月十日中宮の御方へ入らせられようといふ御案内が来たので、中宮御所では、常より

も室内の飾付を、格別に念入に磨き繕ひ、女房なども皆、支度に注意をした。十日の夜半頃に、淑景舎が入れられた。淑景舎が、間もなく夜が明けた。登華殿の東廂の二間に、御部屋ごへいの飾付はした。翌朝大層早く、御格子をすつかり上げて、その明方に關白殿奥方お二方が、一つ御車でお上りなされた。中宮の御座は、御部屋ごへいの南に、四尺の御屏風を西から東へと仕切つて、北向に立てて、御疊や褥を置いて、御火鉢だけを据ゑ奉つた。御屏風の南から御帳臺の前に、女房達が大層おほ勢祇候した。

○淑景舎 原子を見よ。○春宮にまゐり給ふ長徳元年一月十九日、關白道隆、二女原子の春宮に入りて、女御となれるをいふ。當時、春宮に居させ給へるは、太子居貞親王にて、のち即位あり、三條天皇と申す。「春宮」は、東宮御所の意。○ほどの事「事」は儀式萬端をさす。○いかゞは 俗のドウシテ、又は何デといふに當る。元來下略の語なれば、相當の補語あるべきなれども、この頃はその意味變化して、殆ど副詞の如く軽く用ゐたり。○正月十日 小右記、日本紀略に、長徳元年正月十九日とある、是なるに似たり。○参り給ひて 春宮に参り給ひてと也。この句の下、その後を補ひて聞くべし。○御消息 淑景舎よりのなり。○しつらひ 裝飾の意。もと爲繕ひの義にて、波行の動詞なるを體言としたり。或人が室禮の活用といへるは非。○渡らせ 淑景舎のなり。○登華殿 トウクワデン。トウクワウデン、後宮の一殿にして、七間四面なり。東に簀子あり。その中央に反橋の渡殿ありて、貞觀殿に通ず。南は切馬道にて弘徽殿に通ず。西は弘徽殿と同じく細殿なり。(附圖参照) ○ひんがしの二間 二間のある所は、廂の間のうちなり。「ひんがし」を、古本に「ひさし」とあり。二間を見よ。○御しつらひは 御對顔のお部屋として御しつらひはと也。○つとめて 十一日のなり。○御格子まゐり渡して 格子を上げたるをいふ。高貴のあたりにては、格子を上下するを参るといふ也。○殿 中宮及び淑景舎の父關白道隆なり。○うへ 北の方を稱す。こゝは道隆の妻高階貴子なり。○貴子 從二位高階成忠の女。はじめ掌侍たりしかば、世に高内侍と稱し、又儀同三司の母ともいふ。儀同三司伊周、中納言隆家、中宮定子、淑景舎原子などの母なり。道隆薨後尼となり、長徳二年十月逝く。○宮は 宮の御座所の略。○御曹司のこゝは二間をさしたるが如し。「曹司」は部屋といふに同じ、春註に職曹司としたるは誤。○四尺の屏風云々 高さ四尺の屏風を西より東へ折曲けて、北向を正面に立ててと也。「北面に立てて」は屏風の表を北へ向けたるをいふ。「屏風」の下、をを略けり。○御疊海うちおきて 疊を置き、上に褥を置きてとなり。

疊は厚疊なるべし。當時の疊は移動する疊なれば、置くといへり。○御火桶ばかり云々 火桶だけを置かれたり也。貴人の身邊には、硯筥や何や取揃へて置くべき物あるに、火桶のみ置かれたるをいふ。○御屏風の南 屏風のうしろに當る。○御帳の前に 御帳臺の前の處となり。

(口譯) こちらの間で中宮の御梳櫛をなさる間、中宮が「淑景舎をばお見上げ申したか」と私にお尋ねなさるから「まだ何でお見上げ申しませうぞ。積善寺供養の日に、お後姿を一寸お見掛けただけです」と申上げると「その柱と屏風との際に寄つて、わが後から覗きなさい。大層美しい方ですぞ」と仰にならるから、嬉しく見たさが増つて、いつそこの時がくるかと待遠に思ふ。中宮の御裝束は、紅梅の固紋や浮紋の御表着を、紅の御打衣三重の上に只引重れて召された

こなたにて御ぐしなど参るほど、淑景舎は見奉りしや」と問はせ給へば、道まだいかでか。積善寺供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、宮その柱と屏風とのもとによりて、我がうしろより見よ。いとうつくしき君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣三重がうへに、只引き重ねて奉りたるに、紅梅には濃ききぬこそをかしけれ。今は紅梅は着てもありぬべし。されど萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなり」との給はすれど、只いとめてたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣に、やがて御かたちの匂ひ合はせ給ふに、なほことよき人も、かくやおはしますらむとぞゆかしき。さてゐざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきてのぞくを、「悪しかめり。うしろめたきわざ」と聞えごつ人々も、いとをかし。御ざうしの廣うあきたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり、引きかけて、奥によりて東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北にすこ

が「一體紅梅の下着には濃打の衣がよろしい。尤も今は紅梅の上着に着ないで居る方がまよい。けれど萌黄などが厭なので着たのである。全く紅梅は紅の打衣には調和しないのである」と仰になるけれど、只至極お立派にお見えなさる。何でもお召になつてゐる御衣に、すぐに美しい御容貌が映り合はれるので、やはり今お一人の貴女も、かやうにおありなさらうかと思はれて床しい。さて最前の設の席に、中宮が居さつてお出なされたので、その儘御屏風に寄添つて覗くのを、「悪いてせう。後ぐらい行為よ」と注意する女房達の様子も、甚だ面白い。御部屋が廣く開いて居るの

で、大層よく見える。奥方は白い御表着などの下に、紅の張つた衣二つばかり着て、女房の裳と見え、それを引掛けて、奥に寄つて東向に坐つて入らつしやるから、只御召などだけが見える。淑景舎は北に少し寄つて、南向に坐つて入らつしやる。紅梅の内衣など澤山、濃いや薄いやを重ねて、上に濃い紅綾の單、や、赤味がかつた蘇枋の織物の袴、萌黄の固紋の若々しい表着を召されて、扇をつと顔に譬して入らつしやる。大層よくて、ほんに立派に美しくお見えなさる。關白殿は薄紫色の御直衣に、萌黄の織物の御指貫をはき、紅の御下着など召されて、直衣の入紐をさして、廂

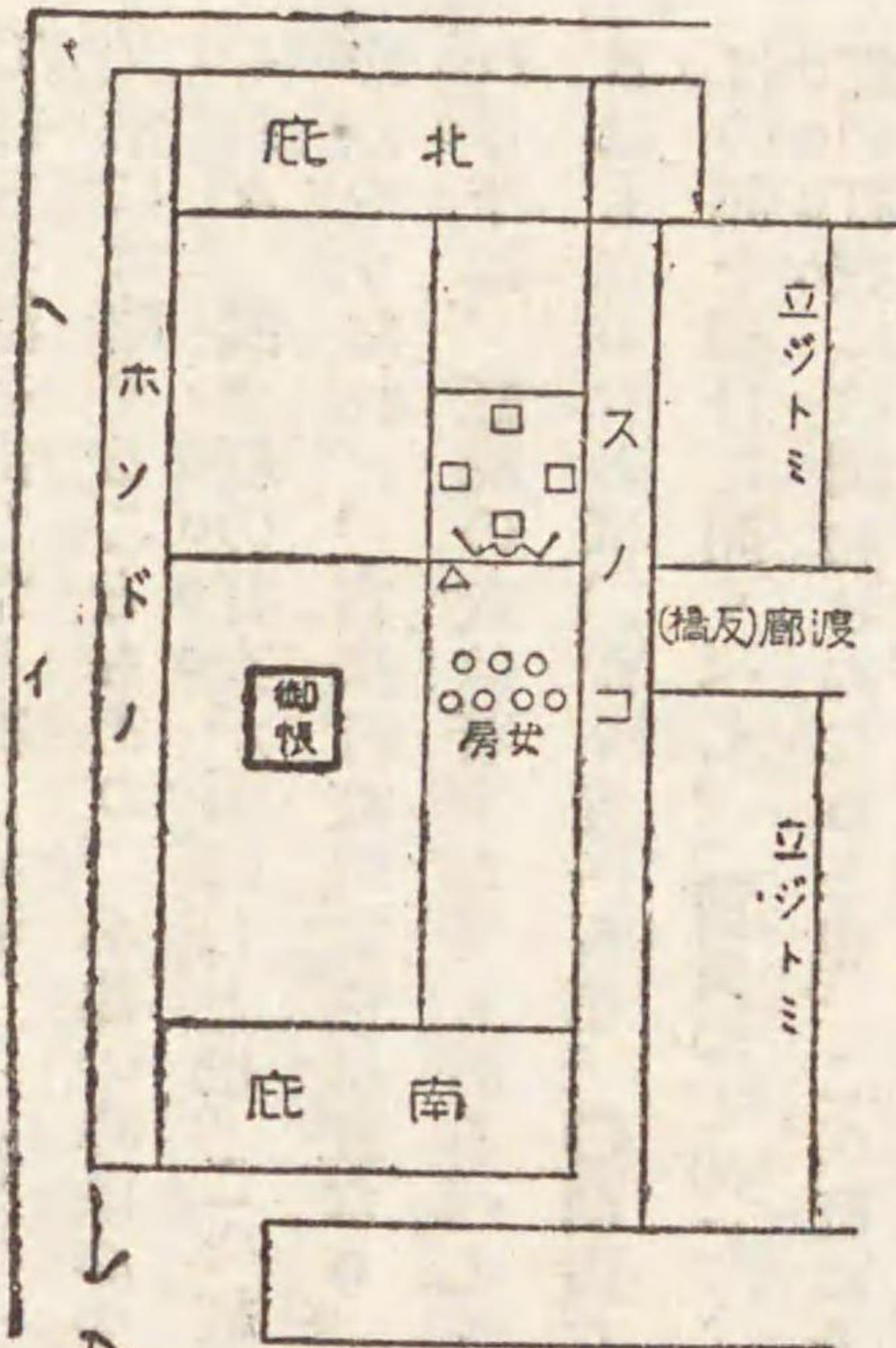
しよりて、南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、すこしあかき蘇枋の織物の袴、萌黄の固紋の、わかやかなる御衣奉りて、扇をつとさし隠し給へり。いとみじく、げにめてたく美しと見え給ふ。殿は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱にうしろをあてて、こなたさまに向きておはします。めてたき御有様どもをうちらみて、例のたはぶれ言をせさせ給ふ。淑景舎の、繪にかきたるやうに美しげにて居させ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひ合はせ給ひて、なほたぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

(考異) ○匂ひあはせ給ふに 原本匂ひあはせ給ふぞとあり。ぞを假ににに改む。

○こなたにて 「こなた」は御帳臺のある間か、或は南廂ならん。○御ぐしなど云々 中宮の御梳櫛など遊ばさる、程となり。○淑景舎は見奉りしや云々 淑景舎をば汝は嘗て見奉りしや否やと、宮の問ひ給へばと也。○まだいかでか 未だいかでか見奉るべきの略。淑景舎はこれまで父君の里第に居給へる方なれば、中宮奉仕の清少は、未だお目にかゝらぬと見ゆ。○積善寺供養の日 日本紀略正暦五年二月の條に「二十日壬寅關白(道隆)供養積善寺、中宮(定子)行啓、東三條院(詮子)同以御幸、云々」。下文二百卅七段にも、この時の事見えたり。參看すべし。○御うしろをわづかに の下、見奉りきを略けり。「うしろ」は後影なり。○と聞ゆれば と中宮に申上ぐればとなり。○いつしかと 何時見んことかと也。「し」は強辭。○紅梅の固紋浮紋の御衣云々 固紋浮紋の御上着を、紅の御打衣三重襲のうへに、只重ねて着給へると也。この「御衣」は、次に「紅の打ちたる三重がうへに」とあるにて、表着なること明なり。この句中宮の御装束をいへるなれば、上に、中宮はを補ひて聞くべし。「紅梅」は三四月の紅梅の衣を見よ。○固紋、浮紋 貞丈の説に「綾の文をしづめて固く織りたるを固文、糸を浮めて織りたるをうけ文といふ」。うけ文は即ち浮紋にて、「紋」は模様なり。○紅のうちたる御衣 打衣なり。紅の綾を砧にて打ちて澤を出したる衣。表着の下、袴の上に着る。引繕ふ時は重ねても用ゐる。こゝは三枚重ねたり。又常には略することもあり。小袴の時は必ず着る。後世板引にしても尙、打衣といへり。○濃ききぬこそ云々 濃き紅の打衣が面白しと也。この紅の打衣は面白からずの餘意を含めり。單に「濃き」とあれば、紫のやうなれど、古來打衣の定色は紅なり。その色濃きを濃打といふ。○今は紅梅は云々 二月にもなれる今は、紅梅の衣は着ずしてもあるべしと也。紅梅は十一月より二月までの衣なるに、今日は二月十日にもなりたれば、かく宣へる也。○萌黄などのにくければ の下、なほ紅梅をば着たり。されど紅梅はの語を補ひて聞くべし。「萌黄などのにくければ」は中宮の好かせ給はぬ故なるべし。○紅には云々 紅の打衣には調和せぬなりと也。この紅はその色濃打に比すれば淺し。○奉りたる御衣に云々 何にてもお召しなされたるその装束に、すぐ御容姿が美しく映り合はせらるゝにつけてと也。「やがて」は即ち、そのまゝなどの意。原本の「あはせ給ふぞ」は、「とぞゆかしき」にのぞ「文字にさしあひて、文法調はず。下に、めでたきを補ひて聞けば聞かるれど、思ふにこの「ぞ」はにの誤か、さらば衍字なるべし。○ことよき人 異貴人にて、他の貴女をいふ。こゝは淑景舎をさす。○るざり出でさせ給ひ 中宮が此方の間より、設の席に坐ざり出で給ひと也。「るざり」は膝行するをいふ。○うしろめたき業 の下、かなを略けり。○聞えごつ 聞え言する義。聞ゆるやうにいふ也。○御さうしのひろう云々 御曹司の廣く開きたればと也。對面の御部屋のひろうと、かけ拂になりたるをいふ。「さうし」に障子の字を充つるは

の柱に背中をあてて、此方向になつて入らつしやる。御娘方のお立派な御様子などを御覽になつて、ニコ／＼して何時もの冗談口をおききなされる。淑景舎の繪にかいたやうに美しくして入らつしやるのに、中宮は大層ゆつたりとして、いま少し大人らしくあらせられる御様子か、紅のお召に映り合はせられて、やはり世に類はどうしてあらうぞ、ありはせぬとお見えなされる。

いかい。間取の具合より推す時は、決して障子のあるべき所にあらず。○紅の張りたる二つばかり。下に紅の張りたる衣二つばかり着ての略。さてこの張衣は打衣に當る。「白き御衣」はその上に着たるなり。○張りたる板引とて、漆塗の板に絹綾に糊をつけて張りて、よく乾して引放したるものにて、碇にて打ちたる時は、又異なりたる光澤のあるもの也。○女房の裳なめり云々。中宮の御前ゆゑ、敬意を表する爲に、女房の裳を借りて着たる也。○引きかけて。それを引掛けてと也。○奥に。奥はこの曹司の西に當る。○御衣など云々。顔の見えぬ様なり。○紅梅どもあまた濃く薄くて。濃き薄き紅梅の衣を數多重ねたるをいふ。これは內衣なるべし。內衣は後世の小袖に當る。○濃き綾の御ぞ。紅濃き綾の御衣にて、單衣なり。○すこしあかき蘇枋の織物のうち少し赤みの勝ちたる蘇枋色の織物の重ね袷なり。「織物」は織物の見よ。「うちぎ」を詳解以後の註に、表着と解けるは誤なり。○萌黄の固紋のわかやかなる御衣。これは表着なり。詳解以後の註に、唐衣としたるは誤なり。唐衣を打任せて御衣といふことなし。況やこの時、中宮御姉妹の母君ながら、臣下たる高内侍が、裳を着けたるのみにて唐衣を着ざるに、淑景舎の唐衣を着給ふ筈なし。淑景舎の御装束は、內衣、單、打衣、表着の順にて重ねたり。玉海に「姫君事、白御衣八、濃色御單、濃打御衣、薄蘇芳、二重織物、表着、云々」とあるを参考すべし。さて婦人の装束の着様を、要領抄に「まづ單、次に袷(內衣)、次に打衣、次に表着を着、帯して袴をはき、腰結びてより、唐衣着て裳を附けたり」と見ゆ。單、內衣の順序は本文と異なれど、大體はおなじ。○扇をつ



圖殿華登

とさし隠し。扇もつと顔をさし隠しの略。扇を顔にかざすことは、婦人が人に對面する時の正式の行儀なりき。○薄色の。紫のなり。○紅の御ぞども。の下、着てを略けり。「紅の御ぞしは紅色の衣をいふ。○衣。この衣は袍又は直衣狩衣の下に、二領も三領も重ね着るものにて、その製作は束帶の下に着る袷におなじくて、それよりも稍長し。三條家裝束抄に「衣の事、或は袷とも稱之、束帶の下などに重用するは纒着(たけと等しきこと)以是爲袷、直衣並に狩衣の下に用之は、莫大長き也、以是爲差別」と見え、なほ色目に關しては、同書に「狩衣直衣の下衣は、夏冬大略無差別、色は薄色、萌黄、紅、黄、蘇芳、紫、紅梅、女郎花用之、是等壯年の人用之、白は長年の人用之、皆綾なり」とあり。○御紐さして直衣の御紐さしてと也。「紐をさす」は入紐をさす、即ち直衣の領の雄紐を雌紐にさすをいふ。こゝは手まさぐりにしたる趣なり。○うしろをあてて。背中を當ててと也。○こなたさま。清少のゐる方なり。○めでたき御有様どもを。中宮及び淑景舎のめでたき御有様どもを見給ひてと也。○たはぶれ言。戲言なり。冗談なり。○いと安らかに。甚だ目安くと也。淑景舎の行儀正しきに對して、中宮は少し打解けたる方おはするをいふ。○なほたくひはいかでかと。もとより優れさせ給へど、淑景舎のいかに美しきかと思ひしに、今かく見比べ奉るに、やはり中宮に並び給ふべくはあらぬと也。「なほ」の語心を付くべし。「いかでか」の下、世にあるべきを略けり。

(口譯)
朝の御手水を差上げる。あの淑景舎の御方の御手水は、宣耀殿貞觀殿を経て、童二人下仕四人て持つ

御手水まゐる。かの御かたは、宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人してもてまゐるめり。唐底のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。せばしとて、かたへは御おくりして、皆歸りにけり。櫻の汗衫、萌黄、紅梅などいみじく、汗衫長くし

て参るやうである。唐庇のこちらの廊下に、女房が六人ばかり祇候する。廊下は狭いといつて、半分は淑景舎をお送り申上げて、皆引返した。櫻の汗衫に萌黄紅梅の着など美しく、汗衫の尻を長く曳いて、お手水を取次いで差上げるのが、甚だ優美である。織物の唐衣などが目に立つて、相尹の右馬頭の娘の少將の君、北野三位の娘の宰相の君などが、近くは祇候する。あゝ面白いと見るうちに、この中宮の御方の御手水は、當番の采女が青い裾濃の裳に、唐衣裾帶領巾などをして、顔など眞白に白粉を塗つて、下仕などが取次いで差上げる具合は、これまた儀式立ち、唐めいて

りひきて、取り次ぎまゐらす、いとなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ少將の君、北野の三位のむすめ宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水、番の采女、青すそごの裳、唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎて参るほど、これはおほやけしう、唐めきてをかし。

御手水まるる 十一日の朝なれば、御手水を奉るなり。御手水まるりを見よ。○かの御方は かの御方の御手水はの略。淑景舎の御手水をいふ。○官耀殿、貞觀殿 淑景舎より登華殿までの間に、この二殿あり。(附圖参照) ○貞觀殿 チャウグワンデン 禁中の一殿にして、中央の最北にあり。廣さ九間四面、四方に廂あり。皇后宮の正廳ある處にして、又御匣殿ともいふ。(附圖参照) ○もて参るめり 御手水の調度どもをなり。○唐庇 カラビサシ。唐風の庇にて、屋根を反らせたる造をいふ。○こなたの廊云々 これは登華殿東面の、貞觀殿に通ずる反渡殿にて、その中央の屋根が唐庇になれる也。その中央唐庇の所よりは、此方(登華殿の方)によりたる廊に、女房六人ほど候ふとなり。○せばしとて 廊がなり。○かたへは御おくりして云々 半分は御手水の所まで御送り申上げて、皆引返せりとなり。「かたへ」は片方の義にて、その半ばをいふ。「皆」は御送したる「かたへ」の人をさす。○櫻の汗衫 童女のなり。「櫻」は春の服色にて、表は白なるが、裏は薄紫或は紫など、なほ諸説多し。○萌黄、紅梅 汗衫の着の色なり。これも汗衫なるべしといへる註もあれど、汗衫を着る童女は二人なるに、櫻萌黄紅梅にては三種となる。その誤れること知るべし。○長くしりひきて 汗衫の尻は殊に長し。(附圖参照) ○取り次ぎ参らす の上、御手水をを略けり。下仕の手より御手水を受取りて、淑景舎の君に参らす

なり。○織物 浮線綾または固紋などの紋を織出したるものをいふ。○こぼれ出でて 御簾の下より衣裳を押し出したるをいふ。○すけまさの馬の頭のむすめ少將の君 「すけまさの馬の頭」は、上の五節の段(七十八段)に見えたり。但娘は別人なるべし。五節の段は、この段よりは必ず後の事と見ゆるに、舞姫に出でたる娘は十二歳なり。然るにこの娘は少將の君などいひて、大人立ちたる名のやうなれば、舞姫に出でたる人の姉と定むべし。「馬の頭」は馬寮の頭をいふ。○北野の三位のむすめ宰相の君 北野の三位は藤原遠度なり。九條右大臣師輔の七男、右兵衛督、永延元年従三位、永祚元年三月薨す。大鏡師輔の條に、北野の三位遠度と見ゆ。紫式部日記に「宰相の君は北野の三位のよ」、御堂關白記寛弘六年十一月廿五日の條に、向湯宰相、三位遠度女子などある宰相君は本文の同人か、或はその姉妹ならむ。諸註菅原輔正の女とあれど、輔正の參議(宰相)たるは長徳二年にて本文の記事以後の事なり。さて「少將の君」も「宰相の君」も、皆淑景舎に仕ふる女房にて、御手水の御送に参りて居残りたる人のうちなり。詳解にこれを童の名とせるは誤なり。序にいふ、この草子中、他の段に見ゆる宰相の君は、すべて中宮方の女房なり。混すべからず。清涼殿の丑寅の隅の段の宰相の君を見よ。○この御方 中宮の御方なり。○番の采女 當番の采女なり。御手水の役を勤むるにみれば、水司の采女なるべし。水司は後宮十二司の一にて、大寶令に「掌進漿水雜粥事」とありて、尙水一、典水二、采女六人を置きたり。○青すそごの裳 青色の末濃に染めたる裳なり。すそごを見よ。○おもてなどいと白くて 顔など大層白くしてと也。白粉を濃く塗りたる様なり。さてこの句の下、侍ひを補ひて聞くべし。○取り次ぎて御手水をなり。○おほやけしう云々 儀式だちて唐風めいておも白しと也。采女の装束は、西宮記に「緞、唐衣、比禮、同裳、簪如常、云々」。又後世のものながら、禁裏御装束記に「繪衣、表白練、裏萌黄、表雲に椿花、以三色繪畫也、裏(生絹)衣(花色地、生絹に青海水、以胡粉畫之)袴(裏表紅平絹)とあり。

(口譯) 朝御飯の時になつて、御髪上げの女官が参つて、女藏人も御まかなひも、髪を結つて参るうちに、仕切つてあつた屏風もおしあげたので、透見する自分は、隠蓑を取られた心持がして、物足らず心苦しうので、御簾と几帳との間で、柱のものとから拜見する。着物の裾や裳などは、御簾の外に押出されたから、關白殿が端の方から御見付になつて、誰か、ほのかに見えるのは「とお告めなされるので、中宮が「少納言が何かとゆかしがつて覗くのでせう」と申されたと「ア、恥かしい。あれは舊い近付よ。大層醜い娘達を持つて居ると見るかも知れない」など仰しや

御膳のをりになりて、みぐしあげまゐりて、藏人も、まかなひも、髪あげて参るほどに、隔てたりつる屏風も押しあけつれば、かいまみの人、かくれ蓑取られたる心ちして、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。衣の裾裳などは、皆御簾のそとに押し出されたれば、殿のはしのかたより御覽じ出して、「誰ぞや、かすみの間より見ゆるは」と咎めさせ給ふに、少納言が、物ゆかしがりて侍るならむ」と申させ給へば、彼はふるき得意を、いとにくげなるむすめども持ちたりとこそ見侍れ」などの給ふ御けしき、いとしたり顔なり。あなたにも御膳まゐる。羨ましく、かたぐいのは、皆参りぬめり。とく聞しめして、おきな、おんなに、おろしをだに給へ」など、只日ひと日、さるがう言をし給ふほどに、大納言殿、三位の中將、松君もゐて参り給へり。殿いつしかといだき取り給ひて、膝にする給へる、いとうつくし。せばき縁に、所せき日の御装束の下襲など引きちらされたり。大納言殿はものくしう清げに、中將殿はらうくじう、いづれもめてたきを見奉るに、殿をばさるものにて、うへの御すくせこそめてたけれ。御わらふだなど聞え給へど、大納言、中將、陣につき侍らむ」とて、いそぎ立ち給ひぬ。

(考異) 〇藏人もまかなひも髪あげて参るほど 原本藏人もまかなひの髪あげてまゐらす程とあり。別本による。 〇おむな 原本女とあり。抄本による。

る御様子、甚だ得意顔である。淑景舎の方に、お膳があがる。關白殿がこれを見て「美しく各方のお膳は、皆参つたやうである。早く召上つて、翁媪(ヤ、ババ)におさかりでも下さいませ」など、只終日冗談口を仰しやるうちに、大納言殿、三位中將に、松君もつれて入らした。關白殿が、くるや選きと松君を抱取りなされて、膝にお据ゑなされたが、甚だ可愛らしい。狭い縁側に、お二人の場取つた御束帶の下襲の裾などが引散されて居る。大納言は立派に美しく、中將はまかせて、いづれも見事なのをお見上げすると、關白殿は勿論の事として、奥方の御異報が結構である。

〇御膳の折、は朝御飯なり。〇みぐしあげ 理髪の官女なり。紫式部日記に「夜ふくるま、に月の隈なきに、采女、もひ取、みぐしあけども、殿守、かん守の女官、顔もしらぬをり」とあるを、清水宣昭は「みぐしあけ、必ず女官の名なるべし」とて、台記の別記に、理髪六人とあるを引きて證せり。春註に、中宮の御髪をあぐると解けるは非なり。中宮の御髪上のごとは、すでに上に出でたり。〇藏人 女藏人の略。〇女藏人 内侍命婦よりは下藤の女房にて、御匠殿の御装束裁縫等より、殿上の雜物を檢閲守護することを掌る。〇まかなひ 陪膳の女房のおもだちたるを稱するか。紫式部日記に「御膳参るとて、女房八人一つ色にさうぞきて、今宵の御まかなひは宮内侍いと物々しくあざやかなる容體に、元結ばえしたるを」とあり。〇髪あけて 髪を結び上げてと也。禁秘抄に「朝餉、女房皆上髪、三位以上釵子許也、暑氣比、凡聽不上髪」。これは帝の朝餉なるが、中宮も同様なるべし。山東京山の女裝考に「宮女たち御陪膳の時は、必ず垂髪を結び上げて、櫛をもさす事あり。かやうにする由は、すべらかしにては、御膳の具へ髪の毛のふりか、り、けがさんを憚る也——その結髪のはきは明らか知られねど、紫式部日記に「内侍二人出づ。その日の髪あけうるはしき姿、唐繪をかしけにかきたるやう也」とあるに見れば、後世の兒髻即ち唐輪の如き形なりしならん。云々」。〇かいまみの人 清少みづからいへる也。「かいまみ」は搔間見の義、隙見すること、覗くこと。〇かくれ蓑云々 櫛に取りたる屏風をあきて、隠れ場のなかりたるを、鬼の隠蓑取られたるに喩へていへり。隠蓑隠笠は鬼の身を隠すための具とぞ。拾遺集雜賀「かくれ蓑かくれ笠をも得てしがなきたりと人にしられざるべく」。〇はしの方より云々 端の方から人のゐるを見付け出し給ひてと也。〇たぞや 霞のまより見ゆるは誰ぞやとあるべきを、前後にいへり。「や」は歎辭。〇かすみのまより見ゆるは ほのかに見ゆるはと也。ほのかに見ゆるを、霞のひまより物のほの見ゆるに喩へたり。こは古今集戀一「山櫻霞のまより、ほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」と

殿が御圓座などを
勸めなさるけれど、
お二人は「後所に参
りませう」といつて、
急いでお立ちになつ
た。

あるを典據としたるにて、下句の意はこゝには交渉なし。古本に「かのすみのみ(彼の隅の間)より」とあるは、その意明白なり。○少納言が云々 中宮の御詞。○侍るならむ かいまみ侍るならむの略。○ふるき得意を 舊き得意なるよと也。「得意」は知合の意。「を」は歎辭。○にくけなる 醜けなると也。○見侍れ 「侍る」は相手の動作に付くる敬語ならねど、かやうに用ゐたる例、まゝあり。○あなたにも 淑景舎の御方をさす。○かたぐのは 方々の朝の御膳はの略。○きこしめして 召上りてと也。○おきな、おむな 「おきな」は翁にて道隆自身をいひ、「おんな」は老女にて北の方なる高内侍をいへり。○さるがふ言 戲言、狂言、おどけなどの意。「さるがふ」は散樂の轉訛なり。散樂は元來支那にて、雅樂に對して俗樂を稱したるものにて、卑俗滑稽を主とするより、わが國にても滑稽諷諭を演ずるを、「さるがふ」といへる也。これを猿樂又は申樂など書くはあて字なり。又思ふに「さるがふ」は戲交の義なるが、たまく散樂に、語音も事柄も似通ひたるより、通用したるならんか。○大納言殿 大納言殿がなり。大納言は伊周をいへり。○三位の中將 隆家をいへり。○松君 伊周の男道雅の幼名なり。從三位左京太夫に至り、天喜二年七月薨す。年六十二。○いつしかといたき取り 何時わが近く來るかと待遠にして、抱き取りと也。○せばき縁 「縁」は即ち簀子なり。○所せき日の御裝束 「日の御裝束」は東帶姿のことにて、裾を曳き 太刀佩きなどしたれば、場狹に見ゆる也。○物々しう清けに 立派に美しくと也。○らうくじう 勞々じうなり。功者らしきをいふ。こゝは俗のマセテに近し。○殿をばさるものにて 殿をば當然の者にしてと也。道隆は藤原氏の名門なれば、その幸福は當然なるなり。○うへの御すくせこそ 北の方の前世の御果報はと也。「すくせ」は宿世の字音にて、前生をいふ。北の方は中流の儒家高階氏の女として、この道隆を夫とし、中宮、淑景舎、伊周、隆家等を子にもちたれば、その宿世めでたき也。○わらふだなど聞え給へど 殿が大納言中將などに、御圓座に著き給へなど申さるれど、○陣に

著き侍らじ云々 役所に出勤致さんとて、縁を急ぎ立ち給ひぬと也。中將には近衛の陣座あり、大納言には陣座なし。但大政官の仗座あり。こゝの「陣」は役所又は詰所といふ程の意と見るべし。

(口譯)
暫く經つて、式部丞
某とかい勅使で参つ
たから、御膳宿の北
に寄つた間に、褥を
さし出して勅使をす
わらせた。中宮から
の御返事は今日は早
くお出しなされた。
まだその褥を取込ま
ぬうちに、東宮の御
使で、周頼の少將が、
淑景舎の御方へ参つ
た。渡殿は狭い縁な
ので、こちらの御殿
の縁に褥をさし出し
た。お手紙を受取つ
て、關白殿與方中宮
等が御廻覽なさる。
關白殿が「御返事を
早くお上げなさい」と
仰しやるが、淑景
舎がすぐにもお上げ
なさらぬのを、關白
殿が「私が見ますの
でお書きなさらぬと
見える。」

しばしありて、式部の丞すけながしとかや、御使に参りたれば、御膳宿のやどの北に寄りたる間に、褥むしろさし出でてすゑたり。御かへりは、今日はとく出させ給ひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、東宮の御使に、周頼ちかよりの少將まゐりたり。渡殿はほそき縁なれば、こなたの縁に褥さし出でたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覽じわたす。御返かへりごとはや「などあれど、とみにも聞え給はぬを、殿ながしが見侍れば書き給はぬなめり。さらぬをりは間もなく、これよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御おもてはすこし赤みながら、少しうちほゝゑみ給へる。いとめでたし。「とく」など、うへも聞え給へば、奥さまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄りそひ給ひて、もろ共に書かせ奉り給へば、いとづつ、まじげなり。宮の御かたより、萌黄の織物の小袿こぎ、袴押し出されたれば、三位の中將かづけ給ふ。くるしげにもちて立ちぬ。松君のをかしう物の給ふを、誰も「うつくしがり聞え給ふ。宮の御子達みこたちとて引き出でたらむに、わるくは侍らじかし」などの給はするを、げになどか、今までさる事のとぞ心もとなき。

(考異) 少將まゐりたり の下、原本御文取入れての一句あり。必ず衍と覺しければ削りたり。さるは次の「しとれき

し出てたり」の下にも、この句ありて重複したれば也。○もちて 原本思ひてとあり。抄本による。

○式部丞なにがし 藏人にて式部丞かねたる人なり。勅物に、信經とあるは誤なり。信經は長徳三年に式部丞となれる人にて、時代あはず。○とかや の下、いふがを略けり。○御使に 主上より中宮への御使になり。○御膳宿 オモノヤドリ。御膳を納めおく所。抄に「御膳宿所は臺盤所の内にあり」。○すゑたり 勅使をなり。○御返り 中宮のなり。○東宮の御使に 東宮が淑景舎への御使になり。○周頼の少將 道隆の六男、尊卑分脈に「大舍人從四位下」とあり。○渡殿は 上に「唐庇のこなたの廊」とあるもの也。○こなたの縁 登華殿の東面の簀子なり。○御文とり入れて 東宮の御文を受取りてと也。○御返りはや 道隆の詞なり。「はや」は早くし給への略。○とみにも聞え給はぬを 淑景舎がすぐにも御返事を上げ給はぬをと也。○なにがし 道隆自身をさす。不定の代名詞なれど、かく自稱にも用ゐる。○さらぬ折云々 何某(道隆)が見ざる折は、あひ間もおかず、此方より手紙をお上げなされると也。わざとからかひ給へる也。○御おもては 淑景舎がなり。○とくなど 疾く書き給へなどの略。○奥さまに向きて云々 淑景舎がなり。「奥さま」はこゝにては西向にて、うへ即ち母君の居給へる方なり。○もろ共に書かせ奉り 指圖して書かせ申すをいふ。○つゝ、ましけなり きまり悪く遠慮せらるゝやうなりと也。○おし出だされたれば 簾の下よりなり。○かつげ給ふ それを取次ぎて勅使に被け給ふと也。○苦しげにもちて 勅使がなり。○うつくしがり いつくしがりに同じ。かはゆがること。○宮の御子達とて この松君は中宮の御子方といひてと也。○などの給はするを など關白殿の給はするをと也。○さる事の さる事のなきの略。「さる事」は皇子を設け給ふことをさす。

未の時ばかりに、「菴道まゐる」といふほどもなく、うちそよめき入らせ給へば、宮も

さもない折は、絶間なくこちからお上げなさるものを、淑景舎がお顔は少し赤くなりながら、少しニコニコなさつてゐるの、甚だ美しい。「早くお上げなさい」など奥方も仰しやるので、淑景舎は奥の方に向いてお書きなさる。奥方が側近くお寄りになつて、一緒になつてお書きせ申上げるので、一層きまりわるさうである。中宮の御方から萌黄の織物の小袖と袴を、使への祿として押出されたので、三位中將が取次いでお遣りなさる。使の周頼の少將は持苦しさうに戴いて往つた。松君が面白く何か仰しやるのを、誰も誰も可愛がり申される。關白殿が「この

松君は中宮の御子達だといつて人前に出しても、悪くはありませぬよ」など仰しやるのを、ほんに思へば、何て中宮様には、今まで御子様のお出来なさる御様子がないのかいと、気がかりである。

(口譯) 午後二時頃に「菴道が敷かれます」といふ間もなく、主上がお召の音をそよ／＼とさせてお入りなされる。中宮もそちらにお寄りなされ。すぐ御帳臺に入つて御座なされたので、女房は遠慮して南面の間の方へ、そよ／＼と出たやうである。廊下に殿上人が大層大勢居る。關白殿は御前に職の役人を呼んで、果物や肴をお取寄になる。

こなたに寄らせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮司召して、果物さかな召さす。奥人々酔はせなどおほせらる。まことに皆ゑひて、女房と物いひかはすほど、かたみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山の井の大納言召し入れて、御うちぎまゐらせ給ひて、還らせ給ふ。さくらの御直衣に、紅の御衣の夕ばえなども、かしこければとゞめつ。山の井の大納言は、入りたゝぬ御せうとにても、いとよくおはすかし。匂ひやかなる方は、この大納言にもまさり給へるものを、世の人は、せちにいひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山の井の大納言、三位の中將、内藏の頭など、皆さぶらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ参りたり。宮こよひはえなどしづらせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、早のぼらせ給へ」と申させ給ふに、又、春宮の御使しきりにある程、いとさわがし。御むかへに、女房、春宮のなども参りて、「とくとそゝのかし聞ゆ。宮まづさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、淑景舎さりともしいかでか」とあるを、宮なほみおくり聞えむなどの給はするほど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」として、まづ淑景舎わたり給ひて、殿など歸らせ給ひてそのぼらせ給

ふ。道のほども、殿の御さるがう言に、いみじく笑ひて、ほと／＼うち橋よりも落ちぬべし。

(考異) ○参りたり 原本参り給へり、とあり。抄本による。

○未の時 今の午後二時。○庭道をみる 庭道を舗き奉ると也。主上の此方へ入らせ給ふための設なり。勅物に「信經記云、二月十八日渡御登華殿、仰掃部寮敷庭道、午刻供朝膳、未刻渡御、頭中將齊信朝臣持御劍於南妻、有侍臣盃酒事、中刻還御」。○うちをよめき 主上がなり。「そよめき」は装束の衣ずれの音をいへり。○宮もこなたに云々 殿、うへなどゐる方を立ちて、主上の方に寄り給ひぬと也。○御帳の中に入り給ひぬれば 二所ながら御帳臺の中に入り給ひぬればと也。御寝なされたる也。帳臺を見よ。○南表 南の廂の方をいふ。○官司めして 中宮職の役人を呼び出して、御供の殿上人に、菓子肴酒などもてなせと命ぜらる、也。○さかな 酒肴の義にて、酒の下物になる物をいふ。○人々酔はせ 「人々」は殿上人等をさす。「酔はせ」は命令格なり。酔はしめよといふに同じ。○山の井大納言 道頼。道隆の長男にて、祖父兼家の子となる。伊周、中宮、隆家等の異母兄なり。永延二年正四位下中將、同三年藏人頭、正暦元年参議、同二年權中納言、同五年權大納言たり。長徳元年六月薨す。年廿五。「山の井」はその北の方の家のある處の名なり。拾芥抄に「山井殿、三條坊門北、京極西、惡所云々」。○御うちぎ参らせ給ひて 源氏紅葉の賀に「上の御梳櫛に侍ひけるを、はてにければ、うへは御うちぎの人めし出でさせ給ひぬ」の浪江入楚の註に「御装束召さする衣文の人なり」とあり。「うちぎ」は打着的義にて、装束を着るをいふ。桂又は内着的義とするは誤ならん。即ち装束奉仕の人を御打着の人といひ、その人に装束調へさせ給ふを「御打着参らせ給ふ」といへる也。花鳥餘情に、藏人私註の文を引

「人々を酔はせしなど仰しやる。仰しやる通りほんに皆酔つて、女房達と話をしあつて居る間、互に面白いと思つてゐる。日の入る頃に主上はお起きになつて山の井の大納言をお呼寄せになつて、装束をお整へになつてお還りなさる。櫻の御直衣に紅の御下着の夕日に映えたさまなど、美しいけれど勿體ないから筆をとめた。山の井の大納言は、伊周等の一まきとは縁の違つた兄さんで、甚だ立派でおありなさるよ。美しい點は、この伊周の大納言にも優つて居られるものを、世間の人は類に劣つてゐるやうにおくさし申すことが、氣の毒である。關白殿、大納言、山の井の大納言、

きて、御髻御鬢つくろふ人を御うちぎといふとあれど、源氏の文に據れば、御梳櫛と御打着とは別役なり。○夕ばえなどもかしこければ云々 夕榮なども美しけれど、畏ければ筆をとめつと也。この「とめつ」を春註詳解などは誤りたり。○入りた、ぬ御せうとにても云々 仲間はづれの御兄人にて、甚だ勝れて居給ふと也。中宮、伊周、隆家などの兄なれど、異腹なれば、「入りた、ぬせう」といへり。「にても」はにてに、もの歎辭の添ひたる詞なり。口語のデに當る。この時代には、デ、モの意に用ゐる事なし。○匂ひやかなるかたは 美しき方はと也。○この大納言 伊周をさす。○せちにいひおとし聞ゆる 只管いひ下し申すと也。○内藏頭 頼親。道隆の五男なり。尊卑分脈に従四位下左中將とあり。○皆さぶらひ給ふ 主上還御のお見送になり。さてお見送はてて、復もとの座に還り居給へる也。○馬の内侍のすけ 右馬權頭藤原時明の女。内侍のすけは内侍所の次官(典侍)。春註に「一條院源氏物語を御覽じて、紫式部を日本紀をこそよく見たりけれど宣ひしを妬みて、式部を日本紀の局といひし人なるべし。歌人なり」とあり。内侍所を見よ。○こよひはえなど 今夜はえ参るまじなどの略。○あるまじき事 の下、なりを略けり。○春宮の御使しきりにある 淑景舎を召さる、お使なり。○女房春宮のなども 主上方の女房、及び春宮の女房などの略。抄本には「春宮の侍従なども」とあり。○騒がし世話シナイといふに當る。當時かゝる用法ま、あり。○とくと 疾くのぼり給へとの略。○まづさばかの君云々 先づ然らばかの淑景舎の君をお送り申上げられて、その後にはのぼるべしの略。「さば」はさらばに同じ。こゝは御迎の使の頻なるをさす。○さりとともいかでか の下、さる事の侍るべきを略けり。姉宮に對しての遠慮なり。○遠きをさきに の下、こそせめを略けり。遠き方を先にお見送り申すべしと也。登華殿よりは、東宮御殿へ参るは、清涼殿へのぼるより遠し。○のぼらせ給ふ 宮はなり。○道のほども 殿の歸り給ふ道の程もの略。○うち橋 假に架けたる板橋をいふ。家屋雜考に「廊

三位中將、内藏頭など、皆主上をお見送り申上げる。中宮が今夜お上に御當直なさるやうにとの勅使で、馬の典侍が参つた。中宮が「今夜はよう参られません」などお参りなさるのを、關白殿がお聞きなされて「仰に背くことは甚だあるべからざる事です。早うお上りなさい」と申されるに、又春宮から淑景舎への御使が類にある折柄、甚だ世話しない。御迎に主上附の女房や春宮方の女房などが参つて「疾くお上りなさい」とお勧め申上げる。それならば先づ、かの淑景舎の君をお送り申上げて」と中宮が仰になると、淑景舎が「それでも何で私がお先に参られませう」といはれる

中の土間へ、ははせ跛橋の如き板橋を渡すをいふ。これは何處へも移し用ふべき爲なれば、ウツシハシの義なり。ツシの約チなれば、此名ありといへり。源氏桐壺に「うち橋渡殿、かしこの道に、云々」。萬葉十に「打橋わたす君がこむ爲」。

評 この段は史實の示す通り、長徳元年二月十日の事である。されば伊周を大納言とあるのはどうか。伊周は前年の八月に既に内大臣に昇任してゐる。つい呼馴れた稱呼のまゝに書いたものだらう。(主上御年十六、中宮二十、淑景舎十四五、道隆四十三、うへ未詳、伊周二十二、道頼二十五、隆家十七、松君三、頼親、周頼未詳、清少三十、三十一?)

當時は中關白(道隆)一家全盛の最頂點で、道隆は攝關たること既に六年、妻貴子と共に、世の聲望、君の寵遇を飽くまで荷つて、男子二人(内大臣伊周、大納言道頼)は顯要に居り、女子は相次いで當帝東宮の后妃に備り、政權は全くその掌中に握られて居た。随つてこの中宮の最盛期であつた。

淑景舎の姉宮御訪問は、東宮の女御になつてからはじめての事で、この機會に一家の總集會を、道隆は企てたらしい。

登華殿は東面を正面とした御殿なので、その東廂の二間に、御對顔の席は設けられた。淑景舎の君が夜中からの御出掛は、そのあらはなのを嫌はれた爲だらう。それは淑景舎からくるに、官耀殿は東宮の第一女御藤原娥子のお住居であり、貞觀殿は御匣殿の御部屋であり、その他町の女連の垣間見は、必ず五月蠅さに堪難いことであつたらうと思ふ。所で殿うへ打揃つて曉の外出は、稍異例に屬する方が、これも早く子供達の揃つた顔を見たからだらう。「一つ車」はその行粧の極めて略儀な事を語つてゐる。中宮の御座に屏風を立廻したのは、その座の主人公である事を證してゐる。正席に屏風を立てることは、この時代の習慣であつた。二間は場所が狭いので、寒さ凌ぎのお火鉢だけを据ゑて、豫め御

のを「やはりあなたをお見送り申しませう」など中宮が仰せになる具合、甚だ面白く結構である。それなら「遠い方をお先に」といふので、まづ淑景舎がお出掛になつて、關白殿などお歸りなされてから、中宮はお上りになる。關白殿のお歸りの道々も、その御冗談口、人達が非常に笑つて、あぶなく打橋から落ちさうである。

席を設けた。

淑景舎は從來父母の膝下に居られたのだから、中宮付の女房などは、お目にかゝる機會は、殆どない。只この一年前の積善寺供養は、道隆主催の大法會だつたから、一家族振つて參詣し、中宮も御所から參會したので、清少もそのお供で、中姫君(淑景舎)の後姿だけをお見掛けしたまで、ある。中宮が特に清少にだけ垣間見を許されたのは、そのお氣に入りな事が想はれる。

御梳櫛はてて御召を調へられる。こゝで衣色の趣味に就いての中宮の御嗜好が拜察される。萌黄を「にくし」と仰せられたのは、若い色合なので、似合はぬと思し召されたのだらう。外の方々は既に着席して、中宮の御出座を今やと待受けて居るので、中宮も居ざり出て、設の席に就かれた。

北の方の装束は甚だ簡單である。中宮又は女御といへ、わが娘なので、略儀に従つて唐衣も着ない。たゞ裳だけ借物で間に合はせた。正装としては、唐衣よりも裳を重んじた故であらう。淑景舎は最も正式に、扇までも翳されてゐる。萌黄の衣も、これはお年若だけに映りがい。道隆が柱にもたれて、直衣の入紐を手まさぐりにしながら、娘達をながめながら、冗談口を利いてゐる態度は、甚だ得意らしい。この對面の場面は、史記鴻門の會の一節を想起させる面白い叙述で、只あれは武張り、これは和いだまで、ある。

淑景舎の「繪にかきたるやう」は、美しいことの單なる形容ではない。物語などによくある句で、チンと片付けた趣をいふのである。多少御初心で居らせられる點もあらう。榮華物語、見はてぬ夢の卷には、攝政殿(道隆)をば、帝大人みかどび給ひぬれば、關白殿と聞えさす。中の姫君(原子)十四五ばかりにならせ給ひぬ。春宮(三條帝)に參らせ奉り給ふありさま、花々とめでたし。——淑景舎にぞ住ませ給ふ。何事も輝くやうなれば、いはむ方なくめでたし。女御の心さまも花やかに今めかしう、笑ましき御有様なり。年頃官耀殿を見奉らせ給へ

る御心ちに、これは事に觸れ、今めかしう覺さる。女御もわざとてなすと思されど、御衣の重りたる裾つき袖口などぞ、いみじうめでたく御覽せられける。

こゝでも淑景舎を抑へて、中宮を揚げてゐる。それにも相當の理由はある。中宮が何を召してもお似合なざるのも、いと安らかなのも、今が發育の完全した女盛であらせられるからで、この一門特有の豊艶な御容姿と拜察すると、紅の御衣に匂ひ合はせた具合は、必ずお美しい譯だから、「なほ儂はいかでか」は、あながちわが佛尊しのみではあるまい。

朝のお手水が今使はれる。お湯から小道具まで、御自身のお用になるのが例で、淑景舎の君のは、わざ／＼淑景舎から運んでくる。御手水は渡殿まで出てお使ひなされる。其處までお送した女房達は、あまり渡殿が狭いので、六人の中半分は歸つて、少將の君や宰相の君が居残つてゐた。萌黄紅梅など着た下仕がお手水を取次ぎ、櫻の汗衫を着た童女がお世話をする。この童女が一枚加ると、何時も風情が面白くなる。中宮様のは童女の代に、采女がお介錯申上げる。これは正式だ。采女は、その比禮裙帯も今風ではないが、唐めいて見えるのは、特におしろいを壁塗にして、髪上した姿をさすのではあるまいか。紫式部日記に、

内侍一人出づ。髪上げうるはしき姿、唐繪をかしげにかきたるやうなり。

とあるので、さう思はれる。屏風のおし明けられたのは、お膳の爲に、女藏人や御まかなひの女房が入るからである。隱蓑笠の傳説は、随分舊いことで、

師走のつこもりによるの鬼を

鬼すらもみやこのうちと蓑笠をぬぎて、こよひや人に見ゆらむ(躬恒集)

かくれ蓑の中納言の二の舞にやあらむ。(袂衣物語)

など、清少以前にも、殆ど同時にも見え、又寶物集や續詞花集にもあることを思ふと、一般に流通した傳説と見える。

「あしかめり、後めたき業かな」と、外の者が心配した通り、垣間見は果して關白殿のお目にとまつて、一寸お咎になつて見たが、中宮がお取成をなさるので、例の散樂言に、「彼はふるき得意を」など胡摩化してしまはれた。清少は初宮仕からもう數年にも及ぶから、實際ふるき得意である。「にく氣なる娘ども」は、いはゆる卑下自慢の倒語である。

淑景舎のお膳は、「あなたにも云々」と、別に書いてはあるが、中宮と同時に參つたことは勿論である。「翁媪におろしをだに」とあるので見ると、兩親共まだ頂かぬものと見える。中宮は素より、淑景舎でも、表向はお上通りであるから、君臣の差別は、親子でもキツバリして居るのである。

そのうち伊周隆家の子供達が打揃つて、孫までもやつて來た。松君はのち道雅といつて、子まである妻君に逃隠れをされた程の器量なしであるが、乳兒の時は、どうしてチャホヤされたものだ。

小千代君(伊周)は、かの大納言(源重光)の姫君、いみじう美しき若君うみ給へれば、北の方貴子(攝政殿(道隆)など、いみじきものにかしづき給ふ。松君とぞ聞ゆめ、殿迎へ聞え給うては、乳母にも君にも御贈物して、歸し聞え給ふ。(榮華物語、見はての夢)

といふ有様で、道隆祕藏の愛孫であつた。

中宮、淑景舎、伊周、隆家、松君、かう顔が揃つて見ると、この父祖たる道隆の榮華は大したものだが、もと／＼藤氏の嫡々だから、寧ろ當然でもある。只その母親たる貴子の果報は、實際めでたい。元來が儒家の高階氏の女に過ぎなかつたが、家學を傳へて、

女なれど眞字などいよく書きければ、内侍になさせ給ひて。(榮華物語)

まことしき文者にて、御前の作文には文奉られしはと。少々なのこには勝りてこそ聞え侍りし。 (大鏡)
といふ譯で、高内侍の才名は宮中を震撼させ、随つて圓融帝さへ多少思召があらせられたと、續古事談は語つてゐる。又歌を詠んでは、

忘れじのゆく末まではかたければふをかぎりの命ともがな

の名歌を始として、勅選集中に殆ど五首を數へる。才人はとかく躰き易いものを、これは順境に進んで、關白殿の北の方となつたのさへ僥倖であるのに、かうした方々の母君といふのだから、所謂さいはいひ人の頂上であらう。

登華殿は清涼殿に比して建物が小さい。随つて縁も狭い。そこに嵩張つた束帶姿で、伊周隆家の兄弟が裾を曳摺つたのだから、愈よ狭く感ずる。圓座を出して著席をす、めると、「役所に一寸顔出しをして來ます」と、松君だけ置いて、二人は中座されたのである。

中宮には御入内後六年の今日に及んで、まだ産屋の騒をなさらぬ。以前は主上が御幼少なので無理もないが、もうそろ／＼御出來なされてもよさうな頃合である。殊に皇子の有無は、外戚が權力の消長に關する一大事で、御簾のみ孕んだ素腹の後は、徒に嘲笑の種となるのみであつた。道隆のいつた「宮の御子達とて引出でたらむには、孫に目を無くした好々爺の言とのみ見ては當るまい。この孫がもし皇胤の孫であつたならばとの感慨は、すべてが満足な境遇であるこの際、當然起るべき順序ではないか。周圍の人達が、「などか今までさる事のこと」と心もとながつたのも、單なる情味ばかりの同情ではないと思ふ。さて中宮は、この翌年末にやう／＼皇女を擧げられたが、もう御祖父たるべき道隆は死んで居た。式部丞某は藏人である。お膳宿は、登華殿の西南にある中宮の御方のである。清涼殿からくると取付だから、その北の間に勅使を請じ入れた。東宮は當時昭陽舎(梨壺)が御住殿であつた。これは榮華物語、

語、晚待星の巻に、

梨壺には、例のやうに春宮おはします。

とあるので、さう断定する。昭陽舎から出たお使は、登華殿の渡殿にとが、つてくるのが順序である。渡殿は例の狭い。その縁はなほ狭い。そこで本殿の東面の縁に、その席を設けた。

主上から中宮への御消息は、後刻御入來のお知らせで、春宮から淑景舎へのお使は、「今宵參れ」との御消息らしい。是等の文は即ち艶書であるが、中宮は大人であらせられるから、一本立て勿々に御返事を差上げる。淑景舎はまだお年若ゆゑ、御返事には後見が入るので、御文を兩親や姉宮などが、手から手に拜見する。そして指圖をして御返事を書かせる。この頃は決してさういふ筋の事を、隠し立をしたり、祕密がたりしない。朋友間などになると、それを見せ合つたり、自慢しあつたりもする。空穗物語の政頼兼雅の左右大將の艶書合や、源氏物語の雨夜の品定の厨子の文などが、その適例である。

當時の帝王は、后妃を御することゝ容易でなかつた。いや后妃その人には、さまでの遠慮も入るまいが、その父兄は大抵執柄か大臣などだから、うっかり機嫌を損じては、決してよい事はない。さればその歡心を買ふ爲には、勉強してその子妹を熱愛する態度を示す必要があつた。后妃はお召上げになるのが正式で、后町に御出張になるのは略例である。今主上が俄にこゝに入御になつて、中宮と御帳の内に入られたのは、特殊の寵遇を語るものであらねばならぬ。尤も一條帝は、心から定子中宮を敬愛もして居られたのは事實である。一旦御歸殿になる。すぐ折返し今宵宿直の御召がある。東宮は東宮で、淑景舎お召のお使を、頻にお立てなさる。遂にはお迎の女房が、兩方からくる。裏面に多少の方便は伏在して居るとしても、父たり母たる道隆貴子の満悦はいふまでもあるまい。

中宮も、折角の仰言を辭むのは、「あるまじき事」と御承知であらうが、「今宵はえこそ」と、出仕を

溢られたのは、珍しく兩親打揃つての御入來だから、ゆつくり歡談したい御希望があつたのではあるまいか。實際かういふ機會は、永久に再び與へられぬ事となつて、これが父公生前の顔のを見をさめとなつた。蟲が知らずといふのは、こんな事だらう。

主人としては客を見立てるのが禮であり、妹としては姉を先立てるのが禮である。そこであなたからお先にと、姉妹のお美しい争が始る。「いとをかしうめでたし」の譯である。登華殿から東宮御殿までの距離は、登華殿清凉殿間の距離より遠い。「遠きを先に」は、この際妥當な解決である。

一旦退座した伊周や隆家が、主上還御のお見送に立つてゐる。還御の頃は日没だから、疾うに二人とも引返して居たことが略筆されてあるのだ。

道隆の子女達を評して、中宮は「安らかに大人びて儔なし」、淑景舎は「めでたく美し」、伊周は「物々し」、隆家は「らうくじ」、松君は「うつくし」と稱へてゐる。妾腹の子では道頼を、「匂ひやかなる方は、この大納言(伊周)にも優る」と、大いに譽めてゐる。これは甚だ公平な評で、

(道頼)御ちたちいと清げに、あまりあたらしき様して、物よりぬけ出でたるやうにぞおはせし。御心ばへこそ異御はらからにも似給はず、いとよし。又されをかしくもおはせし。(大鏡)

とあるに吻合する。けれども道頼は、夙く祖父兼家に子養され、且庶子である爲、實の親の愛が薄く、大殿(兼家)この君(道頼)を、いみじく思ひ聞えさせ給へり。大納言殿(道隆)これをよそ人のやうに思ひて、小千代君(伊周)を、いいで、これ疾くなしあげむと思したる。(同上)

といふ變な事情で推移し來つた結果、面談の連中は、伊周を揚げ道頼をおとしたと見える。それを只管氣の毒がつて居る所は、この女一片の義氣稜々たるものがある。

この道頼の外、頼親(内藏頭)周頼(少將)などまで、腹こそ違へ、男女數多の子供達を眼前に揃へて、

身の程々に成出た、榮華の光景の展開したこの場面を、道隆の心地には、そも何と見たらう。散樂言は「例のたはぶれ言」で、この人の十八番ではあるが、「いと憎げなる娘どもを云々」、「翁媪におろしをだに給へ」、「なにがしが見侍れば云々」など、機嫌のよいま、に、今日は連發である。得意想ふべしである。

廊に並んだ殿上人まで、喜の均霑で、「人々酔はせ」と、殿のお許しが出ては、眞じめな顔は一つもなく、女房達とされかはす賑やかさ。もとく酒は道隆の好物であつた。飲んだら人も我も泥酔しないと喜ばなかつた。酒飲友達が居ぬなら、極樂でも御免蒙らうといふ程の酒豪であつた。

をのこは上戸ひとつの興の事にすれど、過ぎぬるはいと不便なるをり侍りや。祭のへさ御覽すとて、小一條大將、(濟時)閑院大將(朝光)と一つ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ。烏つついぬたるかたを、瓶に作らせ給ひて、興あるものに思ひて、ともすれば大御酒入れてめす。今日もそれにて參らする。もてはやさせ給ふ程に、あまりやうく過ぎさせ給ひて、後は御車のしりくちのすたれ皆上げて、三所ながら御警はなちておはしましけるは、いとこそ見苦しかりけれ。大方この大將殿達の參り給へる、尋常にて出で給ふをば、いと本意なく口惜しき事に思しめしたりけり。物もおぼえず御裝束もひき亂りて、御車さしよせつ、人にかゝれて乗り給ふをぞ、いと興あることにさせ給ひける。(大鏡)

思へば連發の散樂言も、すべてこの酒氣から放散してくる瓦斯である。然しいざとある場合には、チンと濟して酔つて居た顔も見せぬといふ、胸のあたりに縮括のある、重寶な酒飲であつたさうである。

今日はいかう何もかもめでた盡しであるが、實は一抹の暗雲が、去年から低迷して居た。それは道隆の病氣である。荐に水を飲みたがる所から、飲水病といひ、その伯父攝政伊尹もこれで死んだ。

冬つ方になりて、關白殿水のみ聞し召して、いみじう細らせ給へりといふことありて、内などにもなまなく參らせ給はず。この二位の新發意(高階成忠)を感はして御祈をし、いみじき事どもをす。北の方思し至らぬ事な

し。殿の御心地のたいならぬをぞ、世の大事に思ふめる。(榮華物語、見はてぬ夢)

さて新年の長徳元年となつては、政務も簾中で聞くやうになり、この二月頃は、大分病氣が昂進して居た筈である。飲水病は今の糖尿病である。知らぬから仕方がないが、糖尿病には敵薬だといふ酒を暴飲して居たから、病氣はますます重るばかり、もう三月になつては、長押をおりるのすら困難な位で、四月十一日に遂に薨逝された。大鏡の作者が、「大御酒の亂れさせ給ひし也」と診断したのは誤診で、酒は只その死期を早めたに過ぎない。こんな大病でなほ、散樂言を一日いひ暮して、人達をして打橋をあぶなく踏外させた、その元氣に驚く。

この文、道隆一家の榮華の光景を、極力描寫してゐるが、冷靜に客觀的に觀察したのではなくて、全く當座の歡喜に酔うて、有頂天で書いてゐる。筆々熱を帯びて、火花が散るばかりに思はれるのも、この所以である。

然し本文の起草された時期に就いて一言したい。これを誰も宮仕中の筆と推斷するらしいが、頼親が内藏頭に任じたのは、すつと十年も後の事だ。

寛弘二年六月十九日ノ除目、内藏頭頼親、中將如元。(小右記)

とある。九十二段の二月晦の文が、寛弘六年以後の筆である事を思合はせると、本文は寛弘二年六月以後の起草と斷じて、間違はあるまい。

九十一段

殿上より、梅の花の、皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、只「はやく落

ちにけり」といらへたれば、その詩を誦して、黒戸に殿上人、いと多く居たるを、うへの御前聞かせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらむよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

花の皆散つてしまつた枝をよこして「これはどうです」と尋ねたから、只「早く落ちにけり」と答へてやると、黒戸に殿上人等がその詩を吟じて、大層大勢集つて居たのを、主上がお聞き遊ばされて「可なりな歌など詠出さうよりも、かういふ方が優つてゐるよ。よく答へた」と仰になつた。

○散りたる枝を の下、おこせてを略けり。○これはいかに の下、見給ふを略けり。○はやく落ちにけり 紀長谷雄の停盃看柳色の詩の序に、「大庾嶺之梅早落、誰問粉粧」とあるを思ひ寄せて答へたる也。大庾嶺は支那江西省南安府城の南にあり。梅多くて梅嶺と名づく。早落の落は花の散るにいふ。落花落梅の例おもふべし。○いらへたれば 次に「多くるたるを」とあるに對し、文法上の時と、のはず。いらへければとあるべし。○その詩を誦して 「その」は「大庾嶺云々」の句をさす。「ず」は誦の字音。○うへの御前 主上なり。○よろしき歌 一通りのよき歌なり。「よろし」は例の可成の意。

○かゝること 古き文句など應用して答ふるをさす。

殿上は若人達の詰所であり、又暇な折も多いので、いろいろな事を目論では、女房達の才能を試し、よいとかわるゝとか、噂の種を製造する。それが常人だけの名譽不名譽にとゞまるならまだしも、延いてはお召使ひなさる御主人達のお顔に關はるのだから溜らない。かうなると女房達も、なか／＼うつかりして居られなくなる。尤も最初からその覺悟で、主人達も女房を精選して召抱へたものである。空穗物語、あて宮の巻に、

かくて御参り近くなりぬ。御調度御よそひをうるはしく清ちに調せられ、御供人廿とな四十人、宮四位あるは宰相の娘、髪たけにあまり、たけよき程にて、手書き、歌よみ、こと琴ひき、人のいらへすること皆上手、云々。とあつて、種々資格を具備したうへに、人のいらへすること皆上手な手合ばかりである。「瓦の松はあり

つや」の宰相の君のやうな人も、中宮の御内には居る。只多くの中で、殊に清少が傑出してゐたことは勿論である。

棒ばかりになつた梅を出して、「これはいかに」は、甚だ皮肉な問である。返事のしやうに困る。所を「早く落ちにけり」と、典故を踏んでの速答は、全く上手ならへで、後に出てくる「おいこの君」の氣轉と同巧異曲である。洵に主上の仰せられた如く、通例の歌を詠んだのよりは、遙に面白い。

殿上人は悪口もいふ代り、物めですること、亦尋常でない。その機才にひどく感銘して、清少の控へてゐる黒戸の廊に集つて、「大庾嶺の梅は」と朗詠する。黒戸は上の御局に近い。そこで端なく主上のお耳にとまつた譯である。中宮はこの時清凉殿にお上り中であつた。

「大庾嶺之梅云々」は、詩ではなく、詩序である。四六體の文章である。但一般には四六の賦體は、詩の取扱を受けて居つた。その押韻するからして、詩に近いものである。

九十二段

二月のつごもり、風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、「公任の宰相殿の」とあるを見れば、ふところ紙に、たゞ、

すこし春あるこゝちこそすれ。

とあるは、げに今日のけしきに、いとよくあひたるを、これが本は、いかゞつくべからむと思ひ煩ひぬ。誰々か」と問へば、主殿司それ／＼といふに、皆はずかしき中に、宰

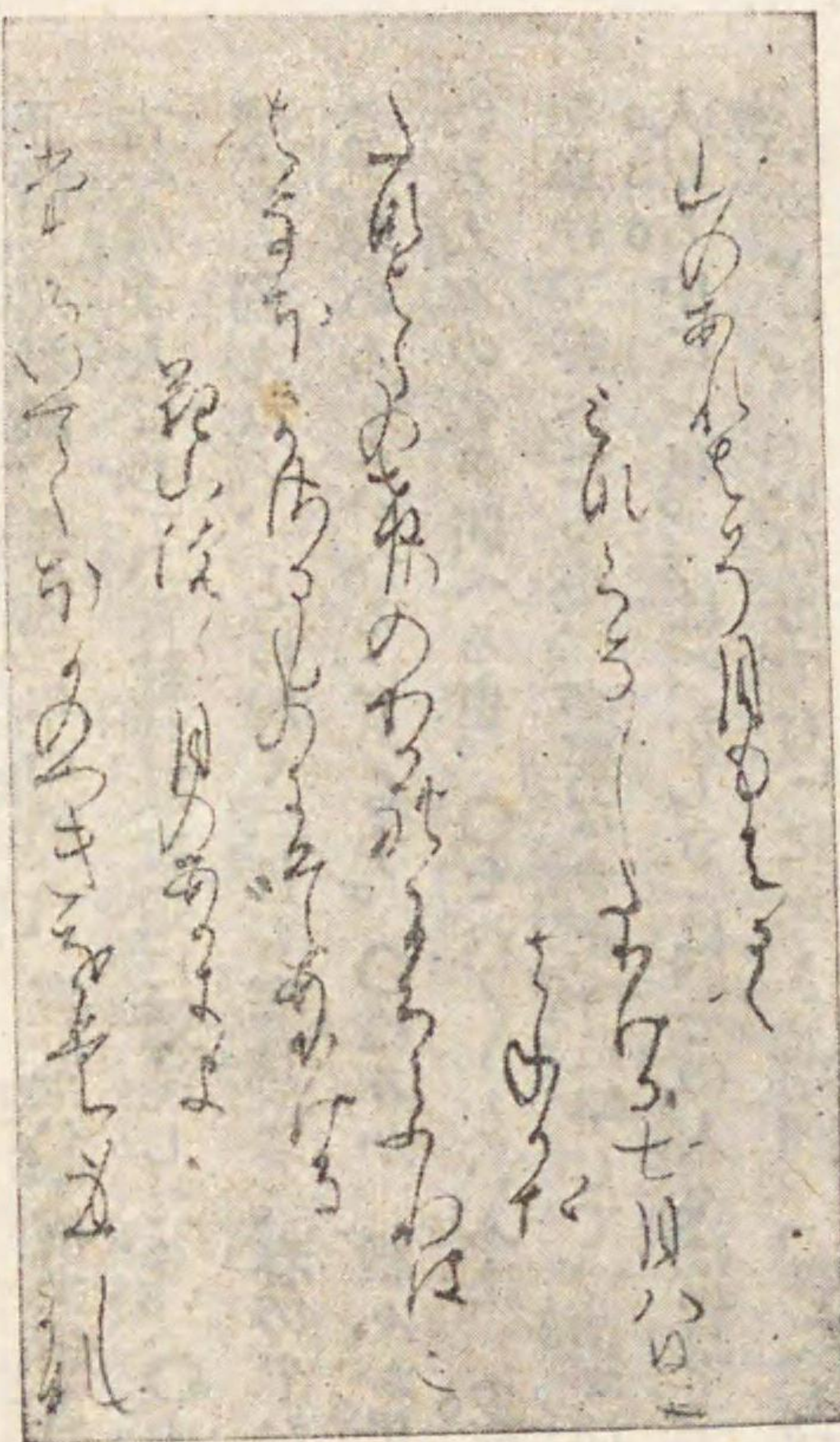
(口譯) 二月の晦、風がひどく吹いて、空が大層暗いのに、雪が少しちらついた頃、黒戸に主殿司がきて、「かう参りましたといふから、近寄ると」公任の宰相殿のお手紙です」と出したのを見ると、懐紙にたゞ、

すこし春ある心ちこそすれ(わづかばかり春のある氣持がする)

と書いてあるのは、ほんに今日の景色に大層よく合つてゐるのを、この上の句はどう附けようかしらと、思案に餘つた。「誰々が入らつしやるか」と尋ねると、「たれそれ」といふに、誰も皆恥かしい中に、宰相殿への御返事をば、何で風情なしにいひ出されようと、自分の心一つで苦しいのを、中宮の御前にお目にかげようとすべく、中宮は主上が入らつて御寝になつてゐる。主殿司は「早く」と催促をいふ。ほんに返事が拙いうへに遅からう事には、取得がないから、まよと思つて、

栢の御いらへをば、いかゞ事なしびにいひ出てむと、心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれども、うへのおはしまして、おほとのごもりたり。主殿司は、「どく／＼」といふ。げに遅くさへあらむは、取りどころなければ、さばれとて、そらさむみ花にまがへてちる雪に。と、わな／＼／＼書きて取らせて、いかゞ見給ふらむと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、俊賢の宰相など、「なほ内侍に申してなさむ」と定め給ひし」とばかりぞ、左兵衛督の中將にておはせしが語り給ひし。

(考異) ○公任の宰相殿の 原本公任の君宰相中將殿のとあり。○宰相の 原本宰相中將のとあり。○俊賢の宰相 原本、俊賢の中將とあり。○左兵衛督 原本左兵衛佐とあり。以上古本による。



公任書

○かうしてさぶらふ 「かうして」はかくを強くいへるのみ。○よりたるに 近寄りたるにと也。○公任の宰相殿の 下、御文にて侍りを略けり。原本、宰相中將と續けたれど、當時この官たる人は齊信なり。然るに公任をば公任の君と書き、齊信をば官のみ書かんこといかいあらむ。○公任 關白太政大臣藤原頼忠の長男。永觀中左中將、永延中藏人頭、

空寒み花にまがへてちる雪に(空が寒さに、花に似せてうち散る雪に)と慄へく書いて渡して、人々が何と御覽なさるだらうと思ふのもつらい。この評判を聞きたいと思ふが、又譏られたのなら聞くまいと思ふのを、幸に好評を博したと見えて、俊賢の宰相などが「やはり内侍に申請してせうぞ」と評定なされた」とだけを、左兵衛督のその頃中將で居られた方が、お話しなされた。

正暦三年参議、長保三年中納言、寛弘六年權大納言、永久二年一月薨す。年七十六。四條大納言と稱す。古今の才人にして、管絃詩歌書道に通達したり。○すこし春あるこゝちこそすれ 空寒く雪さへ降りて、春とも覺えねど、とにかく二月も晦日にて、春の半なればかくいへり。こゝは雪の花かと思ゆるを、すこし春ある」といへるにあらす。○誰々か 誰々か居給ふの略。殿上よりの消息なれば、そこに居合はせたる人々の名を問へる也。○それくといふに 主殿司がそれくの人ぞ居給ふといふにと也。一々名を擧げて答へたるを、必要なさまに略して、「それく」と書ける也。○はづかしき中に 恥かしき人なる中にと也。「はづかしき」はその人々は皆才子なれば、心置かるゝをいふ。○いかゞ事なしびに「いかゞ」は「いひ出でむ」にかゝる副詞。「事なしび」は事無しぶりの約にて、何の取立てたるふしもなきをいふ。平凡にの意に近し。○心ひとつに苦しきを わが心一つに苦しきものをと也。相談あひ手もなくて困却するをいふ。○御前に 宮の御前になり。○うへ 主上なり。○とくく 疾くく返事を給への略。○けに遅くさへあらむは云々 附句の拙きうへに、時まで遅からんは取得なければと也。「けに」は「取どころなければ」にかゝる副詞。○さばれとて まよと思ひてと也。「さばれ」はさはあれの略。○空さむみ云々 空の寒さに、花に似せて散る雪景色に、その花と見紛へらるゝ點が、すこしは春の心地すると也。「散る」といへるも、春の雪の趣なるべし。○いかゞ見給ふらむ この附句を公任の宰相又はほかの方々の、何と御覽なさるならんと也。「さぞ拙しと見給ふらん」の餘意を含めり。○これが事 附句の評判なり。○俊賢の宰相 西宮左大臣源高明の三男。永延中右少辨藏人。正暦三年藏人頭兼右兵衛督、長徳元年八月参議、寛弘元年正月權中納言、長和六年三月權大納言となる。萬壽四年薨す。年六十八。原本の中將とあるは誤。俊賢の中將たるは長保三年八月にて、中宮崩御の後の事なれば也。○内侍に申してなさむ 申請して清少を内侍になさんと也、内侍及び内侍所を見よ。○定め給ひし

評定なされしと也。○左兵衛督の中將にておはせしが 左兵衛督のその時中將にておはせしが、語られしと也。「左兵衛督」は藤原實成なり。太政大臣公季の長男にて、長徳四年十月右近中將、寛弘五年参議、同六年三月左兵衛督を兼ね。長和四年權中納言、寛徳元年薨す。年七十。兵衛府を見よ。

公任、俊賢が宰相即ち参議在任中では、實成が中將だった長徳四年十月から、中宮が崩御になつた長保二年の終まで、二月のある年は長保の元年、二年だけである。所で黒戸の事があるから、長保元年六月の内裏炎上以前と見なければならぬ。依つてこの段を長保元年の二月晦日と斷定する。(公任年卅四、俊賢四十一、實成廿五、清少卅四五?)

清少が黒戸にゐたのは、前段と同じく、中宮の清涼殿にお上りの折と見える。この段は全く草の庵の段の縮圖といつてよい。對手の齊信が公任に代つたまで、ある。この公任がまた曲者で、常に齊信と馳騁して、門地官途學問才藝、ともに一步も遜らぬ名物男で、四條大納言の才名は、齊信よりも後人を震駭させてゐる。「事なしび」には、返事の出來ない筈である。巧遅は拙速にしかず、頓智とさそくとは、應對の最大要件である。清少は元來、「人のいらへすること皆上手」と選出された女房の一人だから、こんな附句位にひるむ譯はない。まして歌人元輔の娘ではないか。既に、

筑紫へまかりける時に、籠山のもとに宿りて侍りけるに、道づらに侍りける木に、ふるく書付けて侍りける。春はもえあきはこがるゝかまど山

これに末をつけて、かすみもきりもけぶりとぞ見る(拾遺集、雜)

と元輔がやつてゐる。附句には親のづりの骨法がある。「わな、くく」は誇張だらうが、この一句で儼重に大事を取つた趣が印象されて、「空さむみ」の附句に、重味が生じてくる。

最初から毀譽褒貶を念頭において、思ひ煩つたり、心一つに苦しがつたり、わな、くく、書いたり、いかゞ見給ふらむと忙しがつたりしてゐる清少だから、殿上の評判の好否は、實際大いに氣になつたらう。内侍に推選しようとして俊賢の宰相がいはれたと、實成の中將の語を引いて、その大好評であつたことを、婉曲に誇稱した叙法は、一寸面白い。

俊賢は齊信、公任、行成と共に、四納言の一人に稱へられ、その義妹は當時の關白道長の妻高松の上である。かうした地位の人に推選されたら、内侍位のこととは容易と思はれるのに、遂に實現しなかつたのは、いかゞな譯か。その二月九日に道長の長女彰子の裳着のお祝があつた。これは入内の支度で、十一月には入内をした。こんな事情で、定子の中宮方の女房が内侍となるのを、道長が好まなかつたのかも知れぬ。但俊賢は「貪欲謀略之聞共高之人」(小右記)だから、お座なりをいつたのかも譯らぬ。實成が左兵衛督に任じたのは、寛弘六年三月四日である。されば、本文は必ず、それより以後の執筆と見なければならぬ。

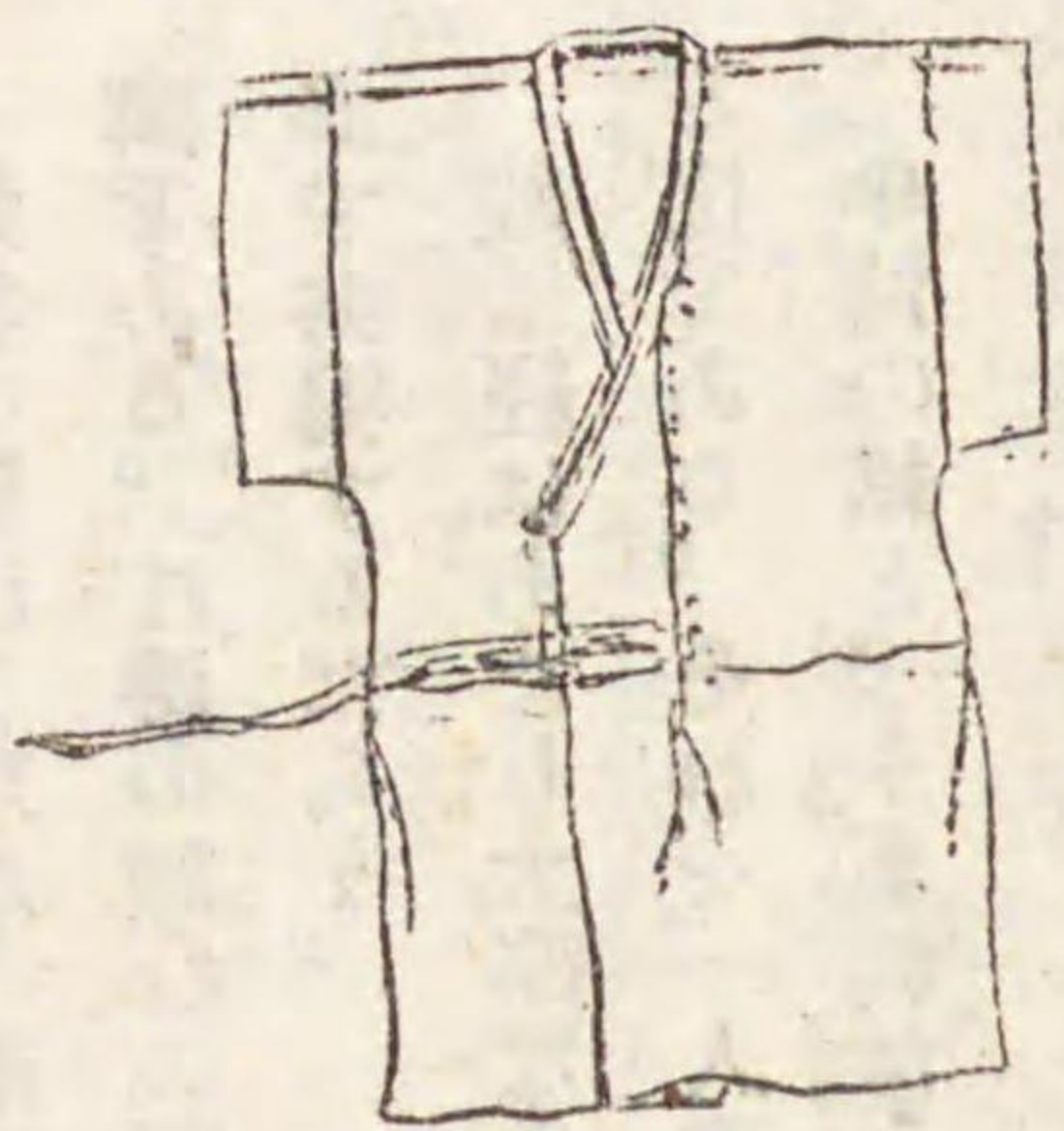
九十三段

はるかなるもの 千日の精進はじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。みちの國へゆく人の、逢坂の關こゆるほど。うまれたるちごの大人になるほど。大般若の御讀經、一人して讀み始むる。十二年の山ごもりの、始めてのぼる日。

(考異) ○大般若の御讀經 原本大般若經御讀經とあり。抄本、活本等による。

(口譯) 前途の遙なもの 千日の精進を始める日。半臂の紐をひねり始める日。陸奥へゆく人の逢坂の關を越える時分。生れた乳兒が大人になる

間。大般若經の御讀經を一人て始める。十二年の山ごもりの人の始めて登する日。いづれも遙なものである。



古半臂(大東寺藏)

はるかなるもの 氣の遠きものなり。○千日のさうじ 千日間精進潔齋して修行するをいふ。さうじ物を見よ。○半臂の緒 「半臂は西三條裝束抄に「唐ノ高祖ソノ袖ノ長ヲ制シテ減ズ、是ヲ半臂ト號ス」とあり。束帶の時、袍と下袴との間に着る。長さ二尺ばかり、袖幅一寸五分臂の半に至る。下に襦とて幅七寸ばかりの帛をつけ、左右の脇に十二つづの襷をたゝみ、背の方に二所の襷あり。東大寺所藏の古半臂は、すこしその制を異にす。「緒」は志緒といふものにて、所謂附紐の製なり。幅二寸五分、長さ一丈二尺(又八尺)疊みて左の腰通りに垂る。羅にて作る。さてその横筋の合はせ目は縫合はせずして、捻り合はせたるものならん。丈長き緒なれば、その捻りはじめは、氣の遠く思はる、也。○ひねりはじむる日 半臂の緒は長きにせよ、捻るはむづかしき事にせよ、幾日も要する筈なし。恐らくは「日」はほどの誤寫ならん。○みちの國 道の奥の國の略。或は道のくの轉訛したるならんか。○逢坂の關 近江山城の國境なる逢坂山にあり。東國出入の咽喉にして、美濃の不破、越前の愛媛と共に、三關の稱あり。大管會その他、事ある毎に使を遣して、警固せしめられし處なり。日本書紀に「神功皇后命ニ武内宿禰、擊ニ忍熊王、宿禰追之、適遇ニ逢坂以破、故號ニ其處ニ曰ニ逢坂也」。○大般若の御讀經云々 「大般若」は大般若波羅蜜多經の略。立并三藏の譯にて、六百卷あり。一切空の深義を開説す。般若は聖智と譯す。○山ごもりの 山籠る人のと也。○はじめてのぼる日 山になり。十二年の山ごもりを見よ。○以上句の下毎に、はるかなるものなりを略けり。

千日精進は、當時流行の御嶽詣の爲の精進で、伊周なども、太宰府から召還後やつてゐた。御嶽の事は、下文あはれるもの、段(百二段)の評を參看したがよい。一體千度の破の、千僧供養の、笛千遍の

といふことは、多行を以て信を取らうとする、佛教の事相から來た事である。十二年の山籠、これは比叡山の山籠で、傳教大師が、新發意僧に對して規定されたことであるが、天祿元年の慈慧大師(良源)の起請文に、

籠山僧、不可出内界地際事。東限、慧田院、南限、般若寺、西限、永飲、北限、楞嚴院。

右山門是結界同際、而近代或起大原、或向小野、東西南北出入往來、無忌憚之類、是即不守大師制戒之所致也、自今以後殊立禁制、若有慣常出内界者、將以擯出、不加僧衆、云々。

と見え、その禁足範圍も狭く、しかも清少の頃は、その規則を勵行した時代だから、それを十二年も續けるのは、實際苦行であつたらしい。僧俗共におこなふ千日精進、天台僧のやる十二年の山籠、その著手の第一日は、ほんに末途な感じが起るだらう。

逢坂の關は、京から東路へ踏出す第一歩で、未明に京を出立して、残月に乘じて關路にかゝる位の京隣である。往時の旅行の困難を知るものは、奥州行の旅客が、この關頭に立つた時の末途なる感懐に、必ず共鳴するだらう。

般若經はあまり大部なので、法會には轉讀といつて、卷毎の初中終を諷誦するに、數人で分擔してやる位である。それを一人で讀始めるのは、氣の遠いことも亦夥しい。

半臂の緒と、うまれたるちごとの二件は、始めて婦人の筆らしく感じさせる。

九十四段

方弘は、いみじく人に笑はるゝものかな。親などいかに聞くらむ。供にありくもの

(口譯) 方弘は非常に人に笑

はれるものよ。親などは方弘の笑はれるのを、何と聞くらむ。方弘の供して歩く者共の、大分人らしいのを、人達が呼寄せて、何しにあんな者に使はれるぞ。一體あれをどう思ふぞ。などいつて笑ふ。方弘の家は衣服などよく調へる家で、下襲の色や袍なども、人よりはよくして着てゐるのを、人達が「これは外の人に着せたい。(お前には勿體ない)」など冷かすことよ。ほんに方弘は詞遣ひなどが變だ。自宅に宿直物を取りにやるに、方弘が「家來二人で往け」といふに、家來が「一人で取りに往きませうものを、二人には及びますまい」といふと、方弘が「可笑しな男よ。

どもの、いと人々しきを呼びよせて、人々何しにかゝる者に使はるゝぞ。いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへのきぬなども、人よりはよくて着たるを、人々「これはこと人に着せばや」などいふよ。げにぞ詞づかひなどのあやしき。里に宿直物取りにやるに、方弘をのこ二人まかれ」といふに、男一人して取りにまかりなむものを」といふに、方弘あやしの男や。一人して二人の物をば、いかで持つべきぞ。一升瓶に、二升は入るや」といふを、なてふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて、「御返ごとく」といふを、方弘あなにくの男や。竈に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯、酒ならばこそほしうして、人の盗まめ」といふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は、誰々かありつる」と人の問へば、方弘それかれ」など四五人ばかりいふに、「又は」と問へば、方弘さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、亦あやしき事にこそはあらめ。人間に寄りきて、方弘わが君こそ。まづ物きこえむ。まづく人の宣へる事ぞ」といへば、方弘何事にか」とて、凡帳のもとによりたれば、「むくろごめにより給へ」といふを、「五體ごめに」となむいひつる」といひて、また笑ふ。除目のなかの夜さし油するに、燈臺の打敷を踏

一人で二人前の物をば、どうして持てようぞ。一升瓶に二升は這入るかい」といふを、何といふ事と知る人はないが、非常に笑ふ。よそからの使が来て、「御返事を早く下さい」といふのを、方弘が「あ、憎い男よ。籠に豆でもくべたか、そんなに急ぐのは。この殿上の墨筆は何者が盗み隠したぞ。飯が酒ならば欲しくて、人が盗みもしようが」といふのを、又人達が笑ふ。女院が御不例といふので、主上の御見舞の御使に參つて歸つた時に「女院方の殿上人は誰々が居たか」と人が尋ねると「あの御方この御方」と四五人ばかりいふに「又その外には」と尋ねると「されば退去

（考異）○いふよ 原本いふにとあり。今假に改む。

みて立てるに、新しき油單ゆたんなれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸ればやがて燈臺はたふれぬ。襪したうづは打敷につきてゆくに、まことに道こそしんどうしたりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤たいばんに人もつかず。それに方弘は、豆一盛ひともりを取りて、小障子のうしろにて、やをら食ひければ、ひきあらはして笑ふことぞ限なきや。

○親などいかに云々 親など方弘の笑はるるを、何と思ひて聞くらんと也。○供にありく 方弘の供にて歩くと也。○いと人々しき 物々しきをいふ。「人々しき」は一人前らしき也。○何しに云々 「何しに」は何爲とてなり。「かゝる者」は、いみじく人に笑はる、方弘をさす。○いかゞ覺ゆる 何と感ずるか也。馬鹿らしくは感ぜぬかの餘意あり。○物いとよくするあたりにて 染織の業に長けたるあたりにて也。「あたり」はその家庭をさしていへる也。旁註に「吳服所などなるべし」とあるいかゞ。吳服所は専門の技術者なれば、「物いとよくする」などいふ必要なし。○よくて着たる よくして方弘が着たる也。○これはこと人に云々 殿上人などの方弘にからかふ詞なり。これは方弘には勿體なし。他人に着せたきことよと也。「これ」は方弘の見事なる装束をさす。○いふよ 原本のいふには、下文に意うまく續かず。思ふに、にはよの誤寫にて、人々のいふよの意なるべく、こゝにて句は切れたるならん。○けにぞ詞つかひなどの 人々の笑ふを承けて、「けにぞ」といへる也。○里に宿直物とりやるに 當直の夜、自宅に夜の物を取りに、使をやるにと也。○まかれ こゝは往けの意。○一人して云々

する人達があつた、といふのを笑ふのも亦怪しからぬ事ではあらう。人の居間に寄つて来て、方弘が「私の大事な貴女様、まづお話し致しませう。まづ〜」或人の仰しやつた事で「すぞ」といふから「何事ですか」といつて几帳の際に寄つた所が「むくる籠めにお寄りなさい」といふのを「五體ごめに」といつたといつて、又笑ふ。除目の中日の夜、方弘が油さしの役をするに、燈臺の打敷を踏んで立つたが、その打敷が新しい油單だから、強くくつ付いてしまつた。そのまゝ歩いて戻るので、すぐに燈臺は倒れた。襪は打敷が付いたまゝ、歩くので、本當に方弘の通る路は震動した事

使にゆく男の詞なり。一人にて宿直物を取りに參らんものを、二人には及ぶまじの略。○御返ごとく の下、給へを略けり。○あなにくの男や 方弘の詞なり。「あな」は歎辭。「にく」は憎しの居體言、「や」は歎辭。使の返事を急ぐを惡める也。○籠に豆やくべたる 籠に豆をくべれば、一齊にばちばちばちけ出すより、忙がはしき事の譬に用ゐたり。○この殿上の墨筆は云々 返事を書かんとて、墨筆を尋ねても見當らぬよりの詞なり。○女院 東三條院藤原詮子。詮子を見よ。○御使に 病氣御見舞の主上の御使にと也。中宮の御使にあらず。○院の殿上人 女院方の殿上を許されたる人をいふ。○それかれ など云々 方弘が答へていふ也。○又はと 又は誰かありつるとの略。「又は」は外にはといふが如し。○また笑ふも亦あやしき事にこそは云々 外には誰が居たるかといふ問に、立去る人もありたりといふ答は、頓珍漢にて怪しけれど、元來愚なる方弘の事なれば、それを人達の笑ふも亦、却て怪しき事ならんと也。○人ま 人のるぬ間なり。○より来て 方弘がなり。○わが君こそ 清少をさす。「こそ」は敬愛の稱なり。せうとこそを見よ。○まづ〜人の宣まへる事ぞ この話はまづ〜或人のいはれたる話ぞと也。○むくるごめに 體籠たぐらの義にて、全身をいふ。「ごめ」は俗のグルメに當る。○五體ごめに の下、寄り給へを略けり。○なむいひつるといひて なむ方弘がいひつると、人達のいひてと也。○除目の 中の夜 この頃は正月九日より十一日まで三日間、除目は行はる。「中の夜」は即ち正月の十日に當る。○さし油するに 方弘がなり。「さし油する」は、燈臺の油皿に油をつぎ足をいふ。○打敷 燈臺の下敷物なり。通常方形に作る。こぼれたる油の床を汚さぬ爲に敷く。○新しき油單 その打敷がなり。○油單 ユタン、貞丈の説に「布の單に油を引ききたる故に、油單といふ」とあり。これを打敷にしたる也。後世は油を引かでも、紙にて製りても、油單といへり。○とらへられ 足にへばり付きたるをいふ。○襪 シタウヅ。下沓の音便。和名抄に「襪、和名之太久豆、足衣也」とあり。禮服の襪には錦を用るれど、

朝服のは綾絹麻などの白地なり。今の足袋の如くにて、指分れず。○つきてゆく 打敷に付いて其まゝゆくと也。○しんどう 震動の字音。○頭つき給はぬ程は 藏人頭が殿上の臺盤につき給はぬうちとは也。○豆一もり 臺盤の上にするたる坏に盛れる豆なり。○小障子 コサウジ。清涼殿中御手水の間と朝餉の間との隔なる衝立障子なり。表に猫、裏に竹雀を描く。○ひきあらはして 小障子を引退けて、方弘の食ひ居る所を露して也。

評 人の家來を呼寄せて、入らぬ智慧をつけるなどは、細殿に人と(四十三段)の段に、「ありく者共見安からず呼寄せて」とあるのと一致する行爲である。

一體方弘は、文徳帝の皇子源能有の後裔ではあるが、中頃は受領宿世で浮沈してゐた。「物よくするあたり」は、

「立田姫といはむにもつきながらす、棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなむ侍りし。(源氏・帯木の巻)

次妻夫婦同年也——裁縫、染張、織紡之道、——家治能治之條、嘆而有餘、朝夕厨膳叶心、夏冬裝束、若し時、烏帽子、狩衣、袴、袷衣、袖、袂、單衣、差貫、水干、冠、袍、半臂、下襲、大口、表袴、帶、大刀、箭、扇、香、襪——皆放此女房之徳也。(新猿樂記)

とあるやうに、この妻君はなかくの持ぎ手で、夫の衣裳の世話など、行届かしたものと見える。しかし肝腎の先生がこれだから、口まめの女房達は黙つて過されぬ。「こと人に着せばや」は、失禮至極な申條ではあるが、さう輕侮されるほど、方弘はえらい頓馬であつた。

「一升瓶に二升は入るや」は、一升袋は一升の諺に似て、瓶は分量に限があるのに、人の力は限のないことを知らぬ論理の誤謬が、滑稽の種を蒔いたのである。「竈に豆やくべたる」は、性急なる者を、「豆か

ら」といふに似て、必ず當時の諺であつたらうと思はれる。只場合に合はせて、それが突飛に聞え、妙計に失笑の種になつたのである。「さては去ぬる人」の挨拶は勿論、「五體ごめ」の可笑しいのは、大業に骨々しく聞える故だらう。「几帳のもと」の几帳は四尺ので、簀子と廂の間の簾下を仕切つてゐる物である。

以上は方弘の「詞などの怪しき」を擧げたので、さてその動作に及んで来た。新しい油單でベタつくのを足に突掛けて、燈臺は引くり返る、襪は一緒にけし飛ぶといふ大騒動、それが除目の晩で、上卿始め著座して、申文を詮衡して、國司を除任する、ごく眞面目の席だけに、滑稽の度の反映が強い。

藏人頭は殿上の貫主で、絶對の威權をもち、頭が座に居ると、平の藏人などは、板敷の外れで、片膝をついて敬屈し、頭が口を開かぬ間は、藏人は無言で居なければならぬ程なのに、頭もまだ臺盤に就かぬうち、小障子の陰での豆の盜食は、無作法者の頂上であつたらう。實際彼は、殿上の名對面の段で見ると、お膳棚に杓を置いた先生である。

言行に就いて、一々「笑ふ」「笑はる」と書いたのは、冒頭の「いみじく人に笑はる、者かな」を回顧したもので、「親などいかに聞くらむ」と同情し、「怪しき事にこそはあらめ」と自省しつつも、尙笑はずには居られないから、始末にいけない。「飯酒ならばこそ盜まめ」は、豆泥棒の伏線になつてゐる。燈臺轉覆の條は殊に面白く、ひどく誇張して、漢語まで持込んだ。

殿上に墨筆が無かつたのは、外の者がわざと隠したものだらう。こんな惡戯はよくする事で、藏人頭以下殿上人は、殿上に臺盤かきのけさせて、疊よせて、殿上に臥並みて、寢起のかうぶりぎはにて、曙にぞ日記はし給ひし。——にくき下臈の藏人ある時は、まだ暗きに日記を書かせて、書損ふを勘發する因縁には仕かまつり候ひし。(大枕秘抄)

であつた。藏人頭が殿上の臺盤におつきなさらぬうちには、誰もつかない。それを方弘は臺盤の上の豆一盛りを取つて、小障子の陰で、そつと食つてゐたので、人達か小障子を引退けて見あらはして、笑ふ事が限もないことよ。

は、よく箇中の消息を語つてゐる。暗打はする、囃物はする。故參の者は新參を教育する義務をもつて居ると承知してゐた時代なのに、随分意地のわるい事をしたものだ。さてこの方弘に就いて想起するのは、「ちうせい高坏」、「柏の上おそひ」の生昌である。方弘ほどなガサツ無作法没常識ではないが、詞づかひの怪しい所など、酷だよく似通つて居る。それもその筈、この二人はおなじ文章生出身であつた。本朝世紀に、

長徳元年十月三日、文章生方弘補所雜色。

とある。文章生の非常識なことは、既に姫宮の御方(六段)で、委しく批評して置いた。「むくろごめ」を「五體ごめ」など、漢語を使つたのも、文章生の口癖が出たのである。

九十五段

關は 逢坂の關。須磨の關。鈴鹿の關。くさだの關。白川の關。衣の關。たゞこえの關は、はゞかりの關とたとしへなくこそ覺ゆれ。横ばしりの關。清見が關。みるめの關。よしなくの關こそ、いかに思ひ返したるならむと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關とはいふにやあらむ。逢坂などをまで思ひ返したらば、わびしからむかし。足柄の關。

○須磨の關 攝津武庫郡西須磨の西、源光寺の邊か。證歌多し。○鈴鹿の關 伊鹿鈴鹿郡。上古は伊賀に越ゆる加太の險隘にありしを、後に坂下の邊にうつす。證歌多し。○くさだの關 岫田關。伊勢一

(口釋) 關は、逢坂の關、須磨の關、鈴鹿の關、岫田の關、白河の關、衣の關が面白い。たと越の關は憚の關と比べやうもなく思はれる、横走の關、清見が關、みるめの關が面白い。よしなくの關は、どうして由なしと思返したのだらうと、ひどく

その理由が知りた。それゆゑに勿來の關とはいふのだらうか。逢坂の逢ふといふことなどまで、由なしと思返したなら、わびしい事だらうよ。足柄の關も面白い。

志郡川口。伊勢名勝志に「關址は今與五郎坂といふ所也」。源氏藤原葉「守りける岫田の關を川口のあまきへのみは負はせざらなむ」。○白川の關 岩代西白川郡關山。拾遺集、兼盛「便あらばいかで都へつけやらむけふ白川の關はこえぬと」。○衣の關 陸中磐井郡關山。一に衣川の關と呼べり。詞花集、和泉式部「もろ共に立たましものをみちのくの衣の關をよそにみる哉」。この句の下、をかしを略けり。○たゞこえの關 大和より河内へこゆる暗峠をいふか。古事記に「自日下之直越道」、萬葉六「直越のこの道にして押照るや難波の海と名づけたりしも」とあり。關の事は見えざれど、要害の地なれば置かれし事ありしならん。○はゞかりの關 陸前柴田郡槻木村。後拾遺集「しるらめや身こそ人めを憚の關に涙はとまらざりけり」。○たとしへなく 比ぶるやうなくと也。「たい越」を遠慮もなくひたすら越ゆる意に取成し、「憚」は遠慮する趣なれば、あまりにその意味懸隔して、比較し難しといふ也。○横ばしりの關 駿河駿東郡横走郷。今の足柄村。兼盛集「横走り清見が關のかよひ路にいづといふことは長くといめむ」。○清見が關 駿河庵原郡清見寺の地か。○見るめの關 八雲御抄に「近江」とあれど未詳。この句の下、をかしを略けり。○よしなくの關 下文に「それをなこそその關と云々」とあれば、勿來の關の一名ならん。○いかに思ひ返したるならむ 「よしな」は由なしにして、無益の意。折角思ひ立ちたるものを、何と思ひ返して、由なしといふならんと也。○それをなこそその關と云々 由なし勿來と連續したる意味あるやうに聞ゆればいへり。「なこそ」は來る勿れの意。關は磐城回磐城郡勿來驛の附近。本名菊多の關といふ。後撰集「立寄らばかけふむばかり近けれど誰かなこそその關をすゑけむ」。○逢坂などまで云々 逢はんと約束したることをまで、由なしと思ひ返したらばと也。「逢坂」に人に逢ふといふ意を含めたり。○足柄の關 相模足柄郡足柄峠。後撰集、眞靜法師「足柄の關の山路をゆく人は知るも知らぬもうとからぬ哉」。この句の下、をかしを略けり。

評 例の歌枕の打聴から抄出したもので、只越に憚。よしなくに勿來、逢坂は、湊合の妙を見る。足柄の關の結收、おのづから清少一家の筆法。

九十六段

森は 大荒木の森。しのびの森。ここひの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつきの森。きくたの森。岩瀬の森。立聞の森。常磐の森。くろつきの森。神南備の森。うた、ねの森。浮田の森。うへつきの森。石田の森。かうたての森といふが、耳とゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。ここひの森。こばたの森。

(考異)「うへつき 原本うへ木とあり。春本の一本に従ふ。」

大荒木の森 山城乙訓郡與村神社の地か。萬葉十一 かくしてやなほやみなむ大荒木の浮田の杜のしめならなくに」とある浮田の森は、對岸なる久世郡淀町にあり。名所方角抄には、愛宕郡の市原野にありといへり。「大あらし」の大は美稱。あらしは荒城の義にて、殯宮即ち葬場をいふ。さればもと古墳の森を、あらしの森といひしならん。○しのびの森 抄に「河内國」とあれど、しのぶの森の訛にて、陸奥(今岩代)の信夫郡か。○ここひの森 伊豆田方郡伊豆山附近。拾遺集「こ、にだにつれん」となり。時鳥まして兒戀の森はいかにぞ。○木枯の森 駿河安倍郡葦科川の邊。六帖「人しれぬ思ひするがの國にこそ身をこがらしの森はありけれ」。○信太の森 和泉北郡信太村。○生田の森 攝津武庫郡生田神社附近。○うつきの森 未詳。○きくたの森 菊田の關(勿來)の附近か。○岩瀬の森 大和平群郡なるは、萬葉八に「神無備の岩瀬の森の時鳥ならしの岡にいつか來鳴かむ」。岩代岩瀬郡なるは、貫之集に「みちのくや岩瀬の森のしける日に一聲つらき初時鳥」。○立聞の森 未詳。○常磐の森 八雲御抄に山城とあり。常磐山の森か。○くろつきの森 未詳。○神南備の森 攝津三島郡。いま神内といふ所なるべし。大和にあるは、神奈備の岩瀬の森と續けたり。○うた、ねの森 岩代西白河郡鹿島社附近。八雲御抄「みちのくのうた、ねの森の橋たえて稻負鳥も通はざりけり」。○浮田の森 山城久世郡淀町附近。大荒木の森を見よ。○うへつきの森 未詳。「うへつき」は殖槻にて、へはるの誤か。さらば大和國郡山にあり。神樂歌に「殖槻や田中の森やてふ、云々」。○石田の森 山城宇治郡。萬葉九「山科の石田の森に手向けせばけだし吾妹にたゞにあはむかも」。○かうだての森 「かうだて」は神館の音便ならん。山城愛宕郡御蔭山。また下鴨にもありと。また蜻蛉日記の初瀬詣の條にあるは、山城の綴喜郡香達(森なり)……○ここひの森 藻鹽草に伊賀、抄に山城とあり。六帖「うづもれてこむ人はなほ戀の杜木々のこの葉のまだちらぬまに」。○こはたの森 山城宇治郡山科の木幡。萬葉十一「山科のこはたの山に馬はあれどかちよりわれく汝を思ひかね」。この山の杜なるべし。

評 例の獨特の筆致は認められるが、感想は平凡を免れない。大荒木の森は、

大あらしの森のした草おいねれば駒もすさめずる人もなし(古今、雜上、詠者未詳)

の名歌で、最も著名になつた森で、初筆に書いたいけの價值はある。「かうだて」の耳にとまるのは、全く賀茂の神館に響いて聞えるからである。かう賀茂に因縁のつきさうなものは、何でもゆかしいのを、「あやしけれ」と自ら評してゐる。清少は祭氣ちがひであつた。「森など云々」はまた別の事で、「あやし

(口譯) 森は 大荒木の森、しのびの森、ここひの森、木枯の森、信太の森、生田の森、うつきの森、きくたの森、岩瀬の森、立聞の森、常磐の森、くろつきの森、神南備の森、うた、ねの森、浮田の森、うへつきの森、石田の森、かうたての森といふが耳につくのが可笑しい。森などいへさうもなく、たつた一本木のあるのを、何で森とつけたぞ。ここひの森、木幡の森が面白い。

けれ」に關係はない。さてこの森は、皆神の杜をいつたので、普通の森林ではない。

九十七段

卯月のつごもりに、長谷寺にまうづとて、淀のわたりといふを物せしかば、船に車をかきすゑてゆくに、菖蒲、菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬の淀には、これを詠みけるなめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを着て、脛いとたかき男童などのあるも、屏風の繪に、いとよく似たり。

(考異) ○けり 原本けるとあり。抄本、古本による。

○淀のわたり 山城久世郡淀町邊の渡船なり。「わたり」はわたしと同じ。○かきすゑて 昇据ゑてと也。○末みじかく 水面に出でたる部分の短きをいふ。○取らせたれば 人に採らせたればと也。○高瀬の淀に 神樂歌に「薦枕高瀬の淀にかる薦のかるともわれは知らで頼まむ」とあるをいへり。「高瀬の淀」は河内茨田郡高瀬郷(今北河内郡)に屬する淀川を、古へ高瀬川と稱したりき。その淀瀬をいふ。「淀」は水の停滞める處を稱す。○見えし 思はれしといふに同じ。「し」の下、よの歎辭を略けり。○三日といふに 五月のなり。○脛いと高き 衣を脛高にか、けたるなり。○屏風の繪 當時屏風は盛に用ゐられて、扇などするに必要な家具となり、年賀元服裝着などの祝儀には、新調するが普通にて、十

(口譯) 四月の晦日に長谷寺に參詣するといつて淀の波といふのを渡つたので、船に車を昇載せてゆくと、菖蒲や眞菰などの葉末が、短く水面に見えたのを取らせて見ると、大層長かつた。眞菰を積んだ舟の往來したのが、甚だ面白かつた。高瀬の淀にの歌は、この眞菰を詠んだものやうに思はれた。五月三日といふ日に歸るに、雨がひどく降つたので、菖蒲を刈るといつて、笠の大層小さいを冠つて、脛を大層高く捲り上げた男や童などがゐる

のも、屏風の繪に、大層よく似てゐる。

二ヶ月又は名所などの繪を描分けて、詩歌など題したりき。

當時京から大和へ行く道路に、二大幹線があつた。その一線は伏見宇治を経てゆく、所謂大和街道である。今一線は鳥羽から淀へか、つて、木津川の西岸を南下する道である。京が今のやうに、甚しく東遷して居なかつた時代だから、少し迂回はしてゐるが、鳥羽線による者も相應にあつた。清少の長谷詣も、内裏からとすれば、鳥羽線を取るのも至當な理由がある。否清少はそんな理由に拘つては居ない。これまでの長谷詣には、伏見線を取つてゐたが、四五月(陰曆)の交の水郷氣分の味ひたい希望から、鳥羽線を取つて、淀にか、つたらしい。「淀の波といふをものせしかば」の口氣は、この間の消息を説明してゐる。船に輿車を昇載せてゆくのは、宇治(蜻蛉日記、更科日記などで見ると、當時は渡船であつた)でも、木津でも見馴れて居る筈だが、菖蒲や眞菰の葉を手づらまへにすることは、淀でなくては出會はれない興趣である。引抜いて見たら下の方が長かつたとは、面白い描寫で、それにこそ漫々と水の満漚うた趣も見え、梅雨頃の青臭い水の香も搖曳するやうである。刈菰を載せた舟が、ゆらくと波紋を蒸がいて、茂つた菰蒲の間に没し去る光景に、神樂歌の薦枕や、六帖の刈菰を聯想するのも、なつかしい仕業である。

「三日といふに」を、春註に、長谷に詣でて三日目に歸るなりとある。蜻蛉日記や更科日記の長谷詣の條にも、三日參籠の事があるから、尤ものやうではあるが、四月の晦に京を出發して、長谷に三日參籠したのでは、當時の旅程では、五月の五日以前に、淀の渡にかゝる譯にゆかない。この文は遅くとも、五月四日の記事でなければならぬ。それはこの刈つた菖蒲が、五日の節供の材料になるのだからである。いや四日には殿舎に菖渡すことが、年中行事の抄などにあるから、三日が盛に刈る時と思はれる。そこで「三日といふに」は、五月の三日といふ日にの意と見るのが至當である。

「小き笠」は、都人の大笠とはちがつて、勞働的意味が現れ、「脛いと高き」は、それに水郷的情味が加つてゐる。「屏風の繪に云々」は、繪では紹介されて知つてゐるが、實際には餘り知らない人の口吻で、珍しく感じた趣が言外にある。屏風の繪に諸國の名所を畫くことは、久しい以前からの慣習で、それを題にして詠んだ歌を、色紙形に書いて貼つたものである。拾遺集夏の詞書に、

天曆の御時、御屏風に遊のわたりする人かける所。

など、淀の川舟や美豆の御牧やと、この水郷の景氣を畫いた屏風の事は、歌人の家集に散見してゐる。

九十八段

湯は な、くりの湯。有馬の湯。玉造の湯。

(口譯) 湯は 七栗の湯、有馬の湯、玉造の湯が面白い。

○湯 出湯・走湯をいへり。温泉のこと。○な、くりの湯 七久里、七栗など書く。伊勢一志郡神原にある温泉。夫木集「一志なるな、くりの湯も君がため戀しやますと聞くは物うし」。○有馬の湯 攝津有馬郡湯山にある温泉。六帖「あひ思はぬ人を思ふぞ病なる何か有馬の湯へもいくべき」。○玉つくりの湯 出雲八束郡湯町。陸前玉造郡にも温泉がある。

○例の古歌の聯想や名義の面白いのを、主としたまゝである。當時の温泉は今日と違ひ、眞の病氣療養の場所であつた。されば湯を主としたとすれば、伊豫の湯(道後)但馬の湯(城崎)などを、有馬と並べて挙げなければならぬ筈である。

九十九段

常よりもことにきこゆるもの 元三の車のおと、鳥のこゑ。 曉のしはぶき、物の音はさらなり。

(口譯) 平日よりも格別に聞えるもの 元日の車の音や鳥の聲、曉の咳は、常よりも殊に聞える。曉の音楽は勿論である。

○元三 元日をいふ。年の元、月の元、日の元なればとぞ。○鳥の聲 元三の鳥の聲なり。「鳥」は庭鳥なり。○しはぶき 咳なり。頻吹の義。○物の音 曉の物の音なり。「物の音」は樂器の音なり。○車の音は、第三段一月八日の條に、

人々よろこびしてはしり騒ぎ、車の音も、常よりはことに聞えてをかし。と共通する。曉の靜寂を破る咳嗽は、人間の消息を通ずる第一聲として、有意味の感じを與へる。曉の樂聲は、一種の神祕的な崇高嚴肅な感じがあつて、物語などにも、身に沁みてあはれなもの、やうに、詞を盡して賞美してゐる。但これは、雅樂や神樂などの純正な樂のことで、今日の俗曲では、この感じは出ない。

百段

繪にかきておとるもの なてしこ。 さくら。 山吹。 物語にめでたしといひたる男女のかたち。

(口譯) 繪に描いて實物より見劣りするもの。それは撫子、櫻、山吹、小説に非常に美しいといつてある男女の容貌などである。

○殊に愛好する物は、常に深い注意を拂つてゐるので、繪で見ると、その豫想を裏切ることが甚しく感ぜられる。物語中にほめ立てた男女の顔も、期待の大きな割に、繪では榮えない。繪の描寫が特別に粗拙なので、見劣がするといふのではない。黒川氏の説に、

當時の繪風は、人の顔を畫くに、ロキメ、カヤハナとて、一筆にて點するのみにて、後世の如く密に畫かざりしなり。故に美人の顔もさほど美しく見えぬなり。

とあるのは一往の論で、さういはれると、櫻や撫子などは、平安時代の古畫には、馬鹿丁寧緻密に描いてあるではないかと反駁したくなる。源氏、桐壺の卷に、

繪にける楊貴妃の顔のかたちは、いみじき繪師といへども、筆限ありければ、いと句なし。は、本文の證文となるものである。

百一段

かきまさりするもの 松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏は世にしらずあつき。

○かきまさりするもの 繪にかきまさりするもの也。こは前段の「繪にかきて劣るもの」に對したるなれば、尙繪のうへの事と定むべし。春註に「松の木鹿」までは、繪にかきまさりするものを、「冬は云々」以下は、文章に書きまさりするものを挙げたりといへるは強ひたり。○冬はいみじくさむきの下、さまを補ひて心得べし。○夏は世にしらずあつきの下、さまを補ひて心得べし。「しらず」は知られずの意。



納涼(扇面寫經)

(口譯) 繪に描いて實物より見勝りのするもの。それは松の木、秋の野、山里、山路、鶴、鹿、冬は甚しく寒いさま、夏は世に類のない暑いさまである。

實物よりも風情おほく見えるのは、畫工が更にこれを理想化する點もあらう。夏冬の寒さ暑さは、實際では甚だ閉口するが、繪にして見ると、随分面白い畫題になるものが多い。

百二段

あはれなるもの 孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが御嶽精進したる。へだて居てうち行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの目さまして聞くらむ想ひやらる。まうづる程のありさま、いかならむとつゝしみたるに、平にまうで著きたるこそ、いとめてたけれ。烏帽子のさまなどぞ、すこし人あろき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衛門の佐のぶたかは、「あぢきなき事なり。たゞ清ききぬを着てまうでむに、なてふ事かあらむ。必ずしも、『あしくてよ』と、御嶽のたまはじ」とて、三月晦日に、紫のいと濃き指貫、しろきあを、山吹のいみじくおどろくしきなどにて、隆光が主殿の亮なるは、青色のあを、紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うち續きまうでたりけるに、歸る人もまうづる人も、珍しくあやしき事に、すべてこの山道にかゝる姿の人見えざりつとあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日のほどに、筑前の守失せにし代になりにしこそ、げにいひけむにたがはずもと聞えし

(口譯) 感にたへたもの 喪にゐる子、鹿の聲があはれである。身柄のよい男の若いのが御嶽精進したのがあはれてある。家人とは別居して、お勤をする曉の禮拜など、甚しくあはれてある。睦しい妻女などが目を覺して、その禮拜の聲を聞くだらう様子が想ひやられる。さて參詣の折の安否がどうかうかとと謹慎してゐたに、無事に歸り着いたのが、大層めでたい。たゞ烏帽子の傷んだ具合が、少し體裁がわるい。えらい身分

か、これはあはれなる事にはあらねど、御嶽のついでなり。

○考異 ○想ひやらる 原本想ひやりとあり。別本による。○のぶたか 原本のぶかたとあり。○青色のあな 原本青色のとなり。以上古本による。

○あはれなるもの 感哀に禁へぬもの、感激のあるものなどの意。○孝ある人の子 親の喪中にゐる子。孝は追孝の意。孝をケウと讀む。「人の子」は人の親とおなじ辭様に、「人の」を冠して、語意を強めたる也。○よき男 身柄のよき男なり。○御嶽精進 ミタケサ



金剛藏王

ウジ。御嶽、及びさうじ物、千日の精進を見よ。○へだてて家人とは隔てて也。○曉のぬか 曉方の禮拜なり。「ぬか」は額づきの略。○むつまじき人 妻女などなるべし。○聞くらむ 想ひやらる その禮拜の聲を聞くらむ有様想ひやらると也。○まうづる程のありさま 御嶽に參詣する時の具合なり。○いか

ならむと慎みたるに安否いかならんと心配して謹慎したるにと也。○まうでつき 都に還り参り着きと也。○人わろき 體裁わるしと也。雅語譯解に、外聞ワルイ、見苦シイとあり。○なほいみじき人「いみじき人」は身分高き人なり。「なほ」は「こよなくやつれて」に係る副詞。○こよなくやつれて 此の上なく身形を飽にしてと也。○右衛門佐 右衛門府の次官なり。衛門府を見よ。○のぶたか 宣孝、藤原氏。正曆二年八月筑前守、長徳四年右衛門權佐兼山城守、長保三年卒す。紫式部の夫なり。原本「のぶかた」に從はば宣方ならんか。宣方は六條左大臣源重信の息にて、身分高き人なれば、あまり敬稱を用ゐぬこと、の文體にかなはず。○あぢきなき 感心せぬ、つまりぬなどの意。○清ききぬ 清淨なる衣な

切見えなかつたと、臍をつぶしたが、四月の下旬に歸つて、六月十餘日の頃に、宣孝が筑前守が死去した後任になつたのは、成程彼のいつた事に違はないことよと、人が評判した。これはあはれな事ではないけれど、御嶽の話の序に書いたのである。

り。○なでふ事かあらむ 何といふ仔細あらんやと也。○必ずしも 「必ず」は「あしくてよ」にかかり、「よも」は「のたまはじ」にかゝる副詞。○あしくてよ 衣あしくて詣てよの略。飽末なる着物にて參詣せよとの意。○御嶽のたまはじ 御嶽の藏王菩薩は宣はじと也。○紫の云々 の上に、われはを補ひて聞くべし。○しろきあを 色の白き襖なり。「しろき」を新しき意とするは鑿なり。○あを 襖の轉訛なり。襖の字は玉簫に「袍襖也」とありて、上衣の意なり。上古襖といひしは、武官の朝服たる關腋の袍のことなり。後世襖といふは狩襖の略語にて、狩衣のことなり。蓋し狩衣の裁縫の形、關腋の袍に似たるより出でたる名なり。さてこゝは行旅に著たるなれば、無論狩襖の方なり。貞丈の説に「六書故に今以夾衣爲襖とあるによりて、裏付けたる狩衣を狩襖とする説あれど誤なり。裏の有無に拘はらずと知れ」と見ゆ。袍及び狩衣を見よ。○山吹の云々 「山吹」は古の花色なり。裏山吹、花山吹などの別ありて、表は黄色を主とす。裏は黄、青、紅などを用ゐる。五節の頃より三月まで、若年の人三十歳ばかりまで着用す。○おどろくしき おどろくしき衣の略。この「おどろくしき」は、その色の派手にケバくしきをいふ。○隆光 宣孝の長男。尊卑分脈に、筑前越前備中備前等の守とあり。皇后大進を経て、左京大夫に至る。勅物に「長保三年藏人、年二十九」と。○主殿助 主殿寮の次官なり。主殿寮を見よ。○青色のあを 麴塵色の襖なり。藏人なれば、襖も青色を着たるなるべし。○摺りもどろかしたる 模様を摺亂したると也。山藍草の汁などにて摺れるならん。「もどろかし」はしどろもどろにもぢらしたるをいふ。○水干袴 スキカンバカマ。水干を着る時には袴にて、直垂に用ゐる袴の如く、長袴なり。○水干 水張にして干したる絹の名なりしが、後には服の名となれり。一に水干狩衣ともいひて、狩衣をすこし簡便にしたる如きもの也。正服ならねば、貴人より庶人まで隨意着用す。明衡の新猿樂記に、狩衣と並べて水干を擧げ、已上宿裝束と註したり。○歸る人も詣づる人も 御嶽より歸る人も御嶽に詣つ

る人も略。○あやしき事に怪しき事にてと也。○すべて「見えざりつ」に係る副詞。○かゝる姿
「かゝる」は宣孝、隆光の派手なる衣裝をさす。○なりにしこそ宣孝がなりにしこそ略。○いひけむ
にたがはずもと云々宣孝のいひけむ詞に違はずもあるかなと、人の聞えしかの略。○御嶽のついでな
り御嶽の話の序なりと也。○人の子。鹿の音。御嶽さうじしたる。の下、各あはれなりを略けり。

九月三十日、十月一日のほどに、只あるかなきかに聞きつけたるきりぐすの聲。
鶏の子いだきて伏したる。秋ふかき庭の淺茅に、露のいろ／＼玉のやうにて光りた
る。かは竹の風に吹かれたる夕ぐれ曉に目さましたる。夜などもすべて。思ひか
はしたる若き人の中に、せくかたありて、心にしもまかせぬ。山里の雪。男も女も
清げなるが、黒ききぬ着たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れ
ば、あるかなきかに心ぼそげなる月の、山の端ちかく見えたるこそ、いとあはれな
れ。秋の野。年うちすぐしたる僧たちの行したる。荒れたる家に葎はひかゝり、蓬
など高く生ひたる庭に、月の隈なくあかき。いと荒うはあらぬ風の吹きたる。

○かは竹 和名抄に「苦竹、加波多計、本朝式用三河竹二字」とあり。今いふマダケなり。○川竹の
云々 古本一本に「夕暮曉に川竹の風に吹かれたる目さまして聞きたる」とあり。○夜などもすべて
夜など目覺したるもすべてあはれなるもの也の略。○せく方ありて 邪魔立する者ありてと也。「せく」
は塞ぐこと。支ふること。○黒ききぬ 喪服なり。青にびを見よ。○年うちすぐしたる 年盛を過した

(口譯)
九月晦日、十月一日の頃に、只啼いてゐるかなきといふやうに、幽に聞付けた蟋蟀の聲、雞が雞を抱いてうづくまつてゐる、秋たけた庭の淺茅に、露がいろ／＼玉のやうで光つてゐる、苦竹が風に吹かれた夕方曉に目さましてゐる、夜など目をさましたのも、すべてあはれてゐる。思ひ合つた若い男女の中に、邪魔立する者があつて、思ふまゝにもならぬ、山家の雪、男も女でも美しい人が、喪服を着てゐる

ると也。老いたるをいふ。○きりぐすの聲。ふしたる。光りたる。吹かれたる。目さましたる。夜などもすべて。まかせぬ。山里の雪。衣きたる。秋の里。行ひしたる。あかき。吹きたる。の下、各あはれなりを略けり。
評 孝は親孝行とも解せられるが、こゝは追孝の孝として、親の喪のかゝつた子と見る方がふさはしからう。當人ばかりか「弔孝不哀、失凶禮體」(雜纂)とさへある。鹿の音は、現今ほど珍しい物ではなかつた。つい近くの東山や北山西山へゆけば聞けたものである。現に長徳四年に、狼に追はれて鹿が禁中に飛込み、狼まで紛れこんだ位である。身分柄の若い男の御嶽精進は、どんな念願があつてかと、同情が起つて哀に感ずるのである。晨朝の禮拜が靜寂を破ることは、常よりことに聞ゆる曉のしはぶき(九十九段)も同じ事だが、信仰の行事だけに、感哀が深い。源氏、夕顔の巻に、
明方も近うなりにけり。鶏の聲などは聞えて、御嶽さうじにやあらむ、只おきなびたる聲に頼づくぞ聞ゆる。立居のけはひさへ堪難げに行ふ。いとあはれに、あしたの露に異ならぬ世を、何を食る身の祈にかと聞給ふに、なも當來の導師とぞをむむなる。云々。

老人の精進は月並ではあるものの、他人の源氏の君でさへ、いと哀に聞給ふではないか。まして千日が間別居ときまつた、その若い妻女などが、夢も結ばぬ孤閨の裏に聞付けた心地は、全く同情に値する。紫式部も清少も、御嶽精進に對する感想と著眼點とは一つだが、源氏物語には、直接に自家の感想を發表する自由を有しないから、自然普遍的表面的であるのに、この草子は自己中心のもので、勝手な主觀的の考察を下し得るから、箇性のあらはれた、特殊の感想が見えて面白い。
御嶽信仰は、當時非常な勢で流行し、左大臣雅信は八幡大菩薩大般若波羅蜜多心經と共に、本尊として歸敬し、伊周も長徳三年の夏から精進をはじめ、道長なども御嶽詣の御蔭で、娘の彰子中宮が皇子御

などがあはれてゐる。月の廿六七日頃の曉に、話しながら起き明して見ると、あるかなきかのやうな心細さうな月が、山際近く見えたのが、大層あはれてゐる。秋の野、年寄つた僧達が動行してゐる、荒れた家に葎が這ひかゝり、蓬などが高く生えてゐる庭に、月が隈なく照つてゐる、ひどく荒くはない風が吹いたなど、あはれてゐる。

懷妊になつたと喜んでゐた。一體御嶽の金剛藏王菩薩は、役行者が金峯山で練行中に感得した、釋迦如來の變身といふので、右手に三鈷を握り、臂を怒らし、左手を開いて腹をおさへ、三眼忿つて魔障降伏の相を示し、兩脚は上下にして、天地經緯の相を示した權現である。こんな忿怒の相を現じたおそろしい菩薩だから、非常に敬虔な態度で信仰しないと、佛罰が靦面だ。そこで參詣前には千日精進をし、いみじき人と聞ゆれど、こよなく窶れて詣つる」のである。滯なく參詣がすめば、めでたい極みで、烏帽子のヒシヤゲ位が、見ともない頂上である。

金峯山は、毎年九月九日から三月三日まで、山どめであつた。宣孝親子の登山した「三月晦日」は、山開から間もない頃で、待切つて居た信者達が、盛に押出す時であつた。

宣孝は紫式部の夫で、その子隆光は式部の繼子である。隆光は長保三年に廿九とあるから、宣孝が筑前守になつた正暦二年は、十九ばかりの若者である。宣孝とても四十近い年配であつたらう。元氣盛の男とはやり切つた若者とが、「御嶽よもあしくてよと宣はじ」と、得手勝手な解釋を下して、「なでふ事かあらむ」など稍輕侮した調子で、甚だケバクしい服裝で押出した。殊に青摺の水干袴などは、當時大いに意氣な物としてあつた。六根清淨の淨衣姿の連中は、齊しく驚異の眼を見張つた。所が罰が當るどころか、却て出世をしたと、えらい奇蹟のやうにいつてゐる。但これから十年経つた長保元年に、紫式部ほどの立派な妻君を遺して、宣孝の死んだ事は、やはり御嶽の罰かも知れない。

暮秋のきりくす以下は、おもに自然の風物の感哀をそるに足り、詠歌の材料に取扱はれたものが多い。風の音は、既に第一段に、蟲の音と並べて、「哀なり」と評してゐる。荒過ぎては恐ろしさが先立つて面白くなるから、「荒うはあらぬ」の註脚を添へたのである。「鶏の子」は洵にい、見付け物で、優しい情味のあるものである。人事に關したるものでは、「夕暮曉に目ざましたる」の夕暮に目を覺すこ

とは、一寸をかしいやうだが、これは宿直や何やと、夜明しの多い宮中生活な爲、晝間寝ることが、折折あるからだらう。戀中の堰かれるのが哀なのは、あまり當然で、平凡と感ぜられる程にまで、やはり哀なものである。

鈍色の衣も、その對象が奇麗な人だけに、哀が増すのである。老僧の勤行は、白樂天の「香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經」(戲贈禮經老僧)と作つた境地と同様で、その殊勝さに涙がこぼれもする。

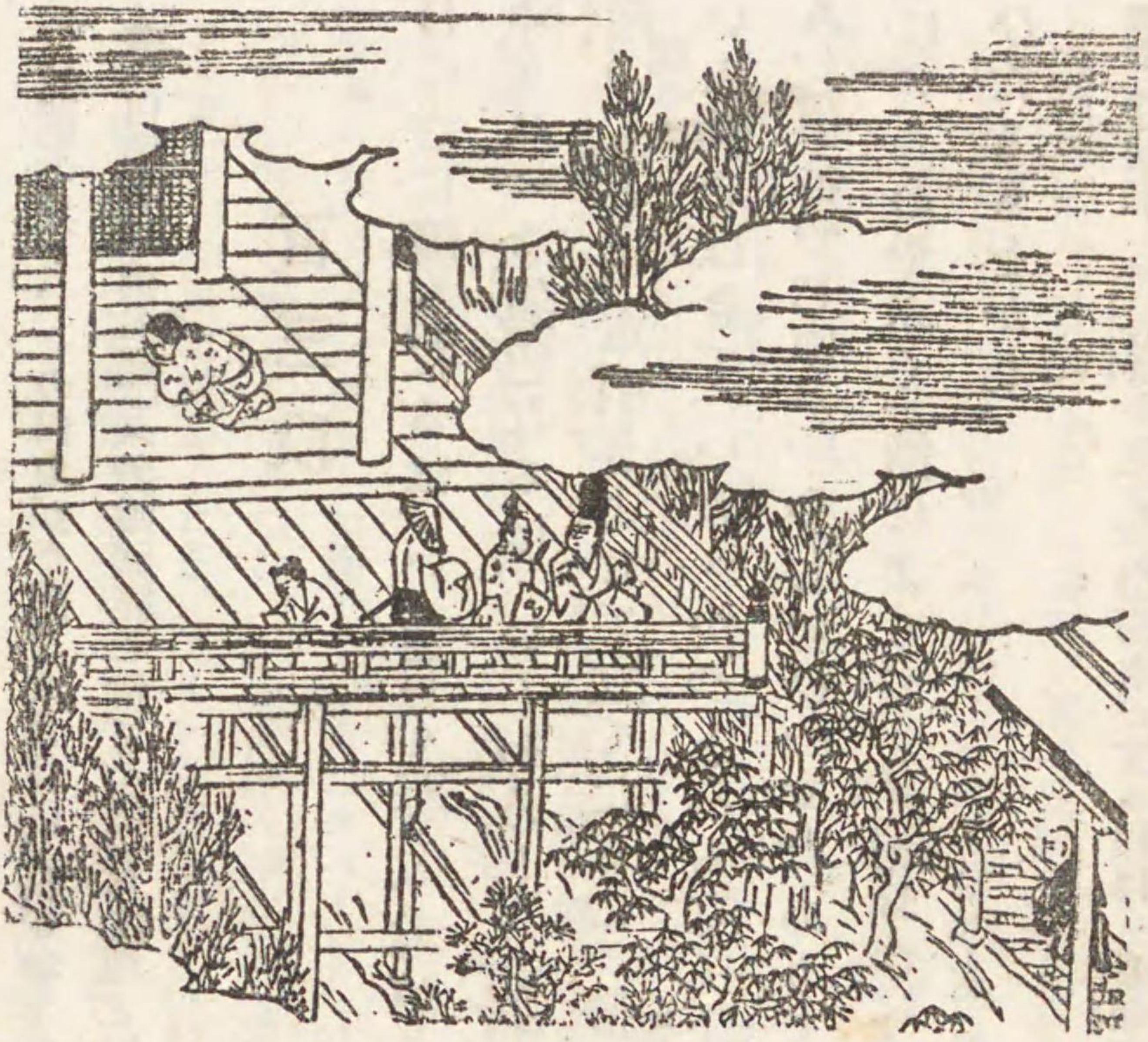
百三段

正月びつきに寺に籠りたるは、いみじく寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき氣色なるは、いとわるし。初瀬はつせなどにまうでて、局などするほどは、樽階くわいのもとに、車引きよせて立てたるに、帯ばかりしたる若き法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつゝみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうち讀み、俱舎くしやのじゆを、少しいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいとあやふく、傍かたわらによりて、高欄かうらんおさへてゆくものを、たゞ板敷などのやうに思ひたるもをかし。

○初瀬 長谷寺を見よ。○局などする程は 參籠する部屋など支度するうちとは也。○樽階 穴ハシ。「樽」は荒木の材木をいふ。「階」は階段なり。寺前の坂にあり。○帯ばかりしたる 下着に帯ばかり

(口釋) 正月に寺に籠つてゐるは、ひどく寒く雪勝に氷つたのが面白い。雨などが降出しさうな氣色なのは、甚だいけない。初瀬などに參詣して、お籠りの部屋など支度する間は、樽階の際に車を引寄せて立つてゐると、帯だけしめた若い法師達が、足駄といふ物をはいて、少しも用心もせず、その樽階を下り上るといつて、何と

きまつた事もない經の片端を讀んだり、俱舎の頌を少しよみ續けて歩くのが、場所に応じて面白い。自分が登るには甚だあぶなく、傍へ寄つて欄干をおさへて行くものを、あの若法師達は、只板敷のやうに思つてゐるのも面白い。



初瀬の寺景

なく、慎もなくの義。平氣にて一向用心せざるをいふ。○おりのぼる、樽階をなり。○何ともなき經のはし、何とも定まりたる事もなき經文の片端をと也。口から出まかせに誦經するをいふ。○俱舎のじゆ「俱舎」は藏の義にて、阿毘達磨俱舍論の略。世親菩薩の作にして、玄奘三藏の譯なる三十卷本、世に行はる。「じゆ」は頌の字音。偈といふに同じ。字句を一定して、諷誦に便ならしめたるもの。俱舎論中に、四句一偈にて、すべて六百頌あり。これを「俱舎の頌」といふ。○所につけて、場處柄に應じてと也。○わがのぼるは、我が樽階を上るはと也。○たゞ板敷などのやうに云々の若き法師等はなり。

法師が来て「御部屋かへしなどしたるもあり。裳、唐衣など、こはくしくさうぞきたるもあり。深履

(口譯)法師が来て「御部屋の支度をしました。

早お出なされ」などいつて、穿物など持つて来て、車から自分達をおろす。参詣人を見ると、着物をあべこべに裏返しなどして着てゐるもある。裳唐衣など角だつて着飾つてゐるものもある。深履半靴などは、廊下のあるたり足摺して遣入るのは、禁中めいて亦面白い。内外共に立入ることを許された若い男や家の子など、あとに又引續いて「その處は低くなつてゐる所であるやうです。高くなつてゐる所のやうです」など、主人に注意してゆく。何者かしらん、その貴人に大層近寄つて歩き、又先立つてゆく者などを、家來達が制して「暫く待て。貴人の入らつしやるに、

半靴などはきて、廊のほどなど履ずり入るは、うちわたりめきて、又をかし。内外など許されたる若き男ども、家の子など、又立ちつゞきて、「そこもとは落ちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何者にかあらむ、いと近くさし歩み、さい立つ者などを、供々しげし。人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとて、少し立ち後るゝもあり。又聞きも入れず、われまづとく佛の御前にとゆくもあり。局にゆくほども、人の居並みたる前を通り行けば、いとうたてあるに、犬防の中を見入れたる心ち、いみじく尊く、などで月頃もまうですすぐしつらむと、まづ心もおこさる。みあかし常燈にはあらで、うちに又人の獻りたる、恐しきまで燃えたるに、佛のきらりと見え給へる、いみじく尊げに、手ごとに文を捧げて、禮盤にゐがはりく誓ふも、さばかりゆすり満ちて、これはと取り放ちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出したる聲々の、さすがにまた紛れず、「千燈の御志は、なにがしの御ため」と、わづかに聞ゆ。帶うちかけて拜み奉るに、法圓、こゝにかうさぶらふ」といひて、櫛の枝を折りてもてきたるなどの尊きも、なほをかし。

(考異) ○御局して侍りはや、原本局したりとあり。古本による。○つらむと、原本つらむととあり。古本、堺本による。○わがはりく、原本わがひてろぎとあり。堺本による。○尊きも、原本尊きなどともあり。一本による。○御局して侍りはや、の上、法師のきてを補ひて聞くべし。「はや」は早参り給への略。○履どももて

かうは近寄りぬもの
だなどいふを、成
程と思つて、少しあ
とへさがるもある。
又耳にもとめないで
自分が一番に早く佛
の御前に参らうと思
つてゆく者もある。
部屋へゆく間も、人
が居並んだ前を通つ
て行くので、甚だ面
白くないが、犬防の
中を見込んだ心持は
非常に尊く、何て月
頃も参詣せず、月日
を過したらうと思は
れて、第一に信心の
念がおこされる。常
燈明ではなくて、内
陣に別に人の奉納し
た燈明が、恐しい位
に燃えたのに、本尊
の佛がきら／＼光つ
てお見えなされるの
が、非常に尊ばれる
が、大徳の和尚達が、手毎
に願文を捧げて、禮
盤に居代り／＼して
立願するその聲も、

きて云々 法師が上履など持来て、車よりおろすと也。○きぬかへさまに云々 衣服を表裏に引返しな
どして着たるもありと也。以下参詣人の様子なり。○こはくしく 角立ちと也。改りて儀式張りた
るをいふ。○深履 和名抄に「深頭履、今按此間云深履、其頭短者謂之半靴」。貞丈雜記に「深沓は
靴といふ沓の事なり。物具抄に、靴、沓、同事歟、云々」とあり。靴は下部を革にて作り、上部は藩薇錦
をつけ、靴帯とて金具のある細き革にて締むるやうにす。後世の深沓とは全く別物なり。○半靴 ハウ
クワ。桐の木を彫りて浅く作り、漆にて黒く塗られたる沓。もとは深頭履の頸短き物なりしなるべし。○履
すり 履を引摺るをいふ。○内外などゆるされたる 内外共に立入ることを許されたと也。主人の信
用を得たるさま也。「内外」は音にナイゲと讀む。熟語にて、内とのみはん同じく、外にはおもき意
味なし。○家の子 本宗の總領に對してその族類を稱する名、もとは一家の端なれども、隨從して奉公
する者なり。○そこもと 其處のところなり。○おちたる所 低くなりたる所なり。○あがりたるの
下、所に待るめりを略けり。○教へゆく 主人たる貴人になり。○いと近く その貴人になり。○さし
あゆみ 「よし」は接頭語。○さいだつ者などを の下、男達の制してを略けり。「さいだつ」は先立つの
音便。○しばし人のおはしますにしばし待て、貴き人の居給ふにと也。「しばし」の下、待てを略けり。
○まじらぬわざ 近寄りぬことと也。「かく」はいと近くさし歩み先いだつもの、云々」とあるをさす。
○立ちおくる、も 引下りて行く者もと也。○佛のお前にとゆくも 佛のお前に参らんとゆく者もと
也。上の「聞きも入れず」は「ゆくも」に續く。○犬防 こは佛堂の内陣と外陣とを仕切る結界をいへ
り。造付の格子なり。もと殿舎などの階下に立てて、犬などの濫に上らぬやうにしたる駒寄、即ち埒なる
が、参詣者の多き佛堂などには、階下に立てがたき故、堂内に移して、内外陣の界に置ける也。多く
正面にのみあれど、正面より左右に打曲けて置ける處もあり。○犬防の中 即ち内陣にて、本尊のましま

さほどに堂内一林に
ワヤ／＼して、これ
は誰のと取立てて、
聞分けられさうもな
い、和尚達が強ひ
て絞り出した聲々
が、流石にまた外の
聲に紛れず「千燈の
御心ざしは何がしの
御爲」とやつと聞え
る。自分が帯を打か
けて禮拜する時に、
法師が「こゝにかう
参つて居ります」と
いつて、櫓の枝を折
つて持つて来たこと
などの尊さも、やは
り面白い。

す處なり。○まづ心もおこさる 第一に信仰の心も起さると也。○みあかし常燈 常燈明といふに同
じ。○うちに 内陣になり。○人の奉りたる 有志の人の奉納したる燈明のと也。○佛の 本尊十一面
觀音の立像のなり。○尊けに 尊けにてと也。○手ごと文をさ、けて 和尚が手毎に願文を捧げてと
也。○禮盤 ライバン。佛前にある高座にて、佛を拜し讀經などする時に、導師これに上る。その形は
溜床の臺に似て小さく、上に疊を敷く。○誓ふも 誓ふ聲もの略。「誓ふ」は佛の本誓にすがりて立願す
るをいふ。○ゆすり満ちて 祈願の聲が、堂内に充滿して震動するをいふ。○これはと取りはなちて
これは誰の願文と取分けての略。○せめてしほり出したる 強ひて絞り出したると也。これは特に熱誠
を籠めたるさま也。「せめて」は迫めてなり。○さすがに 「取放ちて聞分くべくもあらぬ」とあるを承
けたり。○千燈の御心ざしは 佛に千燈を供養する御志はと也。以下「何がしの御爲」まで、法師の讀
上げたる願文の文句なり。抄本には「千燈」を千壇とありて、註に「壇は布施の義なり。志の廣大なる
を千壇といふなり」と見えたり。○なにがしの御爲 某の御爲の略。○帯うちかけて 裳の掛帯を
肩に打掛けてと也。掛帯は肩よりかけて胸前にて結ぶ。禮裝なり。唐衣と同じ地にて、繡あり。唐衣着
たるうへに、頸に掛く。(附圖参照) ○こゝにかうさぶらふ 此處にかく参れりと也。清少の局に、櫓
の枝を持來れる法師の詞なり。

(口譯)
犬防の方から法師が
近寄つて来て「御立
願の筋は十分によく
佛に申し上げました。
幾日位お籠りなさい
ますか」と尋ねる。

犬防のかたより法師寄りきて、「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」
など問ふ。法師しかくの人もらせ給へりなどいひ聞かせていぬるすなはち、火
桶、菓物などもてきつゝ貸す。はんざふに手水など入れて、盥の手もなきなどあり。
法師「御供の人はかの坊になどいひて、呼びもて行けば、かはり／＼ぞゆく。誦經の鐘

のおと、わがななりと聞けば、たのもしく聞ゆ。かたはらによろしき男の、いと忍びやかに額かみなどつく。立居たちあのほども心あらむと聞えたるが、いたく思ひ入りたる氣色にて、いも寝ず行ふこそ、いと哀なれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊たかげなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などを、げざやかに聞きにくくはあらで、すこし忍びてかみたるは、何事を思ふらむ、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。

序に「これくの人
が籠つてお出なさ
る」など話しかけて
立去るとすぐ、火桶
や果物など持つて來
て貸したり呉れたり
する。半挿に手水な
ど入れて、盥には取
手のないのなどもあ
る。お供の方は彼方
の宿坊に御休息下さ
い」などいつて、法
師が供の者を呼立て
てゆくので、供の者
は交代に宿坊へゆ
く。誦經に打つ鐘の
音を、自分の爲ので
あると聞くと、頼も
しく思はれる。自分
の部屋の脇で、可成
の男が大層忍びや
かに禮拜する。立居の
様子も心がありさう
に思はれたが、ひど
く思ひ込んだ氣色
で、寝もせずお勤を
するのが、大層あは
れである。禮拜を休
む間は、經を高くは

○いとよく申し侍りぬ 貴女の御願意は、十分によく佛に申し上げたりと也。○幾日ばかりの下、かの疑辭を略けり。○しかくの人 これくの人にて、身分柄の人なるべし。○きつ、貸す「貸す」は専ら火桶を承く。果物はくれたる也。○はんざふ ハニザフ。ハザフ。半挿の字音。その柄なかば内に、半は外にある故に、かく呼ぶとぞ。湯水を盛りて物に注ぐ器にて、柄の中を水の通るやうにしたる物なり。今の湯桶に似たり。和名抄に「匭、波運佐市、俗用ニ椽字」。○手水など入れての下、ありを略けり。○盥の手もなきなど の下、添へてを略けり。「盥」は兩方に手のあるが通例なり。匭より手水を注ぎて洗へば、盥に水は溜るなり。飛沫の散らぬやうに、盥の上に貫簀ぬさを置く。○かの坊に 法師の詞なり。彼の宿坊に休息し給への略。「坊」は比隣したる僧舎をいふ。○よびもて 供の者をなり。○かはりがはりぞ 供の者がなり。○わがななり 我が爲のなりと也。「ななり」はなるなりの略。○心あらむと聞えたる 用意ありけに思はれたるがと也。○うちやすむ程は 禮拜をやめて休息する間はと也。○高くうち出させまほしきに 聲高く讀上げさせたく思ふにと也。○鼻など云々 心に何事か感

じて泣くさま也。「鼻」は鼻水即ち涕なり。「げざやか」は氣亮の義。際立ちて著きをいふ。○かれを「かれ」は男の願意をさす。

聞えぬ位の聲に讀んだのも聲である。もつと高く讀上げさせたいに、鼻などをいぢりく聞悪い程ではなく、少し忍んでかんだのは、何事を思ふのであらう。あの願意を協へてやりたいと思はれる。

(口譯)

日頃籠つてゐると、晝間は少しゆつゝりして以前は居た。法師の宿坊に、供の男どもや童など出て往つて、退屈してゐると、すぐ傍で法螺貝を大層音高く、俄に吹出したのが唳驚される。綺麗な立文など、供に持たせた男が、誦經の布施物を打置いて、堂童子など呼立てる聲は、山の峩いに響き合つて、耳立つて聞える。鉦かねの聲がだんく高

日ごろ籠りたるに、晝は少しのどかにぞ、早うはありし。法師の坊に、をのことも童わらはなどゆきて、つれづれなるに、只かたはらに、貝をいと高く、俄に吹き出したることをおどろかるれ。清げなるたて文など持たせたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山ひゞきあひて、さらくしう聞ゆ。鉦かねの聲ひゞきまさりて、いづこならむと聞くほどに、やむごとなき所の名うちいひて、「御産たひらかに」など、教化けわなどしたる、すゞろにいかならむと、おぼつかなく念ぜらる。これはたゞなる折ひまの事なめり。正月などには、只いと物さわがしく、物のぞみなどする人の、隙ひまなくまうづる見るほどに、行おこなもしやられず。

○日頃籠りたるに云々 數日をかけて參籠したるに、今とはちがひ以前は、晝の間は少し靜にゆるりとしたりしと也。○貝を 法螺貝をなり。法螺は法事に吹けば、諸天善神歡喜くわんぎ向すと云ふ。但こ、は午時を報ずる爲なり。○立文など持たせたる 願文の立文など下部に持たせたと也。「立文」は既出したる。○誦經の物 誦經の科の物、即ち布施物なり。裝束布帛の類を用ゐる。法成寺金堂供養記に「立幄、爲積つみ誦經物之所」。○堂童子 堂内にて雜事を取扱ふ下役人なり。塵添ちんぜん壘るい抄に「南都諸寺に堂童子といふは、下部侍也」とあるものなるべし。但法會の際には、花筥けこを配る年少の俗兒、又は四位

は何處から上げるの
だらうと聞くうちに
貴い所の名をいつて
「御平産あるやうに」
など御祈禱などした
のが、何だか産の安
否がどうだらうかと
心配で、佛を祈念さ
れる。かう書間の物
静なのは、平常の何
もない時の事であ
る。正月などには、晝
間でも参詣人で只ひ
どくざわ／＼して、
物望などする人が、
絶間なく参詣するの
を見るまゝに、お勤
もせられない。

(口譯)
日の暮れる時分に参
詣する人は、お籠り
する人と見える。小
法師達が持上げられ
さうにもない屏風な
どの高いのを、大層
うまく取扱ひ、疊な
どトんと立置くと見
ると、すぐ局に出て、
犬防に籠をさら／＼

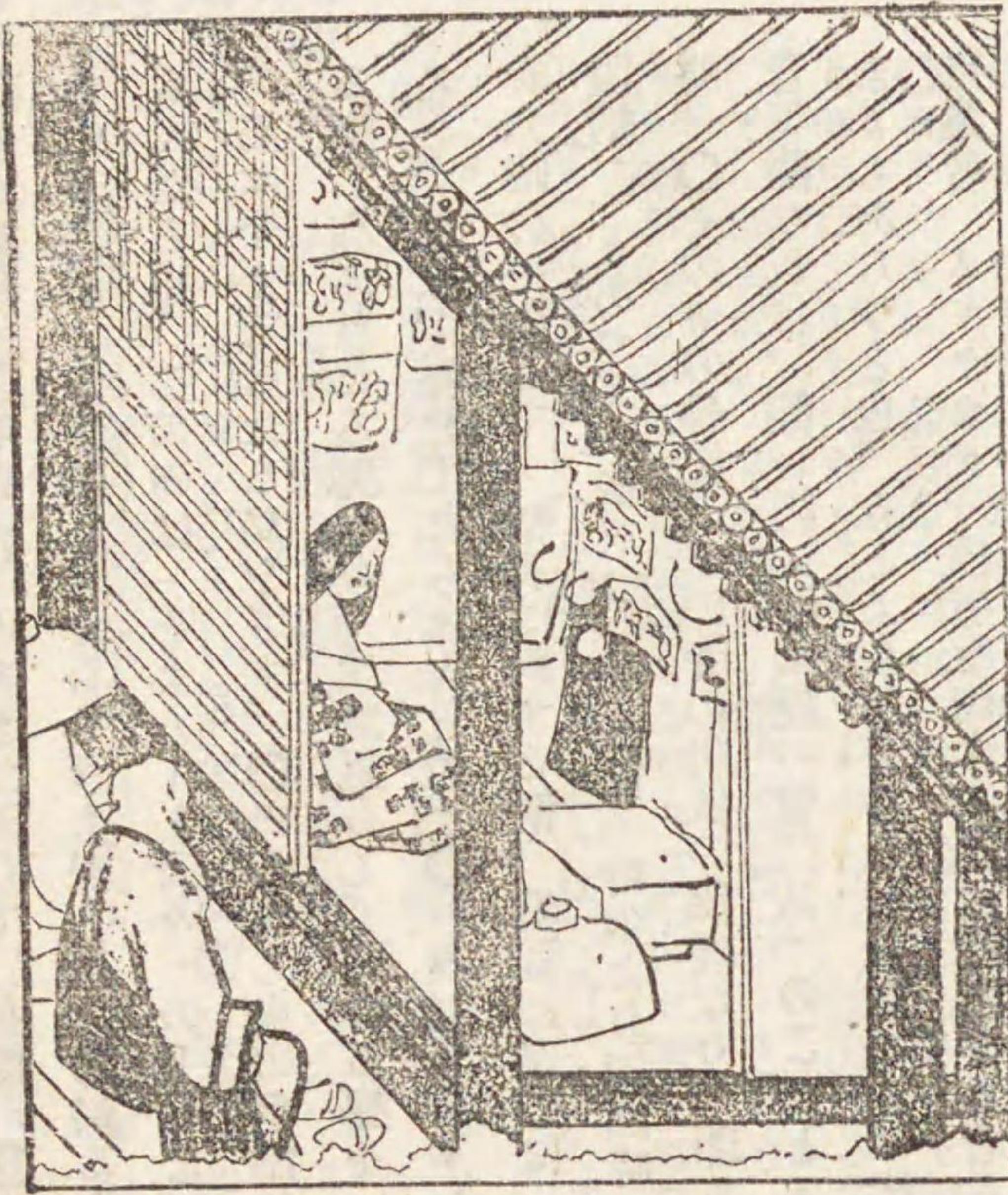
と懸ける有機など、
仕馴れたのは大層樂
さうであるよ。歸る
人だらうか、ぞろ
／＼と大勢局から下
りて来て、老女らし
い人の、人柄賤しか
らず忍びやかな様子
で「その部屋の内が
危険だ。火の用心を
せよ」などいふもあ
る。七つ八つ位な男
の兒が、愛くるしく
高慢な聲で、附添の
家來共を呼付け、物
などをいつてゐる様
子も、甚だ面白い。
又三つ位な乳兒が
寝おびれて、咳をし
た様子も可愛い。乳
母の名を母などが
呼んだのも、籠つて
ゐるのは誰だらうと
知りたい。終夜非常
に物騒しく勤行し
明すので、眠らな
かつたのを、後夜のお
勤が濟んで少し眠つ
た寐耳に、その寺の

五位の俗官を稱す。○きら／＼しう聞ゆ 目にきは立つをいふ語なるを移して、耳に立つことにいへり。
○いづこならむ 何處よりの祈願ならむの略。○やむごとなき所の名云々 貴き願主の名をいひてと
也。○たひらかになど 「たひらかに」の下、守らせ給へを略き、「など」の下、祈りてを略けり。○教化
云々 崇をする物怪など教化したるの略。「教化」はケウゲと讀む。教訓化導の意にて、法を説きて惡よ
り善に轉化せしむるをいふ。○すいるに 「おぼつかなく」にかゝる副詞。○いかならむと云々 御産の
うへ如何ならんと心許なくて、御佛を念ぜらるゝよの略。「念」はこゝにては祈念の意なり。○これは
晝間の物靜なるをさす。○たゞなる折云々 平生の時の事と見ゆると也。○物さわがしく そは／＼と
落着かぬをいふ。○物のぞみなどする人 縣召に任國を望みなどする人。○まうづる の下、をを略
けり。○行ひも わが勤行もと也。

日のうち暮るゝにまうづるは、籠る人なめり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ
屏風などの高さ、いとよく進退し、疊などほうとたて置くと見れば、たゞ局に出て
て、犬防にすだれをさら／＼と懸くるさまなどぞ、いみじくしつけたるは安げなる
や。そよ／＼とあまた下りて、大人だちたる人のいやしからず、忍びやかなるけは
ひにて、歸る人にやあらむ。「その内あやふし。火の事制せよ」などいふもあり。七
つ八つばかりなる男兒の、愛敬づきをこりたる聲にて、さぶらひの人呼びつけ、物
などいひたるけはひも、いとをかし。また三つばかりなるちこの寝おびれて、うち
しはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名、母などうち出でたらむも、たれならむ

と、いと知らまほし。夜ひと夜いみじうの、しり、行ひあかす。寝も入らざりつる
を、後夜などはてて、少しうちやすみ寝ぬる耳に、その寺の佛經を、いとあら／＼し
う、高くうち出でて讀みたるに、わざと尊しともあらず。修行者だちたる法師の讀
むなめりと、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。

(考異) ○けはひ 原本御けはひとあり。古本による。○安げなるや 原本安げなりとあり。坂本による。○たれ 原
本これとあり。古本、坂本による。



(紙草の狗天) 籠 參

○小法師ばらの 小僧達がなり。この
句「いとよく進退し」につゞく。○高き
の下、をを略けり。○進退し あちこち動
すをいふ。○疊などほうと立ておく 置疊
など持来て、トんと立置くと也。「ほう」
は擬聲なり。○たゞ局にいでて そのま
ま局にはひりてと也。「いでて」は打出で
ての意。○犬防にすだれを この犬防は内
陣横手のなり。これに沿ひて參籠者の局を
設くる故に、見え透かぬやうに、それに籠
を掛くるなり。○いみじく「安げなる」

本尊の御經を、大層
荒々しく高聲出して
讀んだのが、取立て
て尊いといふまでも
なく、尊く聞える。
修ら者らしい法師が
讀むのと見ると、
ふと打驚かれてあは
れに聞える。

(口譯)
又夜などはお籠りし
ないで、書間局のう
ちで、人らしい人が
お勤してゐるが、藍
鼠色の指貫のピンと
張つたのに、白い衣
など澤山着て、子供
まうに見える若い男

の立派に着飾つたの
に童など連れて、家
來達が大勢長つて取
巻いたのも面白い。
一寸屏風を立てまは
して、禮拜など少し
する様である。顔を
見知らないのは誰だ
らうと、大層床しく
思れる。又見知つた
のは、あの人さうな
と見るのも面白い。
若い人達ばかり局
などの邊をぶらぶら
して、本尊様の方へ
は見向もしないで、
別當などを呼んで、
さしやき話して出て
ゆくが、不都合な者
とも見えないさ。

に係る副詞。○そよくとあまた下りて 衣摺の音そよくとして、多勢局より下りてと也。○大人だ
ちたる人の 大人即ち老女らしき人がと也。○歸る人にやあらむ この一行は今參籠はてて、歸る人な
らんかと也。この句は「そよくと云々」の上へまはして心得べし。○そのうち その局の内なり。そ
の局は今まで居たる局をさす。○あやふし火の事制せよ 危険なり、火の用心をせよと也。○をこりた
る聲 高ぶりたる聲なり。生意氣らしく聞ゆる聲をいふ。○乳母の名母などうち出でたらむも 乳母の
名を、母など呼立てたらんもと也。○いみじうのしり 僧達の誦經などなるべし。○後夜 ゴヤ。晝
夜六時の一にして、初夜に對する稱。雲圖抄裏書に「初夜自亥二刻至子二刻、後夜自子三刻至丑
四刻」とありて、後夜は今の午前一時半より同四時に至る間をいふ。○後夜など 後夜の勤行などの
略。○その寺の佛經 その寺の所依の佛經なり。即ち本尊に所縁ある經文にて、初瀬寺にては本尊觀世
音菩薩なれば、觀音經(法華經の普門品)のこととす。○わざと尊しともあらず 取立てて尊しといふ
までもあらずと也。もとより尊きことなるをいふ。諸註、格別に尊しとも思はずと解けるは誤なり。○
修業者 スギヤウザ。佛道を修する爲に行脚する者をいふ。所謂回國巡禮の類なり。

また、よるなどは籠らて、人々しき人の行ひたるが、青にびの指貫のはたばりたる、
白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若きをのこの、をかしよううちさうぞ
きたる、童など具して、さぶらひの者どもあまたかしこまり、あねうしたるもをか
し。かりそめに屏風たてて、額などすこしつくめり。顔知らぬは誰ならむと、いと
ゆかし。知りたるは、さなめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなど

のわたりにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず。別當など呼びて、打つさ
めき物語して出でぬる。えせものとは見えすかし。

(考異) ○籠らて 原本顔しらとあり。○をかしげなる 原本をかしうとあり。以上古本による。○具して 原本
してとあり。塚本による。

○はたばりたる 布帛の中廣なるをいふ。白氏文集に、幅の字をハタバリと訓めり。和訓栞に機張の
義と。「たる」の下、にを略けり。○子ども 人の子のことにて、幼少なるにも限らず。○うちさうぞ
きたる の下、にを略けり。○あねう 圍繞の字音。○かりそめに云々 かの指貫着たる人のさま也。
○知りたるは 顔知りたるはの略。○さなめり 其の殿なめりと也。○局どもなどの云々 參籠の婦
人の局などのあたりを立さまよふと也。隙見するさまなり。○別當 べたウ。別に寺務に當る者の稱
にて、延喜式に「凡諸寺以別當爲長官」とあり。但この別當は、さる重々しき僧とは見えす。堂
内の雑事など專當する法師なるべし。○えせ者とは見えす 析柄の興ありて、えせ者とは見えすと也。
「えせ」は賤しめいへる詞にて、こゝは不埒者といふ程の意。

二月晦日三月朔日ご
ろ、花盛に寺に籠つ
たのも面白い。綺麗
な男たちの微行と見
える二三人、櫻や青
柳の襖など美しくて
括をあげた指貫の裾
も、上品に見なされ

二月晦日、三月朔日ごろ、花盛に籠りたるもをかし。清げなるをのこどもの、忍ぶと
見ゆる二人三人、櫻、青柳などをかしようて、くさりあげたる指貫の裾も、あてやかに
見なざる。つきよくしきをのこに、装束をかしようしたる餌袋いだかせて、小舎人
童ども、紅梅、萌黄の狩衣に、いろくのきぬ、摺りもどろかしたる袴など着せ、花
など折らせて、侍めきて、ほそやかなる者など具して、金鼓うつこそをかしけれ。さ

る。ふさはしい従者に、飾を面白くした餌袋を抱かせて、小舎人童達に、紅梅や萌黄の狩衣に、色々の下着、摺亂した模様の袴など着せ、花など拵持たせて、侍めいて、瘦きすな者など連れて、金鼓を打つのが面白い。某ぞよと見知つた人もあるが、先方では何で自分の参籠してゐるのを知らうかい、氣が付かずに通り過ぎてしまふのは、逢ひたくはないが、流石に物足りない。自分のこゝに居る様子を、見せようものな。どいふのも面白い。かうして、寺籠り又はすべて常に往かない所で、召使の人だけであるのは、往甲斐なく思はれる。やはり同じ程合の身分で、同じ心に面白い。

（考異） ○ありくめるは の下、原本いみじとあり。通釋に「活本、慶安本には「いみじく心づきなき物」と、次の題目につけたり。（古本も同じ）されば「は」にて終るべき處なり。さて次の「心づきなきもの」といふ段は三百六段と重複なれば、こゝは旁註本に従ひ省きつ」といへるに従ふ。

○花盛に籠りたる寺になり。諸註、これを尙初瀬の参籠と解けるは誤なり。初瀬のことは前文に終るにて、こゝは冒頭の「正月に寺に籠りたるは云々」を承けて、二三月の交の花盛に寺籠りするも面白しといへるなり。○清けなる 美しきこと。俗のキレイに當る。○青柳 アヲヤギ。表は白、裏は青きといふ。直衣又は襖の色目なり。○青柳の襖(アヲ)などの略。一本にこの語の前後「清けなるをのこどもの櫻の襖柳の襖など好ましげなる姿にて」とあり。○く、りあけたる 指貫の裾括を、脛に高く括り上げたるをいふ。○見なざる、 の下、よの歎辭を含めり。○装束をかきき 装飾の面白きと也。○餌袋 菓子飯など入る、袋。もとは鷹の餌を入る、物なれど、この頃は割籠と同じやうに用ゐて、持

事も、色々話し合へるやうな人を、是非に一人や二人又は多人數誘ひたい。その居合はせてゐる召使の中でも、適當なものもあるけれども、始終見馴れてゐて面白くならう。男などもさう思ふと見える、わざ／＼友人など尋ねて、呼立ててあるくやうである。

歩きたりき。○小舎人童ども の下、に文字を略せり。○金鼓 コング。鰐口なり。寺堂の軒頭に懸け置き、布索にて打鳴らす金屬製の樂器。桂林漫録には、「佛堂ノ前ニ掛タル鰐口ノ事ヲ、古クハ金鼓トモイヒケルニヤ。京師玉生寺ノ鰐口ノ銘ニ云ク、地藏院、奉鑄顯金鼓堂口、正應元丁巳五月廿九日云々。」○さぞかしと云々 その人は某ぞよと見ゆるもあれど、その人は何とて、自分の参籠して居ることを知るべきぞ、知らずして通りすぐることが、流石に物足らずと也。「流石に」は、あながち逢ひたくはなければと也。○例ならぬ所 常居らぬ所にて、旅先をいふ。○使ふ人のかぎりしてあるは 自分の召使ふ人のみにて在るはと也。「ある」は居ること。○おなじ程にて 同じ程度の身分の人にてと也。○そのある人その自分の手許に居る人なり。召使をいふ。○さ思ふ 「さ」は「寺籠り例ならぬ處にて使ふ人の限しであるは甲斐なし」とあるをさす。○わざと尋ね云々 わざ／＼友達など尋ねて、呼出してあるくやうなるよと也。「は」は歎辭。

寒くて雪や氷に閉ぢられた、正月の寺籠が面白いといふ。嘗て雪霰が細殿のうちに舞込りのを興がつた清少としては、當然の事と思ふ。冬の雨ときては、いかにも感心しない。元來清少は雨をあまり好かない人であつた。尤もこれは、兵部のやうなつむじ曲を除いては、誰でも閉口する。さて正月の寺籠から聯想して、長谷寺参籠の叙事にはひつてゆく。

春日詣や初瀬詣には、京から牛車でも往つたものである。但信心の爲には、相當の身分の者も徒歩で往く。

これも徒よりなめり、よろしき女二人、しも人どもぞ、男女數多かめる。馬四つ五つひかせて、いみじく忍びやつしたれど、清けなる男どもなどもあり。（源氏、玉鬘）

この頼もし人な介、弓矢持ちたる二人、さてはしもなる者、童など三四人、女ばらあるかぎり三人壺装束して、
盥洗めくもの、ふるき下衆女二人ばかりとぞある。いとやすかに忍びたり。(同上)

いづれも忍びの参詣だが、前のは大臣家の女房で、繁華な生活者であり、後のは田舎出の受領階級で、
質素な生活者である。平人の徒歩はいふまでもない。

詣でも還りもするなめり、脛を布のはしいて引めぐらしたる者ども、ありきちがひ騒ぐめり。部さしおけたる所
に宿りて、湯沸しなどする程に見れば、さまざまなる人のいきちがふ。おのがじしは思ふ事あらめと見ゆ。(蟬
蛉日記)

さて初瀬の山下に車を立てて、本堂にお籠りの局を取るうち、榎木の階段(今は屋覆のある石坂)を、窓
に見上げると、若僧共が、袈裟も衣も着ぬないがしろな姿で、高だか平だか知らぬが足駄ばきで、平地
のやうに上下する。それが所柄人柄、經文や咒文を鼻歌代に口ずさみながらだ。京女殊に宮女房の心ち
には、愈驚きも感心もせずには居られぬ。「傍によりて高欄おさへてゆく」は、あるき下手な連中とて、
手摺に捉まのく危なかりながら登る體である。それが僅一町か一町半の坂をなどいつてはならぬ。こ
のあたりの記事は、二百八十七段(初瀬に詣でて)に反復してあるから、比較して見るも面白からう。

當時長谷寺に参籠するには、まづ兼日に精進をしてから、今も高野山でやつて居るやうに、まづ宿坊
にか、つて申入れる。この坊主は宿老の大徳である。それも萬次によつて、勢力に次第が出来るから、
参籠の局の位置も、上臈の大徳はい、場所を取るのである。本尊の左右の廂の間が、いくつにも仕切ら
れて、局になるのである。源氏、玉臺の巻に、

右近の局は佛の右の方に近き角にしたり。この(玉臺の君)御師はまだ深からればにや、西の間に遠かりけるを、
云々。

とあるのが、それである。宿坊と局とは、絶えず連絡を保つて、宿坊の別當法師と小法師原が、局の世
話を一切する。本堂にのぼる前に、稜殿で稜をして貰つて、身を潔めて置く。(蜻蛉日記、更科日記に見
える)局は手狭だから、下人などは最初から宿坊の方に泊る。願主も都合次第で、夜だけ局に籠つて、晝
間は宿坊におりて居てもよい。籠るのは一晩から三晩でも、七日でも三七日でも、それは勝手である。

今でもお籠りといへば夜である通り、夜分の祈禱を主としたものであつた。
願文はまた御燈文といつた。一體こゝに参詣する者は、二里手前の椿市(今の金谷)で、燈明皿など買
つて支度することが、例になつてゐた。後世は「お蠟を上げられませう」と蠟燭をとますところを、油火
の燈明を上げる。大願を立てる際には、人によつて十萬燈も燃す。李部王記に、

延長八年八月、作願文、遙祈長谷寺觀音、願御病平癒、爲造白檀觀音像、乃本鏡一面燈明十萬燈。

長者の萬燈貧の一燈で、貧乏人は貧乏人相應に、燈明供養をした。願文の様式はほゞ一定したもので、
大抵はたゞ一寸、願意の所と供養の燈明數とを書替へるまで、あるから、澤山あつても世話はない。志
の主は藤原の瑠璃君の爲にとか何とか、作名をすればよい。それを宿坊の大徳殿が、佛前で讀上げる。
局する程の資力のない者は、外陣や堂の内外に雑居して、夜明しをする。だから各種の階級の人が充滿
して、目盲や腰抜の不具者まで詰掛けて居た。かうした貴賤のお籠り連中が、年中毎日絶間なしだから、
實にこの寺の繁昌は廣大無邊であつた。

仰も初瀬は三十三所觀音靈場の隨一で、源氏にも、

佛の御中には初瀬なむ、日の本の中にはあらたなる驗顯し給ふと、唐土にだに聞えなる。

と書かれた靈佛である。その利益は、市はの段で説明した如くであるから、祈願の節も種々雑多で、し
まひにはおのが勝手の戀を祈る者があり、中には御利益の強請をする奴もある。

観音助け給へとて、長谷に参りて、御前にうつ伏して申しけるやう「この世にかくてあるべくば、やがて御前にて干死なむ。又自ら便もあるべくば、その由の夢を見ざらむ限は出づまじ」とてうつ伏したりけり。寺の僧見て「誰を師にはしたるぞ。いづくにて物はくふ」など問ひければ「かく便なき者は、師もいかでか侍らむ。物賜はる所もなく、哀と申す人もなければ、佛の給はむ物をたべて、佛を師と頼み奉りて候ふ也、云々。」(宇治拾遺)

「御局して侍り」は、上の「局などする程は」の首尾である。よごれをかなじんで、始末らしく裏返しに、上着をはふつたのは、田舎女の旅装だらう。お寺に著いてもまだ着直さぬ、こんな不作法者があるかと思ふと、裳唐衣で禮装した貴女がある。男は又、藁沓やけ、でくる下衆もあらうが、深履半靴で、廊下を踏こはめかす身分柄の者もある。その沓摺などに、すぐ禁中が聯想されるのは、清少自身の生活が現れてきたのである。

貴婦人の一行、家來共が敬屈して介錯する様子は、「おあぶなう御座います」の聲が聞えるやうである。殊に近所に立廻る雜人の態度のまぢくな所に、面白味がある。貴人からいへば、「まづ佛のお前にとゆく」奴は承知のならぬ不埒者だが、元來忍びの参詣であり、且こゝは佛の王國で、信心のうへには貴賤平等だから、流石に咎もならず、又承知で威張つて驅逐もする。以上は参詣者の群集雜沓する光景と、各種各様の行動とに向つて、鋭い視線を投げたもので、描寫の筆づかひが、又精細に面白く動いてゐる。「局にゆく程も」からは内陣の光景である。「居並みたる」人は、前から参籠してゐる人達だらう。故參らしい顔して、この新入の参籠者はと、好奇の眼を見張る。その前を通るのは、實際婦人でなくても、多少氣がさすだらう。不信心を悔恨する念は、かういふ場所柄では、我人共に必ず起つてくる。居は志を移すとはよくいつたものだ。

常燈明の外に、有志奉納の燈明が火の山のやうに燃え、その光明に由來尊い長け二丈六尺の靈佛が、金

色を放つて拜まれては、氣の遠くなるほど、一種の靈感に打たれてしまふ。本尊前の禮盤に、大徳邊が代るく著座して、願文を讀上げる。堂内に充滿した参詣者のとよみと、その祈念の聲とが、あれこれ混線して入我々入、只耳を聳するばかりである。中にどうやら一筋徹つて聞えたのは、千燈の御志で、流石に聲が高い。この邊の叙事、實にその光景が浮動するやうで、佳境妙筆である。自分の願文なので、掛帯して拜んでゐると、宿坊の法師が櫛の枝を持つてきてくれる。何處の寺でも、参籠には櫛をくれるのが、當時の例であつた。さて銘々香華を手向けて、おのが勤行に取掛るのである。

法隨が局にやつて来て、願文を讀上げ奉つた報告をして、序に参籠の日數を尋ね、某貴顯の見えてゐることなど、問はず語りして出てゆく。これも檀那を外らさぬ御方便の愛敬で、昔も流行寺の坊さんは如才がなかつた。やがて火鉢や匣や盥などの小道具が持込まれる。間食のお菓子がかかる。供の者は宿坊の方へ呼ばれて、交代に出てゆく。初夜の誦經が始まると、叙述の足が、非常に速くて快い。

隣室に参籠してゐる男の動靜を、大層細かに記述したのは、大いに注意を惹いたからで、筆々同情の涙がにじんである。「いも寝ず行ふ」のは徹夜の禮拜で、所謂千度の拜など勤めて居るのだらう。休息の際にも讀經する。實に信心一二昧といはねばならぬ。「高くうち出させまほしき」は、例の興趣に任せたもので、信心を遊樂的に扱ふものである。額づくも忍やか、經讀むも高きは聞えぬ程、鼻も忍びてかむ、すべてしめやかな振舞は、「立居の程も心あらむ」を立證するもので、「彼を叶へばや」とまで、清少の同情を買得た所以である。さてかう一寸した事にも、惻々の情に禁へないのは、元來婦人の通有性で、蜻蛉日記に、

たかどもの坏鍋などすみてゐるも、いと悲し。下菜ぢかなる心多して、みづからけ劣してぞ覺ゆる。ねぶりせられず、いそがしかられば、つくんと聞けば、目も見えぬ者の、いみじげにしもあらぬが、思ひける事どもを、

人々聞くらむとも思はず、のいしり申すを聞くも哀にて、只涙のみぞこぼる、とある藤原倫寧女の感想や行爲と一致してゐる。

夜分の繁華に引換へて、晝間は少し静であつたと、過去の記憶を記述してゐる。誰も彼も宿坊へ往つたのは、朝飯の爲らしい。獨局に取殘されて、ボンヤリして居ると、喫驚するばかり、耳許で吹出したのは、一山に午時を報ずる法螺貝である。赤染衛門の歌にも。

山寺にまかせてたりける時、貝吹きけるを聞きてよめる

けふもまた午の貝こそ吹きつなれ羊のあゆみ近づきぬらむ(千載集)

とある。「清けなる立文」は、師檀の契ある宿老の大徳への消息だらう。使が取次の堂童子を呼ぶ聲から、すぐに祈禱の鐘の聲に移つた、省筆の味が面白い。「やむごとなき所の名」や「御産平らかに」などは、願文中の文句と見える。清少は婦人だけあつて、お産には殊に深い同情が起つて、覺束なく念ぜられるのである。午の貝、堂童子を呼ぶ聲、願文を讀上げる祈禱の聲、かう聞集めてゐることを想ふと、その如何に徒然であつたかといふことがわかる。いひ換へれば、「つれづれなるに」の一語から、以上の叙事が胚胎してきたのである。「これは只なる折の」は、上文を結んで、下文の正月は晝間でも騒がしいといふ叙事に移つてゆく轉換の句である。

「正月の云々」は、冒頭の「正月に寺に籠りたるは」の理想の實現で、否この經驗があつたから、あ、揚言したのである。行も出来ぬほど、參詣の群集するのは、無論年の初詣を志す人もあらうが、「物望などする」と、特に斷つたのは、縣召の除目に申文を捧げた人達の立願をさしたのだらう。すさまじきものの段の除目の條にも、「物詣する供にも、我もくと参り仕うまつり」とある。

「日のうち暮る、に」からは、一般參籠者の上にわたつて、その光景を叙したのである。小僧が手懸に

敏捷に局する様は、キビく／＼と書かれてあるが、局から下りる一行の描寫は、更に面白い。「あまた下りて」は總括的の句で、その内に主人も老女も男の兒も乳母も、皆包含されてゐる。「歸るにやあらむ」の推測は、火の用心の注意から出發したのである。「火の事制せよ」の句は、假住居の局生活を、強く印象させる。男の兒のマセた様子もい、が、乳兒の寝おびれの咳に至つては、觀察が甚だ細かく、まことに婦人の筆らしい。「誰ならむ」と知りたいのも、例のゆかしがりの女氣質である。曉の靜寂を破る讀經の高聲を、まづ尊しと觀じ、さて修業者の所爲と想定する、叙法の順序が自然である。

薄暗い堂内の局で青鈍の見えるのは、流石に畫だ。「はたばりたる」は、仕立おろしのピンと張つたのをいふので、衣幅の廣いのではない。とにかく青鈍の指貫に白衣は、所謂淨衣姿で、參詣についての本支度であり、人達が介錯してゐる様子も、そのよき人である事が證され、額など少しつく態度も、その重重しさを思はせる。かうした旅先では、善惡につけ目に立ち易いので、奥ゆかしくも感じ、面白くも思はれることになる。

本尊様にも目もくれず、參籠の局のぞきや、むだ話に耽る若者が、えせ者に見えないとは、その理由が殆どわからぬ。想ふに信心にも、例の遊樂氣分は附いてまはつて、色々な物が珍しかったり、面白かつたり、ゆかしかつたりして居るうちに、何時か興味偏重の窩寶に陥つて、到頭様子いいの、が、事となつてしまつたのだらう。

さあこの餘波は延いて、遊山的信心詣の一項が、こゝに展開された。しかし一方には、冒頭の正月の寺籠りに、雪霰の降るのが面白いといつた文脈を承けたのである。二三月の交のお花見かた／＼の寺籠りは、一寸洒落れてゐる。花やかな色目の着物を着た、品のいい、若人達は、必ず相應な身柄の者であるらしい。指貫の括をあけたのは歩き支度である。供には三大夫をはじめ小舎人童に至るまで、醜くない

のを揃へ、行粧に花を盡しての参詣は、所柄人目に立つ譯である。又それがこの人達の本望であつた。まあ彼岸参の氣分と大差はない。でも堂前の鰐口を叩くのは、流石に信心らしい。それは今日の参詣者が、常習的に叩くのよりも、更に有意味であつたからで、

令打百箇寺金鼓、依夢不吉。(小右記、長保元年七月) 令打百寺金鼓。蓮新阿闍梨、同法禪師相共、日中打了各五十箇寺、闍梨親步行、志之甚矣。(同、九月)

などあるのを参考せねばならぬ。

旅先で知人に逢ふことは、互に嬉しい事だのに、向ふは氣が付かず、素通りしてしまふのは、流石に物足らぬ感じがする。それが又面白いといふ。何でも興味本位で、解決をつけてしまふ。聲でも懸けようかと思ふのは、例の物好から出た、清少の何時も起す心的状態である。何清少ばかりでもない。この時分の人は、大抵人なつかしい、かうした氣分をもつて居た。

「かやうにて」から以下は、上來の記事に對する結論である。一體旅や遊行に好伴侶を要することは、いはゆる「思ふどち春の山邊にうちむれてそこもいはぬ旅寢してしが」(素性)で、先人の既に道破してゐることである。召使でも話のわかる人間もあらうが、同じ顔では、第一氣が變らぬからをかしくない、男を引合にして、自説の證人にしたのは狡猾である。

平安時代の作物に、寺社参籠の記事は、非常に多い。けれどもこの文のやうな大文字は、更がない。長谷参詣の記事も、亦非常に多い。けれどもこの文のやうな描寫の精細を極めた妙筆は、更がない。只叙事が精細といふだけではない。全く深い感銘をもつて書いてゐる。だから一言一句も、深い印象を讀者の胸裏に貽さすには置かぬ。

○

ころづきなきもの 祭、御祓など、すべて男の見る物見車に、只一人乗りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらむ。やむごとならずとも、わかき男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。すきかげに唯一人かくよひて、心ひとつにまもり居たらむよ。いかばかり心せば、けにくきならむとぞ覺ゆる。物へもいき、寺へもまうづる日の雨。使ふ人などの、「我をばおぼさず。某こそ只今時の人」などいふをほの聞きたる。人よりは少しくしと思ふ人の、おしはかり事うちし、すゝろなる物うらみし、われさかしがる。

この題目、下文(二百八十五段)にもありて、内容も、前半の物見車は、にくきもの(二十四段下)に、ほゞ同じきが見え、後半の物羨みの壁訴訟は、下文のと重複したり。さては獨立の意義なければ省きつ。

百四段

わびしげに見ゆるもの 六七月の午未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけて、ゆるがし行くもの。雨ふらぬ日張むしろしたる車。ふる日張むしろせぬも。年老いたる乞兒、いと寒きをりも、暑きにも。げす女のなりあしきが、子を貧ひたる。ちひさき板屋の黒うきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたくふる日、ちひさき馬に乗りて前驅したる人の、かうぶりもひしげ、袍も下襲もひとつになりたる。いかにわびしからむと見えたり。夏はされどよし。

(口譯) 不快げに見えるもの 六七月の正午から二時頃の暑い日盛に、きたならしい車に、つまらの牛をかけて、マクくゆくものはわびしげに見える。雨の降らない日に張篋をした車はわびしげに見える。

雨の降る日張筵をし、ない車もわびしげに見えぬ。年寄つた乞食、わびしげに見えぬ。大層寒い折でも暑い時でもさ。賤しい女の身形の悪いのが、子を背負つてゐる、小い板屋のよごれてきたらしいのが、雨に濡れてゐる、などはわびしげに見える。雨のひどく降る日、小い馬に乗つて先供してゐる人の冠もひしやげ、袍も下襲も一つにくつ付いたのは、どんなにわびしからうと見え、た。けれど夏は却つて涼しさうでよい。



わびしげに見ゆるもの也を略けり。

評 わるい車や牛は、盛夏の眩い日光にあつては、一層そのきたなさが引立つ。「ゆるがしゆく」は口の方がわるい。車に天氣の日に張筵するのは、忌服のある場合で、雨降に張らないのは俄雨だからである。理由はともあれ、見た目はたしかにわるい。

寒暑に苦む老乞食、子をおぶつた下衆女、雨にあつた古い板屋、感じはいづれもよくない。

主人は乗車で、他の従者は徒立だから自立たぬが、前驅がけちな瘦馬で、雨にグシャ／＼になつた装束を着た態は、甚だ見窄らしい。上文に「先につとまもられゆく者、きたなけなるは心憂し」とあるに吻合してゐる。そのうへ冠も装束も、ピンと強張つたのを立派として、烏羽朝の漆塗の冠帽や如木の袍衣に變化しゆく道程にあつた時代だから、この有様は殊に情無く感じたらう。「夏はされどよし」の一句の反

撥は、變化があつて面白い。

百五段

あつげなるもの 隨身の長の狩衣。のふの袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪おほかる。琴の袋。六七月のずほふの阿闍梨。日中の時など行ふ。又、おなじころの銅のかぢ。

(口譯) 暑さうなもの 隨身の長の狩衣、衲の袈裟、出居の少將、非常に肥つた人の髪の毛の澤山ある、琴の袋、六七月頃の祈禱をする阿闍梨が、正午の勤行などする、又おなじ時分の銅の鍛冶、いづれも暑さうである。

釋 ○隨身の長 衛府の長なり。雑色の長とも杳取の官人とも稱し、本府の隨身これを勤む。大將を兼ねざる大臣及び大納言以下の人、これを具す。節會の日は褐の衣冠、平生は狩衣即ち布衣、平禮烏帽子、淺黄の指貫、腰帶、太刀、壺胡篋、弓、淺履なる由、袞華蓋葉、愚童訓等に見ゆ。○のふの袈裟 「のふ」は衲にて、補綴の義なり。法體裝束抄に平袈裟、衲袈裟、甲袈裟と並べ擧げて、衲袈裟の條に、「甲も綴も色々同じからず、又綾織物文等同じからず。九條歟。法服の時之を懸く」とあり。「袈裟」は梵語にて、不正色染又は古壞色と釋し、世人の棄てて用ゐざる布片を取り、補綴して作る。故に衲袈裟又は糞掃衣とも呼ぶ。後には殊に高貴なる織物を厚く縫綴りて、衲袈裟と名づけ、普通の袈裟と區別したり。○出居の少將 「出居」は、朝廷にて射儀や相撲などの儀式の時に、庭上に臨時に設くる座をいふ。この座に就きて威儀を立つる近衛の少將を、出居の少將又出居の介といひ、その侍従をば出居の侍従といふ。江次第相撲召合に「次左右出居、少將各一人、褰幔著、出居座(縫掖、蒔繪劍)、衛門兵衛無、出居、云々」。

○琴の袋 琴の袋は錦、金襴などの厚織物にてつくるを例とす。○ずほふ 修法なり。佛教にて、加持

祈禱する法式をいふ。本尊の前に壇を構へ、口に眞言を唱へ、手に印契を結び、心に佛菩薩の相を觀す。祈禱は大別して息災、延命、增益、敬愛、鉤召、降伏の五種とす。○阿闍梨 アザリ。アジャリ。梵語なり。軌範師又は正行と譯す。祕密眞言の解行勝れたる者の學位とも稱すべきものにして、天台宗にては金胎蘇三部、眞言宗にては金胎兩部の大法を受得したる者を、傳法灌頂大阿闍梨位といひて、極位とす。○阿闍梨の下、がを略けり。○日中の時など行ふ 晝夜六時のうち、正午の勤行するをいふ。○銅のかち 「かち」はかぬちの略にて、金打の義。鍛冶の誤讀にあらねど、事は相通す。

■ 弓矢を帶して武裝してゐる隨身の長の狩衣が、袷の布衣では暑からう。出居の座は殿上の簀子なども設けるが、こゝは庭上の場合をいつたもので、江次第の褰幔云々とあるのでわかる。おなじ出居でも、侍従などは文官の服裝だから、何でもないが、近衛の少將は、弓箭兵仗の武裝をして、そこに著座するので、天日に照付けられて暑さうなのである。

衲の袈裟や琴の袋は地厚な爲、暑苦しさうなのである。太り肉の多髪は女の様らしい。男ならば肥えたる男と書くべきである。これは髪ゆるさけな爲、暑さうに感ずるので、この段中での面白い觀察である。陰曆の六七月は暑い頂上である。その日中に護摩を焚いて、火掛りをしながらの修法は、無論あつた。

銅のかちは金梳やその他の銅細工をするのをいふので、黄金や白銀は貴金屬だから、仕事が細かく、吹革の音も大して立たないが、銅細工では比較的大袈裟なので、盛に炭火をおこして、ガチャン／＼、夏の日盛に叩き立てるのは、實際暑苦しい。鐵とても熱かるべけれど、赤金の名のあつげに聞ゆる也」といふ説は牽強である。荒々しい下等な鐵工場などは、清少の見聞の範圍外である。

この段暑けなるものとあつて、皆客觀的の感想である。そこで「いみじく肥えたる人の髪多かる」から想像すると、清少はさうひどくは肥えず、髪も大して澤山では無かつたと見える。上文梅壺の段にも、「髪などもわがにはあらねばや、處々わな、き散りばひて」とあつて、短かつたらしい。下文、積善寺供養の段では、髪を入れてゐることが書いてある。

百六段

はづかしきもの 男の心のうち。いざとき夜居の僧。みそか盜人のさるべき限に隠れ居て見るらむを、誰かは知らむ。暗きまざれに、懷に物引き入るゝもあらむかし。それはおなじ心に、をかしと思ふらむ。夜居の僧は、いとはづかしきものなり。若き人の集まりては、人のうへをいひ笑ひ、そしり悪みもするを、つく／＼と聞き集むる、心のうちもはづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前ちかき人々の、物けしきばみいふを聞き入れず、いひ／＼てのはては、うち解けてねぬるのもはづかし。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし憑むるこそはづかしけれ。まして情あり 好ましき人に知られたるなどは、おろかなりと思ふべくもてなさずかし。心のうちにのみもあらず、又みな、これが事はかれに語り、かれが事はこれにいひ聞かすべかめるを、わが事をば知らで、かく語るをば、こよなきなめりと、思ひやすらむと思ふこそはづかし

(口譯) きまりの悪いもの 男の心の中、眼ざとい夜居の僧、こそこそ泥坊が、相當な物陰に隠れてゐて見てをらうのを、誰か気が付かうか、悪い人などは、暗まざれに懷中に人の物を取込むのもあるだらう。それはおなじ根性から、泥坊は面白と思ふかも知れない。夜居の僧は甚だ恥かしいものである。若い女房が集つては、人のうへを噂して笑ひ識り憎みなどもするのを、つく／＼と一々聞取る、その心中も恥かしい。「まあいやな、喧

しいなど、主人の御前近く詰めてゐる老女達が、腹立氣味にいふを聞きも入れないで、散々喋舌つた擧句は、打解けて寢てしまつた後までも恥かしい。男は心の中で、疎ましく思ふやうでもなく、齒痒く氣にくはぬ事があると思つても、顔をあはせては、その女をだまして頼りにさせるのが恥かしい。まして情深い好いたらしい人と、一般に知られた男などは、思ひ方が疎略である、女の氣の付きさうにも扱はないさ。心の中に思ふばかりでもなく、口に出して、この女の缺點は他の女に話し、他の女の缺點はこの女に話し聞かせるやうであるのに、女は自分の缺點を、男が他

(考異) ○見るらむの上、原本いかにの語あり。抄本による。

○男の心のうち 抄本には「色好む男の心のうち」とあり。男の心中を想像して恥かしく思ふなり。その理由は下に述べたり。○いざとき 寐敏きにて、眠の覺め易きをいふ。抄本には「いさぎよき」とあり。○夜居の僧 人の家に往き、終夜加持する僧をいふ。禁中にては清涼殿の二間に候し、聖體を護持する故に、護持僧又は御持僧ともいふ。禁秘抄、御持僧の條に「東寺、一長者多候、夜居、又山、寺、各一人」と見ゆ。○みそかぬす人 窃盜なり。「みそか」はひそかに同じ。○さるべき限 相當したる物陰なり。○それは同じ心に云々 「それは」は人の物引入る、をさす。「同じ心云々」は盜人が同じ根性から面白く思ふらんかと也。「それは」の下、盜人のを補ひて聞くべし。○わかき人 「人」は女房をいへり。○つくづくと聞き集むる云々 いろ／＼の話を熱々と皆聞取る、夜居の僧の心の中も恥かしく也。○御前近き人 主人の御寢間ちかく侍ふ人々なり。○けしきばみいふ 氣色に現して咎めいふと也。諸註、夜居の僧の間居ることを様子に見せてと解けるは誤。○聞き入れず 若き人がなり。○いひ／＼てのはてはいひ募りたる果はとなり。○うちとけて寢ぬるのちも 心ゆるして横になりたる後も、夜居の僧が定め

の女に話すとも知らないで、現在かう他の女の缺點を話し、他の女の聞いては、他の女よりも自分が最もよく男に思はれてゐるのだらうと、女が自惚れて思ふだらうかと、男が馬鹿にして思ふのが恥かしい。それがいやもう二度と逢ふまいと見限つた男に逢へば、心なしの者らしいと見られても恥かしくもないものぞよ。女の至極あはれに氣の毒げに見捨てにくい事などなば、男は少しも何とも思はないで見捨てゐるのも、どういふ料簡かと思はれて呆れ返る。その癖人の上を非難し、口達者に理窟をいふよ。そして格別頼になる身寄もない奉公人などないひ寄つて、その女の身重に

○聞居たりしならんと思はれて恥かしく也。諸註、打解けたる寢姿を見られはせずと思はれて恥かしくと解けるは非。○男はうたて云々 男は「さし向ひたる人を、うたて思ふさまならず、もどかしう心づきな事ありと見れど」とあるべきを、前後にいへり。男は目の前に居る女を、心の中には厭に、思ふやうにもあらず、齒痒く氣にくはぬ事ありと思へどと也。○すかし憑むるこそ云々 さあらぬ風に旨くだまして、頼りにさすることが恥かしく也。「憑むる」は頼ますること。○まして 普通の男すらさやうに女をすかし頼むるにましてと也。○なさけあり好ましき人に知られたるなどは 人愛ありて、好色人と世に知られたる男などはと也。「人」は人としての意。○おろかなりと云々 思ひやうの疎かなりと、女の氣付きさうにも取なさすと也。○心のうちにのみもあらず 心の中にてさやうにもてなすかすのみにあらずと也。○これが事は彼に云々 この女の事は彼の女にあし様に語り、彼の女の事はこの女にあし様にいひ聞かすやうなるをと也。○わが事をば知らで云々 女が餘所にてはわが事をばあし様にいはる、を知らで、目のあたりかく外の女をあし様に男の語るをば、男が自分を思ふことは外の女よりも勝れるやうなりと、自惚に思ふならんかと、男の思ふが恥かしく也。○いであはれ「いで」は發語、「あはれ」は歎辭。○また逢はじと思ふ人 「人」は男をいふ。○心もなき者なめりと見えて、男に心なしの女のやうに見られてと也。○いみじくあはれに云々 女の極めて衰に氣の毒に見棄てにくき有様などを、男は見棄てて、すこしも何とも思はぬも、如何なる無情の心ぞと思はれて淺ましと也。「心ぞ」は心なるぞの略。○さすがに人のうへをばもどき物をいとよくいふよ さやうに無情の男ながら、他の男のうへをば非難し、大層立派なる口を利くことよと也。○たのもしき人 頼になる人にて、こゝは親兄弟などの後見者をいふ。以下無情なる男のさまなり。○たいにもあらず 只の身にもあらずと也。懷妊したるをいふ。○知らで こゝは領らでの意にて、構はぬをいふ。

なつた有様などを構はないで、振捨ててしまふよ。

■あながちな盗人を持出したのは、一寸奇矯のやうだか、清少の生活は、宮廷内の共同生活だつたから、今日でも、寄宿舎や下宿などで、紛失物が多いと同様の事情に由るものだらう。本文のやうな滑稽事實は、落語などでもよくやることで、お仲間と思ふだらうの想像が可笑しい。しかし手證を見られては、これは恥かしい。「若き人の集りて云々」は、清少の經歷から推すと、中宮の御殿での事と見える。夜居の僧の詰所の御佛間即ち二間と、女房が詰めてゐる廂の間とは隣り合つてゐるから、こちらの話は向へ筒拔である。睡がり屋ならとにかく、目敏い夜居の僧では、厭が應でもこの話が耳にはひる。キマリの悪い譯である。してお前近く侍ふ大人女房の小言もあるのだから、黙つて居たらよさうなのに、喋舌りくたびれる程喋舌つて、その癖「寝ぬるのちもはづかし」は自家撞着である。そこに興に乗つては、ついでに理性を置去にしてしまふ、若い人達の血の氣の多い態度が、よく現れてゐる。

男の心の中は、すべて女の立場からの批評で、にくきものの段(二十四段)で、曉起の男の態度を委しく描寫したのは、この注脚とすることが出来る。参照すると、いよ／＼面白い。ほんに女を籠絡する手腕に、入神の技を具へた先生達となつては、うっかり尻尾を出すやうなことは、決してせぬ。源氏物語の光君の態度などは、この道の理想であるが、事實としては、藤原兼家が道綱の母を繰縦した具合など、實は齒痒いやうである。往く先々御機嫌取に、外の女の悪口をいつて廻つて、術策を弄するのを、高處から冷眼に視たら可笑しなものだらう。いつそ赤の他人の氣になれば、キマリの悪いこともないとは、人情を穿つた言である。

抑も、義理も人情も糸瓜の皮と女を棄てるのは、この時代には珍しからぬ事で、一勿論よい事とはせぬが、男から女の家に通ふのだから、往くの止めさへすれば、そのまゝ縁切となつてしまふ。別に縁切の必要もない。あまり離婚が世話なしたから、女はミジメなものであら、そしてわが事は棚に上げ、立派な口を利く男は、「さすがに人の上をばもどき、物をいとよくいふよ」の冷語をあげせ掛けられて、流汗三斗の思はしたであらう。

後見する親兄弟もない、可愛さうな奉公人などを、孕ましたま、逃けてしまふ。今日のやうに、弱者を保護する、完全な法律のない時代だから、分婉から産兒養育の費用や世話は、悉く女の負擔で、棄てられた上にえらい泣を見る。これでは男を呪はずには居られまい。しかし男からいへば、女もまた貞操堅固な者ばかりではない。澤山男を通して鞘當をおこさせる。源氏の木枯の女のやうなものもある。亭主を嫌つて逃隠れのはて、奉公に出てしまつた大和宣旨のやうなものもある。對手嫌はずの浮れ女といはれた和泉式部のやうなものもある。お互に始から一人を守つて添遂けたのは、落窪の少將と落窪の君位のもので、まづ少い。

百七段

むとくなるもの 潮干の濁なる大きな船。髪みじかき人の、かづらとりおろして髪けづるほど。大きな木の風に吹きたふされて、根をさゞげてよこたはれふせ。相撲のまけて入るうしろ手。えせ者の從者かんがふる。翁のもとづりはなちたる。人の妻などの、すゞるなる物怨じして隠れたるを、必ず尋ねさわがむものと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心と出てきたる。狛犬しく舞ふもの、おもしろがりはやり出ててをどる

(口譯) 形なしなもの 潮の干潟にある大きな船 髪の毛の短い人が髪を取はづして髪を梳く時、大きな木が風に吹倒されて根をもろめて横になつてゐる、相撲取の負けて引込む後姿、威勢もない詰らぬ者が、家

足音

來を叱責する、老人が烏帽子を脱いで髪を出してゐる、人の妻などがむやみな嫉妬をおこして身を隠したのを、夫が必ず尋ね騒ぐだらうと思つたのに、さうも思つてもぬす、くやしいやうに暢氣にして居るに、妻はさう家を出しても居られないので、自分の心から思ひ返して歸つてくる、狛犬めいて舞ふ者が、面白がつて調子に乗つて躍る足音、いづれもむとくである。

釋 ○むとく 無徳の字音。品位のなくなりたるさまをいふ。立派に見えたるものなどの、見ざまわるくなれるをもいふ。俗の形ナシの語、これに當るか。源臣が「様あしけにの意」と解けるはいまだし。○かづら取りおろして「かづら」は即ちかもじなり。添髪をいふ。「取りおろして」は取放つをいふ。柳のかづらを見よ。○横たはれ 横たはりの轉語。○相撲 スマヒ。王朝時代禁中にありし相撲の節の相撲取なり。相撲の節とは年中行事歌合の註に、「諸國の供御人を召集めて、七月に相撲の節を行ひて、天子御覽する也。云々」。初日は内取とて、左方同志、右方同志の勝負あり、次日は節會の當日にて、召合とて、左右の勝負を決せしめ、翌日は拔出とて召合に勝ちたる者を、更に決勝せしむ。○うしろで 後姿、後つきなり。○從者かんがふる 從者を勧ふると也。「勧ふるは叱るをいふ。かんがへて見よ。○もといり放ちたる「鬘放つ」とは頭髮をむき出しにするをいふ。冠も烏帽子もかぶらぬ様



(卷繪の撲相) 撲 相



(卷繪事行中年) 舞 子 獅

をいふならんといへど、狛犬は雅樂の舞なれば、「はやりいでて踊る」とあるにかなはず。獅子狛犬を見よ。○はやりいでてをどる 輿に乗じて夢中になりて躍ると也。

ゆたのたゆたに思ひ憑まれた大船だけに、干瀉にへばり著いたさまは形なしである。房々と見えたのは實は入毛で、髪を解くと牛の尻尾のやうな地髪が出たのは形なしである。殊に髪を長いのを美人とした時代だから、この感じは剗切であつたらう。大木だけに、その根こぎになつた様は形なしである。連

なり。○人のめ「め」は妻なり。「人の」は添へていへる語。○物怨じ 嫉妬するをいふ。○尋ねさわがむ 夫がなり。○さしもあらずの上、夫がを略けり。○ねたけにもてなしなるに妻に取りてはくやしきやうに振舞ひて居たるにと也。○さても云々 妻がなり。○旅立ち 家出しと也。一夜にても餘所に泊るを、古へは旅といへり。○心と出できたる 自分の心から歸りきたると也。○こま犬しくまふ 和名抄の曲調類、高麗樂曲の中に、狛犬とてあり。この雅樂の狛犬の舞めきて舞ふとなり。即ち獅子舞のことなるべし。獅子狛犬は同物なり。狛犬の舞を直に獅子舞のこととする説は非なり。また豊穎は「しく」はし、にて狛犬と獅子との舞

年大風が吹いて、堂舎の轉覆まであつた頃とて、これは屢實見したものだらう。

相撲は王侍從(宇多帝)と業平とが、殿上で取つたやうな、ひよろ／＼したのではなく、例年七月にある上覧相撲である。鬼とも組みさうな最手^{まて}拔手が負けて、しほしほと引込む後姿は形なしである。

いくら威勢がない主人でも、平生は主人の權式で通るが、いざ勘當などといふ場合には、一向睨が利かないので形はない。男が人前での素頭は大失禮とした時代、まして老人の禿頭では、愛想が盡きるほど形なしである。しかし清少はこれをいつては、親の元輔に濟むまい。元輔は内藏助の時、賀茂祭の内藏使を勤めて一條の大路を渡る時、落馬して冠を落し、失笑の種を蒔いた男である。今昔物語に、

年老いたる者の馬より落ちたれば、物見る君達いとほしと見るほどに、元輔いと疾く起きぬ。冠は落ちにければ、誓つゆなし。笠を被たるやう也。殿上人の車の許に歩み寄る。夕日のさしたるに、頭は爛々とあり。いたく見苦しき事限なし。大路の者市を成して、見嚙り走りさわぐ。云々。

夫婦間の葛藤から女の家出は、やたらあつた事で、源氏、帚木の巻に、

心ひとつに思ひあまる時は、いはむ方なくすこ言の葉、あはれなる歌を詠置き、忍ばるべき記念をとめて、深き山里世ばなれたる海づらなどに這ひ隠れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いと哀に悲しく心深き事かなと、涙をさへなむ落し侍りし。云々。

とあるのも同じ事情である。これを藤式部丞は、「輕々しく殊更びたること」と批評してゐる。まして本心からでなく、只男を脅威するつもりでの家出に、男が度胸をすゑて構はぬとなつては、こゝ引込がつかない。仕方がなしに、始の擬勢何處へやらで、す／＼戻つてくる。甚ださまがわるい。

獅子舞がはじめのうちは神妙に、雅樂の拍大らしく、しとやかに舞ふが、調子に乗つてくると、前足後足のおほ勢が、ドコ／＼足踏して躍るのが卑しく騒がしく、お座が醒める、獅子舞のことは、江次第、興

福寺供養記、園大曆などにも見えてゐる。著聞集に、

かの失せたる御衣をかづきて、さきをば法師、あとをば敷島とて、待賢門院の曹司なりける者がづきて、獅子を舞ひて参りたりける。

で、大抵の様子がわからう。今もあるのと似たものである。

百八段

修法は 佛眼眞言など讀み奉りたる、なまめかしうたふとほし。

(口譯) 祈禱の法は、佛眼眞言などを讀み奉つたのが、優美で尊い。

○修法 ずほふを見よ。○佛眼眞言 「佛眼」は一切佛眼大金刚吉祥一切佛母尊の略。單に佛母尊ともいふ。大日如來の變化身とぞ。佛眼の修法は、この佛母尊に對して、



息災延命等を祈る法なり。「眞言」は眞實言説の謂にして、大日如來三密中の語密に屬す。大日如來自らの眷屬の爲に、如義眞實の語を以て説き給ふものとす。即ち陀羅尼なり。「佛眼の眞言」は、この本尊特有の咒文にして、南謨三曼陀勃伽南唵陀囉嚩尼索訶といふ。

僧正おおくびの緋の衣か何かで、密僧が護摩を焚上げながら、本尊の眞言を唱へたのは、何だか修法に威嚇性を帯びた氣がして恐ろしく、とても批判の餘裕などあるものではない。しかしそれが馴れつこになつてしまふと、やはり何でもないと見えて、佛眼眞言になまめかしさを發見することにもなる。この佛は一切諸佛菩薩の功德をすぶる意からして、佛母の稱があるので、女相を現じてゐる。そこがなまめかしく尊いところだらう。

百九段

はしたなきもの こと人を呼ぶに、われかとしてさし出でたるもの、まして物取らす
る折はいとゞ。おのづから人のうへなど、うちいひ誇りなどもしたるを、をさなき
人の聞き取りて、その人のある前にいひ出でたる。哀なる事など、人のいひてうち
泣くに、げにいと哀とは聞きながら、涙のふと出でこぬ、いとはしたなし。泣顔つ
くり、けしきことになせど、いとかひなし。めてたき事を聞くには、又すゞろに、
只いできこそ出でくれ。

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御棧敷のあなたに、御輿をとゞめて、御消息
申させ給ひしなど、いみじくめてたく、さばかりの御有様にて、かしこまり申させ
給ふが、世に知らずいみじきに、まことにこぼるれば、化粧じたる顔も皆あらはれ
て、いかに見苦しがるらむ。宣旨の御使にて、齊信の宰相中將の、御棧敷に参り給ひ
しこそ、いとをかしう見えしか。たゞ隨身四人いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほ
そうしたてたるばかりして、二條の大路廣う清らにめてたきに、馬をうちはやして
急ぎ参りて、少し遠くよりおりて、そばの御簾の前にさぶらひ給ひし。院の別當ぞ
申し給ひし。御かへし承りて、又走らせ歸りまわり給ひて、御輿のもとにて奏し給

(口譯)
間のわるいもの、外
の人を呼ぶのに、自
分かと思つて顔を出
したものが、聞か
る。まして物を呉
れる場合には、愈
間がわるい。人のう
へなどを自然噂して
訝りなどしたのを、
幼い子供が耳にして
ゐて、その訝られた
人の前で、その事を
いひ出したのは、聞
かゝる。哀な事な
ど人が話し出して泣
くのに、ほんに大層
哀などは聞きなが
ら、涙がひよつと
出でこないので、甚
だ間がわるい。泣顔
をこしらへ、様子を
變へるけれど、その
効なく涙が出てこな
い。めてたい事を聞
く時には、又やたら

ひしほど、いふもおろかなりや、さてうち渡らせ給ふを、見奉らせ給ふらむ女院の
御心、思ひやり参らするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには、長泣をして
笑はるゝぞかし。よろしききはの人だに、なほ子のよきはめてたきものを、かうだ
に思ひ参らするもかしこしや。

(考異) ○女院の 原本の文字なし。旁本による。○子のよきは 原本このよにはとあり。古本による。

○はしたなき 半なる意、なきは形容の語尾。俗の半端、半間などいふに近し。○我がとて 呼ばる
るは我がと思ひてと也。○さし出でたる者、いとゞ。いひ出でたる の下、いづれもはしたなしを略け
り。○かひなし 涙の出でこねばなり。○たゞ出できこそ 涙がなり。○八幡の行幸云々 一條帝の
石清水八幡社参詣の御還幸にと也。○女院 ニョウキン。天皇の御母准母内親王等の、上皇に准じて院
號を蒙れるを稱す。こゝは一條帝の御母なる東三條院藤原詮子のこと。○詮子 關白藤原兼家の女に
て、圓融帝の世の梅壺の女御たり。一條帝踐祚するに及び、御生母たるを以て皇太后となり、正暦二年
九月尼となりて、東三條院の號を受く。女院の嚆矢とす。長徳三年閏十二月崩す。御年四十。○御輿
こゝは菟花輦にて、鳳輦にあらず。神事又は普通の行幸に乗御せらる。なきの花を見よ。(附圖參照)
○御消息申させ給ひし 主上が御挨拶の爲に御便りあらせられしと也。○さばかりの御有様にて 天子
ともあるさ程の尊き御身分にてと也。○かしこまり申させ給ふ 敬意を表せらるゝと也。○こぼるれば
涙がなり。○あらはれて 洗はれてと也。○宣旨の御使 天子の仰言を傳ふる御使。「宣旨」はセン
ジと讀む。勅旨を宣傳する義。○御棧敷に 女院のなり。○たゞ隨身 の上、齊信はを略けり。○馬ぞ

に涙がとめどなく出
てくる。
主上が八幡の行幸か
ら還御なさる時に、
御母女院の御棧敷の
彼方に、御輿をとゞ
めて、御機嫌伺のた
りなさいましたな
どは、非常にめてた
く、天子ほどの尊い
御有様で、敬意を盡
されるのが、世に類
なく甚だめでたいの
で、眞に涙がこぼれ
るから、化粧した顔
も皆涙に洗はれて、
どんなにか見苦しい
ことだらう。勅使と
して齊信の宰相中將
が、女院の御棧敷に
参られたのは、大層
面白く見えた。たゞ
隨身四人の大層着飾
りたのと、馬副の男
のすつきりと扮装つ
ただけで、二條の
大路の廣く綺麗で立
派な通りな、馬を乗
立て、急いで参つ

御棧敷の少し遠くから馬をおりて、御棧敷脇の御簾の御前に祇候なされた。その御口上を女院の別當が取次いで申上げられた。御返事を承つて、齊信が又馬を走らせて歸つて参られて、主上の御輿のきはで、御返事を奏上された時の様子は、めでたいなどいふも一通りの事よ。そして主上が御通御になるのを御覽遊ばされる、女院の御心中を、御推量申上げる時は、自分まで嬉しくて飛上りさうに思はれた。さうした事には、長泣をして笑はれるぞよ。普通の身分の人でさへも、やはり子のよいはめてたいものを、女院が天子をお手様に持つて居られるのは、どんなにめで

ひ 馬副にて、公卿の乗馬に附添ひゆく従者。行幸啓祭使などの時、公卿これを召具す。物具裝束抄に「人数は大納言十人、大納言八人、中納言六人、参議四人、祭使八人、服装は冠(卷纒)、綵、襦衣、袴、相(結構時着之)、單(同上)、布帶、裳脛巾舌地」とあり。○さうぞきたる「ばかりして」に續く。○ほそらしたてたる 花奢に瘦ぎする様子をいふ。○馬をうちはやし「はやし」は令榮の義なれば、馬をあふり立つるをいふ。古本には、はやめとあり。○遠くより云々 女院の御棧敷の遠くより馬をおりてと也。○そばの 脇手のなり。女院の御目通りならぬ方なり。○さぶらひ給ひし の下、よの歎辭を略けり。○院の別當 女院の廳の別當。院中の事を總理する長官なり。上皇の院中には別當三三人ありて、公卿及び殿上人より選任す。女院も略同様なるべし。○申し給ひし 宣旨を取次ぎ申し給ひしと也。○御返し承りて 齊信が女院の御返事を承りてと也。○はしらせ 馬をなり。○奏し給ひし 女院の御返事をなり。○いふも めでたしといふもの略。○うち渡らせ給ふを 主上の御輿が棧敷前を通御せさせ給ふをと也。○女院の御心 の下、「よき御子をもちたるをば、いかに嬉しく思ひ給ふらむ」を補ひて聞くべし。○飛びたちぬべし 嬉しさに雀躍しさうなりと也。○よろしききは 普通の身分。「よろし」は例の可成の意。○子のよきは云々 子の良きは結構なるものをと也。○かうだに云々 上の「女院の御心思ひやり参らするは、云々」とあるをさす。○かしこしや 尊貴の御心中を忖度したるを、畏れ多しよといへる也。

藤馬の允と呼ぶに、あらぬ由なき者が、ハイと出て來たのは、歌なら傍題の格で、全く半間で具合がわるい。それが物呉れる場合では、今更引込ましもならず、いよく始末にいかぬ。わがした悪口をその當人の前で、子供が素破抜いては、ホンに顔から火の出る譯で、人前を繕つても、美しく美しくと心掛けた當時の人情では、どんなにかはしたない思がしただらう。愁歎場に涙の出ないのや、おめでたの席に涙の出るのを苦にするなどは、流石に神經質な婦人の持前が見える。實際宮仕する者は、社交的に泣きも笑ひもする機會も多からうが、また随分心から、さう思ひ込む場合も多からう。さてめでたき事にこぼれる感涙は、八幡の行幸の一章を生む前提である。

一條帝の八幡の行幸は、この十年間では、永延元年と長徳元年との二回である。永延の時は、母后がまだ皇太后の尊號でゐられた時代だから、本文に女院とあるのに慥はない。だから後度の長徳元年の行幸と定める。齊信は永延の時は左京大夫だから、宣旨の御使に立つ譯もないが、長徳の時は藏人頭の中將だから、その職掌柄、御使に立つた筈である。但本文に宰相とある。これは長徳二年四月の任官であるが、それは、この本文が起草された時分の官職だらう。(主上御年十六、女院三十四、齊信二十九)

一體棧敷は物見の爲に、臨時に懸けられたものだが、随分綺麗を盡して、殆ど半永久的にも造られ、これを棧敷屋といつて、土居から少し高く床を構へ、簾を懸け渡し、欄干を前に結つて、木や竹や草花などを植ゑて、風流を添へたものである。當時は上行幸啓から始めて、下は國司の罷申まで、貴賤を通じて、その路次の行粧を睹ることを唯一の行樂とし、語草としたもので、女院は殊に御親子の情を兼ねての御見物であらせられた。この年の八幡行幸は、十月廿一日の御發程で、翌廿二日の御還幸であつた。女院の御棧敷手前に乗輿をとめ、御機嫌伺の勅使を立てて、父母無し尊貴を以て、なほ親子の禮をお盡し遊ばされる。一體一條帝は御氣質が温順で、御幼沖から、非常な御孝行なお方と拜察される。御父圓融上皇御在世中は、朝覲おこたりなく、それ以後は、母后の御機嫌伺に詣で給ふこと殆ど連年で、外戚藤原氏の強盛は、母后の勢威を一層強からしめたことは事實であるが、帝の一生の御事蹟を通じて見ると、やはり人情にお篤い方であらせられた。この人情美の發露を拜見しては、假令清少でなくとも、心ある者は泣かずには居られない。

てたい事かと、かうお察し申上げるのも勿體ない事である。

宣旨の御使の一章は、上の「御消息申させ給ひし」を、更に具象的に詳敘したもので、別の事ではない。還幸の御道筋は、淀を渡つて、羅城門から朱雀大路を北へ、二條の大路に出るのである。この大路は宮城前の横通りだから、外よりも広い道幅で、十七丈もあつた。殊に今日は御還幸といふので、京職から人が出て、飽くまで綺麗に、掃除を行届かせてある。總體に人拂をして、森嚴な氣が充渡つてゐる處を、例の美男の風流才子頭中將齊信が、隨身まで綺麗びやかに飾り立てさせて、勅使として馬を乗立ててくる。女院の御棧敷に寄つて、院司の別當を通じて使命を宣べ、さてその御返事を、主上の御輿の際で奏上する。衆人環視の中に立居振舞ふその閑雅な容止は、蓋し見物である。殊に中宮方の人々に取つて、この感じの深い理由は、既に「返る年の」段で評して置いた。當時の記録に、

長徳元年十月廿二日、石清水行幸還御、於朱雀院東方女院御見物、右大臣被_レ事由奏、以頭中將齊信啓事由、被_レ許渡御前。(信經記及小右記)

とあるのは、本文の事實を證明するものである。但朱雀院の東方に女院の御車を立てたとある。すると二條大路は三條大路であるべきだ。或は寧ろ朱雀の大路の誤記と見る方が適當だらう。

この勅使の一齣は、わざわざ齊信の爲に裂いた挿話には相違ないが、なほ間接には、主上と女院との御關係のめでたさを映發させてゐる文字である。

「さて渡らせ給ふ」から、再び本文に立返つた。清少の思ひやり參らせた女院の御心とは、帝者の母として贏ち得た無上の光榮を、御満悦に思召されることと、御親子の御情愛とであるが、これに就いて、一寸注脚を要することがある。それは外でもない。さきくの賀茂、八幡、春日の御社參には、帝がまだ御幼年であつた爲、お後見かたぐ、女院は輦輿に御同乗なされたのである。然るにこの度は、正暦元年に御元服、即ち御成年式を擧げられてから始めての八幡詣で、立派な一本立の行幸であるのが、と

んなにか女院の御心に、ゆかしく思召されたであらう。棧敷打つて行啓なされる動機にも、かうした事情が潜在して居ることを思ふと、いよゝこの行幸を御覽になつた、女院の御嬉しさと御喜びとは、實に想像以上のものであつたらう。

はけしい感激を「とび立ちぬべく」の一語で象徴させ、歡喜の悲哀に長泣したといつてゐる。蓋しはじめの感涙は、主上の御孝情に洒いだ涙なので、後の長泣は、女院の御心の御満悦を想像し奉つての涙である。そしてはじめは、同車の人にかまりの悪い位の程度であつたものが、二度目には、人達には笑はれるに至つて極つた。

「よろしききはの人だに、云々」から以下は、自分の感激が生じた理由の説明であつて、前文の敘事を結束した文字である。

百十段

關白殿の黒戸より出でさせ給ふとて、女房の廊にひまなくさぶらふを、あないみじの御許たちや、翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらむ」と分け出でさせ給へば戸口に人々の、いろゝの袖口して、御簾を引き上げたるに、權大納言殿、御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いと物々しう清げによそほしげに、下襲のしりながく所せくさぶらひ給ふ。まづあなめてた、大納言ばかりの人に、沓を取らせ給ふよと見ゆ。山の井の大納言、そのつぎ、さらぬ人々、黒き物を引き散したるやうに、藤壺の

(口譯) 關白殿が黒戸から御歸りなさるといつて女房が廊にすき間なく祇候して居るのを御覽なされて「まあ美しい女房方よ。この老人をばどんなに馬鹿げてゐると、お笑ひなさるだらう」といつて、女房の

へいのもとより、登華殿の前まで居なみたるに、いとほそやかにいみじうなまめか
 して、御はかしなど引きつくるひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿の、清涼殿の前
 に立たせ給へれば、それは居させ給ふまじきなめりと見るほどに、少し歩み出でさ
 せ給へば、ふと居させ給ひしこそ、なほいかばかりの昔の御おこなひの程ならめと
 見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の、忌の日とて、くすしがり行ひ給ひし
 を、女房たべ、その珠數しばし。行ひてめでたき身にならむとか」とて、集まりて笑へ
 ど、なほいとこそめでたけれ。御前に聞しめして、佛になりたらむこそ、これより
 は勝らめ」とて、打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見参らす。大夫殿の居
 させ給へるを、かへすぐ聞ゆれば、例の思ふ人と笑はせ給ふ。ましてこの後の
 御ありさま見奉らせ給はましかば、ことわりと思しめされなまし。

○出でさせ給ふ 退出せらるること。○廊に 清涼殿の北廊になり。○さぶらふを 「わけ出で」にか
 かる。○あないみじのお許達や あ、美しき女房達よと也。「あなも」やも歎辭。○翁 道隆みづから
 若き女房達に對していふ語。○笑ひ給ふらむと の下、いひてを略けり。○戸口に 黒戸の戸口にてと
 なり。○人々の 女房達になり。○權大納言殿 伊周。○御沓 關白殿のなり。○いと物々しう云々
 これは權大納言殿の容體なり。淑景舎東宮に参り給ふ段にも、積善寺供養の段にも「大納言殿は物々し
 う清けに」とあり。關白殿の事としたる説もあれど、次にも「細やかになまめかしうて」といへると重複

ぬる中を撮分けてお
 出なさるので、黒戸
 の戸口にぬる女房達
 が、色々な美しい袖
 口を現して、御簾を
 上げると、權大納言
 殿が、御沓を執つて
 お穿かせ申上げる。
 權大納言殿は大層立
 派に美しく様子よ
 く、下襲の裾を長く
 あたり狭い程にして
 お出なさる。第一ま
 あ關白殿のめてたい
 事、大納言ほどの
 人に沓をお取らせな
 さることよと思はれ
 る。山の井の大納言
 その御弟達、又その
 外の人々が、黒い物
 を引散したやうに、
 藤壺の屏の際から、
 登華殿の前まで居並
 んでゐると、關白殿
 は大層御姿がすなり
 として、すつと優美
 て、御佩刀など取直
 して佇んでお出なさ
 るに、宮の大夫殿が、

し、且容體矛盾したれば取るべからず。○そのつぎ、その次々なり。山の井の大納言の弟達をいふ。
 ○さらぬ人々 兄弟ならぬ他人達なり。○黒き物を云々 當時の四位以上の袍色は黒なれば、しか見ゆ
 る也。○藤壺のへい 藤壺即ち飛香舎の屏なり。この屏は築垣にて、飛香舎の東面をかざる。○居なみ
 居並びなり。○いとほそやかに云々 關白殿がなり。○御はかし 「はかし」は令佩にて、佩刀の敬
 稱。○宮の大夫 中宮大夫の略。中宮職の長官なり。大進を見よ。「大夫殿」は道長なり。○道長 關白
 兼家の五男。正曆中大納言の大將たり。道隆道兼の二兄相ついで薨するや、その姉即ち一條帝の御母詮
 子（東三條院）に就いて強請し、内覽の臣となる。次いで右大臣氏長者となり、長徳二年兄道隆の子伊
 周及びその一黨卻けらるゝに及び、天下の權悉くその手中に歸す。左大臣を経て太政大臣となり、攝政
 關白たること再三。萬壽四年十二月薨す。年六十二。世に御堂關白と稱す。長女は一條中宮、二女は三
 條中宮、三女は後一條中宮、四女は敦良親王妃、五女は小一條院妃たり。長子頼通、次子教通、相次い
 で攝關となる。○それは居させ給ふまじ 「それは」は宮の大夫殿をさす。「居させ給ふまじ」は下座は
 し給ふまじと也。この居るに二様の方式あり。跪と蹲踞となり。跪を最敬禮とす。○すこし歩み出で
 關白殿がなり。○ふと居させ 宮の大夫がなり。○いかばかりの云々 如何程の前世の善行の程度なら
 ん、並一通りの善業にはあらざりしなるべしと也。○中納言の君 右兵衛督藤原忠君の女、和泉守時明
 の室なり。○忌の日とて 今日忌の日とての略。一般にわたる月六齋などの忌日なるべし。中納言の君
 自身の忌の日にはあらじ。○くすしがり行ひ 奇特らしくして勤行すること。「くすし」は奇しの義。○
 たべその數珠しばし その數珠、しばし給への轉置なり。「たべ」は給へなり。「しばし給へ」は即ち借用す
 ることになる。○行ひてめでたき身にならむとてか 殊勝らしく勤めてその利益にて、關白殿のやうに
 來世はめでたき身にならんと思ひてするかと也。○集まりて 女房達がなり。○なほいとこそめでたけ

清涼殿の前に立つて
 お出なさるから、あ
 の方は下座なさるま
 いと思つて見るうち
 に、關白殿が少し歩
 き出されると、大夫
 殿がひよつと下座な
 されたが、やはり關
 白殿は、どの位な前
 世の御善業の程合で
 あらう、一通りの御
 善業ではあるまい
 と、お見上げ申した
 のは、えらいもので
 あつた。中納言の君
 が今日は忌日だとい
 つて、奇特らしく修
 行なされてゐるのを
 「その珠數を暫くお
 よこしなさい。貴女
 は修行して關白殿の
 やうなめでたい身に
 ならうとするのかし
 といつて、女房達は
 集つて冷やかに笑
 ふが、やはり關白殿
 は大層めでたい。中
 宮がお聞きになつて
 「修行して佛に成る

のは、關白殿に成るよりは勝らう」と仰になつてお笑ひなされておると、又今度は中宮がめでたくなつて、お見上げ申してゐる。大夫殿が關白殿に下座なされた事を、再三申上げると、中宮は、「いつものお前の思ふ人だ」と仰になつて、お笑ひなさる。まして大夫殿の今後の榮えた有様を、中宮が御覽なさらうものなら、自分が今大夫殿の下座について、關白殿の御果報を驚き感じたのは、尤もであると思し召されるであらう。

枕草子評釋

れ。關白殿はやはり勝れてめでたしと也。○御前に聞し召して、女房達のかくいひあへるをなり。○これよりは、「これ」は關白殿をさす。○まためでたくなりて、又中宮の御うへのめでたくなりてと也。○例の思ふ人、清少の何時もの最負に思ふ人よと也。「人」は道長をさす。○まして、只今すらめでたきにましてと也。○この後の御有様云々、宮の崩御の後の大夫殿即ち道長の全盛なる御有様を、宮の御存命にて見給はんには、わが大夫殿の關白殿に下座したることをめでたく思ひしことを、尤もなりと思召さるゝならんと也。

道隆が攝政をやめて關白となつたのは正曆四年四月であり、伊周が權大納言から内大臣となつたのは正曆五年八月である。さればこの文は、正曆の四年四月から同五年八月までの間の出來事である。丁度その頃道長は大納言兼中宮大夫であつた。但山の井の道頼は、中納言から、伊周の後を襲うて大納言となつた人だから、こゝでは山の井の中納言と呼ぶべきである。(中宮御年十八九、道隆四十二、伊周二十、廿一——道頼廿三四、道長廿八九)

黒戸は清涼殿の北廊で、後の宮が弘徽殿の上御局にお住の時は、女房達の詰所になることは、榮花物語、烟の後の巻にも、

皇后宮上の御局におはします。清涼殿の丑寅の妻戸渡殿(北廊)かけて、例の弘徽殿の上の御局の定なり。とあるのでわかる。上文清涼殿の丑寅の隅の段(二十段)やこの段も、中宮は上御局に住ひ、女房達は北廊に居たのである。北廊の北端にも戸はあるが、今關白殿の出させ給ふのは、その西面の壁を切つて設けた出口、所謂黒戸である。こゝから出るには、是非とも女房達の居並んだ間を通らねばならぬ。そこで道隆は通りがかりの捨臺詞で、「あないみじの御許達や」と、一寸愛敬を振撒いたものだ。「翁をば」といつたのは、當時初老として年賀など催した四十算を、既に超えてゐるからでもあるが、實はわざとの

誇張の意味も混つて、例のお好きな散樂言なのである。どうして、「細やかになまめかしく」見える人が笑はれてよいものか。

關白殿退出の光景は、一段と精彩のある文字である。美しい袖口で御簾を掲げる女房、光るやうな容體で、あたり狭しと、七尺もある裾を曳いて沓を取る伊周、下立つて一寸ためらつて、優美な容體で、太刀の帶取など引直してゐる道隆、人物がそれ／＼浮動して見える。「黒き物を引散したるやうにて」は、公卿の列立してゐる有様を、最も簡淨に表現してゐる。

執柄の沓は、藏人頭が取るのが例であつた。

平三位曰、頭必取執柄沓、不經頭刀禰上達部自曰、我不取一人沓、過分頭アロキ事此事許也。(貫首秘抄) 藏人頭は殿上の貫主で、役だが、一の人の沓を取るのが缺點といはれた。然るにこゝでは、大納言が關白の沓を取つてゐる。想ふに父子の關係上、破格の處置を、伊周がしたのであるまいか。珍しい異例なので、殊に驚異の眼を見張つて、「大納言ばかりの人に」と感歎したものであるらしい。

「それは居させ給ふまじきなめり」は、道長の強項なことが、既に世間周知であることを證してゐる。元來道隆道長の兄弟中は、甚だ不和であつた。道隆は酒好のフザケ者で、大の樂天家であるのに、道長は剛毅の意地張で、飯室の僧正が所謂如虎渡深山峰の相を有つて、「影をば踏までつらをやは踏まぬ」と父の前に絶叫して、才人公任を土芥視し、大極殿の柱の鉤屑には、二兄を睦若たらしめ、帝后の父祖攝關の誓の矢には、長兄一家の顔色を奪ふなど、性格が全く相違して、調和しようがない。加ふるに、父兼家歿後は道隆の獨天下で、その子伊周の官歴は俄に躍進して、この兩三年間に、叔父道長を凌駕する傾向を呈して來た。道長が不平なもの尤もである。それに東三條女院は、兄道隆一家とは疎々しくて、弟道長を酷く愛して、我が子のやうに思召されたことも、たしかに兩者の間を隔絶させる暗溝であつた。

しかし道長が何としても、公事は私情で忤ける譯にはゆかない。禮儀三千威儀八百、足の踏方が一步違つても、物の置方が一寸後先になつても、非禮として記録に書留められる時代だから、致し方がない。中宮大夫(定子の)に任せられた時は、不興に覺えて、「参りだにつき給はぬ程の御心さまも猛しかし」と、榮花物語にはあるが、かう咫尺の間に面をあはせては、大鏡に、

かく世間の光にておはします殿(道長)の、一年ばかり物を安からず思し召したりしよ。――さりながらも、聊ひけし御心やはたうさせ給ひし。公さまの公事作法ばかりには、あるべき程に振舞ひて、時たがふる事なく勤めさせ給ひて、内々には所も置き聞えさせ給はざりしぞかし。

とある通りで、道隆が一寸歩き出すと、豫想を裏切つて、道長が忽ち蹠蹠した。やはり關白殿の御威勢はめでたい。めでたいに就けて、すぐ例の宿命觀が擡頭してきた。

中納言の君は、女房達の中での上臈である。持戒しながら出勤してゐるので見ると、決して重い忌ではない。しかもその忌は、一般的の齋日だから、誰もあまり重んじてやらないのを、中納言の君ばかり奇しがらから、「行ひてめでたき身にならむとてか」と冷かしもするのである。「たべその數珠しばし」は、やはり關白殿の果報を歎羨する女房達の心持が現れて、「笑へど尙いとこそめでたけれ」の矛盾が面白い。

中宮は上御局の御座で、この北廊の驛を聞召して、成佛こそと仰せられた。女房達は現世利益に執着し、中宮は當來の利益を渴仰された所に、御見識の高さも窺はれ、關白殿歎羨の念は、端なく中宮讚仰の緒を啓いた。例の御主君思ひである。反復道長の蹠蹠したことを言上に及ぶと、清少がかねて道長に通交して居る評判なので、からかひ半分、「例の思ふ人」と忌味を仰しやる。これは御本心は、清少と御同感であるのを、わざと詞を依違させて、お戯れになつたものである。

「ましてこの後の云々」は、この文が中宮崩後の筆であることを示してゐる。「この世をばわが世とぞ思ふ」とまで、権力を振つた道長に、うづくまらせた事を思ふと、全く清少のいふ通り、道隆も果報者である。「ことわりと思し召されなまし」は、何となく中宮追慕の情が漂うた、悲しい聲に聞える。

抑もこの文は、關白殿のめでたさが主眼で、大納言に沓を取らせることがその第一條件、大夫殿の蹠蹠が第二條件である。殊に第二條件が有力な骨子となつてゐる。中納言に鬘縁した一話は、畢竟本題廻護の筆である。「まして云々」の掉尾の一結、千鈞の力がある。

百十一段

九月ばかり、夜ひと夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前裁の菊の露こぼるゝばかり濡れかゝりたるも、いとをかし。すいがい、らもんなどのうへにかいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りて、所々に絲も絶えざまに、雨のかゝりたるが、白き玉をつらぬきたるさまなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいと重げなりつるに、露の落つるに、枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人の心ちには、つゆをかしからじと思ふこそ、又をかしけれ。

(考異) ○らもんなどのうへに 原本らもんすきなどのとあり。異本による。

(口譯) 九月時分、一晚中降明した雨が、今朝はやんで、朝日の花々しくさしたのに、裁込の菊の露が、こぼれる程濡れかゝつてゐるのも、大層面白い。透垣や羅文などのうへにかいた蜘蛛の巢が、こぼれ残りて、あちこちに絲も切れさうに、雨が、白き玉を絲に貫いたやう

なのが、非常に興があつて面白い。少し日が高く上つてくると、萩などが露で大層重さうであつたのに、露が落ちるので、枝が動いて、人が手も觸れないのに、ふつと上の方へ起あがつたのを、非常に面白いと自分がいつたのが、外の人の心では、一向面白くもあらまいと思ひやるのが、又面白い。

(口譯)
正月七日に使ふ若菜を、人が六日にもて

はやして取散しなどするに、見も知らぬ草を、子供が持つて来たのを「これを何といふか」と尋ねるが、子供は急に「返事をしないで」「さあ」などいつて、あれこれ顔見合はせて「耳無草といひます」といふ者のあるから「耳無草では、何といつても聞かぬ顔であるのは尤であるよ」などいつて笑ふに、又愛らしげな菊の生えたのを持つて来たから、つめどなほ耳無草こそつれなければあまたしあればきくもまじれり(いくら抓つても、やはり草の名の耳無し同様の子は平氣である。しかし大勢居るから、中には人のいふことを、草の名のきく子も

釋 ○前栽 センザイ。庭前の草木の裁込。○すいがい 透垣の音便。板又は竹など、各その間を透して造れる垣。○らもん 羅文。らんもんはこの音便なるべし。細き木又は竹などを、菱形に交叉したる垣をいふ。前田真蔭の説に「羅文とて※の如く、細き木を組みちがへたるものをいふ。羅綺の紋には多く菱形あれば、うちまかせて、菱形を羅文とはいひ慣へるなるべし。凡て立部板垣などの上に、菱形に組み造るが見ゆる是れなり」。○かいたる 搔きたるの音便。蜘蛛の巣搔くをいふ。○日たけ 日の高く上りたるをいふ。○いと重けなりつるに 露になり。○をかしといひたる をかしたわがひたるをの略。評 美しい叙景文である。平安時代の歌人は、只この内容の一部を復習して居たに過ぎない。萩の花の動的の景致が、活躍してゐる邊は、殊に妙である。源氏物語、末摘花の巻に、
橘の木のうちもれたる、御隨身召して拂はせ給ふ。うらやみ顔に松の木のおのれ起き反りて、さとこぼるゝ雪も、名にたつ末のとみゆるも、云々。

松と萩露と雪の差別はあるが、景致が類似して、共に得易からぬ文字である。「人の心にはつゆをかからじ」は、かういふ詩味を感賞し得る人が、優長な生活を營んだ當時の上流人にも少かつたものと見える。共鳴者があるまいと思ふのが又をかしいとは、ちと負けじ魂も手傳つた皮肉で、清少が獨よがり微笑してゐる様子が想見される。

百十二段

七日の若菜を、人の六日にもてさわざり散しなどするに、見も知らぬ草を、兒どもももてきたるを、通何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず、「いさ」など、

これかれ見合はせて、「耳無草となむいふ」といふ者のあれば、通うべなりけり、聞かぬ顔なるは「など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば、
つめどなほみ、な草こそつれなければあまたしあれば菊もまじれり。
といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。



(經寫面扇) 合草の兒小

釋 ○七日の若菜 正月七日に用ゐる若菜。若菜を看よ。○兒ども 兒達なり。この複數なることは、次の「いふ者のあれば」をむかへて心得べし。○といへど と清少のいへど也。○とみにも の上に、兒共はを補ひて聞くべし。○いさ サア何といふか知らぬのサアに當る。下に、必ず知らずと承くる例なるを、こゝは略したる也。「いさなど」の下、いひてを略けり。○見合はせて 顔をなり。○み、な草 耳無草。路傍などに野生する石竹科の草。花は白くてはこべに似、葉は鼠の耳に似て對生す。漢名卷耳。○いふ者のあれば いふ者のそが中にあるべし也。○うべなりけり 云々 聞かぬ顔なるは、うべなりけりを轉置したる也。耳無しといふ名の草なれば、聞かぬ風なるは尤もなりと也。「うべ」は諸の義。○もてきたれば 兒供がなり。○つめどなほの歌 いくら抓みても、草の名の耳無といふやうに、人のいふ言を聞かぬ者は、

混つてゐる）といつてやりたかつたけれど、向は子供の手だから耳にはひりさうもない。

平氣にて困ることよ、しかし數多居る中には、菊の名のやうに、いふ言を聞く者も混りたりと也。「つめど」は草を摘むに、人の身を抓む（ツネル）意をかけ、「耳無草」は聞かぬ兒をよそへたり。「つれなれ」は俗の平氣に當る。つらしの意には、この頃は未だ用ゐず。「菊」に聞く意をかけたなり。○聞き入るべくも 上に、兒供の事なればを補ひて聞くべし。

義になる若菜以外の物をも、手に任せて摘んで來たのである。（耳無草を七種のうちに教へる説もあるが）清少自身は、素よりさる方面には、知識が乏しいので、小兒に説明をもとめた。その癖口ばかりはわる達者で、荐に秀句澤山に洒落散して、「聞入るべくもあらず」など、歌心なしと見くびつて、ひどく小兒を馬鹿にしてゐる。厄介な大人である。

「聞かぬ顔なるは」は、「とみにもいはず」を承けてゐる。菊も耳無草同様、野から摘んで來たのだから野菊の若ばえで、所謂嫁菜だらう。

この時代にも、小兒を折檻する方法に、抓ることがあつたと見える。いづれ婦人の所爲である。歌はこれに依つて趣向を設け、耳無草と菊とを断ち入れてゐる。すべてこの文は、耳無から關聯して、聞く聞かぬを字眼としてゐる。

百十三段

二月官のつかさに、定考といふこととするは、何事にかあらむ。釋奠もいかならむ。孔子などは掛け奉りてすることなるべし。聰明とて、うへにも宮にも、あやしき物など、かはらけに盛りて參らするを。

（口譯）二月太政官の役所で定考といふ事をするのは、何の事だらう。釋奠も何だらう。

多分孔子の畫像などは、お掛申してする事だらう。聰明といつて、主上にも中宮にも、變な物などを、土器に盛つて差上げる。

○官のつかさ 太政官廳をいふ。「官」は太政官の略。○定考 カウヂヤウ。六位以下官吏の藝能行動格勤の勝れたるを選出して、官爵を定むる行事。毎年八月十一日に行はる。この語倒に讀むを故實とす。上皇の音に似たるを避くる也。公事根源に「上卿、官の東の廊の座に着きて事を行ふ。次に朝所にて三獻の儀式あり。次に宴穩の座につく。各三獻あり。大方二月の列見におなじ。式兵の二省より諸司の輩の上日を撰成する事を列見といふ。それを書あつめて奏するを擬階奏といふ。此人々を選び出で定むるを定考とは申す也」とあり。かく定考は八月の公事なるに、こゝに「二月」とあれば、定考は列見の誤ならんかともいひ、又釋奠の脇書に二月と書けるが、本文に摺入したるかともいへり。後説是にちかし。○釋奠 シヤクテン、サクテン、又セキテン。先師を祭る儀式なり。禮記王制に「釋菜奠幣禮先師」とあるに出づ。二月八日の上丁の日、大學寮にて行はる。孔子並に十哲の影像を掛け、學官學生の禮拜あり。大學頭諸役を定めて、祭文を讀み、畢つて講論あり。次に文章博士題を獻じ、文人詩を賦す。翌日釋奠の胙を藏人より獻じ、主上朝餉にて聞召し給ふ。○くじなど云々 孔子並に十哲の像など壁に掛けて、祭する事なるべしと也。「くじ」は孔子の字音。○そうめい 聰明。江次第に「寮官居聰明、以折敷、高坏等、羞公卿」とある註に「聰明者胙也。餅（白黑）、梁飯、栗黄、乾棗也。胙字彙云、音祚、祭福肉也」。○宮にも 中宮にも。○あやしき物 聰明のうち、梁飯などを殊にさしていへる也。○かはらけ土器。○參らするを 「を」は歎辭。

評 官仕はして居るものの、奥向の婦人だから、中の重以外の表方の役所内の仕事に對しては、全く無知識である。今のやうに、見學などの出来る時代でないから、いくら才女でも、致し方がない。何が定考やら、殆ど見當もつかぬ。釋奠は學事關係の事だけれど、それすら主上中宮の御手許に參つた祭の胙を見て、わづかに想像をつける位のところで、をかしいやうに交渉がない。

百十四段

(口譯) 主殿司が「頭辨の御許から」といつて、繪などのやうなものを白い色紙に包んで、梅の花の見事に咲いたのに附けて持つて来たのを、繪がしらんと急いで取入れて見ると、餅餠といふ物を二つ並べて包んだのであつた。それに添へてある立文には、解文のやうな様式に「進上餅餠一つつみ、例によりて進上如件、少納言殿に」と書いて、月日を書いて、美麻那成行と名書して、奥に「この餅餠を差上げます下郎は、自身で参らうと思ひますが、晝は容貌が醜いといふので、参らないのですと、非常に面白げにお書きなされてあ

「頭の辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、しろきしき紙につゝみて、梅の花のいみじく咲きたるに附けてもてきたる、繪にやあらむと急ぎ取り入れて見れば、餅餠といふものを、二つならべて包みたるなりけり。添へたるたて文に、けものやうに書きて、「進上餅餠一つつみ、例によりて進上如件、少納言殿に」とて、月日かきて、美麻那成行とて、奥に、「このをのこは、みづから参らむとするを、晝は、かたちわろしとて参らぬなり」と、いみじくをかしげに書き給ひたり。御前に参りて御覽ぜさせれば、宮めでたくも書かれたるかな。をかしようしたり」など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。返事はいかゞすべからむ。この餅餠もてくるには、物などや取らすらむ。知りたる人もがな」といふを聞きしめて、惟仲が聲しつる。呼びて問へ」との給はすれば、はしに出て、「左大辨にも聞えむ」と、侍していはすれば、いとことうるはしうてきたり。あらず、私事なり。もしこの辨、少納言などのもとに、かゝる物もてきたる下部などには、する事やある」と問へば、惟仲「さる事も侍らず。只とめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、得させ給へるか」といへば、清「いかゞは」といらふ。たゞ返しを、いみじうあかき

る。中宮の御前に参つて、この文を御覽に入れると「立派に書いてある事よ。面白く趣向した」と、中宮がお譽めなされてその文はお取上になつた。「返事をばどうしたものだらう。この餅餠を持つて来る使には、何ぞ遣るものだらうか。様子を知つてゐる人もあればよい」といふのを、中宮がお聞きなされて「惟仲の聲がした。呼んで尋ねなさい」と仰になるので、端近く出て「左大辨殿にお話したい」と侍をしていはせると、惟仲は「大層態度を正して出て来た。中宮の仰ではありませぬ。私事です。もしこの辨や少納言などの私達の許に、こんな餅餠のやうな物を持つて来た下部

薄様に、「みづからもてまうてこぬ下部は、いとれいたんなりとなむ見ゆる」とてめてたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして、下部さぶらふとの給へば、出てたるに、頭辨「さやうの物ぞ、歌よみしておこせ給へると思ひつるに、び、しくもいひたりつるかな。女のすこし我はと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語ひよけれ。まるなどに、さる事はむ人は、かへりて無心ならむかし」との給ふ。則光、なりやすなど笑ひて止みにしことを、殿の前に人々と多かりけるに、語り申し給ひければ「いとよくいひたる」となむの給はせし」と人の語りし。これこそ見苦しき我ぼめどもなれかし。

(考異) ○いとことうるはし、原本いとよくうるはしうとあり。活本による。○れいたん 原本れいたうとあり。古本による。

○頭の辨 藏人頭兼左中辨藤原行成。○御許より の下、参らすを略けり。○白きしき紙 白き紙。色紙を見よ。○咲きたるに 咲きたる枝になり。○もてきたる の下、をを略けり。○餅餠 へイダン。裏餅のこと。和名抄に「裏餅、中納言煮合鴨等、子竝雜菜、而方截、一名餅餠(餠肴)」とあり。二月の列見にも八月の定考にも、上卿以下の公卿諸臣等に、三獻或は四獻の

合巻拾巻
大帳陸巻 調書帳陸巻 正帳陸巻
租帳陸巻 出帳帳陸巻
右件 外頭依例進上如件、謹言
天仁二年八月 日 加賀國雜草 江沼成安

文 解 後に供したる物なり。○けもん 解文。諸司又は國衛より諸省へ書上けをする文書なり。その書法挿圖に示すが如く、端に目錄を擧げて、さて依例進上如件、依例進上如件など書畢りて、

などには、縁でも遣
る事がありませぬ
と尋ねると、惟仲が
「さういふ事もあり
ません。只取置いて
食ひます。何だつて
そんな事をお尋ねな
さる。もし上官の中
からくれましたか」
といふから「どうし
てそんな事はありま
せん」と答へる。只
返事を、大層赤い薄
様の紙に「自身で持
つて来ない下部は、
甚だ冷淡であると思
えます」と書いて、見
事な紅梅の枝に、そ
の文を附けて差上げ
ると、行成がすぐに
お出なされて「下部
が参りました」と仰
しやるので、出て逢
ふと、行成が「あ、し
た物に歌を詠んでお
よこしなされたと思
つたのに、見事に返
事をいはれた事よ。
女の少し我はと慢じ

思ふ者は、何かにつ
けて歌詠散して、歌
人がましくしてゐ
る。さうでない方が
交際がしよい。私な
どにそんな歌などい
ひかけう人は、却て
心なしてあらうよ
と仰しやる。その後
「則光、なりやすなど
が、清少の歌を詠ま
なかつたのを笑つて
やんだ事を、關白殿
の御前に、人達が、大
層大勢ゐた時に、お
話し申し上げられた
ら、殿が『大層うま
く返事をした』と仰
しやつた」と或人が
話したが、こんなこ
とを書くのも、これ
こそ見苦しい我ぼめ
などであるよ。

年月日の下に署名す。「けもん」を春註に、^{けもん}花文綾、^{けもん}花文紗の花文と解きたるは非なり。濱臣の解文といへるぞよき。○美麻那成行 美麻那は氏。成行は行成の作名にて、わざと我が名を打返したる也。○このをのこ この下男なり。自ら卑下して「をのこ」といへり。○晝はかたちわろしとて 葛城の神、役の小角に命ぜられて、久米路の石橋を渡すに、容貌の醜なるを羞ぢて、晝は籠りて、夜のみ出でて造れりといふ故事に本づく。なほ百四十四段のかづらきの神を見よ。○お前 中宮のなり。○御覽せされば 行成の文をなり。○をかしようしたり 解文のやうに書きたる趣向をほめたる御詞なり。餅餠の包をさせるにはあらず。○御文は取らせ給ひつ 行成の文を中宮の取納め給へる也。○もてくるには もてくる者にはの略。○知りたる人 故實を知りたる人なり。○聞し召して 宮のなり。○惟仲 中納言を見よ。○聲しつる 聲しつるよの略。○左大辨 惟仲の當時の官名。○ことうるはしうて 容儀を正しと也。中宮のお召と思へる故なり。○うるはしは端正の意。○きたり 惟仲がなり。○あらず 中宮のお召即ち公用にあらずの略。○辨少納言 辨も少納言も、共に女房の稱呼なり。「辨」は辨内侍また辨のお許とある人にて、「少納言」は清少自身の事をいへる也。○か、る物 餅餠をさす。○する事 かづけ物などする事の略。○さる事も 「する事」とあるをさす。○とめて その餅餠をとめてと也。○上官 ジャウグワン。政官の借字。元來太政官の三局の官人を稱する語なるが、少納言や辨官は兼職の者おほき故、おのづからおもに外記、史等を稱する語となれり。「政官」は太政官の官人の義。○といへばと惟仲がいへばと也。○いかゞは 下に、さる事侍らむを略けり。○みづからまうでこぬ下部 來書に「このをのこは」とあるを承けて書けり。○れいたん 冷淡の字音。すさまじき意なり。小右記、春記などにもこの語見えて、當時通用の漢語なり。原本のれいたうも、この字音便とすべし。○見ゆるとて見ゆると書きてと也。○すなはちおはしまして 頭辨がなり。○出でたるに 端に出でたるにと也。

○さやうの物に 餅餠につけたる文をさす。○歌よみして 歌を詠むといふに同じ。○び、しくも云々 少納言が「みづからもてまうでこぬ下部は、云々」と答へたるをさす。○歌よみがまし 歌人めかすこと。何かにつけて歌よみ散らすをいふ。○さらぬこそ云々 歌人めかさぬが交際しよしと也。○さる事 歌をさす。○むじん 無心の字音。心無しに同じ。○との給ふ と頭辨のの給ふと也。○なりやす 傳未詳。○笑ひてやみにし事を 則光、なりやすは歌嫌ひにて、平素清少に歌詠みかけらる、事を面白からず思ひ居たるに、今度は清少自身が歌を詠まざりつとて、笑ひて已みたりし事をと也。これは頭辨が餅餠の返事につきて、關白殿に物語する序に話したる詞とすべし。但この一句は脈絡透徹せず。脱文のあるならずば衍文ならん。○殿の 關白道隆ならん。○語り申し 頭辨がなり。○の給はせし 殿のなり。○人の語りし の下、よの歎辭を添へて、句を切りても、又がの辭を略げるものと見て、續けても可なり。

この段の出来事は、惟仲が左大辨になつた正暦五年九月から、道隆公の薨じた長徳元年四月までの八箇月間のうちで、梅の花は春季であり、春季に餅餠など取する公事は二月十一日の列見であり、列見の儀式は甚だ繁雜なもので、そのうへ宴穩二座の杯酌があり、雅樂司の舞の二曲もあつたりして、必ず夜分にかゝるから、餅餠を人に贈ることは、その翌日の事とすると、結局長徳元年二月十二日の事と斷定される。(中宮御年廿一、關白殿四十三、惟仲五十二、行成廿五、清少卅二?)

當時は消息にまれ品物にまれ、目うへにする贈物は、草木の枝に附ける習慣であつた。それも花や葉と同色の紙などを用ゐることが、不文律のやうであつたことも、卅六段せちのは條で説明して置いた。こゝは白梅の枝に白紙で包んだ物を持つて來た。餅餠を二つ竝べに包んだ格好が方形なので、繪ではないかと樂みながら、大急ぎに開けて見ると、列見の酒肴の餅餠なので、女房の清少としては、甚だ意外な

珍しい贈物を得た譯である。しかもその立文には、上圖に示したやうに、餅餠進上の意を、解文の體裁で、漢字に書いて、奥には假字で添書がしてあつた。おなじ物でも、裏餅といへば大和めくし、餅餠といへば唐めく。當時は大抵餅餠といつたから、その消息も漢文體がふさはしい。が普通の漢文でも面白くないので、諸司の解文をふと思寄せ、進上の文句を早速利用した手際は、大に妙といはねばならぬ。尤も源順が、五月五日ある處に菖蒲を獻する時に、

進上

餅餠一暮

飲例進上如件

長徳二年二月十二日 美麻那成行

少納言殿

このをこはみつからま

ならむとするをひるはか

たちわるしとてまゐら

ぬなり

深(ふかい)

右葉之菖蒲草(みきはのあやめぐさ)

千年五月五日可刈(ちとせのさつきいつかるべき)(順集)

と、短歌の萬葉書を、解文の書式に散して書いたのは、この粉本であるが、形式ばかりか、その内容をまで應用した點から見れば、行成のは、更に一段の巧者があつて、全く出藍である。

美麻那成行が作名であり、成行が行成の轉倒であることは誰もいふが、美麻那の氏に注意を拂つた説が、今にない。當時の著姓は藤源平橘の順序で、奏授以上の顯官職を占領し、諸司の下官(六位以下)に、はじめて他の舊姓氏を見る始末であつた。美麻那は姓氏録によると、左京に隸した諸蕃で、任那王賀室王之後也とあるが、夙く微祿して、僅に右志美麻那近政の名が小右記に出てゐる。解文は大抵諸司の下官の署名で、舊姓氏が多いところから、わざと美麻那を使つたものである。

奥書は、使に持たせて遣るに就いてのいひ譯を、葛城の神に託したので、みづから下部と戲稱したのは、葛城の神が、役行者に願使されたからである。

行成ほどの書道の妙手が、かう趣向を凝して、和漢兩様に書分けた立文は、定めし見事な物であつたらう。中宮の御詞の「めでたくも書かれたる哉」はその書に對して、「をかしくしたりしはその趣向に對しての御批評である。御賞美のあまり、立文は御手許に御取上げになつてしまつた。「いかゞすべからむ一人もがな」は、清少の獨言なので、實際この返事は、容易には出来ない。來書が大伴傑作だからである。それに餅餠を貰つたのは始めてで、使の者に祿を遣るものか、遣らぬものか、更に勝手がわからぬ。遣つて笑はれてもらさず、遣らないで、すさまじきものの中に書かれるやうでも不本意、ほんに途方にくれる。中宮が惟仲に聞けと仰せられたのは、彼は參議の左大辨だからである。それは單に物識といふのみではない。實際列見の座は大辨が奉行で、すべてを執行してゐる。随つて餅餠についで案内も、よく心得てゐる筈である。

昨日は列見で、終日多忙だつた惟仲も、今日は暇で、中宮に參つたものと見える。侍を遣つて呼ぶと、お上の御用かと思つて、ことうるはしうて遣つてくるから、「あらず私事なり」と碎いて、祿の相談に及ぶと、只食ふばかりと、答は極めて平凡だ。「もし上官のうちにて」と反問する。行成の贈物だと知らせる必要もないから、「いかゞは」と胡摩化してしまふ。祿の始末は、これで一安心だが、さて返事はどうしたものか。

白き色紙に對して、いみじう赤き薄様を擇み、白梅に對して、めでたき紅梅を擇んだ。見立が大いに婦人相應である。文言は行成が、「をのこ」と自稱したのを承けて、下部の癖に代人を使によさすなどは、甚だ冷淡だと、小言をくれた。しかしこれだけでは、行成が、「び、しくもいひたりつる哉」と感心する程のこともない。なほ別に何か仔細があるのではあるまいか。冷淡も婦人の詞としてはこちたがと一考して見たら、果して大に一趣向あることを發見した。それは外でもない、れいたんは、へいだんを語

呂で洒落れたのである。清少はやはり只の鼠ではない。行成が「即ちおはしました」たのも、例の折過ぐさぬ仕打で、清少の返事が歌でなかつた事を、ひどく稱讃して、當世婦人の生意氣なのを攻撃してゐる。一體行成の性格は、四十五段で委しく説明した通り、直線的で真面目で、保守的であつたから、自分こそ歌も詠むが、歌よみ勝ちな新婦人は大嫌ひと見えた。で、交際がしにくいといひ、自分に對して歌など詠みかける女は馬鹿だと罵倒してゐる。まことに不愛敬な持前の男である。

行成の稱譽に、關白殿の許可があつては、大々的名譽な譯で、見苦しき我ぼめと謙退はするもの。底意はやはり卑下自慢である。お蔭で當時に於ける男女の才人が、遊戯的才華を鬨した標本を見ることを得たのは、後生たる我々の幸福である。

百十五段

「何で新任の六位の藏人の笏に、職の御曹司の東南隅の築土の板をしたぞ。東南ばかりか更に西東の板をもするがよいさ。又六位ばかりか五位の藏人もするがよいさ」などいふ事を、女房達がいひ出して「面白くない事よ。着物などに、やたらな名前を付けたことが、甚だ怪しからん。着物の中で、細長をばさうもいつてよからう。なぜ汗衫は汗衫といふのか。男の兒の着てゐる着物のやうに、尻長といふがよいさ。なぜ唐衣は唐衣といふのか。短い衣といはう。けれど唐衣は唐土人の着る物だから、さうもいへよう。上の衣上の袴は、上に着る物だから、さうもいへよう。下襲も下に襲れる物だからよい。又大口の袴は、長さよりは口が広いから、さうもあらう。袴といふ名が甚だ面白くない。指貫もなぜ指貫といふか。足衣又はそのやうな物は、足ぶくろなどいふがよいさ」など

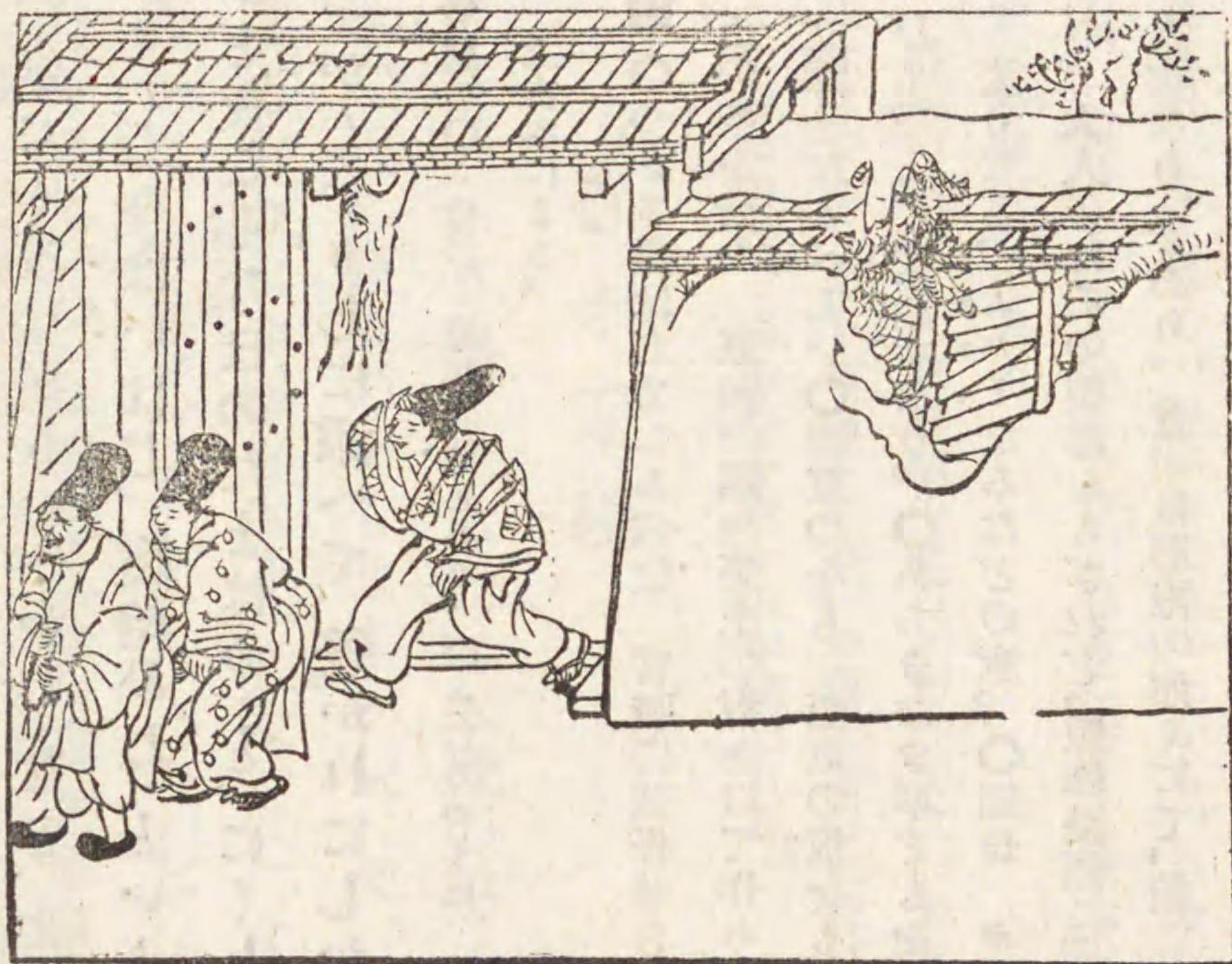
さよりは口のひろければ。袴いとあぢきなし。指貫もなぞ。足ぎぬ、もしはさやうの物は、足ぶくろなどもいへかし」など、よろづの事をいひの、しるを、道いてあなかしがまし。今はいはじ。寝給ひね」といふいらへに、夜居の僧の、「いとわろからむ。夜ひと夜こそなほのたまはめ」と、にくしと思ひたる聲さまにていひ出でたりしこそ、をかしかりしに添へて、驚かれにしか。

〔考異〕○六位の 原本六位とあり。○きたるやうに 原本きるやうにとあり。○うへの袴 原本うへの二字なし。以上古本による。

○つかさ得はじめたる六位 官職に新任せられたる六位なり。「つかさ」は官の義。○たつみの隅の築土の板を云々 東南の隅の築土の板を以て作りし事ぞと也。「ついで」を、古本に「ついで」とあるは、衝立障子なるべし。○西東のをも 西東の板をもの略。○五位も つかさ得はじめたる五位もと也。○いひ出でて 女房がなり。○あぢきなき事どもを 面白くない事どもよと也。「を」は歎辭。○すゝろなる妄りなる、ムヤミなるなどの意。○細長 ホソナガ。大人の婦人の着る物と、男女の童の着る物とあり。大人のはその製詳ならざれど、服飾漫語に「小袷のうへに着るものにて、小袷の如くにて、大袷のなき物なり」とあり。童のは形袍の如くにて、領に長紐あり。身のたけ四尺四五寸、袖たけ一尺六七寸、大袷の幅、上の方は四寸三分、下の方は四寸七分、身幅九寸五分を常とす。細長の袍の略か。(挿圖参照)。○さもいひつべし 「さも」は細長の名義をさす。○なぞ汗衫は 汗衫といへる。汗衫はの略。(挿圖参照) ○尻長と 汗衫の尻とは背の身ごろの、衣のたけよりも長く出でたる部分をいふ。○をのわらはの着た

いろくゝの事をいひ
 騒ぐのを「いやもう
 喧しい。もう私もい
 ふまい。お寢なさい」と、
 自分がいつた返
 事に、夜居の僧が「貴
 女方のお寢なさるの
 は、甚だいけなから
 う。夜通しなほお話
 しなさい」と憎いと
 思つたやうな聲付で
 いひ出したので、面
 白かつたに添へて、
 又吃驚されました。

るやうに 男兒の着たる物のやうにと也。さてこの句「男の童の着たるやうに、尻長といへかし」と轉倒して聞かべし。當時男兒の服裝に、尻長といふ物ありしと見えて、台記久安六年正月十四日の條に「今日御論義間、今鷹着、尻長指貫、侍御在所、簾中」とあり。但その製明かならず。○なぞ唐衣は、なぞ唐衣といへる。唐衣はの略。○短き衣とこそ、唐衣はわづかに胴にのみかゝる程の、たけ短き上衣なり。(挿圖参照)○もろこしの人の云々、始は唐土の背子を模して、や、その製を變じたる物なる故にいへり。「も



(巻繪事行中年) 板の土築

大口あり。こゝのは赤大口なり。○指貫もなぞ

のなれば」の下、さもいふべしを略けり。○うへの袴表袴。うへの衣即ち袍を着る時には袴にて、禮裝なり。袍表袴には、冠をかぶり、太刀を佩ぶ。これを束帶と稱す。桃華蕊葉に「中少將より大臣大將に至るまでも、若年の時は白浮線綾、窠霞の浮文を用ふ。眞は紅打平絹なり」。○大口 大口の袴の略。表袴の下にはく。公卿殿上人地下の者も、束帶には必ず着用したり。表裏共に紅の平絹を用ふる。その製大體表袴と同じく、聊か細く三寸許り短し。後世大口といふに赤大口、前張の大口、直垂に用ふる指貫もなぞ指貫といへるの略。○いひの、しるを

女房達がなり。○今はいはじ もういふまいと也。○夜居の僧の 居合はせたる夜居の僧がなり。この句より會話と見て、女房の一人が、みづから戯れに夜居の僧に比していへりといふ説は妄なり。○いとわろからむ 話をやめて寢給はむことは、いとわろからんと也。○にくしと思ひたる 女房達のいひ罵るを、憎しと思ひたると也。○驚かれにしか いまだ眠りたるならねば、目のさむる意にあらず。

職の御曹司は、御殿すら頽破して居つたことは、既にいつた如くだから、築土などは猶更の事と思はれる。上塗の壁は皆落ちて、骨組の板が露れて、バク／＼になつて居るのを取つて、木笏に作るなどは面白い。古本には衝立の板とあるが、それでは殿内備附の器具を破却することになるから、事態が適はぬ。實際何も東南の隅に限るにも及ぶまいが、偶然にも其處が破壊して居たので、取始めたかも知れない。或はまた陰陽家の占筮や、一寸したお禁厭のやうな事から起つたのかも知れない。

得はじめたるつかさといふのは、一般の官職をさすのではない。六位の非藏人とか雑色とかをしてる者が、藏人に新任したのである。

揚足取のわる穿鑿が始つては、お喋舌の寄せ合だから、實にとめ處がない。だか流石に婦人だけあつて、問題が衣服の名稱に集中してしまつた。細長、表袴、下襲、大口は、幸に攻撃を免れたが、汗衫や指貫は、殆ど形なしだ。唐衣はほんにうしろ短の變な仕立である。後漢書の五行志に、

建安中、女子好爲長裾而上甚短、時益州從事莫嗣以爲服妖。

この服妖と票評されたほどの短い上衣が、直接間接に、支那朝鮮から輸入されて、上流婦人が着ることとなり、唐衣と稱したのである。だから唐衣に裳は附物で、裳は即ち長裾に當るのである。その製は變化したが、指貫は指貫の袴の略、袴は穿裳の音轉だから、何も不思議はない。それを笑ふのは、今日からいへば、無學を表白するやうなものだが、當時には言語の學といふものがなかつたので、寧ろ安心

して勝手なことがいへた。

あまりハシヤギ過ぎて、切がないので、當事者さへも呆れ返つて、「今はいはじ、寢給ひね」と、幕を切落さうと試みたのは、流石に年嵩な清少である。所が思寄らぬ方面から、わざと横槍を入れたのは、夜居の僧である。はつかしきものの段に、

夜居の僧はいと恥かしきものなり。若き人の集りては、人の上をいひ笑ひ譏り悪みもするを、つくぐと聞集むる心のうちもはづかし。

といつた如く、獨二間に詰めて居る退屈さに、こちらの話を残らず聞取つたと見えて、寢ないで夜通しお喋りなさいは、皮肉と厭味との爆發である。「驚かれにしか」は不意を打たれたからで、これも當夜の座興である。

冒頭突兀として筆を起したのは、これも一種の文體で、何等の襍染なしに、夜居の僧の出現したのも、その横槍の突然な趣があらはれて面白い。そしてこの夜居の僧によつて、この文が女房達が御夜詰當夜のスケッチであることが推定される。

百十六段

故殿の御ために、月ごとの十日、御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人、いとおほかり。清範講師にて、説く事どもいと悲しければ、ことに物のあはれ深かるまじき若き人も、皆泣くめり。はてて、酒のみ

(口譯) 故關白殿の御爲に、毎月十日に御經佛の供養をなすつたの、九月十日は、職の

詩ずんじなどするに、頭の中將齊信の君、「月秋と期して、身いづくにか」といふことを、打ち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかてさは思ひいで給ひけむ。おはします所に分け參るほどに、立ち出でさせ給ひて、宣めてたしな。いみじうけふのれうにいひたる事にこそあれ」との給はすれば、酒それを啓しにとて、物も見さして參り侍りつるなり。なほいとめてたくこそ思ひ侍れ」と聞えさすれば、宣ましてさ覺ゆらむ」と仰せらる。

(考異) ○いかてさは 原本いかてかはとあり。○けふのれうに 原本きよの事にとあり。以上古本による。

釋 ○故殿 道隆を稱す。○月毎の十日 道隆の忌日に當る。○御經佛供養 經供養と佛供養と。「經供養」は經を書寫して、その爲に佛事を營むこと。「佛供養」は佛像を彫刻圖畫して、その爲に佛事を營むこと。○せさせ給ふ 御經佛供養せさせ給ふの略。○上達部殿上人 の上、參り集ひたるを補ひて聞くべし。○物のあはれ 物事の感傷、又は人情。○はてて 供養はてての略。○月秋と期して云々 本朝文粹十四に、菅原文時の爲謙徳公、修報恩善願文に、「彼金谷醉花之地、花毎春旬而主不歸、南樓翫月之人、月與秋期而身何去、況籠深者思又深、榮甚者畏又甚、云々」。(朗詠集雜部にも出づ) 句の意は、月と秋とは時を契りて、秋來れば月はその清光を放てども、南樓に月を賞せし人は、その身は何處にか去きし、影も見せず、云々と也。○うち出し 打上げて歌ふをいふ。○おはします所 宮がなり。○わけ參る 女房達の並居る中をなり。○立ち出でさせ 宮がなり。○けふのれうに 今日故殿追善の料としてと也。願文の意などの、この場合に打合ひたるをいふ。○それを 齊信の朗詠の事をさ

御曹司で供養をなすつた。その席に上達部殿上人が、大層大勢めた。清範が講師で、説く事どもが大層悲しいので、格別物の果敢なきの深く感じさうもない若い人も、皆泣くやうである。佛事がすんで酒を飲み詩を吟じなるとする時に、頭中將齊信の君が「月秋と期して身いづくにか」といふ句を吟じ出されたから、非常に面白い。どうしてさう時に協つたことを想ひ出されたらうこれを申し上げようと思つて、中宮のお出になる處に、人達を分けて參る程に、中宮がお立出になつて「結構であるな。うまく故殿追善の今日の料に作り出した事である」と仰になるから「それを申上

す。○物も 宴會の面白き事どもをさす。○ましてさ覺ゆらむ まして汝はしか感ずるならんと也。頭中將と清少とは、殊に親密なる交情あれば、「まして」といへる也。

わざと呼びもいで、おのづからあふ所にては、齊信などかまろを、まほに近くは語ひ給はぬ。さすがにくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるを、いと怪しくなむ。さばかり年頃になりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何事をか思ひ出てにせむ」との給へば、道さらなり。難かるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、え譽め奉らざらむがくち惜しきなり。うへの御前などにて、やくとあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか、只おぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出て来て、いひにく、侍りなむものを」といへば、笑ひて、齊信など。さる人しも、よそ目よりほかに、譽むるたぐひ多かり」との給ふ。道それが憎からずはこそあらめ。男も女も、けぢかき人を方ひき譽め、いさゝかあしき事をいへば、腹だちなどするがわびしう覺ゆるなり」といへば、齊信たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

(考異) ○譽め 原本思ふ人のとあり。古本による。

○わざと呼びも出で 齊信がなり。○まほに近くは云々 本當に親しくは實際し給はぬかと也。夫婦同様の間柄にはならぬかの意。「まほは眞秀の義にて、片秀(偏)の反對なり。十分、完全、本當などの意あり。

てす。夫婦關係の交際にはむづかしい事でもないのを、さう致しませんのは、さやうに夫婦關係を結びませう後では、貴方をよお譽め申上げられません事が残念なのであります。主上の御前などで、女房達が集つて、役目のやうに貴方をお譽め申すのに、何て夫婦關係を結びませうか。夫婦關係を結びませうは、苦々しく氣苦めがして、譽めにく、さういませうものを、只お愛し下さいませ」といふと中將は笑つて「何てそんな事がありませうか。さやうな關係のある人こそ、他人の見て譽める以上に、譽める類が澤山あると仰しやる。それが憎くないなら、まうも致しませう。

り。○思ひたる様 清少が私を思ひたる様なり。○いとあやしくなむ 近く語らぬはいと怪しくなむあると也。○得意の 御得意なりを見よ。○うとくて 實事なきをいふ。○殿上などに明暮なき云々 今は藏人頭にて常に殿上に出仕しをれども、もし殿上に常に居らぬ折もあらばと也。○さらなり いかふも更なるの略。○難かるべき事にも 近く語らばむことは難かるべき事にもと也。○うへの御前 中宮を申す。○やくと集まりて褒め聞ゆるに 女房達が集まりて役目のやうにして、貴方を譽め申すに也。「やくと」は「譽め聞ゆる」に係る副詞にて、役の字音。○いかでか の下、近く語らひて後は、え譽め奉るべきを補ひて聞くべし。○たゞおぼせかし 實事はなくて、只心にのみ思ひ居給へと也。この句「いひにく、侍りなむものを」の下に廻して心得べし。○かたはらいたく の上にも、近く語らひて後はを補ひて聞くべし。○心の鬼 心の咎め、氣の咎めて苦むを、鬼に譬へたる也。○いひにく、譽めむことのいひにく、と也。○笑ひて 齊信がなり。○など の下、さる事のあるべきを略けり。○さる人 近く語ふ人即ち實事ある人をさす。○よそめより外に 餘所目に見て譽むる以上にと也。○それが憎からずはこそあらめ 近く語らふ人を、餘所目以上に譽むることが憎くなくば、近く語らふこともあらんと也。○け近き人をかたひき 「け近き人」は近く語らふ人にて、實事ある人をいふ。「かたひき」は方引にて、方を持つ意。たゞ引とのみもいへり。最負は引を音便にて延べていへるのみ。原本に従へば、近しく語らふ人を最負に思ふ人が、僅にても他人がわが思ふ人の悪き事をいへば、立腹などするが面白からず思はる、なりの意に解すべし。○頼もしげなの事やと 思ふ人を悪くいふを腹立つこそ頼もしけれ、それをわびしといふは、頼もしげなしと也。「の給ふ」は齊信のいへる也。

道隆は長徳元年四月十日に薨去、それ故この九月十日は丁度半周の忌日に當るので、例月のよりはやや鄭重に、その追善供養の式を、職御曹司で擧げられた。これは中宮が孝養の思召から出たことで、公

然し男でも女でも、
關係の深い者をひい
きにして譽め、一寸
でも他人がその者の
悪い事をいふと、立
腹などするのが、不
快に感ずるのであり
ます」といふと中將
が「頼もしくない事
よ」と仰しやるのも
面白い。

式では勿論ない。(中宮御年廿、齊信廿九、清範卅四、清少卅、卅一?)

當時追善の經佛供養は、經は法花經、彌陀經、心經などを主として、金銀墨字を以て、紺紙白色紙に書き、佛は釋迦、彌陀、觀音、勢至を主として、白銀を鑄、白檀を刻んだのもあり、珊瑚を碎き、切金を使つた畫像もあり、法花淨土金胎兩部の曼荼羅もあつた。願文は文章博士彩筆を揮ひ、講説は山奈良の名僧富婁那を辯をふるひ、五十僧七十僧導師を輔けて、梵唄諷誦その盛儀を飾る。請僧に布施を引き齋を供することは、形の如くである。記録にはないが、この時のも、大やう以上の如き盛儀と見て差支はない。清範律師は既に小白河の八講に説法した人で、その快辯は若い者までも泣くので知られる。列席の上達部殿上人の多いことは、長徳二年四月の大變以前、まだ道隆在世の勢力の情力中にあるからで、以後となつては、行啓にさへ、上達部が顔を出さなかつた。

法會には音楽があり、さて酒宴がある。場合が場合、催馬樂や風俗でもないので、詩を誦じたものと見える。例の才人齊信は、殿上人の上首で列席して、またその機智を發揮した。「月與秋期而身何去」は、單に時節の秋なのが打合つてゐるばかりではない。元來この句の出處は、謙徳公(伊尹)が、その父母追善の願文で、その事情が、今日の中宮が父君の御法事をなさるのと、一致してゐるからである。清少が「いかでさは思ひ出で給ひけむ」といひ、中宮が「いみじう今日の料に」と仰せられたのも、かう事情と季節と文意との三拍子の吻合したことを感服したのである。もしその酒宴が既に夕景に及んで、十日の月が職の曹司の木立の上にはほのめきもしたならば、今一拍子揃つて、なほく妙であつたらう。文面にこそ見えぬが、事實が或はさうであつたかも知れない。

例の「物のめでたきはえやむまじ」と、大納言殿の朗詠に、上屋から這出した程の清少だから、この日もめでたがつて、何はさし置いても、まづ譯知りの實の君中宮に申上げに參る。中宮はまたこのめでたさを、

この道に興味と了解をもつた清少に語りうと、お立出になる。そこで兩方のめでたさが鉢合せをしてしまつた。ましてさ覺ゆらむは、清少をおなぶり遊ばされたお詞ではあるが、また實際さう認定されるだけの事實をもつてゐるので、この一句は、次の「わざと呼びも出で、云々の一章を胚胎してゐる。

主上と后妃との御關係は、殿上の侍臣と後宮の女房との接近を餘儀なくさせ、宮廷間の男女交際は、そこに成立する。齊信は中宮の御縁邊だから、中宮のお方に疾うから出入はして居たらうが、殊にこの一年前藏人頭となつてから、清少に親しくなつたと見られる。そして草の庵以來、清少の渴仰者であつた。「さばかり年頃になりぬる得意の疎くてやむはなし」は、當時の男女交際の現状を喝破したものである。

藏人頭はその勢によつて、大抵參議に昇任するのが、この頃の例であつた。——稀には他の散官になる者もあり、御代がはりに會へば罷免にもなるが——それ故「殿上に明暮なき折もあらば」は、齊信としては、參議に昇任の場合を豫想していつたものである。

參議は出勤の役所が太政官だし、末席ながら上達部ではあるし、軽々しく殿上に出入する譯にはゆかぬ。さらば對面の機會も少からうから、その時の思出草には、はかない夢のやうな興趣の爲に、婦人の節操を弄ぶ口氣で、いかにあはくしい女房生活の清少でも、喧とはまさかにははれぬ譯である。

齊信は、かへる年の段(七十二段)で紹介したやうに、才子ではあるが、才子の通弊として、一面にまた輕薄者たるを免かれなかつた。伊周一門の勢力失墜後は、忽ち道長方に趨つて、恪勤の上達部の異名を頂戴したり、隆家と喧嘩をしたりして、甚だ面白い。

清少はこの表裏ある齊信の性格を看破したか否かは疑問であるが、褒めたい一心にと、尤もらしい前提を置いて、貴方とは關係しないといふ、妙な結論の生ずる舌鋒で、齊信を烟に捲いて、旨く逃げてし

よつた。流石の才人齊信も、清少にあつては、から形はない。「頼もしけなの事や」と應酬はしたものの、弾力を失つた鞠のやうな具合で、甚だ振はない。蓋し申込を拒絶された失望の聲である。

百十七段

頭の辨の職にまゐり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなば悪しかりなむ」とてまゐり給ひぬ。つとめて、藏人所の紙屋紙ひきかさねて、後のあしたは、のこり多かる心ちなむする。夜をとほして、昔物語も聞え明さむとせしを、鶏の聲に催されて」と、いとみじう清げに、うらうへにこと多く書き給へる、いとめでたし。御かへり事に、夜ぶかく侍りける鶏のこゑは、孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ちかへり、「孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客わづかに去れり」とあれども、これは逢坂の關の事なり」とあれば、

夜をこめてとりのそらねははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ。

心かしこき關守待るめり」と聞ゆ。立ちかへり、

あふ坂は人こえやすき關なればとりも鳴かねどあけて待つとか。とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。のち

(口譯) 頭辨が職御曹司にお出なされて、話などなさるうちに、夜が大層更けた。それで頭辨が「明日は主上の御物忌に籠らなければならぬから、丑の刻になつたら悪からう」といつて、座を起つて禁中に參られた。翌朝藏人所で使ふ紙屋紙を重れて、頭の辨から、「きぬぐの朝は残多い心持がする。夜通し昔話も申上げて明さうとしたのを、鶏の聲に促されて、早く歸りました」と非常に綺麗に、事實に反して、色々な事

のちのは御前に、

(考異) ○去れりとあれどもこれは、原本去れりといふはとあり。古本による。○御前に 原本御前にてとあり。活本による。

○頭の辨 行成朝臣のこと。○御物忌なるに云々 主上の御物忌なるによりて、殿上に籠るべければと也。○丑 丑の時にて、今の午前二時より四時までの稱。○參り給ひぬ 禁中になり。○藏人所 クラウドドコロ、禁中校書殿にあり。校書殿は文殿とも納殿ともいひて、累代の書籍を納め、また服飾の器物および錢貨等をも納む。藏人の居所は、藏人町屋といふその附屬の建物中にあり。藏人を見よ。○紙屋紙 カウヤガミ、カンヤガミ。カミヤガミの音便なり。京北平野神社前の紙屋川に、朝廷の紙屋院を置かれて漉きたる紙なり。多く宿紙即ち漉返しを製し、色薄黒なれば薄墨紙ともいひ、又水雲紙、繪旨紙、カイ紙などいふ。○のちのあした 後の朝。きぬぐなり。男女相逢ひて別る、朝をいふ。○鶏の聲に催されて の下、立出でたりきを略けり。庭鳥をトリとのみいふ。○うらうへに 表裏になり。反對なるをいふ。清少とは普通の會見なるを、事實に反して情事の逢瀬なるやうに書ける也。○孟嘗君のにや 孟嘗君の偽の鶏にやあらむと也。貴方は虚言吐なれば、夜深に鳴きしといふ鶏も、まことに鳴きたるにはあらず、孟嘗君の偽の鶏の類にて、只早く辭去せし申譯に過ぎざるべしと也。○孟嘗君 マウサウタン。周末戰國時代の齊の公族田文のこと。秦に使用して殆ど囚れんとしつるを、纒に脱して函谷關に到れるに、關門未だ閉ぢたり。あとより追手は迫れり。たましく從者中に、鶏の聲色の上手がありて、その鳴聲を真似たれば、夜明けたらと思ひて、關守門を開く。即ち、のがれて齊に歸りぬ。この事史記孟嘗君傳に「齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦云々、秦昭王、囚孟嘗君、謀欲殺之、孟嘗

を、澤山お書きなされたのが、大層見事だ。その御返事に「大層夜ふげに鳴きました鶏の聲は、孟嘗君の似せの鶏かも知れない」と申上げると、折返してよこした手紙に「孟嘗君の鶏は函谷關を開いて、三千の客がやつと逃れ去つたと書物にあるけれど、昨晚の鶏はそれとは違つて、貴女に逢つたといふ逢坂の關の事です」と書いてあるから、夜をこめて鳥の虚音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ(深夜にまだ鳴きませぬ鶏の虚鳴に、函谷關の關守は欺かれて通すとも、男女相逢ふといふ逢坂の關では、そんな偽事では許しません)逢坂には惻口な關守

が居ります」と申上
げる。折返して、
逢坂は人こえやす
き關なれば鳥もな
かれどあけて待つ
とか(貴女の御自
慢の逢坂は、人の
通行自在の關だか
ら、鳥も鳴かなく
ても開け放して、
來る人を待つとか
聞及んでゐる)
と書いてあつた手紙
どもを、最初の手紙
は、僧都の君が禮拜
までしてお取になつ
た。のちのちの手紙
は、中宮の御前にお
取上になつた。

君使、人抵昭王幸姫求解云々、昭王釋孟嘗君、孟嘗君得、出即馳走、更封傳變名姓、以出
關、夜半至函谷關、秦昭王後悔、出孟嘗君求之、已去、即使人馳傳逐之、孟嘗君至關、關法雞
鳴而出客、孟嘗君恐、追至、客之居下坐者、有能爲雞鳴、而雞盡鳴、遂發傳出、云々。○函谷關
秦の地に出入する關門にて、河南府靈寶縣の南にあり。○三千の客云々 史記孟嘗君傳に「孟嘗君時州
齊、封萬戶於薛、其食客三千人、云々」とありて、函谷關に三千人の客隨行せしにはらず。本文は誤
なり。○去れりとあれども 去れりと書にあれどもと也。○これは逢坂の關の事なり 鶏の鳴きは、
遠方の支那の函谷關にはあらずして、近くのが逢坂の關、即ち自分と清少御身と相逢ふ夜の事なりと
也。「逢坂」に男女相逢ふ意を寓せたり。○夜をこめての歌 深夜に鶏の虚音は、函谷關の關守をたば
かるとも、決してこの逢坂の關は、たばかれて許しはすまじと也。「夜をこめて」は、夜を明方の部
分に籠めての意にて、まだ夜の明けぬ頃をいふ。「逢坂の關は許さじ」に、何と旨く仰せられても、それ
に欺かれて逢ふ事はすまじの意を寓せたり。この歌後拾遺集雜二にも收めたり。○心かしこき關守侍る
めり 函谷關とちがひて、わが逢坂の關には、賢き關守ありて守れるやうなれば、僞事にてはたばから
れじと也。○立返り 折返しといふに同じ。○逢坂はの歌 貴女の御自慢なざる逢坂の關は、自由に通
行の出來る關なれば、鶏鳴くまでもなく、常に開放して、來る人を待つとか聞及ぶと也。その裏面に
は、逢坂の關は許さじなど宣へど、事實は反對にて、逢坂は通行自由の關なる如く、貴女は誰でも御座
れの浮氣にて、關を許して人を待つとか聞及ぶと也。「人こえやすき」とは、文德實錄天安元年四月庚寅の
條に「相阪是古昔之舊關也、時爲聖運、不閉門鍵、出入無禁、年代久矣」とあり。○はじめのは 初
めの文はと也。行成が「後のあしたは云々」と、紙屋紙に書ける消息をさす。○僧都 隆圓のこと。○ぬ
かをさへつきて 額突をまでもしてと也。○のちのちのは 後々の文はと也。「孟嘗君の庭鳥云々」及び

「逢坂は人こえやすき云々」の消息をさす。○御前に 中宮の御前に取給ひてきの略。上のと同句なれ
ば、それにゆづりて略ける也。

(口譯)
さて頭辨は「逢坂の
歌は私に詠み歴され
て、返歌もせずにな
つてしまつたのは、
甚だいけない」とお
笑ひなさる。そして
貴女の手紙は、
殿上人が皆見てしま
つたは」と仰しやる
から「貴方が本當に
私を思つて下さつた
とは、私の手紙を他
人にお見せなかつ
たので分りました。
一體結構な事など
を、人がいひ傳へな
いのは、甲斐のない
事でありませう。
私の手紙は結構だか
ら、それでお見せ下
さつたのでせう。私
は又見苦しいのが世
間に廣がるのは感心
しないと思ひました
から、貴方のお手紙

さて、
逢坂の歌は詠みへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ
給ふ。さてその文は、殿上人皆見てしは」との給へば、
これにてこそ知りぬれ。めでたき事など、人のいひ傳へぬは、かひなき業ぞかし。
又、見苦しければ、御文はいみじく隠して、人につゆ見せ侍らず。志のほどをくらぶ
るに、ひとしうこそは」といへば、かう物思ひ知りていふが、なほ人々には似ず
おぼゆる。「思ひ隈なくあしうしたり」など、例の女のやうにいはいはむとこそ思ひつる
に」とて、いみじう笑ひ給ふ。よるこびをこそ聞えぬなどいふ。
ろが文をかくし給ひける、又、なほうれしき事なり。いかに心憂くつらからまし。
今よりもなほ頼み聞えむ」などの給ひて後に、經房の中將、「頭の辨はいみじう譽め
給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譽
めらるゝは、いみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。うれしきことも
二つにてこそ。かの譽め給ふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、
それはめづらしう、今の事のやうにもよるこび給ふかな」との給ふ。
（考異）○いふが 原本いふこそとあり。○おぼゆる 原本おもへどとあり。以上古本による。

は見苦しいので、ひどく隠して、人に一向見せません。このお互の志の程度を比べると同等でありませう」といふと、頭辨が「かう物事を辨へ知つて挨拶するのが、やはり他の人達には似ないと思はれるよ。『深い考がなく、悪く取計つた』など、普通の女のやうにいふだらうと思つたのに」といつてひどくお笑ひなさる。「これは何でお怒み申さうぞ。いつそお禮をこそ申上げませう」といふ。頭辨が「私の手紙を隠して下されたのは、又やはり嬉しい事でありませう。もし他人にお見せなされたら、どんなに面白くなくつらからう。今後もなほお頼み申しませう」と仰しやられ

た後に、經房の申將が見えられて「頭辨は貴女を非常にお譽めなさるとは、貴女は御承知か。或日の手紙の序に、此間あつた事などをお知らせになつた。自分の愛する人達の譽められるのは、非常に嬉しくて溜らない」など真じめに仰しやるのも面白い。それでは嬉しい事も、二つ出来ました。あの頭辨がお譽めなさるのに、又貴方の愛する人の中に、私が這入つて居りましたよ。などいふと、經房の申將が「私が貴女を愛してゐる事をば、珍しく今始つた事のやうにも、お喜びなさることよ」と仰しやせ。

○詠みへされて 詠壓されてと也。逢坂の關の歌は、行成に詠返されたるま、口を嚙みたるをいふ。

○と笑はせ給ふ と頭の辨の笑はせ給ふと也。○さてその文は云々 行成の詞なり。「その文」は清少の「いと夜深く侍りける云々」及び「夜をこめて云々」の二つの消息をさす。「見てしは」の「は」は歎辭にて、當時通常の語法なり。○思しけり 私を思しけりと也。○これにて 行成が殿上人に、清少の文を示し、をさす。○めでたき事など―かひなき業ぞかし の下に「それ故私の文はめでたきま、に、殿上人に見せ給へるならん」の意を補ひて聞くべし。何故わが拙き文を人に見せたるかと怨むる意を、わざと反對にいへる也。○見苦しければ云々 御文は見苦しければと轉倒せしめて心得べし。これも反對に取成せるにて、行成の文はまことは見事なる也。○志のほどをくらぶるに云々 二人の親切の程を比ぶるに、おなじ程なりと也。「こそは」の下、ありけれを略けり。○かう物思ひ知りて かく物を分別してと也。○人々には よの常の女房達をさす。○思ひ限なく 深慮なくと也。「思ひ限」は他より見とほしのつかぬ深き思慮をいふ。宣長が、思ひやりのなき意といへるは、分寸の差あり。○思ひつるに の下、いみじくもあるかななどいふ語を略けり。○こはなぞ こはなぞさはの給ふの略。○よろこび 身に取りて嬉しき事。感謝。お禮。○いかに心憂く云々 の上、もし人に見せ給はばを補ひて聞くべし。○今よりもなほ 今より後もやはりと也。○いみじう譽め給ふ いみじう貴女を譽め給ふと也。○ありし事など 行成と清少との交渉のすべてをさす。○思ふ人々の云々 自分の愛する方々が人に譽めらる、はと也。「嬉しく」の下、なむあるを略けり。「人々」とはいへど、清少をその中の第一の人に數へていふ也。○二つにてこそ の下、あれを略けり。○かの譽め給ふ 「かの」は行成をさす。○思ふ人の中に侍りけるを 貴方の思ふ人の中に、私が入居たる事よと也。「を」は歎辭。

行成が頭の辨たる長徳二年四月以降、中宮は職に、長徳三年五月ほんの一寸の間居られ、同四年二月

からは、可なり長くお住ひなされた。でこの段は長徳四年二月後の事と見るべきで、又清少と行成との情事は、職の御曹司の西表の段(四十五段)によると、同四年三月以後に成立したらしいのに、この本文はまだその形迹かない所から推すと、まづ長徳四年の二月か三月かのうちで、四十五段の近い以前と見てよからう。(中宮御年廿三、僧都の君十九、行成廿七、經房卅、清少卅三四?)

藏人頭は侍臣の頭梁だから、主上の御物忌には、是非籠るべき責任がある。職で女房達と、夜中の二時近くまで話し込んで、丑の刻になつては大變と、周章で往つたので、子の刻までは前日の分にして、忌まなかつた事が證明される。侍臣達は御物忌には籠つてゐるもの、自分自身の物忌ではないし、場所は殿上の間ではあるし、書簡のやり取などは一向構はない。

紙の事は節はの段でいつたが、紙の供給は今日の状態とは違つて、不十分だつた。随つて貴かつた。で物書くに反故裏、曆裏を利用することは珍しからず、職事や辨官などが役所遣ひの紙は、大抵紙屋院製の宿紙であつた。口宣案にさへこれを使つて、薄墨の論旨など稱へた位である。行成も藏人所備付の宿紙を使つた。引重ねたのは當時の書簡の様式で、それには色目があるのだが、こゝは薄墨紙の事だから、只二枚引重ねたのみである。

わざと「後のあしたは」だの、「鶏の聲に催されて」だのと、いかにも後朝の文のやうな文體に書いて、しかも早朝によこしたの、色めかしい趣向である。即ちその詞に就いて、まだ丑の刻にもならぬ前に歸られたのに、鶏が鳴いたとあつては、それは本當の鶏ではなくて、孟嘗君の偽の鶏かも知れぬと冷かす。一體こんな堅苦しい唐土の史實を持出したのは、清少の好んでした生意氣ではない。全く「昔物語をも」の語に發程したもので、軟派の意義に用ゐた昔物語を、硬派の意義に取做したのである。それも清少が漢文學に素養と理解とをもつてゐたからの機轉である。

行成もなかく引けては居ぬ。貴女は思違ひをしてゐる、孟嘗君のは函谷關の事で、遠い唐土の話だが、自分のいふのは、日本のついその逢坂の關の事であると、和漢地名の合拍は、一寸働いてゐる。逢坂に男女會合の意を寓せることは、古今集戀一に、

おと羽山おとに聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふるかな(在原元方)

がその濫觴で、以來男女間の常套語となつてゐる。行成の創案ではない。

何でも逢つたといひ張られては、辯明せずには置かれぬ。函谷關とこの逢坂の關とは違ふと、清少暗に心賢き關守を以て自任し、猥に人には逢ひはせぬと揚言すると、行成の返歌は、甚だ手きびしい。貴女の自慢らしくいはれる逢坂は、鶏の聲で開ける所か、初から開放しの關でと、事實の方から譬喩の假定を否認して、清少が色好の亂淫者であるかのやうに誣ひてきた。それも一時の戯言である。

行成のに返歌せぬ爲、詠みへされたと笑はれたと、明白に書いてゐる。蓋し行成の歌は殆ど人身攻撃で、優美な程のよいといふ定規をはづれてゐる感じがするので、返歌の必要を認めなかつたのかも知れない。

職にゐる清少と、殿上にゐる行成との贈答だから、清少のは殿上人に筒拔で、行成のは中宮はじめ女房達に筒拔である。しかも行成の手紙は、中宮及び隆圓にまで御覽に入れ、それをお取上げになつた程である。しかし「殿上人皆見てしは」の行成の口氣は、清少の書簡に對した稱譽の意味が含まれてゐることは、七十段に「をのこ共皆扇に書きてもたる」と、主上の仰せられたのに似てゐる。

機才を發揮したには違ないが、自分の行爲を、「めでたき事」と、人前に吹聴する筈もない。又書家の行成の書簡が見苦しい譯もない。現に隆圓はお經のやうに有難がつて、職業柄禮拜をしてお貰ひなされた。そして中宮も御手許に御取置になつたのだから、「露見せ侍らず」も眞事實でない。然るに行成の行爲に

就いては、殿上人に見せ散した怨意を表裏にいひなし、自分の行爲に就いては、事實を反對に托けて、親切心は對等だと皮肉る。行成はまた箇中の消息を萬々承知しながら、表面は知らず顔作つて、「かう物思ひ知りていふ」と空とぼけたのであることは、「いみじう笑ひ給ふ」の舉動が説明してゐる。怨むどころかお禮を申上げて可なりと、見すく虚言をつくつと、その尾について、自分の書簡を隠してくれたのは嬉しいと、わざと眞に受けて調戲ける。

この文、前後の二節に、劃然と分割される。發端から「後々のはお前に」までが前節、その後が後節である。前節は書簡の贈答で、互にその才華を圖はせ、後節は、口頭の應酬で、互にその機轉を争つてゐる。前節は「鳥の聲に催されて」に始つて、「夜深く侍りける鳥の聲」「孟嘗君の庭鳥」「鳥のそら音」「鳥もなかねど」と、鶏の聲を主題として、脈絡が串通してゐる。後節は「その文は」「見苦しければ御文は」「まろが文を」など、書簡を主題として組織されてゐる。そして前節の「いとめでたし」も「ありし文ども」も、遠く近く後節を喚起す伏線となつてゐる。又前節の書簡が、表裏の結構に終始してゐる如く、後節の會話が、盡く反對の意義に取交されて、諷詆の味ひを帯びてゐるなど、實に面白い。

經房との對話は、前後兩節の核心から漸くそれて、餘波になつてゐる。經房はいつも清少の周圍を彷徨してゐる遊星の一つで、機嫌取によく各種の情報を齎してくる男である。(七十段参照)「思ふ人の譽めらる、はいみじう嬉しく」など、甚だ眞じめであるが、眞じめに思はない清少の目からは、單に面白いと、興味の話題として見られてゐる。「嬉しきことも二つ」など、經房の語を借りて、ほんの口先のお座なりで翻弄してゐる。行成から見ると段違ひで、到底清少に太刀打の出来る男ではない。

要するに、全文書簡と會話とに互つた應酬の機轉を、自ら喜び、自ら味つてゐる態度で書いてゐる。こゝに一寸一言して置きたいのは、僧都の君隆圓の事である。積善寺供養の頃はまだ雜僧で、女房達

に册かれてゐたから、「僧綱の中に威儀具足しても居給はでしなどなぶられた位である。然るにこの段では、もう十九歳にもなつて居ながら、やはり姉宮の許に居るのは不思議と見えたが、その事情がわかると、實に泣かすには居られぬ。榮華物語に、

いさや世の中に少し人に知られ、人がましき名僧などは、このわたりに親しきさまなる事には煩しきことと思ひて、召仕はせ給へど、萬に障をのみ申しつゝ、たはやすくも参らす——僧都の君、清昭阿闍梨(中宮の母方の伯父)などばかりぞ、夜居に常には侍ひ給ふ。(耀く藤壺)

方外の徒すら、道長の威勢に憚つて、この御方には召しても來ぬ。據なく隆圓僧都は夜居の僧として、二間に奉仕し、姉宮の息災を祈つて居たのである。

百十八段

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、聲々していへば、
「出でて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、
「おどろしうきはやかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよるとさし入るゝは、吳竹の枝なりけり。
「おい。この君にこそ」といひたるを聞きて、「いざやこれ殿上にゆきて語らむ」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭の辨はとまり給ひて、「怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしつるを、職にまゐりて、同じくは女房など呼び出でてを」といひてきつるを、吳竹の

(口譯) 五月時分に、「月もなく大層暗い晩、女房がお出なさいませう」と、大勢の聲々でいふので、中宮が、「出て見なさい。常になく仰山にいふは誰であるぞ」と仰になるから、自分が出て、「これはどなたですぞ。仰山に際立つて仰しつるのはいふに、

名を、いととくいはれていぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などの給へば、
「竹の名とも知らぬものを、なまねたしとや思しつらむ」といへば、
「え知らじ」などの給ふ。まめごとなどいひ合はせて居給へるに、
「この君と稱す」といふ詩を誦んじて、又集まり來れば、
「殿上にていひ期しつる本意もなくは、なかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」との給へば、
「さる事には、何のいらへをかせむ。いとなか／＼ならむ。殿上にていひの、しりつれば、うへも聞しめして、興せさせ給ひつる」とかたる。辨もろ共に、かへすがへす同じ事を誦んじて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とり／＼に物どもいひかはして歸るとて、なほ同じことをもる聲に誦んじて、左衛門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いととく少納言の命婦といふが、御文参らせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、
「さる事やありし」と問はせ給へば、
「誰知らず。何とも思はていひ出で侍りしを、行成の朝臣の取りなしたるにや侍らむ」と申せば、
「取りなすとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人をよるこばせ給ふもをかし。
○月もなく、こゝは曇りて月の出でぬをいふ。○聲々して、殿上人のなり。○と仰せらるれば、中宮の私に仰せらるればと也。○いでて、端に出でてと也。○きはやかなるは、際立ちて聞ゆるはと也。

物もいはないで御簾を持上げて、ガサツト押込んだのは吳竹の枝であつた。お、此君でしたよと、自分のいつたのを、大勢が聞いて、「さあ、この事を殿上に往つて話さう」といつて、中將新中將外に六位の藏人なども居た連中は立去つた。頭の辨は獨お残りなされて、「怪しからず往つてしまつた人達よ。清涼殿のお前の吳竹を折つて、歌を詠まうとしたものを『同じ事なら、職に参つて女房などを呼出してまあ、歌を詠みかばさう』といつて来たものを、吳竹の異名をすばやく貴女にいはれて、敗亡して往つたのが面白い。誰か教を覚えて、人の一通り知りさきもない事をばいふ

ぞなど仰しやるから「竹の名とも知らないでいつたものな、小面憎いと思し召したでせう」といふと「それが本當ぞ、よう知るまい」など仰しやる。眞じめな話などを話し合つて居られると、殿上人等が「此君と稱す」といふ詩を吟じて、又集つて来たから、頭辨が「殿上で約束した本意も果さないてまあ、何てお還りなされたぞ。甚だ怪しからん事であつた」と仰しやる。殿上人が「あんな名言に對しては、何と挨拶をしませうかい。一通りの挨拶では、なまなかせぬ方がましでせう。殿上でもこの噂で大騒でしたから、主上もお聞になつて面白がつてをられました」と語る。

頭辨も一緒に返す返す同じ此君と稱すの句を吟じて、ひどく面白がるから、外の女房達も出て見る。男女それ／＼に話などし合つて、また還るといつて、やはり同じ事を諸聲に吟じて、その人達が左衛門の陣にはひるまで、聲が聞えた。翌朝大層早く、少納言の命婦といふが、主上の御手紙を中宮に差上げたのに、序にこの話を申上げたから、中宮は局に下りてゐる自分を呼上げて「さうした事があつたか」とお尋ねになるので「知りませぬ。何とも氣が付かずにいひ出しました事を、行成の朝臣が面白く取成したのでありませうか」と申すと「取成すといつても、迹形のない話

○物もいはで 殿上人がなり。○そよると そよとに同じ。「そよ」は擬聲。「ろ」は助語。俗の「サ」といふが如し。○吳竹 今の淡竹の類、葉細く黄ばみて、高さ五六尺。和名抄に「管、吳竹也、久禮太計」とあり。○おい 歎辭。榮華物語に「おい、さなりく、源氏に「おい、さりく」。その他宇治拾遺などにも、例ある語なり。美隆いふ「俚言に「おい、さなりく」といふ意なり」。○この君にこそ の下、ありけれを略けり。「この君」は竹の異名なり。晋書王徽之傳に「嘗寄居空室中、便令種竹、或問其故、徽之但嘯詠指竹曰、何可一日無此君」とあるに出づ。徽之字を子猷と稱す。○聞きて 殿上人がなり。○これ 「この君」といひし事をさす。○中將 傳未詳。○新中將 源頼定、藤原實成二人のうちなるべし。○頭の辨 行成朝臣のこと。○お前の竹 清涼殿の御前の竹にて、これは吳竹なり。禁掖秘抄、清涼殿の條に「仁壽殿の西向の北の方には、吳竹の臺あり」。仁壽殿の西向の北は、清涼殿の前庭に當る。前庭の南に、殿前近くあるは川竹なり。(附圖参照)○呼びいでてを の下、歌詠みかはさむを略けり。「を」は歎辭。○吳竹の名 此君といへる異名をいふ。○たれが教を の上、貴女はを略けり。○竹の名とも知らぬ云々 この君は竹の異名とも知らぬものを、知りていへるやうに方々は思召しての略。○なまねたし なま面憎しの意。○まことぞ しかいふはまことぞの略。○まめごと まじめなる事。あだ事の反對。○この君と稱すといふ詩 本朝文粹十一に、菅原篤茂の修竹冬青といふ詩の序に「晋騎兵參軍王子猷、種而稱此君、唐太子賓客白樂天、愛而爲我友」とある句をいふ。朗詠集にも出でたり。これは詩序にて詩にはあらざれど、この頃には朗吟にたふる句は、詩文を通じて詩といへり。○又集まってきたれば 殿上人がなり。○いひ期しつるほいもなくは 豫定したる本意もなくはと也。この下に、歸るまじきにを補ひて聞くべし。○さる事 「おいこの君にこそ」の挨拶をさす。○なかくならむ 詰らぬ返事はなまかならんと也。却てせぬが増しなりといふに當る。○辨もる共に 殿上人達がなり。

○同じこと 「この君と稱す」の詩なり。○人々 女房達なり。○少納言の命婦 傳未詳。○御文參らせたるに 主上の御文を中宮に參らせたるついでにと也。○何とも思はで この君が竹の異名とも何とも思はでと也。○取りなすとも 假令取成すとも、全く迹形なき話にはあらざるべし。○聞かせ給ふをば 「をば」の助辭落着せず。假に、喜び給ひを、下に補ひおく。○さいはる、殿上人に譽めらるゝをさす。

評 長徳四年長保元年に互つては、源頼定、藤原實成が、長徳四年十月に同時に左右の中將に新任されるから、本文の新中將は、この二人のうち相違ない。古本には式部卿の宮の源中將とある、これは頼定である。そこで五月は翌長保元年の五月と斷じてよい。翌々年の五月は、中宮は生昌宅に遷られて、職にはお住ひがなかつた。(主上御年廿、中宮廿四、行成廿八、頼定廿三、(實成廿五)清少卅四五?)五月間のある夜、職の西表で、殿上人達が、諸聲に女房を呼立てる。その聲がお奥に居らせられる中宮のお耳にとまる程、きはやかであつた。これが即ち「例ならず」である。仰のまゝに清少が端近く出ると、物をもいはず籬の下から、竹の枝をゴソ／＼と押込む。その瞬間に「お、私達を呼ぶのは誰かと思つたら、此君でした」と、竹の異名で挨拶する。一同アツと魂消て、殿上の方に引上げてゆく。叙事のはこびが極めて迅速で、文に無駄がなく、引締つた書方である。「中將新中將六位ともありけるは」は、こゝに始めて音づれて来た人達の顔を認知した趣で、それまでは突如の應答に、左顧右眄の餘裕がなかつた趣がうなづかれる。中將は例の遊星經房かも知れない。獨踏とまつた行成の語中から、殿上人の來襲した事情を説明させたのも、面白い叙法である。尤も事實が、さうした順序でもあるが。抑も當時大學の教科書だつた、三史五經中の典故とちがひ、晋書や世説の王子猷傳の此君は、すこし僻

典といはねばならぬ。尤も菅原篤茂はこれを使用して、名句を吐いたけれど、女房の清少としては、何分心得さうになく思はれるから、行成は「誰が教を知りて」と驚訝し、且感歎した。

かう面と向つて、思ひ人の行成に擧立てられては、人情羞かしくなつて、心にもない謙遜の詞もつい出て来て、「竹の名とも知らぬ」といつた。竹の名でなければ何だらう。これは此君が、二様の意味に兼用されてゐることを證するもので、竹の異名以外に、殿上人をさしていつた事が分明する。「まことぞえ知らじ」は、行成も清少が卑下した虚言と見抜きながら、それを反らさず、わざと眞に受けて挨拶したものである。

男女出會すれば、大抵あだめいた話になり勝なのに、又この頃の清少と行成とは、既に局の簾打かつくを許した間柄であつたので、ツミな話をしてゐたと、殊更にことわつた。すると先の連中が、「此君と礎す」の篤茂の名句を朗唱して、引返して来る。これにまた、殿上人達の才氣の賢さも窺はれる。行成が「殿上にていひ期しつる」といつたのは、「御前の竹を折りて云々」の照應で、その約束不履行を詰ると、その又答が面白い。「さる事には何のいらへをかせむ」。これが清少の詞を聞捨てて、一散に逃出した理由であり、首尾である。當時非常な名歌などに對しては、なまかな返歌するよりは、袖を拂つて逃出すことが、賢い仕打とされてあつた。小野宮實資は御堂關白の、「この世をばわが世とぞ」の歌に返歌せず、藤原定頼は、小式部の大江山の歌に、袖を被いて逃亡した。こゝも清少の名言に對して、とても應酬が覺えないと見て取つて、三十六計の奥の手を出したものである。そして「殿上にていひ罵りつれば」は、「殿上にゆきて語らむ」の首尾で、殿上での喝采の盛だつたことは、少納言の命婦も聞知り、「上も聞しめす」に至つて極る。もうかうなつては、歌どころではない。殿上の貫主行成も一緒になつて、此君の朗詠をはじめ、いや面白いこと。その聲に釣られて、物ゆかしがる女房達が、非番の限は出てくる。銘々に相手や見付

けて、男女の話がはづむ。歸にはまた此君を合唱して、建春門をはひるまで、その聲が聞える。と筆を中止した處は、餘韻が搖曳して、情味が無限である。

吳竹の枝を折つて歌を詠む風雅な試から始つて、遂にまた諸聲に詩を誦んじて左衛門の陣に入るまで、悉く血の氣の多い若者達の、驕つてはづみ切つた動作と言語との表現である。藤氏盛時は門閥家が、高位高官を占領したから、中將級すら大抵若手で、六位の藏人も、かういふ幕には年寄は出ない。行成は中での年嵩で、しかも重々しい藏人頭ではあるが、所謂群衆心理に支配されて、一緒に浮かれて朗詠などする花やかさ。それが梅雨頃のしめりの多い、「月もなくいと暗き夜」を背景として展開された光景なのを思ふと、何ともいへぬ氣持がする。左衛門の陣の朝朝の條(六十四段)と對照すると、一層興味が加つてくる。

翌朝少納言の命婦(表方の女房)が御使にきて、中宮にこの事を申上ける。そこで清少にお尋になる。曩に行成に對して、「竹の名とも知らぬものを」と偽り陳じてゐる。今更前言を翻すこともと、こゝに意地を張るのが、清少の心癖だらう。「何とも思はでいひ出で侍りしを」と、前言を繰返して、機轉らしく行成が取成してくれたらならんと、甚だしらしくしい。だから中宮は、更に本當になさらない。

「たれが事をも」から以下は餘波で、殿上人に譽められた人をお喜になるとすれば、中宮奉仕の三四十人の女房中、才氣縦横の清少が、最もその可能率に富んでゐる事はいふまでもない。それ故中宮は、清少を最もお愛しになり、随つて清少も、中宮に赤誠を捧げて奉仕したものであらま。

殿上人對清少の交渉から、事件が發展して、主上の興せさせ、中宮の喜ばせ給ふに終る。立派な手柄話我ぼめ話である。一二の謙詞があつてからが、畢竟卑下自慢の窩套に墮してゐる。

主上も中宮も殿上人も清少も、漢才の機轉に、殊に興味をもつたことは、一應説明の要があると思ふ。

ではあるまい」と仰になつて、笑つてお出なされた。中宮は誰でも、殿上人が譽めたとお聞きなされる事をば喜ばれ、さやうに譽められる人をお喜びなさるの面白。

中宮の御母高階貴子の父成忠は、文章生出身の人で、専門の漢學者である。貴子も、女ながらもまことしき文者であつたので、子供は男女とも大に漢學を仕込んだ。無論祖父成忠が家庭教師の格であつた。女でも三の君などは調子も變つてゐるが、公々然と文學の巧拙を批判した位で、長女たる中宮も勿論その素養があられた譯である。兄伊周がまた有数の文者で、當時の喝采を博した名文がいくらかもある。この伊周が師傳のやうにして御教導申上げ、中宮がまたその御相伴となつて勉強遊ばされた一條帝が、漢學に秀でられたのも當然の結果である。御製の詩など、御名作が今に傳はつてゐる。又當時の公用文書は悉く漢文だから、官職の高下に拘はらず、苟も官公史たる者は、漢文の素養がなくては勤まらぬ。されば多少の深淺巧拙はあつても、皆漢學を修養し、漢文を以て公文書を作成し、記録を整理した。中將でも新中將でも、その他の殿上人や六位藏人でも、今日から見れば、皆相應の漢學者である。行成は辨官を長年月勤めてゐた位で、斯道の選手である。「おい此君」が、かういふ環境で、かういふ人達によつて、より以上に喝采を博したことを記憶せねばならぬ。

この文、暗闇から牛といふ具合に、唐突から唐突に、事實を展開させてゆく手際は、實に旨いものである。層一層寄せる波動に、脈が躍る。

百十九段

(口體)
圓融院の御一周忌の年、イべての人が御

圓融院の御はての年、皆人御服ぬぎなどとして、あはれなる事を、おほやけより始めて院の人も、「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨いたく降る日、

喪服を脱ぎなどして、哀な事であるのを、禁中から始めて院に奉仕の人達も、遍昭が花の衣になど詠んだ昔の世の御事など思ひ出すに、雨のひどく降る日、藤三位の局に、蓑蟲の様な童が、大きな木の白いのに、立文を付けて、「之を差上げませう」といつたので、取次の女房が、「何處からの御手紙ぞ。今日明日は旦那様の御物忌だから、お蔭も上げませんぞ」といつて、下は閉めたまひの蔭の上の方から受取つて、「かやうにお手紙が参りました」などお知らせ申すけれど、藤三位が「物忌だから見られない」といつて、長押の上に枝のまゝ突挿して置いたのを、翌朝手を洗ひ清めて「昨日

藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の、大きな木のしろきに、たて文をつけて、「これ奉らむ」といひければ、蓑蟲いづこよりぞ。けふあす御物忌なれば、御蔭もまゐらぬぞ」とて、しもは立てたる蔭のかみより取り入れて、さなむとは聞かせ奉れど、三三物忌なれば見えず」とて、かみについさして置きたるを、つとめて手洗ひて、その巻數とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみじげなる手にて、

「これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖。」

と書きたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝることの給はじ。なほ誰ならむ。藤大納言ぞ、かの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これをうへの御前、宮などにとり聞しめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、なほ恐ろしいひたる物忌をしはてむと念じくらしめて、またのつとめて、藤大納言の御もとに、この御返しをしてさしおかせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。

(考異) ○奉れど 原本奉らすとあり。別本による。○なる手 原本なるが手とあり。古本による。○またのつとめて 原本またつとめてとあり。活本による。

○圓融院の云々 圓融帝は一條帝の御父にて、正暦二年二月十二日に崩御。「御はて」は諒闇の御果な

その巻数を」と取
つて貰つて、伏拜ん
であけて見ると、胡
桃色といふ色紙の厚
ぼつたいのを、變な
と思つて、段々あけ
てゆくと、老法師の
甚だ情なきうな筆
蹟で、

これをだにかたみ
と思ふに都には葉
がへやしつる椎柴
の袖(せめてこの
喪服だけでも、故
院の御記念と思つ
て、山里の者は脱
ぎかれたのに、都
では最早脱いで、
花の衣になつたか
知らん)
と書いてある。藤三
位は「呆れる程に口
惜しい仕業である
よ。誰かしたのであ
るか知らん。仁和寺
の僧正であるかし
らと思ふが、僧正は
ふもやこんな事は仰
しやるまい。なほ誰

り。諒闇は當時一年間なれば、こゝは翌三年二月なり。○御ぶく「ぶく」は服にて喪服をいふ。藤衣とも稱す。喪の間は束帶衣冠等、るはみ青鈍等の色を用ゐる、その濃淡を以て喪の輕重を表す。喪葬令の義解に「凡服忌者、爲君、父母、及夫、本主、二年、云々」。○あはれなる事を 最早故院の御名残もなくなると思へば、悲哀を感ずる也。「事を」は事なるをの意。○おほやけより云々「おほやけ」は主上、「院の人」は故圓融院奉仕の人なり。○花の衣に云々 仁明帝の諒闇のはてに、人々の服ぬぎて、或は叙爵しなど喜びあへるを聞きて、僧正遍昭の「皆人は花の衣になりぬなり昔の袂よかわきたにせよ」と詠みし世の御事などを想ひ出すにと也。この歌古今集哀傷に出づ。「花の衣に云々」は、喪服を脱ぎて、花やかなる衣服に着換ふるをいふ。○藤三位 名は繁子。右大臣藤原師輔の四女にて、一條帝の御乳母なり。大鏡道兼の傳に、「女君は故一條院の御乳母の藤三位の腹におはしましたりしを」と見え、道兼の室たりしが、その薨後には平惟仲の妻となれり。○蓑蟲のやうなる 雨中のこと、て蓑着たるを、かく形容せる也。○木のしろきに 白く削りたる木なり。抄に椎柴の枝といひ、眞頼がしろきはスラリとしたる義といへる、皆誤なり。○いづこより云々 これは取次の詞なり。○御物忌なれば 主人藤三位の物忌なれば、敬語を用ゐたり。○部もまるらぬぞ 部もあけぬぞと也。○しもはたてたる部の云々 下の方は閉ぢたるまゝ、の部の上の方をすこし開けて、その文を取入れてと也。○さなむとは聞かせ奉れど さなむ侍るとは、主人藤三位に聞かせ奉れど、の略。「さなむ」は文の來れるをさす。○かみについさして その文は枝のまゝ、長押の上に突きさしての略。○手洗ひて 藤三位がなり。○その巻數とこひて その巻數をこゝにと乞ひおろしての略。巻數と見たる故に、敬意を拂へるなり。○卷數 クワンジユ。クワンズ。依頼によりて經文陀羅尼等を讀誦したる時、その讀誦したる卷數を記して、本寺又は僧侶より、願主におくりたる文書。後世には短冊形に認むることとなれり。貞丈雜記に「是も祈禱の札なり。たとへば



巻 數

だらう。藤大納言は
あの院の別當であ
りなされたから、そ
のなされた事のやう
だ。これを主上や中
宮に早くお聞かせ申
しませうと思ふに、
ひどく待遠だけれ
ど、やはり重い憤の
やうに、陰陽師のい
つた物忌を、果して
しまはうと、その日
は我慢して暮して、
又その翌朝、藤大納
言の御許に、この御
返事をして使にさし
置かせると、すぐに
又向から返事をして、
藤三位の許に置
かせられた。

(口譯)
最初の歌と次の返書

たるをいふ。○いみじけなる手 力なけなる手迹をいへり。○これをだにの歌 歌の意は、せめてこの喪服なりとも、故院の御記念と思ひて、山里の者は脱ぐにも忍びかねたるに、都にては最早その喪服をば脱ぎて、花の衣となりつらんかと也。「これを」は椎柴の袖をさす。「椎柴」は椎のことにて、喪服の染料となる物なれば、即ち喪服の意に用ゐる。「葉がへ」は木の葉のかはる事にて、椎柴の袖を花の衣に脱更ふる事を喩へたり。舊註には、椎に四位をいひかけ、葉がへやしつる椎柴の袖は、藤三位が四位より三位になりたるを擬へたる也とあり。○にわじの僧正のにや 仁和寺の僧正の業にやと也。仁和寺は山城花園の眞言宗の本山なり。この頃の住持は寛朝僧正なり。醍醐帝の皇子敦實親王の三男にて、源雅信の弟、同重信の兄なり。榮華物語に「仁和寺の僧正と聞ゆるは土御門のおとゞ(雅信)の御はらからにおはす」。○藤大納言 公卿補任によれば、正曆三年二月に、藤氏にて大納言たりし人は朝光、濟時の二人、權には道長一人なり。但濟時は中宮大夫を勤務したれば、院の別當は朝光、道長のうちなるべし。○恐ろしいひたる 重大なる慎と陰陽師の勘へたると也。○念じ 我慢するをいふ。○又のつとめて 又の日の早朝 上に「今日あす御物忌」とあれば、その果てたる日の早朝は、翌々早朝なるべし。○又返事して置かせ給へり 又先方より返事をして、藤三位の許に置かせ給へりと也。

それを二つながら取りて、急ぎ参りて、藤三位「かゝる事なむ侍りし」と、うへもおは

とを二通ながら持つて、急いで中宮の御前に参つて、「かうした事が御座いましたと、丁度主上も居られる御前でお話し申上げられるのを、中宮は一向何氣ない御様子で御覽なされて「藤大納言の書風ではなくて、法師のであるやうな」と仰になるので、「それではこれは誰の仕業か知らん。物好の上達部や僧綱などは誰であるか。あの人かしらこの人かしら」など覺束なり知りたがりなさると、主上は「それはこの邊に見えた物には、大層よく似て居るやうだ」と御微笑なされて、もう一枚御厨子の中にあつたのを取出しになつたので、藤三位がそれを見て、「まあ心愛いこと。この

します御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、藤三位「さは誰がしわざにか。すきくしき上達部、僧綱などは、誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、うへ、「このわたりに見えしにこそは、いとよく似ためれ」と打ちほゝゑませ給ひて、今ひとすぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、藤三位「いであな心う。これおほせられよ。あな頭いたや。いかで聞き侍らむ」とたゞ責めに責め申して、うらみ聞えて笑ひ給ふに、やうく仰せられ出でて、主上御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふ者の供なりけるを、小兵衛が語らひ出したるにやありけむ」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、藤三位「などかくはからはせおはします。なほうたがひもなく、手をうち洗ひて伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまも、いとほこりに、愛敬づきてをかし。さて、うへの臺盤所にも笑ひの、しりて、局におりて、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を誰が取らせしぞ」といへば、しれくとうち笑みて、ともかくもいはて走りにつけり。藤大納言のちに聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

藤を仰しやいませ。あゝ頭痛がする。何でも伺ひませう」と一圖にお責め申してお怒み申上げてお笑ひなさると、主上は「やう／＼眞實の事を仰出になつて、御使に往つた蓑蟲のやうな鬼童は、臺盤所の刀自といふ者の供であつたのを、小兵衛が手なづけて遣つたのかもしれない」など仰になるので、中宮もお笑になると、藤三位が中宮を引動し奉つて、「何でも私をお欺しなされませ。私はやは、疑ひなく卷數と思ひ込みまして、手を洗つて伏拜しましたことよ」と笑つて残念がつて居られた様も、大層得意げに愛嬌があつて面白い。さて清涼殿の臺盤所でも笑ひ騒いでゐる。

藤三位が中宮の御前に急ぎ参りてと也。○うへもおはします。中宮のおはしますは素よりなる意。○つれなく御覽じて。中宮は一切の事情を御承知ありながら、平氣なる風にて御覽ありてと也。○さば。しからばの意。○すきくしき上達部。このすきくしきは好事の意にて、常に用ゐる好色の意にあらず。○僧綱。僧官の僧正僧都律師、僧位の法印法眼法橋の總稱。僧尼を統轄し、法務を綱持することを掌る。推古帝三十二年に始めて公設せられたり。○それにやかれにや。それにやあらむ彼れにやあらむの略。○見えしにこそは。見えし色紙にこそはの略。○ひとすぢ。一通なり。○いかで聞き侍らむ。「頭いたや」の句を隔て、上の「仰せられよ」を承く。○鬼童。上に「蓑蟲のやうなる童」とあるをさす。蓑蟲のことを鬼の子といへる故か。○刀自。トジ。戸主の義なるが、朝廷にては御厨子所、臺盤所、内侍所等にありて、雜役を勤むる女官なり。禁秘抄に「刀自、御膳宿、臺盤所各別也、衣唐衣袴也、結中、云々」。○小兵衛。女房の名。雪山の段などに見えたり。○疑もなく。下に、卷數と思ひてを補ひて聞くべし。○笑ひの、しりて局におりて。文脈とほらず。假に、笑ひ罵りてあり藤三位は局におりてと補ひて聞くこと、す。○誰が文を。の上、さて童に向ひを補ひて聞くべし。○しれくとうち笑みて。その童馬鹿氣たる様子に打笑ひてと也。「しれく」は痴呆の意。

この段は正暦三年二月頃のこと、主上中宮御腹をあはせて乳母をかつがれた、若い御するびを書いたものである。(主上御年十三、中宮十七、藤三位未詳)

榮華物語、見はてぬ夢の巻に、

二月には故院の御はてあるべければ、天下いそぎたり。御はてなどさせ給ひつ。よの中の薄にびなどはてて。花の袂になりぬるも、いと物のはえあるさまなり。

とあるのは同時の事である。藤三位は一條帝の御乳母であつたので、禁中に局住居をしてゐた。後拾遺集にも「内に侍りける御乳母の藤三位」とある。取次の女房が、「いづこよりぞ」とは問うたが、童の答がない。これを明白に斷つてないのは省筆で、この答のない事が、後來の喜劇の生ずる根元となるのである。使を返した事を書かぬのも、やはり省筆である。

物忌は嚴重なものになると、一寸簾から外を覗いただけでも、生命に關する一大事が出來すると信ぜられてゐたのだから、大變である。早朝手を洗はぬ者は汚いと、草子中にも見えて、洗ふのが通例なのに「つとめて手洗ひて」と斷つたのは、卷數の出でくる禰染である。

卷數は元來白紙一枚に書き、眞直な白木の棒などに付けて、願主に贈るが例で、盛衰記にも「梅の格に卷數つけて各捧けて奉る」とある。胡桃色は巻くと、裏の白い方ばかり出る。それを白い木に付けたのだから、甚だ色なしで、尋常の書簡のやうでもない。これが藤三位の、一途に卷數と思込んだ所以で、乞ひ出たり、拜んだりしてしまつた。然し手に取つて開けて見れば、胡桃色の書簡だから、「あやし」と首をかしかつたので、その先入の想は、老法師の手を想像させる連鎖となつた。

「これをだに」の歌は、「都には」など、いかにも山里から贈つたもの、如く見せかけ、筆蹟も老法師の書風に書いてあつた。これが主上の御戲であり、わざとの御筆であるが、作者は果して誰か。この歌を勅撰の後拾遺集に、一條院御製とあるからは、疑もないとすればそれまでだが、いくら御聰明でも、主上は御年がまだお十三で、しかも満では十一歳八箇月であらせられる。ところがこの歌は甚だ老成の口付で、小供らしいたどくしさは更でない。想ふにお側には、お年上の中宮などがお付申してゐるから、所謂口綱語持の格で、擔ひ出されたのではあるまいか。

この頃喪服を染めるのに、櫛の皂の外、椎の皮などを使つたと見える。「葉がへやすらむ椎柴の袖」に、藤三位が諒闇のはてに四位から三位になつたことを擬へたといふ舊註は、一寸面白い。四位、椎の假名こそ違へ、後世頼政の歌に例もあるから、成るべくならさう見たいが、如何せん、この人の三位になつたのは、榮華物語で見ると確とはせぬが、まづこの年六月以後の事らしい。尤も榮華物語とても、事實の誤記や曖昧が多いから、この草子では、寧ろ榮華の記事を従として、事情も自然だし、興味もあるから、舊註に左袒してもよい。

仁和寺の寛朝僧正は七十七の老僧、しかも圓融院の灌頂の師で、崩御の折も、榮華には、「いみじう思し惑ふ」とあるから、いかにもその人らしいが、歌人ではない。もし院の別當の藤大納言かと思當をつけしたのは、圓融院は晩年花園の圓融寺を仙居となされ、院司は常に其處に來往してゐたからである。しかしその返事は何とあつたか書いてないが、多分木に竹の返事だつたらう。

藤三位は二通の書簡を御前に持參して、事件の御報告かたゞ御鑑定を乞ふと、中宮は知らぬ體で、はじめの一通は、藤大納言の手とは違ふ、何でも法師の手と仰しやるので、事件は迷宮に入つてしまつた。餘りじらすのも氣の毒とあつて、主上はこゝにも一通あると、同じやうに書いたのをお見せになつた。これは下書したかきの分でもあらう。それですつかり底が割れてしまつた。その藤三位のくやしがつた詞の混線具合が、なか／＼面白い。

使から足が付いてはと、刀自の童を語らつたのは、例の飄輕者の小兵衛であつた。主上を只責めに責申してくやしがり、「宮も笑はせ給ふ」で、ぐるになつてなされた事が露顯したので、今度は中宮の御召を攫んで引搖して嫉がる。その打解けた無遠慮な言行は、とてもお乳母でなくては、否たゞのお乳母では出來ぬ藝當である。「引搖し奉りて」の一句は、よくこの藤三位の態度を表現し得たものである。

藤三位は自分の局に下りて、この鬼童を探し出して、手紙を受取つた女房に見せると「その童で御座いますやうです」といふ。誰の手紙を誰がお前に渡したぞ」といふと、童は馬鹿げたやうに笑つて、何ともかともいはないで逃げてしまつた。藤大納言は後にこの事を聞いて、笑つて面白がりなされた。

次に見せて、書簡の來由を調べにかゝると、童も打笑みて逃げてしまふ。藤大納言も傳聞して笑ふ。まことに天下泰平な可笑しな物語である。

藤原仲文集にも、「これをだに」の歌があつて、四句が「かへやしつらむ」となつて居り、

惜まれば衣のうらに掛けて見む玉のきすとやならむとすらむ

といふ仲文の返歌があるが、懸歌に出あはぬ。全然別な時の歌と見える。

百二十段

つれづれなるもの 所さりたる物忌。うまおりぬ雙六。除目につかさ得ぬ人の家。雨うち降りたるは、ましてつれづれなり。

釋 ○所さりたる物忌 常の住所を去りて、山寺などに住きて物忌するをいふ。○うまおりぬ 「うま」は駒なり。双六は賽目の數によりて、駒を進行せしむ。「うまおりぬ」は思ふ賽目の出ですして、駒を動かすことの出來ぬをいふ。双六の名稱におりはなどあるも、これに出でたるならん。うまを賽目と解し、又禮記の投壺の註など引ける解はいかゞ。抄には目おりぬとあり。○雨うち降りたるはまして 雨日は種々の場合よりもまして退屈ぞと也。除目に司を得ぬうへにまして雨うち降りたるはと、上に續けて解ける註は誣ひたり。

評 これは餘り珍案がない。評はおかう。

百二十一一段

つれづれなるもの 物語。碁、雙六。二つ四つばかりなるちここの物をかしういふ。又、いとちひさきちこの物語したるが、笑みなどしたる。くだもの。男のうちさるがひ、物よくいふがきたるは、物忌なれど入れつかし。

釋 ○物語したる この「物語」は赤兒が何か物をいふやうに聲を出すをいふ。紫式部日記に「若宮御物語させ給ふ」とあるを、宣昭の解に「今、と幼き兒の物いふ如くなるを、カタルといへるに當れり。大人の物語とは異なり」。○さるがひ 散樂を動詞に活用せしめたる語。さるがう言を見よ。

評 物語のことはいふまでもない。碁双六はもと／＼支那の遊戯ではあるが、夙くわが上中流社會に流行した。碁は承和の頃には伴雄堅魚、同須賀雄などの上手があつて、御前試合をしたことがあり、天曆の頃の寛蓮法師は碁聖と稱へられた。双六は所謂本双六で、これは圍碁に比すると、短時間に勝負がつくから、殊に一般的に流行したものである。昔の博打は皆これであつたのである。一體勝負事に賭物は必然的の要求なので、碁でも双六でも、皆賭物があつた。それは光仁帝が若い男女を賭け、惟喬親王が小野の宮を賭物に出されたほどの事はないにしても、随分種々な趣向を凝した賭物もあり、負業即ち所課もあつた。普通の場合には、錢を何貫、紙を何帖といふ風に賭けたもので、これを碁手の錢紙といつたものである。

殊に双六となると、博打氣分が強かつたから、奈良時代からも、屢々禁令は布かれたけれど、遂に一片の空文に終つてしまつた。大鏡に、道長と伊周とが、双六を打つ光景を敘した文がある。

(道長)「久しく双六仕うまつらで、いとさう／＼しきに、今日遊ばせ」とて、双六の解めしておし拭はせ給ふに、

(口譯) 退屈なもの 餘所てする物忌。思ふ目が出ないで、駒の動かぬ双六。除目に官職を得ない人の家。いづれも徒然である。雨の降つたのはまして徒然である。

(口譯) 退屈を慰めるもの 小説。碁。双六。三四歳位の乳兒が物を面白くいふ。又甚だ小さい乳兒が語つたのが、笑ひなどしたの。果物。いづれも徒然を慰めるものである。男のおどけて、口輕に喋舌るのが來た時は、人に對面しない物忌の折だけけれど、徒然が慰むから入れたことよ。

——この御博覧は打ちたせ給ひぬれば、二所ながら、はだかに腰からませ給ひて、夜中曉まで遊ばす。——い
みじき御かけ物どもこそ侍りけれ。帥殿はふるき物ども、えもいはぬ、入道殿は新しきが興ある、をかしき様に
しなつそ、かたみに取かはさせ給ひけれど、云々。

左大臣道長と儀同三司の伊周とが、双六で裸體になるなどは、一寸意外であらうが、建保職人盡にも、
博打を裸體に描いてある。こんな風で、主上の御前でも有擲采之戲とか、また殿上に碁手の錢紙を出
すとかいふことが、當時の日録に散見する。そして婦人も碁双六を弄んだことは、源氏物語やその他の
諸書に散見してゐる。

菓物は盛に賞美されたもので、紫宸殿前の橘を枝ながら折つて、公卿達が食つたこともあり、延喜式
にも、諸國から貢進の菓物に、

栗子、桃子、梨子、柿子、菱子、菑子、郁子、覆盆子、楊梅子、榛子、橘子、柑子、棗子、瓜

などの名が見えてゐる。これらを饗宴の肴に用ゐることは素より、二食の腹ふさげに、甘物や餅よりも
簡單で世話なしだから、間食として珍重され、酒の肴にもされた物である。

緑兒がまはらぬ舌で話すのも、赤兒のカタリながら打ゑむのも、婦人殊に清少の好みである。冗談者
で話上手な男は、物忌の謹慎を破つても、來れば入れるといふに、いかに歓迎の意を表してゐるかわか
らぬ。それ程にまた、物忌は退屈なものであつた。

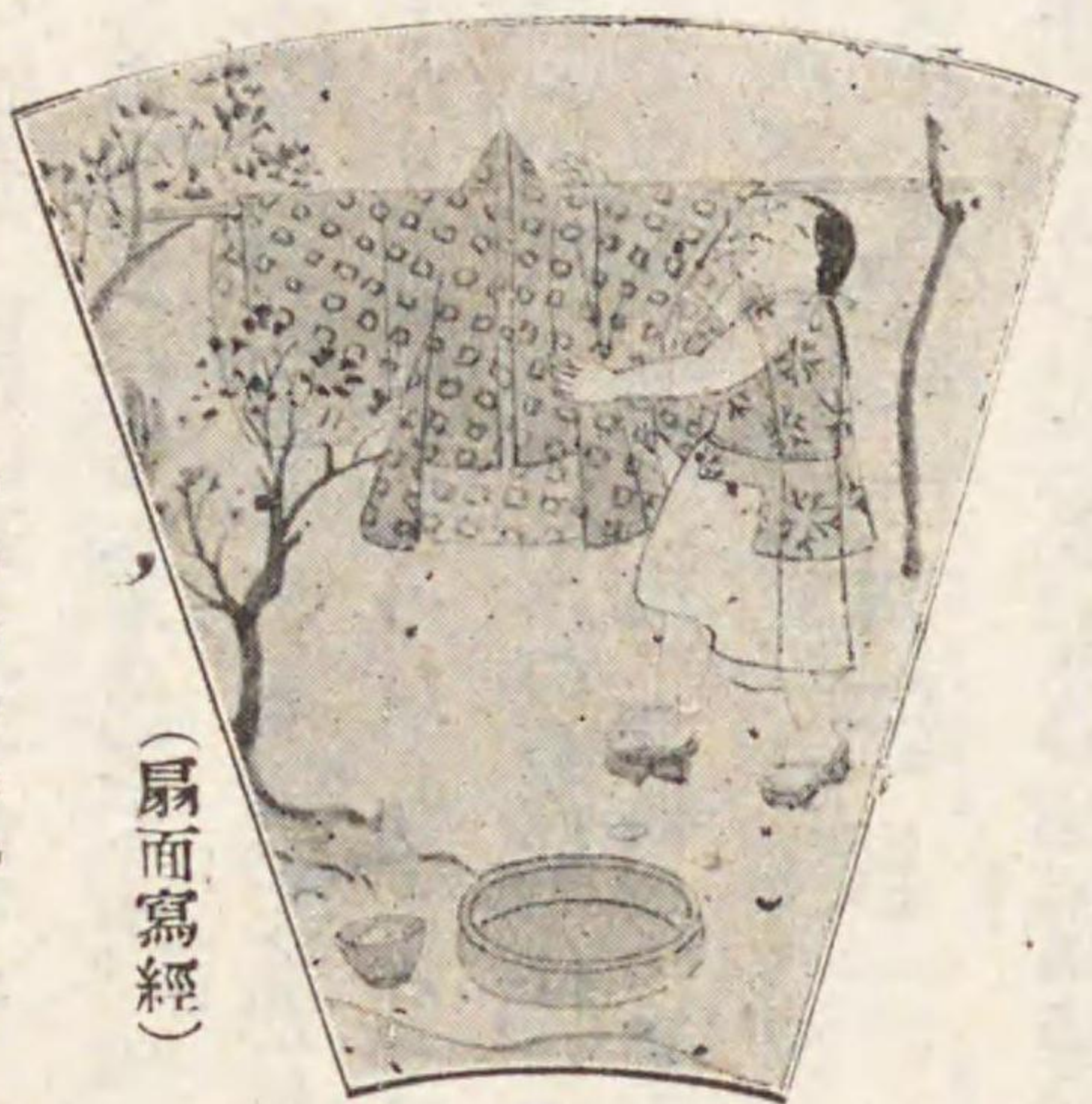
百二十二段

取りどころなきもの かたちにくげに心あしき人。御衣編糝のぬれたる。これい
みじうわるき事いひたると、よろづの人憎むなる事として、今とぞむべきにもあらず。

(口譯)
取得のないもの 答
祝の能く心わら

又、あとびの火箸といふ事、などてか。世になき事ならねば、皆人知りたらむ。げに
書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草子を見るべきものと思はざりしか
ば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はむ事のかざりを書かむとてありしなり。

○みそひめの云々 「みそ」は御衣、「ひめ」は和名抄に糝糝とありて、今の姫糊のこと。姫糊に水が入
つて濡れたるは、折角糊を付けて、切地を固くせんとする效な
ければ也。○これいみじう云々 取處なき者として、人の上又



洗 は何やかや書出すは、甚だわるき事いひたりと、多くの人の憎
むとて、今更中止さる、ものにもあらずと也。「これ」は上の
二件をさす。○あと火の火箸 「あと火」は後火の義、前火(名
目抄に出づ)に對したる名稱にて、前火は迎火、後火は送火に
當る。魂祭などに最初に焚く火は前火にて、最後のは後火なる
べし。棺を送出す時に焚く火を限りていふは事狭し。○など

てか の下、書かざるべきを略けり。「不吉の事なりとも、事實ある事なれば、書かではあらねず」の意
を含めり。○見るべきもの 人がなり。○書かむとての下、書きてを略けり。

評 心も容貌も兩方ともわらくてはとは、平凡ながら尤もの話である。當時染色裁縫は必須の女紅として、
上流婦人も習得したものであるが、それは皆新調の物で、古物の洗張に糊打をするなどは、この人達の
夢にもしなかつた事と見える。そんな事をいふさへ羞かしいとしたらしい。貧乏な卑官の者や下衆など

い人。御衣編糝のぬ
れたの。これは甚だ
悪い事をいつたと、
一般の人が厭がる事
だといつて、今更中
止すべきでもない。
又後火の火箸といふ
事、厭な物だけれど、
取得もない物の中
に、何で書かずに置
かう。世間のない事
ではないから、皆の
人が知つて居よう。
こんな事はほんに書
出して人の見るべき
事ではないけれど、
この草子を見れば、
べき物と思はなかつ
たから、變な事をも、
厭な事をも、只自分
が心に思はう事のあ
りたけを、書かうと
思つて書いたのであ
る。

がやつた事は、古物語や古繪畫などに多く散見する。

前火を扱つた火箸は、なほ後火に使用する機會があるが、後火の時の火箸は、もう他に使ひ道もなく、ほんに始末に困る。これは取處なきものとしての「後火の火箸」といふ諺が、この頃あつたのであるまいか。火箸といふこととある餘所々々しい口氣で、さう推察される。とに角、あまり縁喜でもない物を持つ出したものと、今の我々でも思はれるから、當時にあつては、讀者が必ず不快に感じたらう。況や婦人の讀者では殊に甚しかつたらう。それ故どくといひ譯をしてゐる。さればもとは、御衣ひめの項ぐらゐで終つてゐたものだらう。

「この草子を見るべきものと思はざりしかば」の口吻によると、書留めた分が、何時か人目に觸れて、とかくの批判があつたと見える。で多少昂奮氣味でいつてゐるのだらう。源經房が世上に流布させたといふのは、この草子の全部ではなくて、中途の草稿であつたらうと思ふ。

百二十三段

なほ世にめでたきもの 臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらむ。試樂もいとをかし。春は空のけしきのどかにて、うらくとあるに、清涼殿の御前の庭に、かもりづかさの、疊どもを敷きて、使は北向に、まひ人は御前のかたに。これらは僻おぼえにもあらむ。

（考異）○北向に 原本北面にとあり。○ひがおぼえ 原本ひが事とあり。以上古本による。

（口譯）やはりすぐれて結構なもの 臨時の祭の主上の御前の儀式ほどの面白い事は、何事にあらうかい。試樂も大層面白い。石清水の臨時の祭、春は空の景色が長閑で

うらうらとしてゐるに、清涼殿の御前の庭に、掃部司が疊どもを敷いて、祭の勅使は北向に、舞人は主上の御前の方に向いて著座する。これらは私の覚えちひでもあらう。

（口譯）藏人所の衆達が、衝重などを取つて、公卿などの前毎に据渡し、陪従もその日は御前に出這入するぞよ。公卿や殿上人は代る／＼盃を擧げて、最後は屋久貝といふ物で飲んで座を起つ。そこで取食といふ事をするが、男のするのですら感心

臨時の祭 賀茂は十一月下の酉の日、石清水は三月中の午の日に行はる。○お前ばかりの事は、主上の御前の儀ほどのめでたき事はと也。御前の儀とは、當日主上清涼殿に出御、まづ御禊を行ひ、御贖物あり、御幣を拜せらる。庭座にて祭の勅使以下舞人陪従等に宴を賜ひ、舞御覽あり、式畢りて、使以下装束を改め列を正して、社頭に參向するを稱す。○何事にかあらむ 「か」は反語。○試樂 社頭にて奏すべき舞曲を、御前にてまづ試むる儀なり。祭の前一二日に行はる。○春は空のけしき云々 これより以下、三月の石清水の臨時の祭の趣なり。○かもりづかさ カンモリヅカサ。カニモリノツカサ。掃部寮。職員令に「掃部司、正一人、掌、薦、席、床、簀、簾、苫、及鋪設、洒掃、蒔、蒔、蒔等事」。大藏省の被官なり。○使は 祭の勅使はと也。おもに近衛の中少將の役なり。○北向に 雲圖抄に、賀茂臨時祭の使の座は北面、石清水の祭の時は南面のよし見ゆ。こゝは石清水の祭なり。北向いかゞ。○御前のかたに 御前の方に向きて著座すの略。

所の衆ども、衝重ども取りて、前ごとに居ゑわたし、陪従も、その日は御前に出て入るぞかし。公卿、殿上人は、かはる／＼盃とりて、はてには屋久貝といふ物して飲みてたつ。即ちとりばみといふもの、男などのせむだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらむとも知らぬ、火焼屋よりさし出でて、多く取らむと騒ぐ者は、なか／＼うちこぼしてあつかふほどに、かろらかにふと取りていぬる者にはおくれぬ。かしこき納殿に火焼屋をして、取り入るゝこそをかしけれ。かんもり司の者ども、疊取るやおそきと、主殿司の官人ども、手ごとに箒とり、砂子

しないものを、御前に女が出て取つた。甚だ見にくい。意外に人が居ようとも氣の付かぬ火焼屋から、人が飛出して、多く取らうと騒ぐ者は、却つてうちこぼして始末すべし。うちに、手輕に一寸取つて往く者には負けてしまふ。旨い物置には火焼屋を使つて、取込むのが面白い。掃部寮の役人が疊を除けるや否や、主殿寮の役人が、手毎に箒を取て敷砂を平にする。承香殿の前の邊で、陪從が笛を吹いて、拍子をとつて奏樂するのを、早く出て來ればよいと待つと、「有渡濱」をうたつて、竹の臺の籬のきはに歩み出て、御琴を鳴した折などは、面白くてどうしようかと思はれる

よ。一の舞の舞人が、大層キチンと袖を合せて、二人走り出て西に向つて立つた。次第へ出て來るに、足踏を拍子に合せては、その間に半臂の緒をなほし、冠や袍の領などをなほして、「あやもなき小松」など語つて舞立つたのは、すべて非常に結構である。大輪など舞ふのは、終日見るとも飽くまいと思ふのを、終つてしまふのは甚だ残念であるけれども、又この次の舞があらうと思へば頼もしいに、御琴を昇返して、今度は竹臺の後から舞出て、肩を脱ぎ垂れた様子などの優美さが、甚だ面白い。搦練の下襲の裾などが亂れ合つて、あちこちと入れ違ひなどしたの

ならず。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子うちて遊ぶを、とく出てこなむと待つに、有度濱うたひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせむとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせて、二人はしり出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎへ出づるに、足踏を拍子に合はせては、半臂の緒つくるひ、かうぶり、うへのきぬの領など繕ひて、「あやもなきこまつ」などうたひて、舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。おほわなど舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、はてぬるこそいとくち惜しけれど、またあるべしと思ふはたのもしきに、御琴昇きかへして、このたびはやがて、竹のうしろより舞ひ出でて、ぬぎ垂れつるさまざまのなまめかしさは、いみじくこそあれ。搦練の下襲など亂れあひて、こなたかなたに渡りなどしたる、いで、更にいへばよのつねなり。このたびは、又もあるまじければにや、いみじくこそ果てなむ事はくちをしけれ。上達部などもつぎきて出て給ひぬれば、いとさうくしうくちをしきに、賀茂の臨時の祭は、かへりだちの御神樂などにこそなぐさめらるれ。

(考異) ○して飲みてたつすなはちとりばみといふもの 原本になし。○知らぬ 原本知らぬにとあり。○取りていぬる 原本取りてぬるとあり。以上古本による。○おくれぬ 原本おくれとあり。活本による。○こまつ 原本こまつとあり。必ず誤と覺ゆれば改む。○おほわ 原本おほひれとあり。古本による。

○ついがさね 衝重。折敷の下に檜の剥板を折曲げ、眼象といふ穴をくりあけ、臺を付けたる物にて、食器を載する臺なり。貞丈雜記に「三方、四方、供饗、皆衝重なり。上の臺と下の足を衝重ねたる物なる故にいふ。三方に穴あるを三方、四方に穴あるを四方、穴一つもあけざるを供饗といひ、いづれも同形なり」。○前毎に云々 公卿などのなり。大臣の前には五位二人、公卿の前には所の衆、その參着の度に、舞人陪從のには内藏寮の官人、前から衝重を据置くこと、江次第に出づ。○陪從も 常には御前に出でぬ陪從も也。試樂の儀には、舞人等と同じく陪從の座を設けて、賜饌あり。○陪從 べいじウ。地下の樂人なり。舞人に陪從する義。こは賀茂石清水の祭の時に召さる、東遊の琴笛方なり。○屋久貝といふ物 屋久貝にて作れる盃なり。螺盃と書く。屋久貝は青螺なり。大隅の屋久島より産する故に名づく。一に夜光貝ともいふ。殻大きくて厚く、外は青くて、黒色の斑點あり。磨きて器具に作る。和名抄に錦貝を夜久乃斑貝とよめり。同物なるべし。○飲みてたつ 酒飲みて座を起つ略。○とりばみ 取食の義。或はいはく鳥食の義と。饗饌のあまりを庭に投げて、下衆共に拾はしむるをいふ。今昔物語に、「當初は大饗はてぬれば、取食といふ者をば追つて入れずして、大饗の下をば、その殿の侍共なん食ひける」。○火焼屋 ヒタキヤ。貞丈雜記に「火焼屋は、内裏にも東宮、后宮、齋院にもあり。御所の御庭の明の爲に、衛士といふ官人が火を焼く、小き屋なり。屋に床なくて、地にて焼くなり。云々」。和名抄に、助舗をよみ、「如衛士屋」とあり。こは清涼殿の庭上にある火焼屋なり。○さしいでて 女共がなり。○かしこき納殿に云々 氣の利きたる物置に、火焼屋を充て、と也。取留めて置く場所に火焼屋をして、又出では取るをいふ。「納殿」は納戸物置などの意なり。又「火焼屋をして」を、火焼屋の者をしてと解ける註は非。○かんもりづかさ云々 江次第六に「内藏寮撤饌、掃部寮撤座、主殿掃除」。疊は庭上に敷ける黄端の帖なり。「かんもりづかさ」はかまもりづかさを見よ。○砂子ならず 御庭の砂を

は、いやもう口でいへば尋常になる。今度は又あるまいと思ふからであらうか、終るのは甚だ残なく感ずる。上達部なども使無人等の退出に續いて退出してしまふので、ひどく物さびしく残念であるのに、賀茂の臨時祭は、還立の御神樂などがあるので、残念さも慰められる。

平す。即ち掃除すること。○承香殿の前のほどに云々 承香殿の前は即ち仁壽殿の北にて、露臺、渡殿あり。この渡殿を舞人の座とし、又西砌の壇上を樂屋とすること、古書に見ゆ。○拍子 ヒヤウシ。ハウシ。笏拍子のこと。笏形の板二つを合はせ拍つ。○遊ぶを 管絃を奏するをいふ。江次第六「藏人頭一召、使以下陪從等發物聲」。○うど濱 東遊駿河舞の一節なる有渡濱の曲なり。その歌章は「有渡濱に、駿河なる有渡濱に、うちよする波は七くさの妹、ことこそよし、く」。七くさの妹はことこそよし、逢へる時いささは寐なんや、七くさの妹、ことこそよし。○竹のませ 吳竹の臺なり。「ませ」は笛にて、竹の周圍に結べる籬なり。清涼殿の庭上の東北、承香殿に寄りたる處にあり。江次第六に「藏人所、雜色二人昇御琴、漸進出到吳竹臺下」。○御琴うちたる 所の雜色の二人して昇出でたる琴を、樂人の弾くをいふ。類語抄に、駿河舞、打琴法、求子、打琴法など出でたり。もとその彈法の打つが如くなるによるならん。「琴」は和琴なり。○いかにせむとぞ云々 の上に、あまりの面白さに堪へてを補ひて聞くべし。○一の舞 第一番の舞手。江次第六に「藏人頭奉仰、吳竹臺下定一舞、舞人進舞、駿河舞」とある註に、「一舞二人先進、上藤者出、自露臺南四間、下藤者出、自第二間、拍子之後、次、舞人亦如此」。○西に向ひて 主上のおはします方は西なり。○つぎく出づる 二の舞の次ぎて出づるをいふ。○うへのきぬのくび 袍の領なり。盤領の襟なり。○あやもなきこまつ 駿河舞の一節なり。原本の「こまやまはこまつ」の誤寫なり。その歌章は「千鳥ゆるに、濱に出で遊ぶ千鳥ゆるに、あやもなき、小松がうれに、網な張りそ」とあり。「あやもなき」は、千鳥ゆるに網を張る仕業を誂れるにて、理りなし、ヤクタイモナイの意なり。然るに舊註新註ともに、これを曲節なきの意とし、こまやまに、催馬樂の「山城の狛のわたりの瓜作云々」とあるを引けるは誤れり。且賀茂石清水とも、祭事に催馬樂を奏することなし。○おほわ 大輪にて、駿河舞の舞の手振の名稱なり。原本に「大ひれなど舞ふは」と

ありて、大比禮の後に、求子の舞あるやうに聞ゆるも、さる例なし。求子の後に大比禮を奏して終るを例とす。江次第に「舞畢、求子、舞人自下退返、大比禮後、使舞人退出」とあり。諸註非なり。○果てぬること 駿河舞の果つること、すべし。○又あるべし 又舞あるべしの略。舞は求子の舞なり、抄に還立のこと、註したれど、南祭には還立なきこと本文にも見ゆ。○頼もしきに の下、思ふが如くを補ひて聞くべし。○御琴かき返して 駿河舞終りて、一旦昇出でたりし御琴を、再び昇戻してと也。○竹のうしろより舞ひいでて 吳竹の臺の東より、求子を舞出でてと也。殿上より見れば、「うしろ」は東に當る。江次第六に「舞人自下退返到竹臺東、次右祖進舞、求子」。○ぬぎ垂れつる 袍の右の肩を脱ぐ故に、その袖の垂る、也。○下襲など亂れあひて 下襲の裾などの亂れ合ふなり。○渡りなどしたる 曳き延へたるをいふ。○又もあるまじければにや この舞終らば再び舞はあるまじと思ふ故にやと也。○續きて 使舞人等の退出に續きてと也。○かへりだちの御神樂 賀茂祭の歸さに、使舞人等再び禁中に参りて、神樂を奏するをいふ。公事根源に「社頭の儀果て、使舞人かへり参りて、還立の儀あり、云々。出御ありて、公卿めしあれば、簀子長階に候す。壁の下に、頭已下就きて、使舞人をめす。勸盃ありて神樂あり。庭燎よりはじめて、朝倉、其駒までうたふ。庭火にももろ歌あるべければ、人長作法あり。御神樂はて、祿あり」。



東遊の圖

(口譯) 庭火の煙が細く立上つた所へ、神樂の笛が面白く響へて細く澄渡つてゐる時に、歌の聲も大層あはれに、ひどく面白く、空も寒く氷つて、打衣も大層つめた、扇を持つた手の冷えるのも知らない。人長が才の男を呼んで、オの男が飛んで来たのも、人長の愉快さうな事など思ふと、甚だ面白い。里に居る時は、使や舞人達の只通過するのを見るのでは満足しないので、御社までついて往つて見る時もある。大きな木の下に車を据ゑてゐると、松明の煙が靡いて、半臂の緒や衣裳の光澤も、火影で見るのは、晝よりは非常に引立つて見える。社の御前の橋板を踏鳴

庭燎のけぶりのほそこのぼりたるに、神樂の笛の面しろうわなつき、ほそく吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじく面しろく、寒くさえ氷りて、打ちたる衣もいとつめたう、扇もたる手のひゆるも覺えず。ざえのをのことも召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、たゞ渡るを見るに飽かねば、御社まで行き見て見るをりもあり。大きな木のもとに車たてたれば、松のけぶりたなびきて、火のかげに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を踏みならしつゝ、聲合はせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流る音、笛の聲などの合ひたるは、まことに神も嬉しと思しめすらむかし。少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみるに、なくなりて、上の御社の、一の橋のもとにあなるを聞けば、ゆゝしう、せちに物思ひいれじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、更にえ思ひすつまじけれ。

釋 ○庭燎の煙の云々 以下賀茂の還立の夜の様なり。雲圖抄に「立三金輪積薪、官人着膝突、御前庭燎主殿頭役之、或助允勤之、云々」。○打ちたるきぬも わが着たる打衣もと也、かいねり打たせを見よ。○ざえのをのこ 才の男、神樂の歌人なり。雲圖抄裏書に「歌韓神之時、人長立舞、次勸盃、次人長進召才男」。○飛びきたるも 才の男がなり。○人長の心よげさなど の下、思へばを補ひて聞くべし。○里なる時 自宅に下り居る時なり。○たゞ渡るを 祭使や舞人等の通過するのみをと也。○御社まで

して、歌の聲にあはせて舞ふ様子も、甚だ面白いのに、水の流れる音の聲などの合したの、ほんに神も嬉しと思し召すだらうよ。少將といつた人が、年々に舞人になつて、それを結構なことに思ひ込んで居たのに、死んでしまつて、その亡霊が上の御社の一の橋のもとにとまつて居るのを聞くつと、氣味が悪くて、むやみと物に執着しまはりと思ふけれど、やはりこの祭の歌舞の結構な事をば、更に思ひすて得まい。

賀茂の上社までなり。(卅四段挿圖参照) ○松 焚松また續松の略。○半臂の緒云々 舞人のなり。○橋の板を 社の御前の橋板をなり。○神も嬉しと 拾遺集に藤原忠房「珍しきけふの春日のやをとめを神も嬉しと忍ばざらめや」。この引歌なくとも意は通ず。○少將といひける人 官少將にて終れる古人と見ゆ。但上に落字あるべし。固有名詞なくては聞えず。古本頭中將とあるも不完なり。舊註に、實方かとあるは誤なり。實方は清少の情人なれば、「少將といひける人」など、よそくしく書くべくもなし。且實方はその官中將陸奥守なり。○舞人にてめでたきものに 舞人になりてそれをめでたきものにと也。○あなるを その亡霊の今尙あるなると也。これを祀られてある意として、橋本の社のこととするは誣ひたり。○ゆゝしう 忌々しくして、縁喜わろきをいふ。○せちに物思ひ入れじ 甚しく物に執着すまじと也。「せち」は切の字音。○このめでたき「この」は祭の歌舞をさす。女鳥八幡の臨時の祭のなごりこそ、いとつれづれなれ。などて還りてまた舞ふわざをせざりけむ。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかづること、くち惜しけれ」などいふを、うへの御前に聞し召して、「明日還りたらむ 召して舞はせむ」など仰せらるゝ。女鳥まことにやさぶらふらむ。さらばいかにめでたからむ」など申す。うれしがりて、宮の御前にも、女鳥なほそれ舞はせさせ給へ」と、集まりて申しまどひしかば、そのたび還りて舞ひしは、嬉しかりしものかな。さしもやあらざらむとうちたゆみつるに、舞人御前に召すを聞きつけたる心ち、物にあたるばかり騒ぐも、いと物ぐるほしく、下にある人々惑ひのぼるさまこそ。人の從者、殿上人な

どの見るらむも知らず、裳を頭にうちかづきてのぼるを、笑ふもことわりなり。

つたのだらう。それをするならば面白からう。内裏に還ると、纏頭を貰つて後の者から退出するの詰らないし、など女房達のいふのを、主上がお聞になつて、明日舞人達が還つて来うならば、召して舞はせうなど仰になる。女房達は「本當で御座いますせうか。舞はせるならばどんなに結構でせう」などと申上げる。これを嬉しがつて中宮様に對しても「やはりそれをお舞はせ下さいませ」と、女房達が集つて申願いだつて、その時の臨時祭に、還つて舞つたは嬉しかった事よ。主上が、あは仰せられても先例のない事だから、よもや舞はせる事はあるまいと油断して居たのに、舞人

を御前にお召になるのを聞付けた時の心持、物にぶつかつる程にあわて騒ぐのも、甚だ氣違ひみて、丁度部屋に下りてゐる女房達があわて、上る有様か、ことに言語道断である。人の従者や殿上人などが、見ることも構はず、腰につける裳を頭に被つて上るのを、人が笑ふの、尤である。

八幡の臨時の祭の云々 女房の詞なり。以下、女房を主にして書けり。○還りてまた舞ふわざ 御社より内裏に還りて復舞ふ業となり。還立の儀をいふ。○さらば 還立のあるをさす。○うしろよりまかづる 後にゐる者より退出すると也。江次第六、途中以後事とある條に「内藏寮以三祿辛櫃昇立小板敷前、次藏人頭以下取祿、先使、舞人、次陪從、内藏官人給入長祿、(正絹)次各退出」。○などいふを、など女房達のいふをと也。○あす還りたらむ 明日舞人等の内裏に還りたらむにはと也。○など申す など女房の申すと也。○うれしがりて 女房達がなり。○それ舞はせさせ給へ 「それは舞人等をさす。古本に、この句の下」と申させ給へなど集りて」とある優れるに似たり。意は中宮様にも、それ舞はしめ給へと、主上に申獎め給へと也。○申しまどひし 「まどひ」は「申す」を強くいへる也。○そのたび この話の出でたる折の臨時祭をさす。○さしもやあらざらむ云々 主上の仰言はあれど、例なき事なれば、よもや舞人召すことはあるまじと油断したるにと也。「たゆむ」は心の弛むをいふ。○下にある人々惑ひのぼる 局に下りてゐる女房達の、そを見むと清涼殿に惑ひのぼると也。○さまこそ の下、をかしけれを略けり。○知らず 構はず、頓着せずなどの意。○笑ふも 人がなり。

南祭北祭の用語を見ても、賀茂石清水の神事は、當時の上下を傾倒し、社會を熱狂せしめた事がわかる。御前の儀は兩社ともあるのに——江次第に石清水にはないとあるのは誤——石清水の特にめでたかつたのは、時が彌生の半で、季候がい、からでもあらう。

「舞人陪從が御前に向つて西向に、祭使は北向に」は、單なる叙事と見てはならぬ。主上は額の間に出御ましまして、御倚子に凭り給ひ、公卿は垣下の座に、殿上人は壁下の座に着き並んだ、その森嚴な威儀と花やかさとを想ふと、その位置の排列一つも、見通すことの出来ぬ大事な鍵を握つてゐる。陪從などは多くは地下の卑官であるのに、罷り出で酒饌を賜るのだから、一寸目につく。一獻から五獻も濟んで、さて屋久の螺盃で祭使以下に進め、銅盞で陪從に進める。こゝで賜饌の一段落がつき、一同挿頭の花を買つて退出、主上入御となる。

内藏寮の役人が賜饌の殘物を撤するのに、下衆共の取食に任せる。食餘りを折に入れてのお土産は、昔にはなかつた。誰も居ないと思ふと、豫て待構へてゐた連中が、火焼屋の陰からヒョッコリ飛出す、取込む。忽ち片が付いてしまふ。「多く取らむとする者は云々に」、競争者の態度が細かく面白く描寫されてゐる。「かしこき納殿」の一句は警語。

掃部の役人が庭上の疊を取片づけ、主殿の役人が掃除する。主上がまた出御になる。大臣大納言が簀子の圓座に著く。長橋には中納言以下參議が著座する。その後側には殿上人が居並ぶ。やがて承香殿の方に樂の音が起る。がなか／＼出て來ない。江次第にも、「漸進出到吳竹臺下」とあつて、可なり手間取れたものと思ふと、「とく出で來なむ」と待つのも、單なる感情ばかりではない。

一の舞が催促される。和琴の鳴るにつれて、舞人は進んで駿河舞を舞ふ。その歌が有渡濱である。抑もこの舞は六人又は四人の偶數舞で、二人づつ一の舞二の舞と出る。宣化帝の世に、駿河の有渡濱に、神女が天降つて奏でたのを、國人道守が、その舞態を模して作つたといふ、奇蹟的傳説に伴つた優長な舞振と、六段四十二句の閑雅悠漫な靜調子と、ごく素朴な郷土的色彩に富んだ歌章とで終始する。これがまた大宮人の生活からは、溜らない程の懐かしさ床しさがあつたので、「あやもなき小松がうれ」までくると、ボツと上氣して、夢幻界に遊んでゐるやうな氣持がする。

事々しきもるこしの樂よりも、東遊の耳馴れたるはなつかしく、面しるく。(源氏若菜上の巻)

これが當時の人の音楽趣味の本音であつた。さて一旦退出と見せた舞人陪従が、竹の臺の陰からまた引返して、片下の曲の間に、舞人は右を肩脱いで、求子を舞始める。この藕断えて絲絶えずの有餘不盡の所作は、當時の人士の最も重んじた気分である。

駿河舞の装束は、細纒、冠、綵に、櫻を冠の右に挿頭し、奴袴をはき、裾を長く曳く。右ばかり脱いだ袍の袖がひらくして、その裾と裾との入亂れた舞態は、「いへば更なり」と讚歎するより外はない。求子の歌は、もと賀茂の最初の臨時祭に、藤原敏行が詠んだ、

千早ぶるかものやしるのひめ小松よろづ代ふとも色はかはらじ。(古今集、大鏡)
を舞ふので、石清水では、かもをかみと歌ひ換へる例であつた。

花やかなあとの寂寥からくる哀愁を、局面轉換の楔子として、「賀茂の臨時の祭は云々」の一句を捻出して、さて下文を展開する筆法は、甚だ面白い。

賀茂の還立の神樂を、まづ庭燎の烟から叙し入つたのは、尤も感興がある。庭燎は神樂の象徴で、舊事記、古語拾遺などの天の岩窟の段に、庭燎を焚いた事が見え、神樂の序開にはこの曲を歌ふなど、神事と離しがたい因縁をもつてゐる。實際神樂は夜分の所作で、清涼殿の庭上の真中に金輪を立て、薪を積んで庭燎を焚く。その烟が細く立昇るのである。調子高に透徹つた笛の音を、「わな、く」と形容したのは面白い。探物の歌から順々に歌ひ續ける。今の我々の耳では、何だか緩慢な眠さうな曲節も、その時代には順應した、印象深い調子であらねばならぬ。廣大な殿舎を背景とした禁庭に、シンと身も引締るやうな笛の音と、霜夜の嚴肅な気分と、神祕的な情調とが合體して、寒さも何も忘れてしまふ。打衣の冷たい感觸は、一寸現代人の思寄らぬ所である。

「才の男ども召して」から、筆鋒は舞人のうへに轉じて來た。一體人長は、神樂の指揮官兼舞人で、甚た得意な役前であることは、「心地よげなるもの」(六十七段)といつたのでもわかる。しかし「人長の心よげさ」を説明するには、まだ不十分だ。江次第によると、東遊及び神樂を奉仕する人数は、

舞人、四位四人——五位四人——六位二人 陪従、四位四人——五位四人——六位四人

とある。人長は大抵六位の近衛の將監級の歌舞専門家なので、卑官でありながら斯道の權威だから、四位五位の舞人陪従を、心のまゝに進退する所に、無限の誇と快さがあることを知らねばならぬ。

才の男は古來明解がない。史に、文武二年、百官職事以上及び才伎の長上に、祿を賜ふとある。この才伎はこゝにいふ才で、頼才の諧戲を稱するのである。さればその演戲者は、即ち才の男だらう。江次第に、「人々令起才試」と、人長が稱へることがある。福富草子の詞にも、「目もあやに才する奴かな」とある。この人長の前で、才の男が諧戲を演じたのが、後世の萬歳才藏の起原となつたらしい。空穂物語、嵯峨院の巻に、才の事があつて、それは物真似である。

皆才名のりす。主人のおと、「仲頼朝臣何の才侍る」。(仲頼)「山伏の才なむ侍る」。「いで仕うまつれ」。(仲頼)「今、づらきのや又」。「行政朝臣何の才侍る」。(行政)「筆ゆひの才なむ侍る」。「いで仕うまつれ」。(行政)「渡り、たき物はたゞ冬毛なりや」。「仲忠朝臣何の才侍る」。(仲忠)「和歌の才なむ侍る。難波津にやある。冬ごもりの頃ぞや」。「仲澄何の才侍る」。(仲澄)「渡守の才なむ侍る。あな風早の夜や」とて、被き渡り、皆入りぬ。

これに宇治拾遺の「ふりちふふぐりを、ありちふあぶらん」と、庭火を走り廻る家綱の趣向などで、略見當が付かう。これが即ち散樂である。

里居の時は、御前の儀も還立も見られないので、口惜しさに行列の後に附いて、上の社まで往つて見るといふのに、ひどく祭気分にあくがれた趣が見える。もし筆者が男であり、時が晝間であるならば、それが何でもないことを考へねばならぬ。「見る折もあり」から、社頭の光景に移つてゆくのも面白い。上社に使舞人の一行の到着する頃は、もう日暮である。松明を振つて東遊が奏でられる。その火影に

半臂の緒と衣とのつやを映出させたのに、いかにも冷やかな夜分の氣持がよく出てゐる。神山をうしろに控へた、森嚴な御社を背景として、老樹の蔭を流れる御手洗川の橋板を舞臺に、舞人は東遊の袖を飄す、陪従はせ、らぎに笛の音を吹き合はせる。自然と人事との調和の美は、實に言語道斷、「神も嬉しと覺すらむ」の裏面には、清少自身がまづ感動した趣が現れてゐる。

そこで少將といふ舞人の執着心の恐ろしさを物語る順序となつて、こんな亡靈話の頗る多かつた當時には、眞劍にかう執着してはと自省する理性も起つたらうが、さて「物のめでたきはえやむまじ」と、上にもいつてゐる通り、そこにあきらめの附かぬ所が、興趣に活きる清少の性格の面白い一面である。

一條帝時代は歌舞の復興期で、神樂催馬樂の曲譜も、大に整理されたことは、六十三段で評した通りで、一般に音樂趣味が高潮に達した時代だから、樂的趣味に了解をもつ婦人として、宮仕の女房として敏感な清少として、どんなにか音樂が興味をそ、つたが知れない。殊に注意すべきは、外來の雅樂の男性的なのちがひ、わが邦固有の優長な駿河舞や神樂は、餘計に婦人には親みが深いので、清少のかうまであくがれたのも、無理はないと點頭かれる。

この文三月半の長閑な晝間に行はれる石清水の御前の儀と駿河舞と、十一月の末の物すさまじい夜分に行はれる賀茂の還立の神樂と社頭の駿河舞とを對照して、極力そのめでたさを書いたもので、結末少將の小話を引いて、自分の物めでの感想を叙し、題目の「なほ世にめでたきもの」に顧應させてゐる。

神樂は毎年十二月内侍所で、主上の御前行はれ、表奥の女房達も、溫明殿の渡殿や綾綺殿の簾中で、陪觀を許されるのだから、何も珍しい譯もあるまいに、女だてらに上賀茂まで、夜神樂を見に往つたり、石清水には還立がないとて寂しがつたりする。いくら見ても見飽かぬものと見える。殊に石清水のは、現に使から舞人陪従の全部が、内裏に還つて祿など頂く癖に、舞がないのだから、遺憾の情が深いのである。

ある。

石清水に還立のない理由のわからぬことは、本文にも書いてあるが、想ふに賀茂の方は内裏から路も近いが、石清水となると、大に遠方なのに、前日出向いて、終夜社頭で舞つて、又早朝京に歸り、仕度を仕換へて、又禁中にくるのだから、疲勞が甚しい爲、還立がなかつたのではあるまいか。しかし勸盃と祿を賜ふことだけはあつた。

一條帝は御氣實がおやさしくて、音樂者で入れられたから、女房達の斯道の希望は、すぐ様お取上げになつたらしい。中宮におせがみ申したのは、中宮が主上に對して四歳もお年上で、すべて御後見御教導の地位に立たせられ、その御一言は有力な効果があつた爲と想ふ。

「あしもやあらさらむ」から以下は、前文に一旦「嬉しかりしものかな」と結んだのを、更に立返つて、その折の事實を細叙したのである。先例の無い事だから、よもやと思つて油斷して居たので、そのあわて方は一倍だ。人の従者は、弘徽殿の屏際などに躰居んで、主人の歸を待つてゐる連中で、殿上人は、そこ、にぶら／＼してゐる、今日の所役のない人達である。その中を恥も外見も忘れて、后町のおのが局から、清涼殿まで驅出してくる。とても衣裝を調へてゐる暇も何もなく、周章てふために參る態が、「裳を頭にうち被きて」の一句に、深く象徴される。しかも裳をかぶつたのは、顔を隠す爲であつた。こんな一寸した一時の興趣が動機で、石清水の還立は、この以後例年行はれる事とはなつたが、實際の不便は如何ともし難いと見えて、鎌倉末期には、また還立はなくなつた。

百二十四段

故道隆公の御座りしに、露を御覽せむとて、こと更に「と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。女房御里居、いと心憂し。かゝる所に住居させ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。いさ、人のにくしと思ひたりしかば、又にく、侍りしかば」といらへ聞ゆ。左中將、おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

故殿などおはしまさず、世の中に事出で、物騒がしくなりて、宮またうちにも入らせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおぼつかなさぞ、なほえかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮にまゐりたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の装束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしようても侍るかな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、しをん、萩などをかしよう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、左中將「なかこれしをん、萩などをかしよう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、左中將「なかこれは茂りて侍る。はらはせてこそ」といひつれば、「露おかせて御覽せむとて、こと更に」と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。女房御里居、いと心憂し。かゝる所に住居させ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。いさ、人のにくしと思ひたりしかば、又にく、侍りしかば」といらへ聞ゆ。左中將、おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

○故殿 道隆公。○事出でき 花山法皇を射奉りし罪によりて、長徳二年四月廿四日、伊周は太宰権

の御座りしに、露を御覽せむとて、こと更に「と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。女房御里居、いと心憂し。かゝる所に住居させ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。いさ、人のにくしと思ひたりしかば、又にく、侍りしかば」といらへ聞ゆ。左中將、おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

帥、隆家は出雲権守に貶せられ、尋いで中宮定子は御落飾、尼とならせ給ひし事をさす。○小二條といふ所 中宮の里第として、正暦三年十一月に落成せし二條院の事なり。簾中抄に「二條東洞院又山吹殿」とあるとは別なり。又活本に「小二條」とあるもわろし。○何ともなく云々 何といふ事もなく面白からざりしかばと也。清少が道長の方に意を通じたりと、讒言せし者ありての事なるべし。下にも「左大臣殿云々」とあり。○御前わたり云々 中宮の御事氣にか、れば、やはりかく里居のみしてはあままじく思ふと也。○左中將 當時左中將二人あり。藤原齊信と同正光となり。長徳二年の秋は、齊信は參議、正光は藏人頭なり。古本に右中將とあるに從へば、源宣方、源經房のうちなり。いづれか。○黄朽葉襲の色目にて、表裏とも朽葉の黄ばみの勝ちたる色なり。梔子に茜又は紅をませて染む。○うす色 薄紫色。○しをん 紫苑。表は薄色或は濃蘇枋、裏は青。又一説に表蘇枋、裏萌黄と。○萩の下、衣などを略けり。○拂はせてこそ の下、あるべけれを略けり。「拂はせて」は取らせてなり。○こと更にの下、拂はせ給はぬなりを略けり。○御里居 清少の引籠りて里住したるをいふ。以下女房の詞。○かかる所に云々 かゝる里第などに、中宮の住ませ給はむ程はと也。○いみじき事ありとも 身の上。○かひもなしき出来事ありともと也。清少のことなり。○さぶらふべき者 祇候する筈の人となり。○かひもなくの下、なか参らぬを略けり。○あまたいひつる 數多女房のいひつるは略。○聞かせ奉れと云々 この趣を貴女に聞かせ申せとて、しかいひたるなめりと也。○露臺 屋根のなき臺。樂の臺、涼臺などの類、雨ざらしなる處なり。「露」はあらはなる義。○ぼうたん 牡丹の音の訛。○唐めきをかしき事 の下、よの歎辭を略けり。○いさ人のにくしと云々 「いさ」は知らずと承くる。人が我を憎しと思ひたりしかば、我もまたその人が憎くなりしかばの略。○侍りしかば の下、参らざる侍りを略けり。○おいらかにも 尋常にも、大やうにもの意。下に、物し給へを略けり。憎しと思ふ人も、大様にも見過

「魔揚にしてお出
笑ひなされる。」

（口説）
分をどう思召して、自
らせられぬ御氣色にては
なうやうな御氣色にては
祇候する女房達か、
少納言は左大臣殿の
方の人と都合すき
又集つて話などする
折ら参る私下見
は一人を話さし
私一人を話さし
騷れず惜みの見
宮様から参れど
ある捨ごとの仰言
に久しく時日の経
たの者を、中宮の
方にあつては、無
の事もある何の時
なく中宮の仰言
もなくて中宮の仰
或は疑心細くも
る物思ひの心細く
長女の手紙を持て
來た女中様から

京の内々下つて、こ
しに來て下つて、こ
ひそする傳はなされ
ある仰言はなされ
紙を披いて見ると
紙のなはら何と書
包の花びら一つ吹
そふむらにお書き
に思ふぞとお書き
見ると、非常にお書
なく、數日來御消息
も慰めて、心配され
いづれか、涙をこ
もはる様子を、中宮
もはる様子を、中宮
何は通つて、中宮
言をお思ひ出さず
出仕の思ひ出さず
つて、誰か怪しかり
ん御居だとはかり
思つて、お出なさる
何で出仕なさる
へ、私はいさな近
又、参りませう、近
つ間に、御返事を、

し給へと也。

げにいかならむと思ひ参らす御氣色にはあらで、さぶらふ人達の「左の大殿のか
たの人しるすぢにてあり」などさゝめき、さしつどひて物などいふに、下より参る
を見てはいひ止み、放ち立てたるさまに、見ならはずにくければ、「まるれ」などある
たびの仰をもすぐして、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、只あなたがたにな
して、虚言なども出で來べし。例ならず仰ごとなどもなくて、月ごろになれば、心
ぼそくて打ちながむるほどに、長女文をもて來り、長女御前より左京の君して、忍び
て賜はせたりつる」といひて、こゝにてさへひき忍ぶもあまりなり。人づての仰ご
とにてあらぬなめりと、胸つぶれてあけたれば、紙には物も書かせ給はず、山吹の
花びらを、たゞ一つ包ませ給へり。それに「いはて思ふぞ」と書かせ給へるを見るも
いみじう、日頃のたえ間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長
女も打ちまもりて、「女房御前にはいかに、物の折ごとと思し出で聞えさせ給ふなる
ものを」とて、誰もあやしき御長居とのみこそ侍るめれ。などか参らせ給はぬ」など
いひて、「こゝなる所に、あからさまにまかりて参らむ」といひていぬるのちに、御返
事書きて参らせむとするに、この歌のもと、更に忘れたり。いとあやし。同じふ

る言といひながら知らぬ人やはある。こゝもとに覺えながら、いひ出でられぬは
いかにぞや」などいふを聞き、ちひさき童の前に居たるが、「下ゆく水の」とこそ
申せ」といひたる。などてかく忘れつるならむ。これに教へらるゝもをかし。

○けにいかならむと云々 中宮は實にいかに自分を思召さるゝならむ、おのれを疑はせ給はずと、
懸念せらるゝ如き御氣色にてはなくて也。以下は、侍人達の清少を惡める理由をいへり。○左の大
殿 ヒダンノオホイドノ。左大臣をいふ。こゝは道長のこと。長徳二年七月二十日任官。○しるすぢ 知
る筋。縁故あるをいふ。○しもより参るを わが下の局より御前に参るを也。○放ちたてたる様に 取
除けたる様に也。○相手にせぬをいふ。古本には「放ち出でたるけしきなるが」とあり。○見ならはず
見馴れずと同じ。○あるたびの ある度毎のと也。古本には「度々ある」とあり。○過ぐして 聞過ぐ
してと也。○宮のへん 「へん」は邊の字音。草子中、ほとりに邊の字をあてたる本ま、あり。中には邊
の字を書きて、ほとりと傍訓をつけたるもあり。こゝもほとりと讀まするつもりにて、邊の字を書きた
るなるべし。○あなた方になして 敵方になしてと也。下にも「あなたの人」とあり。○心細くて云々
中宮までもおのれを疑はせ給ふにやと思へば、心細くて物思してある折にと也。○左京の君。中宮の女
房。傳未詳。○忍びて賜はせたりつる の下、御文にて侍りを略けり。○ひき忍ぶ 「ひき」は接頭語。
○人づての仰ごとにて云々 仰言を右筆に書かしたる御文にてはあらぬ様なりと也。御直筆の御文な
るをいふ。祕密の御文と解くは違ふべし。○山吹の花びらを 口無しの意を寓せたり。山吹の花は山梔
色なればなり。古今集、雜體に「山吹の花いろ衣ぬしやたれ問へど答へすくちなしにして」など、なほ
證歌多し。○いはて思ふぞ 六帖に「心には下ゆく水のわかかへりいはて思ふぞいふにまされる」に據

た後で、御返事を書
いて差上げようとい
ふの、この「い」は
ての句を、一向に忘
てしまつた。古歌と
思ひな。同じ古歌と
著名な古歌を知らな
い。現在に知りな
ら口には、ひ出され
だの、い、どうした
の、いふ、など自分
童の前に居たの、小
す、水、と申し、下
う、と、いつたか、ど
教へられるのも、面
白

(口饅)

御返事を差上げて、
少し時日を置いて出
仕した。どうかしら
と何時もよりは気が
置かれて、御几帳に
半ば隠れて居たのを
中宮が御覧になつて
「あれは新参者か」
など仰になつてお笑
ひなされて「あれは

れり。さぞともいはず思ふは、即ち口無しの意なり。○日頃のたえ間 數日來中宮よりの御消息の絶え
たるをいふ。上に「日頃になれば心細く」とあるをさす。○まづ知るさまを まづ涙の知るさまをと也。
中宮の有難き思召に、まづ嬉し涙のこぼる、をいふ。古今集、雜下に「世の中のうきもつらきもつけな
く、まづ知るものは涙なりけり」とあるに據れり。○御前にはいかに物の折毎に云々 中宮には如何ほ
どか、何かの折節ごとに、清少を思し出さる、ものを、清少の参らぬはいかゞと也。これは或女房の語
れるを、長女の語りつぎたる也。○誰らあやしき御長居云々 怪しからぬ清少の長き御里居よと、誰も
思はる、やうなりと也。○こゝなる所に そこゝの所にと也。○あからさまに云々 一寸そこに往き
てまた参らむと也。長女がまだ所用あるさま也。この句の下、それまでに御返り物し給へを補ひて聞く
べし。○この歌の本 「いはば思ふぞ」の歌の上句なり。歌の末を見よ。○こゝもとに覺えながら云々
現在に知りながら、口に出で來ぬは如何なる事ぞよと也。○下ゆく水のとこそ申せ 下ゆく水のとこそ
その歌の本を申せと也。

御返り参らせて、少しほど經て参りたり。いかゞと、例よりはつゝ、まじうて、御几帳
に端がくれたるを、寫あれは今まありか」など笑はせ給ひて、寫にくき歌なれど、こ
の折は、さもいひつべかりけりとなむ思ふを、見つけては、しばしえこそ慰むまじ
けれ」などの給はせて、かはりたる御氣色もなし。童に教へられし事など啓すれば、
いみじく笑はせ給ひて、寫さる事ぞ。あまりあなづるふる言は、こさもありぬべし」
など仰せられて、ついでに、寫「人のなぞ」合しける所に、かたくなにはあらで、

氣に入らぬ歌だが、
あの場合にはさうも
はればならなかつた
と思ふものを、お前
を見ないで、暫く
もわが心は慰むこと
が出来ないやうであ
る」と仰になつて、
何時もと變つた御様
子もない。子供に歌
の上の句を教へられ
た事などを申上げる
と、中宮は大層お笑
ひなされて「さもあ
る事ぞよ。知れきつ
てあまりに輕蔑する
古歌などは、さやう
に忘れもするのだら
う」など仰になつ
て、そのお話し序に
「人が謎々合をした
所に、下手ではなく
て、そんな事に功者
であつたものが『左
の一番は私がいひま
せう。さやうに思ひ
なさい』などいつて
頼みにさせるので、
打任せたとてまづい

さやうの事にらう／＼じかりけるが、功者「左の一番はおのれいはむ。さ思ひ給へ」な
ど頼むるに、さりとともわろき事はいひ出でじと、たのもしく嬉しくて、皆人作りい
だし選り定むるに、左「その詞を聞かむ。いかに」など問ふ。功者「たゞまかせて物し
給へ。さ申しては、いとくち惜しうはあらじ」といふを、げにと推しはかる。日いと近
うなりぬれば、右「なほこの事の給へ。ひざうにをかしき事もこそあれ」といふを、
功者「いさ知らず。さらばな頼まれそ」などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、
その日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人などよき人々多く居並みて、合
はするに、左の一番に、いみじう用意してもてなしたるさまの、いかなる事をかい
ひ出でむと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、「な
ぞなぞ」といふほど、いと心もとなし。功者「天にはり弓」といひ出でたり。あなたの方
の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物も覺えずあさまじうなり
て、いとにく、愛敬なくて、あなたによりて、殊更に負けさせむとしけるをなど、か
た時のほどに思ふに、あなたの人をこに思ひて、うち笑ひて、「やゝ。さらに知らず」
と口ひき垂れてさるがうしかくるに、功者「籌させ、く」とて、さゝせつ。右「いと怪し
きこと。これ知らぬもの誰かあらむ。更に籌さすまじ」と論ずれと、功者「知らずとい
ひ出でむは、なぞてか負くるにならざらむ」とて、つぎ／＼のもの、この人に論じ勝た

せける。『いみじう人の知りたる事なれど、覚えぬ事はさこそあれ、何しかは、え知らずといひし』とのちに恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なる限は、「さは思ふべし。くちをしく思ひけむ。こなたの人の心ち、うち聞きはじめたりけむ。いかににかりけむ」など笑ふ。これは忘れたる事かは、皆人知りたる事にや。

（考異）○申しては、原本申してとあり。○うち聞きはじめ、原本聞し召しとあり。以上古本による。

○にくき歌なれど、面白からぬ歌なれどと也。○見つけでは、清少を見付けではと也。○慰むまじけれの下、さるを今逢ひたるは嬉しの意を補ひて聞くべし。○人のなぞく合、以下中宮の御談話なり。○かたくなにはあらで、下手ならぬをいふ。「かたくなは下手に固りたるをいふ。○らうく」だかりけるが、勞々じかりける人がと也。「勞々じ」は功者なるをいふ。○左の一番は云々、この人は左組なれば也。○さりともわろき事は云々、左方の入々の意中なり。「さりとも」はしか打任せおくとも意。○その詞を、その謎々の詞をと也。○たゞ任せて物し給へ、只おのれに任せて置き給へと也。○さ申してはしか任せよと申しての上はと也。○ひさうにをかしき事も云々、非常に可笑しき事あるかも知られねば、やはりその謎をいひ給へと也。豫め打合はせ置くがよからんと思ふ故也。○方人の男女居わけて、方人の男女を、右の方左の方と居所を引分けてと也。「方人」は最負の人なり。○あなたの人もこなたの人も、敵方即ち右方の人も、身方即ち左方の人もと也。○天に張弓、天にある張弓なり。上弦下弦の弓張月をいふ。○いと興あり、これ程の事は誰も知れる極めて卑近なる事とて、右方の方は、この謎は全く身方の勝利と心得て、甚だ興ありと思へる也。○あなたによりて云々、敵方に附きて、わざと此方を負け

その目になつて、皆身方の男女を左右に席を分けて、殿上人など相當な身分の人が多く居並んで、謎々を合せるに、功者が左の一番に、大層用意して、振舞つてゐる様子が、どういふ事をいひ出すだらうかと見えたので、右方の人も左方の人も心配に見つめて「なぞく」といふまでが、甚だ氣がかりである。「天に張弓」といひ出した右方の方は謎がやさしいので勝つたものとして、甚だ面白いと思つてゐるのに、左方の方は途方にくれる程采れて、大層憎く愛嬌なく思つて、あの功者は敵方に附いて、わざと此方を負けさせようとしたのよなど、一寸の間に氣を廻して思

させむとしけるよと也。「を」は歎辭。○をこに思ひて、馬鹿にしてと也。○口ひきたれて云々、口脇を引垂れて、フザケか、るにと也。左方の出題の卑近過ぐるを愚弄する態なり。「口引垂れ」はべそ口をすること。口わきをさへひきたれてを見よ。○籌させく、とて云々、勝のしるしの籌を刺せといひて、籌刺にさ、せたりと也。「籌」は數取の印の物にて、籌刺はその容器なり。花鳥餘情に「歌合に員指とてあるなり。天徳の歌合には、金銀の藤の枝を洲濱にすゑて、員指の所におく。花の枝にて數を取れるなり。○あやしき事、の下、よを略けり。○この人、勞々じかりける人をさす。○さこそはあれ、しか知らずともいひてこそはあれと也。それは據なしの意を含めり。○何しかはえ知らずといひし、知れる事を、何とてえ知らずといひしかと也。「か」は疑辭。○後に恨みられて罪さりける事、謎合のはてたる後に、知らずと散樂ひし人の、右方の人々より恨みられて謝罪しける事と也。「罪さり」は罪去にて、もと贖物など出して、わが罪をはらふより出づ。「人のなぞく、合しける所」より以下、中宮の御詞のやうなれど、「罪さりける事を語りいでさせ給へば」とある續きにて見れば、中宮の御會話を、最初より地の文の體に書きたるもの也。○御前なる限、御前なる女房の限なり。○さは思ふべし、右方の方は、しか恨に思ふべしと也。○こなたの人の心ち云々、左方の方の心持、天に張弓といひ出したるを開始めけむ時、如何に憎かりしならんと也。○これは忘れたる事かは、この話は自分の如く悔りて忘れたる事ならんや、知りて失敗したる事なりと也。○知りたる事にや、の下、あらむを略けり。

伊周兄弟が花山法皇を射奉つた一件は、長徳二年正月十八日のこと、二月八日にはその罪狀が勸發され、中宮は勢ひ宮中に居り難くなつて、三月四日その里第二條の宮に御退出、それでも表面は、御姫姫の爲とあつた。やがて四月廿四日の御兄弟流罪の宣告から引續いて、中宮の御落飾が、大騒動の大詰となつた。出家の後妃の再び後宮に入ることは、例のないことだから、「宮また内にも入らせ給はず」で、

寂しい物悲しいお氣の毒な月日のうちに、夏過ぎ秋來つて、庭草も高く、露も置く頃となつた。そして女房の服装の紫苑および萩は秋の色目、黄朽葉は秋末冬初の色目だから、この段をまづ、長徳二年の仲秋即ち八月頃の記事と見て、差支はなからう。道長の任左大臣も、その七月下旬の事であつた。(中宮廿一、清少卅一二)

中宮のかうした御境遇を見すて、の里居は、清少自身でも心なしの氣はするが、勤向がうたてあるだから、止むを得ない。すると又殿上人等が、「安からずぞ人々いひなすなる」(七十二段)ほど、後を追つて尋ねてくる。左中將もやつてくる。この左中將は誰か。齊信正光二人の中とすれば、齊信の方かとも思はれるが、それなら他段の例にならつて、當時の官職で、宰相中將と書きさうなものといふ疑も起る。

左中將の談話中「いみじく物こそあはれなりつれ」は總括的の語で、女房の裝束、庭草についての宰相の君の應酬、露臺の前の牡丹など、をかしき事が、逐條的に列擧されてゐる。如何なる場合にも屈託しないで、平靜を粧ふのは、當時の貴人の取るべき態度で、女房達を「たゆまずをかしても」侍らはせるのに、中宮の御用意の細やかさが伺はれる。

庭草の高く茂つたのは、實は殿守の伴の御奴さへも、この宮を餘所にして拂はぬからである。それは時世に媚び、權臣の意を迎へての所業である。小一條院が道長の勢威に怖れて、東宮を辭された時も、庭の草もいと深く、殿上のありさまも、東宮のおはしますとは見えす。淺ましうかたじけなげなり。

と大鏡にある。この醜い現實をば、風雅といふ衣に包んで、「露置かせて御覽せむとて殊更に」と答へた宰相の君の心深さは、當時の淑女の理想に適つたもので、いかにもその人柄がなつかしく見える。そのうへこの宮の上臈女房たるに背かぬ、機智の所有者である。元來この人は「瓦の松はありつや」で、齊信の心膽を寒からしめた(七十一段)程の才女である。

牡丹は支那では後魏時代、南亞細亞地方から移植され、隋を経て唐の開元中に至り、頗る愛翫の極に達し、宮中民間、新花を競つて誇つたものである。所謂沈香亭北に名花傾國兩相歡の本事で、一段の光彩を煥發した。こゝに花のない秋の牡丹を、「唐めきてをかしき」など、珍しさに稱へてゐるのを見ると、當時を距ること遠からぬ昔に舶載してきたものらしい。

「いみじき事ありとも云々」は、清少がいかに中宮の御信任を得て居つたかを立證する。その他これを旁證するに足る事實と文字とが、この草子中に遍滿してゐる。そこで女房達が壁訴訟のやうにして、中宮の御本意を傳達させたのだが、例の意地張の清少の事だから、「又憎く侍りしかば」と、反抗的態度に出た餘憤がまだ収らぬので、左中將もこゝ、苦笑の體である。

伊周一門と道長との葛藤は、道隆在世の時からで、その薨後はますます甚しく、互に目をむき合つた。この前年七月太政官で、この叔姪の大衝突があつて、小右記に、

廿四日右大臣(道長)内大臣(伊周)於^テ夜座^ニ口論^シ、宛如^ニ鬪亂^シ、上官及陣官人々隨身等、群^リ立^テ壁^ニ後^ニ聽^ク之^ヲ。

苟も國家の大臣が、宛も鬪亂の如き口論をやつたのだから溜らない。かうなると藤原氏時代の優美な幻影も破壊されてしまふ。伊周としては關白は取られる、官位は超えられる、威勢には壓される。癩に障るから、外祖父高階成忠法師を參謀にして、陰謀やら呪詛やら大元帥の法やらで祈りつける。道長の方では、絶えず挑發的に高壓を加へる。處へ花山上皇の事件突發で一網打盡、伊周方はやられてしまつた。

「けにいかならむ云々」は、「何ともなくうたてありしかば」の事情を細説したもので、朋輩が敵方の間者でもあるかのやうに、讒訴したのが腹が立つといふ。しかし火の無い處には煙が揚らぬ。既に一昨年になるが、清少が道長の噂をすると、中宮は「例の思ふ人」と仰せられたことがあり、(百十段參照)また實際清少は「左のおほい殿の方の人しる筋」であつた。家集に、

「たか」と散樂言した人が怒まれて、謝罪した事をお話し出したになると、御前に居る限の女房は「右方の人はさう怒めしく思ふ筈です。残念に思つたてせう。又左方の人の心持は、最初天に張弓といひ出すのを開始した時には、どんなにか憎かつたてせう」などいつて笑ふ。これは自分のやうに忘れて失敗した事か。この話は誰も知つてゐる事だらう。

ふと、右方の人はあまりの事に馬鹿らしく思つて、打笑つて「やあ一向に分らぬ」といつて、口脇を引垂れてふざけかける。功者が「勝の籌のしるしを刺せ」といつて、籌を刺させた。右方の人が「甚だ怪しからぬ事よ。こんな謎を知らない者は、誰があらうかい。決して籌は刺すまい」と争ふけれど、功者が「一旦知らないといひ出したからは、何て負にならぬ事があらうぞ」といつて、耳にも入れないで、次々の謎も、この功者の人はいひ張つて勝たせた。右方の人達から「あんな謎はよく人の知つてゐる事だけれど、全く知らない事なら據ないが、何て知らないといつ

清水にこもりたりしに、大殿の上のおし所からいひおこせ給へりし。
思ひきや山のあなたに君をおきてひとりみやこの月をみむとは

大殿の上は即ち道長の妻源倫子のこと、清少が寺籠りをしたのを聞いて、その思慕の情を寄せたものである。かう前々からの行懸りや交際があつたとすると、只さへ御信任の厚いのに、業を煮やしてゐた連中が、近來の不祥事の爲に、いよく神經過敏になつてゐるのだから、疑深い目を見張つて、底意地わるい素振を見せるのも、無理はない。これは道長方でも同様で、赤染集に、

帥殿(伊周)に親しき人のゆかりなりしは、え参るまじとなむあると聞きしかば、
と見えて、衛門の母親なども、清少とおなじやうな、苦い經驗を嘗めさせられた。

召使の女房への御文は、仰書で澤山である。だがこれは内密のであるから、御直筆であつた。詰り屬圍をうるさく思召しての事である。しかし清少の所に來ては、何も内所にする必要もないのに、尙忍んでゐるなどは、この長女の馬鹿正直らしい人格が窺はれる。山吹の花に「いはで思ふぞ」は、この時代では知れ切つた紋切形であるが、御文の御趣向は流石に面白い。これを拜見した清少の氣持は、只あり難い思召に感泣するより外はない。

長女の語つた、中宮の清少を思されることと、長居を怪む女房達の噂とは、左中將の談話中の「御里居心し」の一節を裏書するものであつて、出仕を懲める、さも實體さうな親切氣が、よく現れてゐる。

左中將の忠告、長女の詞添、殊に中宮の厚い思召を伺ひ奉つては、もとより「なほえかくてはあるまじかりける」と思つてゐた處だから、いよく出仕と決心して、さてその御返事といふ段取になつて、ふとした物忘れ、先くゞりをする程の才女も、三つ兒に淺瀬を教はる時があると思ふと可笑しい。御挨拶申上に、御目通りに出ながら、御几帳に端隠れたのは、餘り久し振なので、一寸きよりの悪い體

もある。この際「今参か」の親護の散樂言に、人をそらさぬ中宮の御機轉は、實に敬服に値する。「心に下ゆく水の」の歌を、にくき歌と仰せられたのは、その執念くくねくしい點を、不快に思召されたものだらう。お前を見ないと氣がくさくさするなど、昔通りの何の隔もないおあしらひに、全く打解けてしまつて、童に教へられた話を申上げると、中宮はすぐそれに調子を合はせて、古言を侮つて失敗したお話をなさる。全く人を操縦する妙を極めたもので、上に立つお人は違ふ。

枕詞などの修辭には、殆ど謎に近いものもあるが、謎に懸詞、解詞の形式を備へて來たのは、何時からだがわからぬ。圓融朝の歌人會根好忠の集に、

なぞく物語しけるに

わが言はえもいはしるの結び松干とせふとも誰かとくへき。

とあつて、随分むづかしいのを出して、互に智巧を競つたらしい。それが嵩じては、物合の形式を取つて勝負を争ふやうになつた。これが謎合である。物合の親である歌合の例でいふと、歌人から方人念人まで、組を左右に分けて、豫め出した題で詠んだ歌を、一番二番と左右に合はせたのを、讀師が講師に讀上けさせ、判者がその勝負を審判すると、一々籌刺(員指)に勝の籌をさし、最後に左右總計の差引を見て、組體の勝負を更に決定する。謎合の方は、左方の懸けた題を右方で解き、右方の懸けた題を左方で解いて、その解得たのを勝としたものである。懸ける時には、まづ例せば「天に張弓、なぞく」といふのである。「左の一番は云々」は、丁度この人が左方だつたからでもあるが、これには又別に意味がある。一體右よりも左を重んずることは、神代からの遺風で、支那でも後漢以後は左を貴び、鬪詩も歌合も、左方を位あるものとした。殊に左の一番の座は、競技當事者のうちの第一の貴人又は長者を据ゑる不文律がある。されば今この人が、自分から進んで「左の一番はおのれ」と望んだのは、その自負心の甚しさを思は

せるものである。撰定の時にも、期日近くなつても、當人たゞ呑込んでばかりゐて、一向打開けぬ。皆が心配して強いていへば、腹を立てる。自信を通り越した高慢な態度が、よく現れてゐる。

江談抄の無惡善、古今著聞集の子子子子子、狹衣の唐國の中將、子持聖の類は皆謎であるが、この頃の進歩した方式は、小一條殿のなぞ、物語に、

「かたすまけずの花のうへの露」といひけるに、「すまひ草あはする人のなければや」(實方集)とあるのだらう。それに比べては、天に張弓は甚だ卑近過ぎた謎で、殊にこれは、

醍醐の帝、躬恒を召して「月を弓張といふは何の意ぞ、その由仕うまつれ」と仰せ給うければ、みつれ、
てる月を弓張といふことは山の端さして、ればなりけり(大和物語)

といふ逸話で、當時は三つ兒も、先刻承知な古言なのである。

左方の悲觀に引換へ、右方は得意になつてとよむ。右の一番の人は、弦月と解きさへすれば、無事に勝つたものを、あまり馬鹿にして、下唇を突出して、「知りません」とやつたから、さあ馴馬も及ばずで、口供を楯に取つて、情狀の酌量なしに負かしてしまつた處に、摺枯しの功者振が見える。「さは思ふべし」いかに憎かりけむ」は、以上の御物語に對しての應酬であり、結收である。

「これは忘れたる事かは」は、上に「あまり悔る古言は」とある照應で、いづれも古言を悔つた失敗ではあるが、謎の話は知つてゐて悔つたの、自分のは悔つて忘れたので、一緒にはならぬ、中宮様の何とお取成し下されても、自分のは出來した話でないといふ謙遜の結語である。

百二十五段

正月十日、空いとくらう、雲もあつく見えながら、さすがに日は、いとけざやかに照

(口譯)
正月十日、空が大層

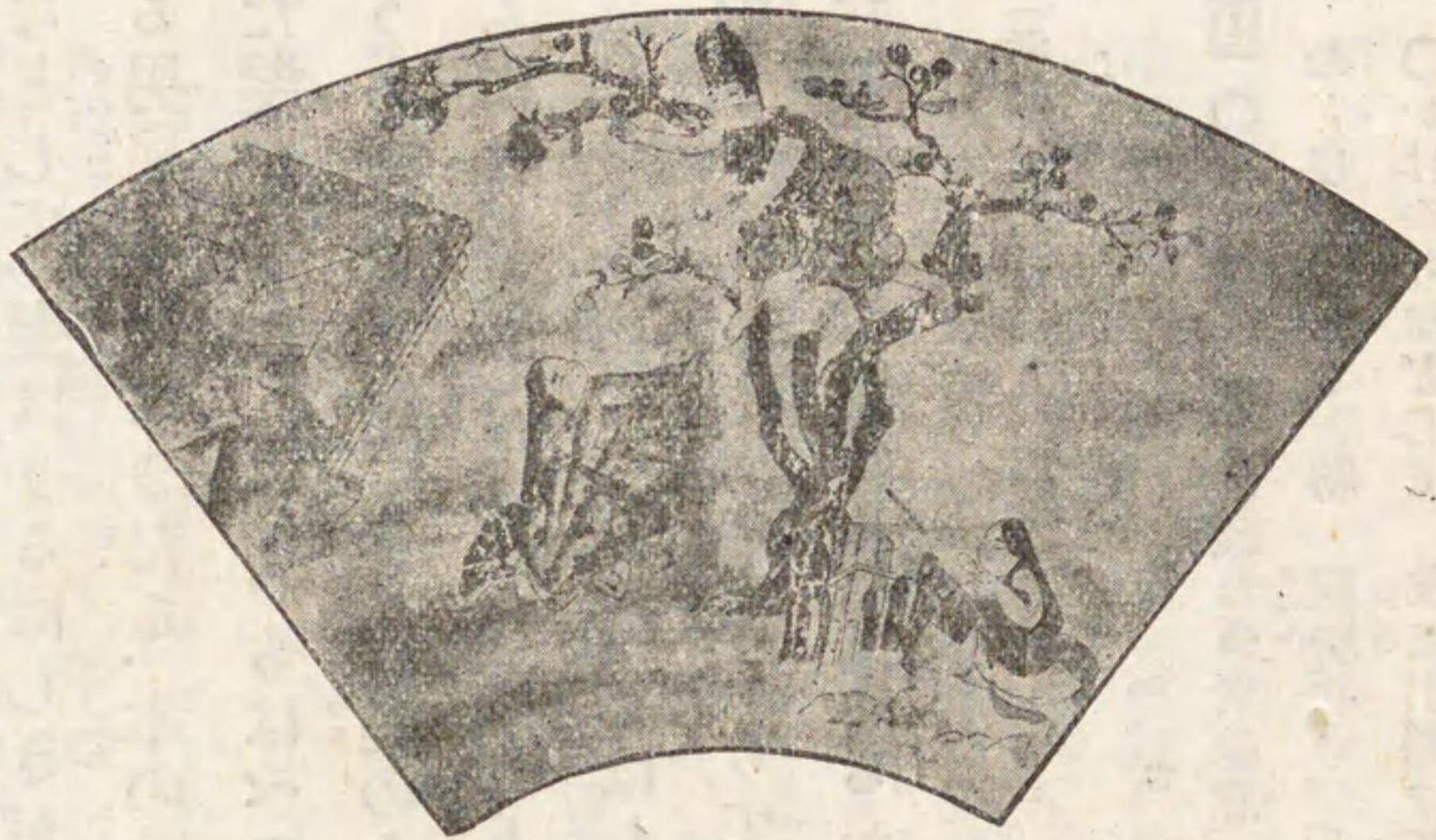
暗く、雲も厚く見えながら、流石に日は大層キツパリと照つてゐるに、賤しい者の家の後の荒島などいふ所で、土もチヤンと平でない處に、桃の木が若々しく大層すばえがちに枝の出でゐるが、一方は青く、今一方は濃く艶やかに、蘇枋のやうに見えてゐるが、ほつそりした童兒の、狩衣は鍵ざきなどして、髪は立派なのが登つ下ぬると、又紅梅の下着に、白い狩衣など腰上げしてゐる男の兒の半靴を穿いたのが、木の下に立つて、「私に、い、枝を切つて下さい」など頼むと、又髪も美しい童女の下着なども綻び勝で、袴は萎えてゐるけれど、色などはよいのを着たのが三四人、

りたるに、えせ者の家のうしろ、あらばたけなどいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木わかだちて、いとしもと勝にさし出でたる、片つ方は青く、今片つ方は濃くつや、かにて、蘇枋のやうに見えたるに、ほそやかなる童の、狩衣はかけやりなどして、髪はうるはしきがのぼりたれば、また紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男兒、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いてなど乞ふに、また髪をかしげなるわらはべの、袖ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる三四人、「卯槌の木よからむ切りておろせ。お前にも召すぞ」などいふに、おろしたれば、はしりかひ、取りわき、「我に多く」などいふこそをかしけれ。くろき袴着たるをのこはしり來て乞ふに、「待て」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

(考異) ○お前にも 原本こゝにとあり。春本の一本、及び古本による。○などいふに 原本などいひてとあり。古本による。

釋 ○えせ者 こゝは賤しき者の意。○あらばたけ 荒島か。○うるはしうなほからぬ 整ひて平らかならぬと也。○しもと勝 葉勝なり。「しもと」は楚の義にて、若枝の伸びたるをいふ。轉じては答の義とす。○かけやりなどして 物に引懸けて破りなどしてと也。鍵裂したるをいふ。○白きなど 白き狩衣など

「卵榎になる木のよ
さうなのを切てお
ろせ。お前でも召す
ぞ」などいふに、上の
児がその枝をおろし
たので、童男女達が
走りちがって分け取
り、「私に澤山下さい
などいふのが面白
い。きたない袴を着
た男が驅けてきて、
くれといふのを、上
の児が「待て」などい
ふと、その男が木の
下に近寄つてゆする
ので、上の児はあぶ
ながつて、猿のやう
に木にしがみ附いて
ゐるのも面白い。梅
の實などがなつた折
も、そのやうである
ぞよ。



(經高面扇)りぼの木の子

態度を異にした様子が、とりくく面白く描かれてある。それに服装が一々、その人物を映出させてる。「我に多く」は子供氣分を印象させる句で、「猿のやうにかいつきて」は面白い形容である。「梅など」と筆鋒を一轉して結んだのは、文致があつてい、

かう桃の木を誰も歎しがるのは、時が正月で、童女の詞にもある通り、卵榎を作る必要からである。宮

中では絲所から獻上するが、源氏淨舟の巻に、
卵榎をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり。
とあれば、一般には手製にもやつたものらしい。

百二十六段

清げなるをのこの、雙六を日ひと日うちて、なほ飽かぬにや、みじかき燈臺に火をあかくかゝげて、かたきの賽をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへに立て待つ。狩衣の領の顔にかゝれば、片手しておし入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、さはいみじう呪ふとも、うちはづしてむやと、心もとなげに、うちまもりたるこそ、ほこりに見ゆれ。

○飽かぬにや の下、あらむを略けり。○かたきの 相手がと也。諸註、かたきの賽と續けて解けるは非。○賽をこひせめて 賽をよき目の出ぬやうにと祈り責めてと也。「こひ」は請ひ祈る意。○とみにも入れねば 頼にも賽を筒に入れねばと也。○筒を盤のうへに立て、待つ 清げなる男がなり。(百十六頁挿圖参照) ○領 きぬの領を見よ。○いとこはからぬ烏帽子を云々 あまり切地のかたからぬ烏帽子を振あふのけてと也。○さはいみじう呪ふとも 賽を請ひせめたるをさす。

碁をやむことなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに、ひろひお

(口譯)
綺麗な男が双六を終
日打つて、やはり飽
かないのかしら、低
い燈臺に火を明るく
ともして、相手の賽
を呪ひせめて、急に
も筒に入れぬから
相手の人は筒を盤の
うへに立て、賽を
入れるのを待つ。そ
して狩衣の領が顔に
かゝるので、片手で
押込んで、大して固
くはない烏帽子を振
あふのけて、「さうえ
らく呪つても、打外
すものか」と待遠し
まうに見詰めてゐる
のが、得意さうに見
える。

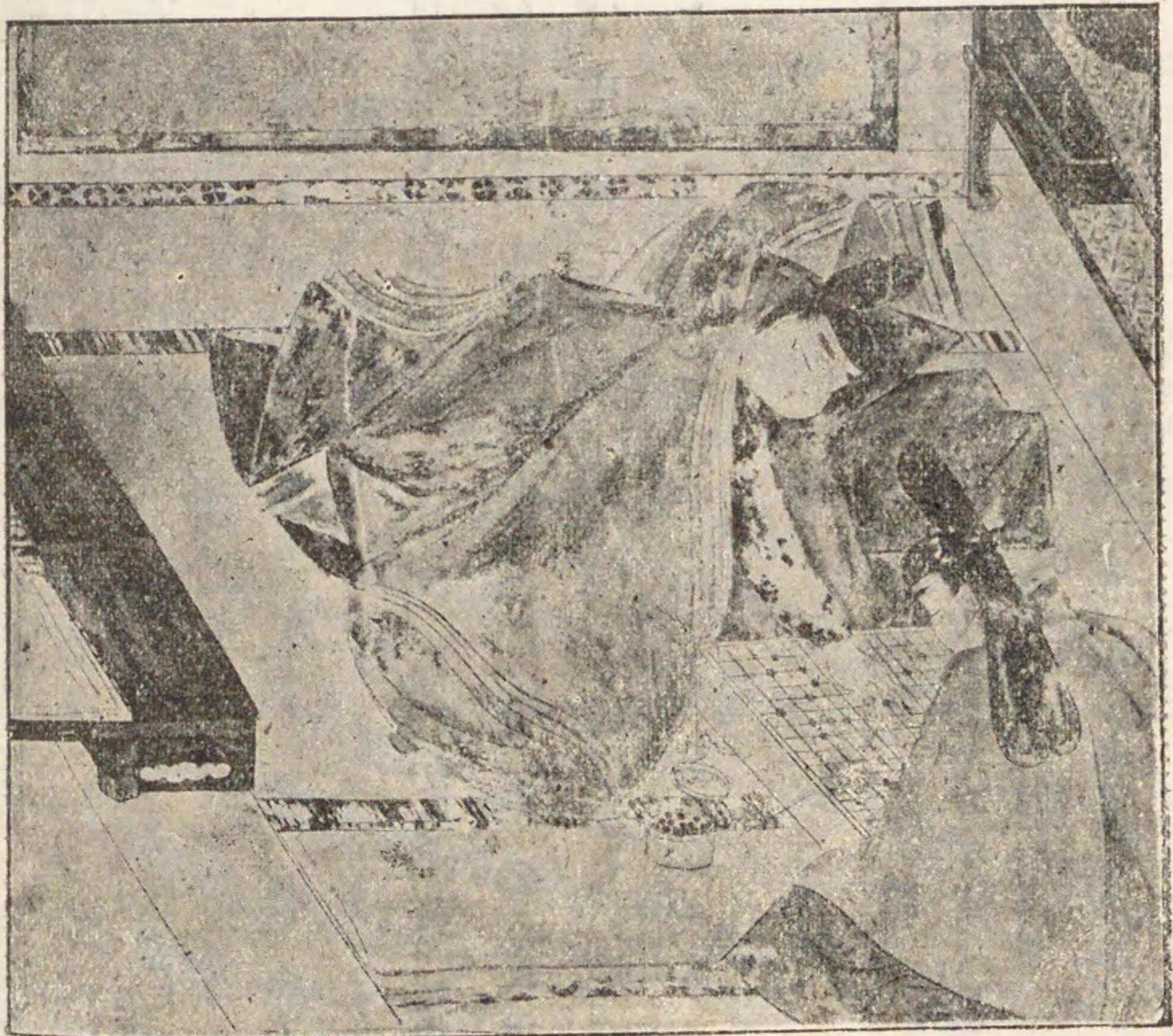
碁を尊い人が打つと

て、直衣の入紐をは
づし、しどけない様
子で、碁石を盤面に
つまんで置くに、身
分の卑い相手が、居
すまひも畏つた氣色
で、碁盤からはすこ
し離れて、及腰にな
つて、打つ手の袖の
下を、今片方の手で
引のけくして、打
つてゐるのも面白
い。

くに、おとりたる人の、居すまひも畏まりたるけしきに、碁盤よりは少し遠くて、及
びつ、袖の下いま片手にて引きやりつ、打ちたるもをかし。

○紐うち解き 直衣の入紐をさ、ぬ
をいふ。○ないがしろなるけしきに
しどけなき様子にてと也。輕蔑の意と
するは非。源氏空蟬に「小袷だつ物な
いがしろに着なして」。○ひろひおく
に 碁石をつまみ、盤面に置くにと也。
○劣りたる人 身分の劣りたる相手の
人なり。○及びつ、及び腰になりな
りしてと也。○引きやりつ、引違け
くしてと也。

短燈臺は双六盤を照すに、丁度都
合がよい。相手の先生は負が込んだも
のを見せて、こちらの振る賽に大きい
目の出ないやうにと、お禁厭をやる。
盤は低いから自然屈み氣味なので、狩
衣の領が押上つて、顔にさはる。生地



(氏源能隆)打碁の人貴

もよし新しくもあり、餘計シャツキリするからでもあらう。頭がさがるから、烏帽子も額の方に垂懸つ
てうるさいので、振あふのける。切地の柔さが想はれる。そしてその誇かな様子もよく出てる。源氏
常夏の巻に、

(近江の君)五節の君とてされたるわか人のあると、双六うち給ふ。手いとお切におしみて、「小賽く」とい
ふ聲ぞいと舌ときや。——この人はたけしきはられる「御返しやく」と筒を捻りつ、とみにも打出です。
中に思ひはやりやすらむ、いとあまへたる様どもしたり。

これは對局者が婦人であるが、本文と共通の光景で、對照するといよく面白い。

碁を打つ貴人の紐を外したのは、打解姿だけれど、相手が目下だから、遠慮は入らない。そこに誇か
な氣持が見える。相手の及腰に敬屈した態度は、細かくよく書かれてある。挿圖の隆能源氏寄生の巻の、
主上と薫中納言が碁を打つところは、この本文の註脚になる。それには主上が黒石を持つてゐる。昔は
黒を貴んだ。
要するに双六も碁も、その競技者の態度を對比して描いたもので、双六は賑やかにハシヤイだ處がや
や下品に、碁はしめやかに落付いた處が上品に、その物柄に相應してゐる。

百二十七段

おそろしきもの 橡のかさ。焼けたる所。みづぶき。菱。髪おほかるをのこの頭
洗ひてほすほど。栗のいが。

○つるばみのかさ 橡の皂なり。「つるばみ」は、和名抄に橡をよみ、樸實也と註し、又同書に、樸柿を

(口譯)
恐ろしいもの 橡の
かさ、焼けた所、菱
、髪、髪のおほかる
る男が頭を洗つて乾

すうち、栗の毬、な
どである。

伊知比乃和佐と訓あり。さては橡の皂は櫛梳なるべし。今いふドンダリの笠か。○みづぶき 水蔭。鬼蓮のことなり。灰と書く。本草綱目に「灰實、莖、三月生、葉貼水、大子、荷葉、皴文如殼、蹙如沸、面青背紫、莖葉皆有刺、其莖長至丈餘、中亦有絲、嫩者剥皮可食、云々」。

評 橡は黒染の原料だから、その皂も随つて上流婦人の目にも觸れるのである。しかし別に恐ろしさうにもない。燒跡は正暦四年の道隆の東三條南院、長徳元年の道隆伊周父子の二條の第、同二年の中宮御所二條の宮、長保元年の内裏の燒亡などのうちには、清少の必ず目撃したのがあらうと思ふ。又京中では永延元年の火災から、長徳二三年の米價騰貴で、頻に火事があつたから、どれかを見もしたらう。水蔭、菱、栗の毬を恐ろしく感じたのは、流石に女らしい。男が髪を洗つてバサラになつた様は、平生結髪してゐるだけに、様子が變つて、髪毛が屑々すればする程はく見える。

百二十八段

きよしと見ゆるもの 土器 新しき鏡 疊にさすこも 水を物に入る、透影 新しき細櫃

釋 ○疊にさす 疊を作るを刺すといへり。○こも 和名抄に薦を訓めり。疊表のこと也。谷川士清は小編の義かといへり。菰をよむも薦の料なればなり。○水を物に入る、透影 水に注ぎ入る、時、光線に透きて見ゆる影なり。透とほる器に入れたる水の影と解くは非。

評 今の割箸などのやうに、土器は懸流しの物だから、非常に潔い。道隆公が山崎の兼時の家に宿つた

(口譯)
清いと見えるもの
土器、新しい金梳、
疊にさす薦、水を物
に入れる時の透いて
見える影、新しい細
櫃、などである。

時、土器が無かつたので、新しい茶碗で水をあけた處が、ふる物ではないかと、道隆が疑はれたとある。土器ならそんな心配はなかつた。金梳、細櫃は、いづれも永久的の性質をもつた器具で、何處にあるのも大抵古物なのに、たまに新規のに出會ふと、潔く感ぜられる。疊表の薦は、全く清淨らしい氣持のする物である。水の透影は、一寸水晶の流のやうに見えて潔い。

百二十九段

きたなげなるもの 鼠のすみか、つとめて手おそく洗ふ人、白きつきはな、す、ばなしありくちご、油入る、物、雀の子、暑きほどに久しく湯あみぬ、衣の萎えたるは、いづれもくきたなげなる中に、練色のきぬこそきたなげなれ。

釋 ○つきはな 啖をいふ。吐涕の義。○すばな 鼻汁を吸るをいふ。○練色 白絹の練つたまゝの色。

評 當時の生活状態が、一寸窺はれる。遅く手水を使ふ人のきたないのは、その間に何かに觸れる機會が多いからである。油は燈火の具ばかりではあるまい。髪に使ふ膏綿の類までも籠つて居るのであらう。いづれもその容器はきたない。雀の子は子供のおもちやだが、羽の碌にはえ揃はないのは、殊にきたないらしい。湯は湯殿湯屋湯槽などの名目があつて、坊さんなどはお勤の都合上、屢入浴したものだ、一般の貧乏人は滅多に遣入れない。湯に入れてやると誘はれて、嬉しがつて東山から大津に出て、越前まで附いて往つた貧乏五位殿もあつた。身分のい、人でも、後世のやうに、毎日入浴はしない。九條殿遺誠に、

(口譯)
きたならしいもの
鼠のすみか、早朝に
手をおそく洗ふ人、
白い啖涕をすいて
あるく幼児、油を入
れる物、雀の子、暑
い時分に久しく入
浴をしない、などは
きたならしいもので
ある。着物の萎えた
のは、どれもくきた
たならしい中に、練
色の着物の萎えたの
は、特にきたならし
い。

次擇日沐浴、五箇日一度。

とある。右大臣師輔公でさへ、五日に一返の入浴である。そんな時分の「久しく」はまことの久しくで、月経か何かで下屋の湯にも、十日以上も入浴しないと見てよからう。それが暑中と来ては、全く氣味が悪い。練貫は地色のま、で、しかも艶があるから、少しの垢でも目立って汚く見える。

百三十段

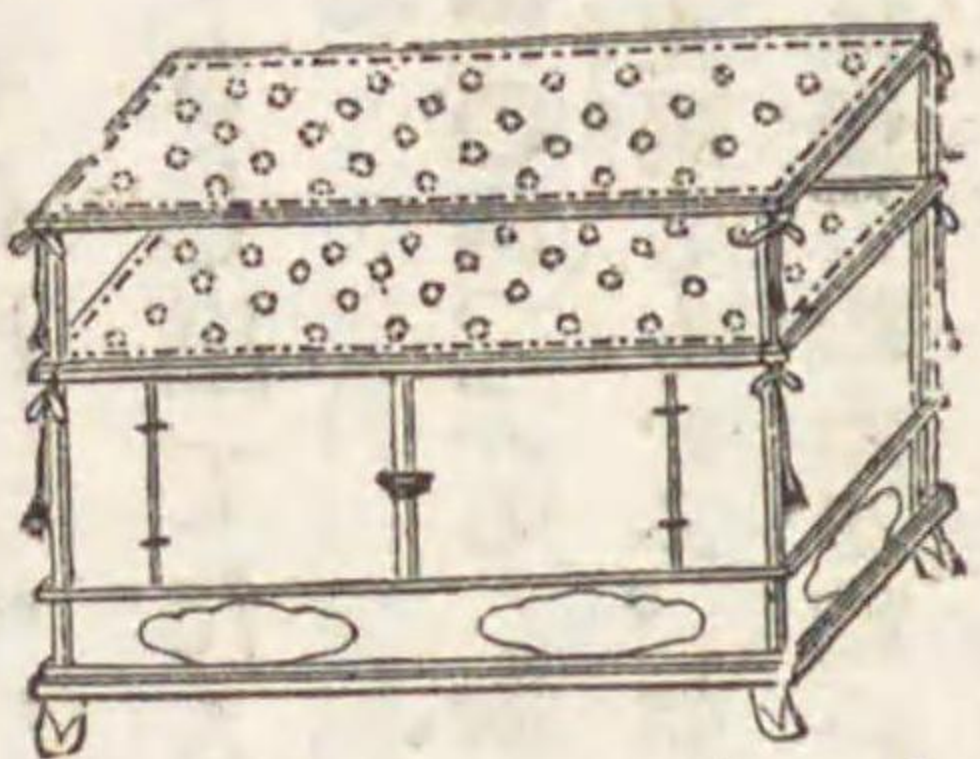
いやしげなるもの 式部のぞうのさく。黒き髪のすぢふとき。布屏風の新しいき、ふり黒みたるは、さるいふかひなき物にて、なか／＼何とも見えす。新しくしたてて、櫻の花多くさかせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪かきたる。遣戸、厨子、何も田舎物はいやしきなり。菴張の車のおそひ。檢非違使の袴。伊豫簾の筋ふとき。人の子に法師子のふとりたる。まことの出雲菴の疊。

(考異) ○さく 原本しやくとあり。活本による。

(口譯) いやしげなるもの 式部丞の叙爵、黒い髪部の毛の筋のふとい、などは卑しげである。布屏風の新しいのは卑しげである。古く煤けたのは、さう彼はいふ證もない物で、却て卑しいとも何とも思はない。なまじ新しく拵へて繪には櫻の花を澤山咲かせて、胡粉や朱砂などで彩つたのが卑しげである。遣戸、厨子、その外何物でも、田舎の物は卑しげである。菴張の車

○式部のぞうのさく 式部丞の爵なり。「さく」は爵の直音なり。式部大丞の五位に叙せらるゝをいふ。式部及び式部大夫を見よ。○布屏風 布張の屏風なり。○さるいふかひなき物にて もとより左様なるいふにも足らぬ物にてと也。○何とも見えす 卑しげとも何とも見えすと也。○新しくしたて、これも布屏風のうへ也。○櫻の花云々 繪になり。○胡粉 蛤粉なるべし。○朱砂 スサ。丹砂のこと。○

の覆ひ、檢非違使の袴、伊豫簾の筋のふとい、人の子では小坊主の肥え太つてゐる、真正正銘の出雲菴の疊、などは卑しげなものである。



厨子 棚厨子を見よ。○菴張の車のおそひ「菴張の車」は車の一種の製にて、その名の如く、外部を菴にて張れる也。張菴したる車と混すべからず、張菴は臨時の事なり。「おそひ」は覆なり。○人の子に 人の子にてはの意。○法師子 小法師なり。○出雲菴の疊 出雲菴にて刺したる疊なり。「出雲菴」は出雲の國産の菴をいふ。「まことの」といへるは出雲菴の名にて、他國より出づるもありて、體裁は却りてその方が優良なりしならん。

式部大丞は、新任の承があると、満員の時は、五位に陞つて、その職を去らねばならぬ。だから、一向叙爵した光榮がない。女の髪の毛や簾垂は、いづれも細いほど美しくもあり、上品でもあるのに、それが太かつたり、疎々しかつたりしては、感心しない。布屏風は粗末な下品な物である。それも古びて煤けてでもあれば、却て目にもた、ぬから、齒牙にもかけぬが、なまなか新しいだけいけない。その新しいうへに、さも物欲しさうに、櫻の花を一面に白く赤く彩色したケバ／＼しさは、俗悪でいよくいけない。一體布屏風は、網代屏風と共に、田舎向物なので、これが「何も田舎物は」の語の出る伏線となつてゐる。遣戸や厨子も、田舎出来は丈夫ではらうが、韻致がない。菴張の車は、政事要略の檢非違使の奏狀に、

四位網代、五位菴張、六位板車、

とあり、網代車などより一段位の下つた物で、榮華物語に、伊周流罪の時、これに乗つた事が見える。既に車が菴張では、覆は何をしても立派には見えない。檢非違使の袴は例の白い布袴で、「重たけにいやしうきらくしからむも」と、四十二段にも誹つてゐる。法師の太つたのは肉感的に見えて、有難味が薄い。小法師でもおなじ譯である。出雲菴は延喜式、堤中納言物語などにも出て、名譽な國産であるの

に、卑しけだといふのは、多分編目でもあらい物だつたらう。
布屏風の批評は、尤も趣味を解した言で、何人をもうなづかせる。

百三十一段

むねつぶる、もの 競馬見る。元結よる。親などの心ちあしうして、例ならぬけし
きなる。まして世の中など騒がしき頃、よろづの事おぼえず。また、物いはぬち
ごの泣き入りて乳も飲まず、いみじく、乳母の抱くにもやまで、久しう泣きたる。
例の所などにて、殊にまたいぢるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり、人など
のそのうへなどいふに、まづこそつぶるれ。いみじくにくき人のきたるも、いみじ
くこそあれ。よべきたる人の今朝の文のおそき、聞く人さへつぶる。思ふ人の文と
りてさし出でたるも、またつぶる。

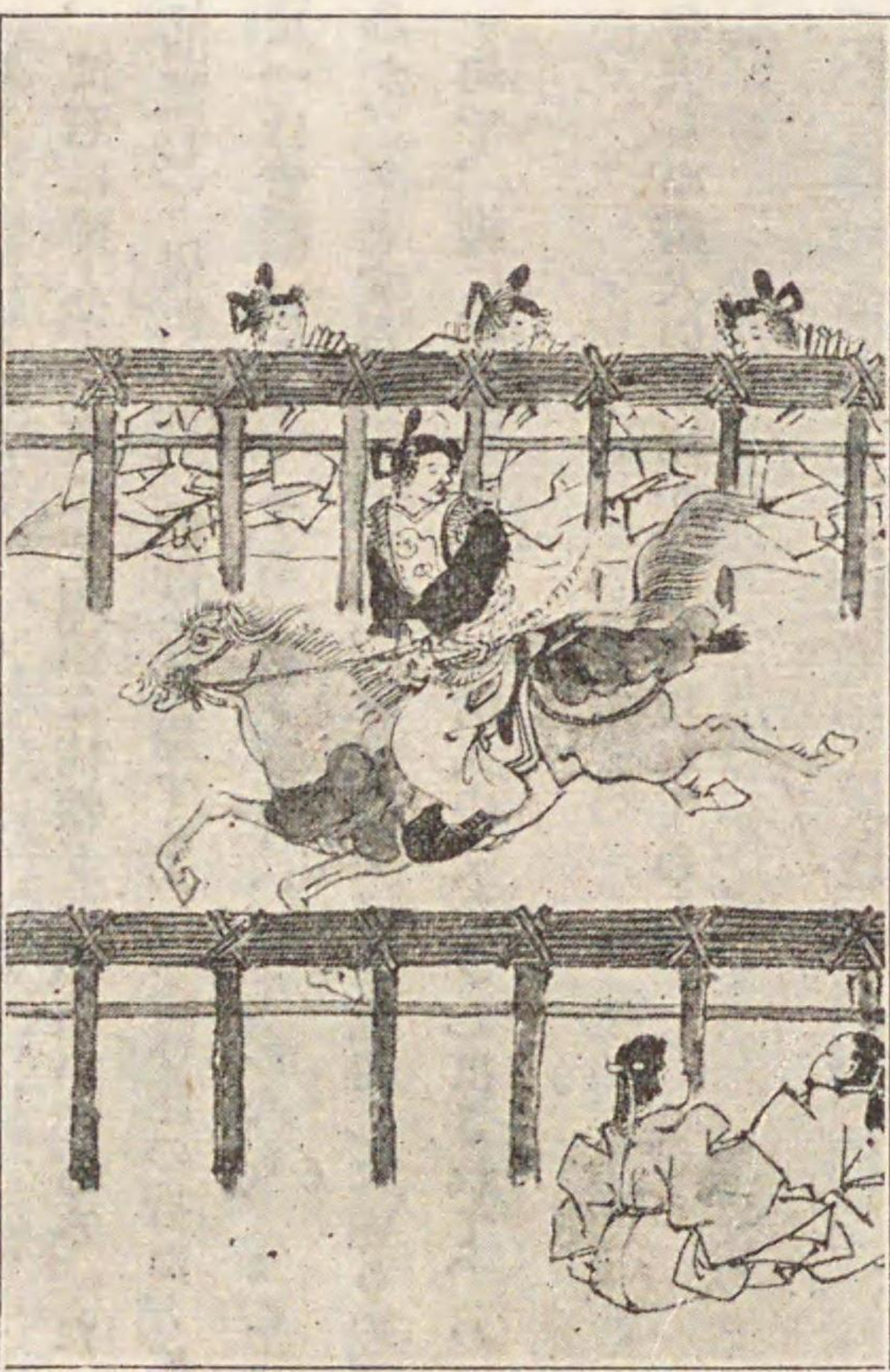
○胸つぶる 胸のドキ、くする、氣のもめるなどの意。○くらべ馬 駒くらべ、きほひ馬、きそひ馬、
走馬ともいふ。毎年五月武徳殿で行はれ、又賀茂石清水などの神事にも行はる。○元結よる 「元結」
は髪を根元を結ぶ物にて、絹麻などの紐を用ゐ、又紙縹をも用ゐる。こゝは紙縹の元結なりるべし。○
例ならぬ 平生のやうならぬと也。病氣なるをいふ。○世の中など騒がしき 疫病など流行するをい
ふ、この時代の語。○いみじく 「久しう」に係る副詞。○例の所 何時も人の集まる所なり。○殊にま

(口譯)
胸のドキつくもの
競馬を見る、元結を
よる、親などが氣分
がわるくて、平常と
は違つた容體であ
る、などは胸がつぶ
れる。まして世間に
流行病のある頃は、
心配で萬事も覺えな
い。又口のきけない
乳兒が泣入つて、乳
も飲まず、乳母の抱
くにも止まないで、
ひどく久しく泣いた
のは、胸がつぶれる。
何時も人の寄る所な
どで、格別に又聞馴
れない人の聲を聞付
けた時は、胸がつぶ
れるのは勿論、外の
人などがその人が居

るとも知らず、その
人の上など噂する
に、まづ第一に胸が
つぶれる。ひどく憎
い人の來たのも、非
常に胸がつぶれるの
である。昨夜逢つた
人の後朝の文の遅い
のは胸がつぶれる。
當人ばかりか、遅い
と聞く人までも胸が
つぶれる。戀しく思
ふ人の手紙を取つて
自分の前に差出した
のも胸がつぶれる。

たいぢるからぬ人の聲 格別に際立たぬ人の聲なり。臘氣には知りたる聲をいふ。諸註、誰とも知ら
ぬ人の聲といへるは違へり。○ことわり 胸つぶるはことわりにて也。○人などの云々 外の人な
どが、その人のうへなどと也。「その人」は清少の知る人又は意中の人か。○まづこそつぶるれ 傍
にて聞けば先づこそ胸潰るれと也。以下「つぶる」とあるは、胸つぶるの略なり。○いみじくこそあれ
いみじくこそ胸潰れてあれと也。○さし出でたるも 我が前にさし出でたるもの略。

この時代の競馬は、左右から一人
づつ出で、一番ひ二番ひと、勝負を
決したもので、今日のよりもつと、
見物をはらくさせる。それは只驅
抜けて、一着を争ふのみではなく、
敵手を引落して乗越すといふ、離業
があつたからである。紙よりの元結
は細く長くよるうちに、切れはせぬ
かと、氣が氣でない。昔は上下とも、
婦人はこれを手製に拵へたから、誰もこの經驗をもつてゐた。その證は、



馬 競

宮の御元結よりて參り給ふことは、大夫殿なむ仕うまつり給ふを、北の方うせ給うて、思はてしの程に召したる
に「仕うまつりおくと見侍りおきし、今とめて參らむ」と聞えおき給ひて、三四日ありて、物の中よりもとめ
侍りけるを見給ふるにも、云々。(小大君集)

宮の御元結は、宮の大夫の北の方が、御用仰付かつて、繼つて差上げたもので、その没後に、その作り置きを探し出して上げたとある。

親の病はその孝心に同情する。清少自身の感想らしいから、正暦五六年の大疫癘の頃、その母親などがまだ生存してゐて、こんな心配をしたのかも知れない。―父元輔は正暦元年に没した―乳兒の泣くのは、五十八段に「おぼつかなきもの」といひ、こゝには胸潰るといひ、又その夜泣は感心しないなどいつて、繰返し氣にしてゐる所を見ると、流石に婦人で、裏に子煩悩な情懷がほのめいてゐる。たまにか見ない人の聲が持出されるのは、例の所と油断して居たゞけ、餘計に吃驚する。寄合ひ話の折などに、自分の知人の噂が持出されるのは、善惡につけ實際はらくする。ごく／＼いやな客人も、まことに不安氣分のもので、いや不安どころかゾツとするものである。後朝の文は屢説明した通りの譯で、一向新味もないが、「聞く人さへ」の一句で、繼に平凡を免れた。情人の文をさし出されて、ハツと顔赤くするのは、戀の弱味である。

總じて感情に動いて、常に恐怖の念を去らぬ婦人の情緒が、よく現れてゐる。

百三十二段

うつくしきもの ふうりにかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又へにつけて居るたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざ

(口譯) 可愛らしいもの、瓜にいた乳兒の顔、雀の子が人が鼠鳴きをして呼ぶと、躍つ

て寄つてくる など 愛らしい。又縁緒につけて繫いでおくと、親雀が蟲などを持つてきてくゝめるのも、甚だ愛らしい。三つぐらゐの幼兒が急いで這つてくる途中で、極めて小さい塵などのあつたのを、目ざとく見付けて、大層美しげな指で摘み込んで、大人などに見せたのは、甚だ愛らしい。尼そぎに髪を切つた幼兒が、目に髪を拂ひのけなさいで、目先がうるさいので、頭を傾けて物など見るのは、甚だ愛らしい。禪がけに結つた袴の腰の上の方が、白く綺麗なのも、見るに愛らしい。大きくはない殿上童が、着飾られて歩くのも愛らしい。美しい幼兒が一寸抱い

とに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雞の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきも、いとうつくし。何も／＼ちひさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて、たすきあげたるが這ひ出てくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。雞の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよく／＼とかがしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子、さりの壺。瞿麥の花。

(考異) ○へにつけて 原本へになどつけてとあり。抄本による。

○うつくしき いくつかしむの形容詞格にて、かはゆきをいふ。○ふり 瓜のこと。活本、宸翰本にはうりとあり。○ねずなきするに 人の鼠鳴するにと也。「鼠鳴」はチウと鼠の如く聲を立つること。○へ

て可愛がるうちに、ひつついて寝入つたのも愛らしい。雛の道具が愛らしい。蓮の浮葉の大層小いのを、池から取上げて見るのも愛らしい。二葉葵の小さいのも大層愛らしい。何でも小さい物は、大層愛らしい。非常に肥えた幼児の二歳ぐらゐであるが、色白に愛らしいのが、二藍の羅などの着物が長くて、裄あげてゐるのが這出してゐるのも、大層愛らしい。八つ九つ十ぐらゐな男の兒が、幼い聲で書物を讀んだのも、大層愛らしい。雛の雛が、足長に白く美しげに、着物が短いといつたやうな様をして、ひよくと喧しく鳴いて、人の後について歩くのも、亦親のそばに連

立つて歩くを見るのも、愛らしい。家鴨の卵、舍利の壺、盟夢の花が愛らしい。

につけて、雀の子を綜緒につけてと也。綜緒は足緒なり。伊呂波字類抄(十卷本)には織を「へ」と訓み、「織織所^ハ以^テ加^フ飛鳥^ニ也。今案俗以^テ長緒^ニ結^シ著小鷹^ニ也」。○く、むる 口に含めてやること。○尼にそきたる 尼ぞきとて、頸のあたりにて髪を切りたるをいふ。この尼は切下髪ニなり。○たすぎがけにゆひたる腰 美隆の説に「空穂藏開の巻に、袷の袴たすぎがけにて、又國讓の巻に、たすぎがけの御袴とあり。袴といふは袴につきたる物にて、それを背より胸へかけて結びと思し」といへり。一説、袴の腰紐を前へまはし、胸の處にてもぢらせて、肩に掛けて結ひたる様といへり。とにかく袴は着物の袖をとむる爲に掛けたること論なし。貞丈が襦袢につきたる物の如くいへるはいかゞ。○白うをかしけなる 袴の白き紐の、領のあたりに結ばれたるが目立つをいふなるべし。○殿上童 テンジャウワラハ。攝關の子弟の、元服以前に殿上に奉仕する者。しかするを童殿上ウツハナシヤウといふ。○かいつきて 搔附きての音便。○足高に 割合に足長に見ゆるをいふ。○衣みじかなるさま 羽毛の短きをいふ。○さりの壺 佛骨を入れる壺なり。「さり」は舍利を直音にいへるにて、骨の梵語なり。但佛舍利は佛火葬の遺物にて、粒状をなす。春註に、玻璃の壺かといへるは非。

近古では姫瓜ヒメウといふもあつたが、姫瓜は苦くて食へない。この時代の瓜は山城のヒメウ、瓜生山が本場の甜瓜で、盛に嗜食されたものである。それに顔をかくことは今もやる戯だが、乳兒の顔に至つては愛敬がある。雀の子は同情をもつてうつくしく書かれた。元來子供の慰物で、お婆さんが飼つて悪くいれた例が、宇治拾遺に見える。宮仕の女房の生活は、随分香氣なもので、孤獨の寂寞を慰める爲には、時に子供らしい眞似さへする。清少もその一人だらう。

雛の調度のことは、過ぎにし方戀しきもの(廿七段)の所で、評しておいた。人形の小道具だから、實際こま／＼してゐる。蓮の浮葉は、「池より取上げて見る」の態度に伴はれて、いよ／＼なつかしい。鶏の

雛は、殊に面白い描寫だ。「足高に」、「衣みじかなるさま」の譬喩の譬句から、人や親鳥のあとを追ふなど、その特性をよく觀察したものである。雁の子はあてに(卅九段)、撫子は晝にかきて劣る(九十九段)と、既に稱へてゐる。舍利の壺は中身相應に小さく、瑠璃や玉や玻璃などで製る。葵は例の二葉葵で、信仰のある物である。巻葉がやつとほされた位の蓮の嫩葉は、小いだけに可愛い。

三つ兒の這ひながら塵を撮みあけて、手柄顔に大人に見せる、尼そぎの髪が目にかゝるのは、催馬樂の朝倉などにある、所謂目刺めざしの體で、それゆゑ首をかしけてゐるなど、小兒の動作中、殊に愛くるしい點を、旨く攫まへてゐる。抱いてゐる中にそれが寝ついたのは、罪がなくてかはゆい。尼そぎの兒はいくつ位だらう。源氏物語に、明石の姫君が三歳の時に、

この春より生ふす御髪、尼そぎの程にて、云々。(薄雲の巻)

とあるから、やはり三四歳と見てよからう。袴の褌掛はその様式が、今日では判明しない。高貴の家では三つ兒にも單、襲、内着、直衣など着せた上に、褌掛の袴を穿かせた。想ふに袴に付けた掛紐を綾取つて、袖をか、けたものらしい。本文の「袴の腰のかみの白うをかしけなる」は、這兒の背中の様子の愛らしさをいつたものだが、源氏のこれも薄雲の巻に、

只姫君の襟引結ひたまへる胸つきぞ美しげき添ひて見え給へる。

と胸先の様子を美しいといつてゐる。すると、背と胸と両方にかけて、褌は廻つてゐるものと見える。これが愛らしく見えるのは、エプロン掛けた後姿が乙であるの、同じ譯である。

殿上童の作り立てたのや、八歳以上の男兒の呷晤の聲は、大人でないだけわらくない。文は漢籍で、皇子など七歳で讀書始をすることが、源氏にある。

に過ぎない感じがする。衣勝な二つ兒の條は、「樽あけたる」も「這ひいでくる」も、前のと重複するので面白くない。寧ろ削る方がい。

「何もく、小き物はいとつくし」は結收の語だから、文尾にすわるのが通例の組織だが、こゝは更にまた多くを書續けてゐる。そこでこれが一篇の綱領となつた形である。

百三十三段

人ばへするもの ことなる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。はづかしき人に物いはむとするにも、まづさきに立つこそあやしけれ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるが、あやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえあらぬが、親のきたるに所えて、ゆかしかりける物を「あれ見せよや、母」など引きゆるがすに、大人など物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引きさがし出でて見るこそ、いとにくけれ。それを「まさな」とばかり打ちいひて、取り隠さて、「さなせそ。そこなふな」とばかり笑みていふ親もにくし。われえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

○人ばへ 旁註に、人そばへの意とあり。或はそ文字落ちたるならんといへり。人そばへは人の居る爲に調子に乗るをいふ。そばへたるを見よ。又抄には、人ばえの假名にて、人中に出でて映ゆる意とせ

(口譯) 人そばへするもの 格別いゝ處もない子供可愛がられつけたもの、圖に乗つて甘へる。咳も調子に乗つて出る。きまりの悪い人に物をいはうとするにも、先づさきに出るのが不思議だ。彼方此方の局に住む人の子供の四五歳位のが来て、生憎にいたづらで、物などを取散してこぼすのを、平生は抑へつけられなどしてとめ出来ないのが、母親

り。○ことなることなき 格別なる所なきと也。勝れたる所のなきをいふ。○しはぶき 咳なり。屢吹の義。○あなたこなたに あちこちの局に。隣家の事にあらず。○四つ五つなるが の下、来てを補ひて聞くべし。○あやにくだちて 生憎らしくと也。大人しかれと思ふに、いたづらなるをいふ。○ひきはなれなど 引張られたりなどしての略。「引張る」は手を取りて抑へつくるをいふ。軍記物などにもよく見ゆる語なり。○ひきゆるがす 母親をなり。○ふとも聞き入れねば 母親がなり。○ひきさがし出でてゆかしかりける物をなり。○まさな あなまさなやを見よ。○われ 物など取散らされたる主人をいふ。○心もとなけれ 氣がかり、氣づかはしなどの意。

評「あなたこなたに住む」から以下は、「ことなる事なき人の子のかなしくし慣はされたる」を、更に具象的に詳叙したもので、いたづら兒が、親が附いてゐるので増長した所行と、その親の、口でばかり生温いことをいつて、それを制しようともせぬ無作法とが、實に印象深く寫し出されてゐる。すべて厭惡の情から、この親子の舉動を觀たので見ると、「われはしたなくも云々」は、清少自身の事に違ない。

題目は違ふが、内容から見ると、全く前段の餘波で、彼には乳香兒のかはゆさを主として叙べ、此には童兒の人ばへする憎さを主として描いてゐる。にくきもの、段にも、子供のわるさを、

あ、らさまにきたる兒ども、童べをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常に來てゐ入りて、調度や何やうち散しぬる憎し。

と溢してゐるのを見ると、清少の子供好も絶対ではない。實はある寂寥を感じる宮仕生活の慰藉から來てゐるかも知れない。

百三十四段

の來たのに巾を利かせて、見たかつた物を「あれを見せてくれよ。母様」などいつて、母を引揺すのに、母親は大人達が話をすると、一寸も耳にもとめないの、自分で勝手に探し出して見るのが、甚だ憎い。それを「いけません」とだけいつて、品物を取隠さないで、「さうはなさるな。損ふな」とばかり、笑つていつてゐる母親も憎い。自分ははしたなく小言もいひ得ないで、只見てゐるのは氣が氣でない。

名おそろしきもの 青淵。谷の洞。鱧板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほこ星。おほかみ。牛。かさめ。らう。らうの長。いひぢかさ雨。くちなはいちご。いきすだま。鬼どころ。鬼わらび。うばら。からたち。いりずみ。牡丹。牛鬼。

(考異) ○かさめ 原本はさめとあり。旁本による。○いかり 原本にすしとあり。別本による。

○青淵 水の青くみゆる淵、即ち深淵なり。○鱧板 今の板屏をいふ。「鱧」は借字にて、端板の義。板割をいふが本にて、その意の轉れるなるべし。○谷の洞 「洞」はほろともいふ。空ろになれる處。○つちくれ 「くれ」は石くれ、木くれなどのくれに同じ。片の義。○いかづち 雷。嚴槌の義。○はやち疾風。「ち」はしともいひて、風の古言。和名抄に「暴風、八夜知、又乃和木乃加世」。○ふさう雲 不祥雲なり。小右記にこの語見ゆ。世に凶災などある前兆に出づといふ。○ほこ星 彗星。抄に「破軍星の事なり」と見ゆ。破軍星は北斗の第七星なる搖光の一名。斗柄ともいふ。劍の形を圖して、破軍の劍先などいひ、この指せる方を萬事に利あらずと稱す。○おほかみ 狼。大神の義、また大口の眞神ともいふ。○かさめ 海蟹の一種。甲の廣七八寸、左右に各一刺あり、色赤黒にして白き斑點あり、味美なり。和名抄に「本草云、擁劍、和名加散米、似蟹色黃、其一整偏長三寸者也」。原本の「牛はさめ」は牛はさめ牛の意。さめ牛はその目白くて魚眼の如きをいふ。○らう 牢なり。牢獄をいふ。○らうのをさ 牢の長にて囚獄正をいふが。さらば假名らうなり。旁註本に「縁衫の名さへにくし」とあり。○いかり

(口釋) 名の恐ろしいもの 青淵、谷の洞、鱧板、鐵、土塊が名が恐ろしい。雷は名ばかりでなく、ひどく恐ろしい。はやち、不祥雲、ほこ星、狼、牛、かさめ、牢、らうの長が、名が恐ろしい。鱧、これも名ばかりでなく、見るのも恐ろしい。繩盜、名が恐ろしい。強盜、又すべてにつけて恐ろしい。脰笠雨、蛇毒、生靈、鬼野老、鬼薇、炭、荊棘、枳殼、熬炭、牡丹、牛鬼が、名が恐ろしい。

錨。こ、は怒の意に響くをいふなるべし。原本の「いにすし」は貽貝錨のことか。○繩蕙 蕙繩を縦糸にして、横に蕙をおり込みたる蕙なり。繩と蕙とにあらず。○ひぢかさ雨 脰笠雨。俄雨をいふ。無名抄に「脰笠雨とは、俄にて笠もとりあへぬ程にて、袖をかづくにや。云々」。六帖に「妹が門ゆきすぎがてにひぢかさの雨もふらなむ雨隠れせむ」とあり。但この歌は、萬葉十一「妹が門ゆきすぎかねつひさかたの雨も降らぬかそをよしにせむ」の轉訛なるが、當時既に脰笠の雨といふことあるにより、ひさかたの雨、ふと誤れるものならず。守部の説に「萬葉十二「たゞ一人ねれど寝かねて白妙の袖を笠に著ぬれつ、ぞこし」とある袖笠を活用して、脰笠の出来しにや。袖を笠に看るは、脰を張る業なれば」とあり。○くちなはいちご 蛇莓のこと。○いきすだま 生靈。生ける者の靈の人に崇るをいふ。○鬼どころ 鬼野老、鬼辭と書く。薯蕷科の草本にて、山野に自生す。根及び肉芽は食料となる。○鬼わらび 蕨の一種。深山に生じ、葉は細長くて鋸齒を有し、一莖に群りて出づ。○うばら いばら、うまらと同語。茨のこと。刺のある小木の總名。○からたち 枳殼。和名に枳椇を訓めり。同物なり。芸香科の小木にて、音にキコクともいふ。○いりずみ 炒炭。延喜式に「内匠寮御鏡一面料熬炭五斗」とあり。炙りて濕氣を去れる炭か。抄には五刑の内に入墨といへり。入り入れ自他の違あれば、炒炭の方おとなしかるべし。○ぼうたん 牡丹の字音便。○牛鬼 佛教に説ける牛頭馬頭の刹鬼をいふ。

評 名の恐ろしい物に、實も恐ろしい物を書ませたのに、聯想の絲のひくに任せて書擲つた痕が、ありありと見える。雷、暴風、狼、不祥雲、強盜、生すだま、牛鬼、牢、らうの長、錨は名實共に恐ろしいが、雷と強盜だけを特に取出たのは、實生活に直接關係が深いからだらう。暴風もその中に加へてもよいと思ふ。牛はその皮相を批判するほどに、趣味をもつて馴染んでるながらも、何だかその名が、憂しと不快に響くのであらう。牡丹は今日では、詩歌に適當した優しい名のやうだが、實は字音でこはくし

い。繩筵は、その頃は京の七條で製造した物で、筵の中の最下等の品である。繩には粗々しい感觸の伴ふことは事實で、今も荒繩荒筵といふ語がある。しかも罪人を捕縛するのは皆繩で、その上髪の毛を繩にからけて、珠數繫にしたものであると思ふと、繩筵も感じのいい物では、決してない。以上の他は音調のいかついのや、聯想の恐ろしいのである事は、説明を俟つまでもない。

百三十五段

見るにことなることなきものの、文字にかきてことごとくしきもの。覆盆子。鴨跖草。茨。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

○覆盆子 イチゴ。莓。○鴨跖草、ツユグサ。鴨頭草とも書く。古名は着草なり。月草はあて字。原野に自生する蔓草のこと。簡單なる染料に用ゐる、移花、移草、青花、藍花等の名あり。○文章博士 モンジャウハカセ。大學寮の被官にて、紀傳道及び詩文を掌る。定員二名、相當從五位下なり。下に文章得業生、文章生あり。○皇后宮の權大夫 職原抄中宮職の條に「權大夫一人、同納言參議、及三位以上兼之云々」。中宮はもと皇后宮の稱。權は假の義。○楊梅 ヤマモモ。○いたどり 古名たぢひ、さいだつま、今スカンボウといふ。虎杖と書く。莖は赤色をおび、高さ二尺内外、葉は長楕圓形をなし、夏の頃紅又は白の小花を開く。本草綱目に「時珍云、杖言其莖、虎言其斑也」。○杖なくとも云々 虎は猛獸なれば、杖なくともよかるべき顔付なるをと也。この句の下、如何なれば虎杖と書くならんを略けり。

(口譯) 見るには格別な事もないものが、文字に書いて仰山に感ぜられるもの。覆盆子、鴨跖草、茨、胡桃、文章博士、皇后宮權大夫、楊梅などである。いたどりはましてその感じが深いといふのは、文字には虎の杖と書いてあるとか。虎は猛獸だから、杖はなくてもよさうな顔付してゐるものを、妙な譯

ことごとくしき文字の植物は山ほどあるが、大江維時が、漢名で秋草の名を書いたら、讀手がなかつたといふ時代だから、清少とても、さうは知つて居ないと見えて、こゝに擧げたのも、甚だ貧弱である。しかも覆盆子、楊梅の菓物は間食に、鴨跖草は染料に、茨は鹽漬にして食料に(延喜式に見える)、その實は藥用などに用ゐられ、日常お馴染の物だから、小むづかしいその漢名も、幸に覚えて居た。

文章博士は、いかにも立派さうに聞える名目であるが、めでたきもの、段に「顔もいと憎さげに、下臈なれども云々」といつた通り、人物を見ると下等で、現代離れがして、口を利かせれば、「ちうせい折敷」の生昌の仲間で、源氏にも「おほし垣下饗、甚だひさうに侍りたうぶ」、「鳴高し鳴やまむ。甚だひさうなり、座をひきて起ちたうびなむ」といひ、その娘まで、「極熱の草藥を服して」といつた調子で、少しもゆかしげがない。皇后宮の權大夫は、中宮の權大夫といふより、遙に物々しく、又權大夫は大夫よりも、却つて仰山に聞える。その癖實際においては、皇后宮も中宮も、上下の差別もなく、權はやはり本官の下位であるといふ皮肉である。

虎杖は根も藥用になるが、主としては鹽漬の食料で(延喜式に見える)、茨と同じ譯の物である。植物をおもに竝べた中に、官職の名を入れたので、文に變化が生じ、名詞ばかりの行列の末を、虎杖の字面についての諧謔で結んだので、文が活躍する。虎といふ猛獸に對して、「顔付を」といつた處に、散樂氣分が見えて可笑しい。

百三十六段

むつかしげなるもの、ぬひ物のうら。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを。

(口譯) むさくろしげなもの